古志加賀谷

越谷市郷土研究会会報　第十六号

平成二十三年十二月刊



旧日光街道沿い・夢空感

スケッチ・田端功政

巻頭言

NPO法人 越谷市郷土研究会
会長 宮川 進

副会長・加藤幸一さんをはじめとする編集委員、原稿作成委員の方々の大変なご努力のおかげで、ここに会報「古志賀谷」第16号を刊行することができました。厚く、お礼を申上げます。

私たちの郷土研究会も若い方の入会は少なく、自然年齢の上昇は防ぎようがありません。むしろ、それで悩んでいるよりも、会員が、いかに精神年齢で若々しさを保ってゆくかを、考える方が先かも知れません。

さまざまな名言があります。「歳を重ねただけで人は老いない　夢を失ったとき　はじめて老いる」サミュエル・ウルマン（新井満訳）「人間は決して年老いるのだ」作者不詳「老いゆえに遊びをやめるのではない。遊びを止めるから老いるのだ」バーナード・ショウ（朝日新聞・天声人語）

会員の皆さま、「年取った」と思えば、年取るのです。まず、「年取った」と思わないこと。「自分は若いのだ」と思い込みましょう。そして、貴重な時間を、郷土研究会の若々しい友人とともに楽しみましょう。

「老後一日楽しまずして空しく過ごすは惜しむべし。老後の一日、千金にあたるべし」貝原益軒。

古志賀谷　第十六号

目　次

巻頭言　会長　宮川　進

聞き書き『大沢町の四方山話』

・蛭田武秀氏「小学校の思い出」　・荒井敏雄氏「桐産業と浅間神社の思い出」

・藤浪保雄氏「戦前戦後の思い出」・秦野徳久氏「東武鉄道開業時の話」

日光道中を通った人たちの記録　宮川　進

日光道中ぶらぶら歩き（3）　和泉　守

江戸時代以前の越谷を通る古奥州道（一考察）　加藤幸一

「往古奥州道」と「押立堤」について　秦野秀明

越谷周辺の六阿弥陀めぐりと新発見の御詠歌　加藤幸一

奥州一覧　道中膝栗毛（二編上巻）について　篠原陸郎

明治天皇の巡幸と行在所の碑　田中利昌

温飩屋さんにある一枚の画　金子　寛

明治になって越谷に鷹狩に来た徳川慶喜　田中利昌

越谷に落ちた隕石　生出弘三

越谷と人気投票　原田民自

越谷の生んだ画家・斎藤豊作、フランスのシャトーと墓　竹村克男

67　62　60　57　55　54　42　39　27　17　15　11　01

越谷・春日部周辺の農作物の屎尿の供給　高﨑　力
東越谷の東福寺の樒（しきみ）　松本裕志
葛西用水に架かる平和橋（旧称・瓦曽根橋）　高﨑　力
越谷星　増岡武司
越谷市内の逆川の水量減少　山本泰秀
いぼ稲荷といぼの木　谷岡隆夫
特集・越谷市内に残る歌　その1「越谷市内の消えゆく歌」　高﨑　力
特集・越谷市内に残る歌　その2「越谷のわらべ歌（大沢町）」　岩瀬静江
特集・越谷市内に残る歌　その3「東武線手まり唄」　原田民自
講師派遣と大間野町旧中村家イベント
講演会報告
展示作品一覧
文化財パトロール
史跡めぐりの記録一覧
史跡めぐり報告　第三九二回から第四二一回
その他の活動
会員アンケート
会員名簿・役員名簿
会報掲載基準　あとがき

141 138 128 127 112 111 109 107 105 102 101 86 84 81 79 77 74 72 69

大沢町の四方山話　その1

平成二十三年十月十三日

蛭田武秀氏の小学校の思い出



蛭田武秀氏（昭和十二年十二月生まれ）によると、照光院は、昭和初期に貧民窟（貧民街、スラム街）救済の寺として地元古老の間で知られた寺で、弘福院と光明院との間にあるので俗称「中寺（なかでら）」とも呼ばれたという。その大沢町の照光院で育った蛭田武秀第２８代住職様の戦後の思い出話を聞く機会を得ました。

1．当時の大沢小学校の登校時の思い出

私が小学校一年生だった頃の思い出である。早朝、大沢小学校一年生から高等科二年生までの大沢一丁目から四丁目（地蔵橋周辺）の児童男女全員が各町内の集会所より三丁目の香取神社に向かって出発した。自らの体力増進を願った速足だった。そして、香取神社でねじり鉢巻きをして「米英撃滅」と一斉に気勢をあげたのをよく覚えている。

それが終わると、それぞれが自宅に戻り、トウモロコシ、コウリャン、ドングリの粉を主食とする朝食をとってから平服を着て、女はナギナタ、男はシナイを持ち、学校に登校した。その時、一列縦隊の集団登校で、班長や副班長がラッパを吹き、皆が「勝ってくるぞと勇ましく」や「貴様と俺とは同期の桜」を歌いながら学校に向かった。

学校の入口（今の越谷市消防署の向かって右）では、二宮金次郎の銅像の前で、班長が「注目・気をつけ」「第二丁目、男子○名、女子○名、登校します」と言って皆で敬礼して学校の中に入って、ようやく一安心した。

※当時の大沢小学校は、第一体育館から消防署にかけてあった。第2体育館から大沢公民館までの学校の裏側には通称「学校の池」と呼ばれた内池があった。

2．小学生の頃の川泳ぎの思い出

学校での水泳の時間は、今の東大沢から大沢小学校にかけての逆川で、ふんどしをつけて泳いだ。逆川は今よりも川幅が広く、ドジョウ、雷魚、ウナギ、ヘラブナなどがいた。釣りをするには一日三十円のお金を漁業組合に払った。

学校が三時に終わると、川泳ぎで遊びたいときは、ガキ大将がふんどしに着替えて来いという命令で、元荒川の上流に連れて行かれ、チューブを浮き袋の代わりにして泳いだものだった。

浄光寺（現、北越谷）周辺の桃林の桃をがき大将に脅されて、よく内緒で失敬したが、帰りは見破られないように、取れた桃を抱えながら立ち泳ぎでシジミ採りを装い、わざわざ元荒川の対岸まで泳いでから、陸に上がって夜に自宅に帰ってきた。桃の毛が肌に刺さり、四～五日は赤くかぶれて親にはばれ、痒くてたまらなかった。元荒川の上流までシャケ（鮭）が登ってきていたのを覚えている。

ある時、元荒川で子供が泳いだ時に、溺れやしないかとそばにいた祖父母が心配で心配で、孫のふんどしの所に荒縄をつけて、それを伸ばして、何かあるとその荒縄を引っ張っていたのを見ている。

逆川や元荒川は、食糧難の頃はシジミやカタッケ（からす貝の地元の言葉）が取れ、薪で燃やして焼いて、醤油がないので塩をかけて食べたものだった。

現在の北越谷二丁目あたりの元荒川にかけて避病院（伝染病に架かった人を隔離し治療する病院）があったのを覚えている。その周辺はさびしい所だった。

3．夏休みの宿題の思い出

夏休みの宿題というと、泳ぎができるようになること、川土手の芝を刈ってくることの二つである。泳ぎは元荒川で練習したものである。芝は牛や馬のエサにするためで、三野宮方面に行って元荒川の土手や川べりの芝草を刈ったが、芝と芝を結んで人をけつまずかせようとするいたずらをやったことが今となっては懐かしい。

秋になると稲穂が実っている頃に、イナゴ取りの宿題がある。場所は、逆川の右岸一帯（大沢から見ると逆川の左手一帯）の田んぼ地である。さえぎるものがなく、今のキャンベルタウン野鳥の森のあたりや弥十郎、大里方面の先まで一望に見渡せた。手ぬぐいを二つ折りして作った袋に、捕まえたイナゴを入れるための竹づっぽう（竹筒）を袋口に入れて縛る。一人三袋を持ってイナゴを取りに行く。取り終わって帰ってくると、イナゴを入れたまま袋ごとセイロ（蒸篭）でふかし（蒸し）、学校に持って行った。たくさん持っていくと先生から褒められたものだった。

4．キャサリン台風（カスリーン台風）の思い出

昭和二十二年に関東地方を襲った台風は、大沢町では逆川から大沢方面に水があふれ出したと聞く。大沢町のほぼ全域が床下浸水した。浸水した各家庭には、一人一個ずつのコッペパンが配布された。

私は、この時、縁台をひっくり返して筏を作り、一面が水におおわれていたこの地で、自作の筏に乗って遊んだ覚えがある。

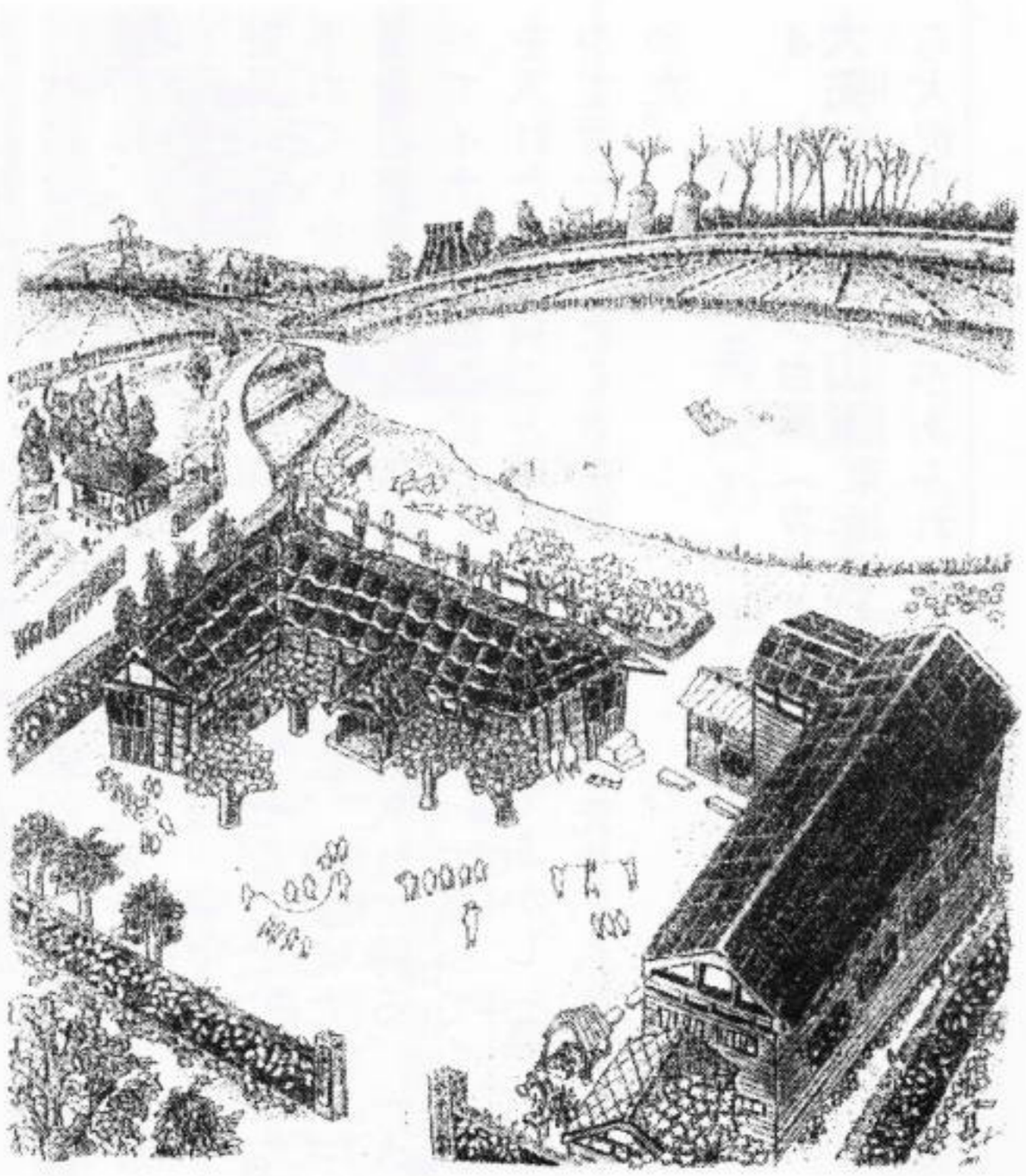
5．戦後になって出現したテレビの話

一から四丁目の商店街には、白黒テレビをいち早く持つ店が町内（丁目）ごとに一軒程度はあった。活気のあった米屋さん、酒屋さん、電気屋さんである。当時の電気屋は、ラッパ付きラジオや電気あんまの修理などを行っていた。

また、武州大沢駅（現、北越谷駅）には、アングルのついた街頭テレビがあって、それを見に行くのがとても楽しみだった。大沢一から四丁目までの商店街が共同で購入したそうである。

※下の写真は昭和３０年代の北越谷駅。向かって左端にあるのは駅前に設置された「テレビ塔」（街頭テレビ）。駅前は連日観覧者で賑わいを見せたという。





昔の大沢小学校

右の水彩画の原本は大沢小にある。創立１３０周年記念誌「けやき」によりますと、大沢小出身で大沢小教師となられた『桜井幸男先生が、昔の大沢小を思い出して描かれた絵』だそうです。

手前の正門入って向かって右には、二宮尊徳の銅像、足洗い場（井戸）、大沢町役場の小さな平屋の建物がある。二階建て建物は、当時の尋常小学校（高学年用）と高等小学校一・二年（現在の中学校に相当）の校舎である。この校舎の内池側に続く校舎には職員室があり、さらに続く北隣端の校舎には教室があった。向かって左の平屋は尋常小学校（低学年用）の校舎である。校庭の東、平屋校舎側には、桜の木が四本、校庭の西側には銀杏の木、さらに学校との境には珊瑚樹が見られる。内池の先には、田んぼ、藁ボッチ、農道、それに沿ったハンの木が見られる。向かって左上端は畑で、遠方には火の見櫓が見られる。

大沢町の四方山話　その２

平成二十三年十月二十日

荒井敏雄氏の桐産業と浅間神社の思い出



エドヤ桐箪笥店（大沢二―八―一二）は、明治十九年（一八八六）創業である。初代は兼吉氏、二代は豊三郎氏、三代は敏雄氏、四代は豊氏、現在は廃業している。第三代当主である荒井敏雄氏（昭和二年一月生まれ）に話を聞いた。

敏雄氏は、天皇家に桐箪笥を献上したこともあり、高い技術と手間をかけて生産された箪笥は、その後「経済産業大臣指定伝統的工芸品」に指定された。四代目は経済産業大臣指定の「桐箪笥伝統工芸士」である。

江戸時代初期に高畑（たかばたけ、現・東大沢四丁目）から大沢にやってきたと推定される荒井家の先祖は、刀砥ぎ師であったという。後に大名行列の武士たちを相手に屋号が「江戸や」と呼ばれる宿屋に転業したようだ。「江戸や」の屋号の言われは、元禄年間に江戸から三人兄弟でやってきてからという。

1．粕壁と並んで盛んだった大沢町の桐産業

荒井敏雄氏によると、明治の頃に恩間村から大沢の荒井家に十九歳で婿に来た兼吉が桐製品作りを大沢で最初に始めた人という。これが、大沢町の桐箪笥・桐箱の産業の始まりと思われ

る。兼吉の父親は、中山道で技術を学び、その技術を息子兼吉に伝えたとのことである。元をただせば中山道から伝わってきたことになる。

戦前までは、大沢町周辺に生えていた桐の立ち木を購入し、それを桐箪笥屋や桐箱屋に売る業者がいた。日清日露の戦争の頃は、勲章などの記念品を入れる桐の小箱が盛んに生産、販売されていたという。

戦後は、会津方面から桐を購入した。原木の仕入れには大金を所持するため、護身用としてピストルを持って会津に仕入れに出かけていた。会津の特木は、質が大変よいので全国からやってきて買われていたという。後に中国から安い桐のに只見川の土手上の砂地に生える立べると質はかなり劣っていた原木が入ってくるが、会津の桐と比された。

会津方面から仕入れられた桐の原木が十トンから十五トンの積みの貨車一台か二台が毎日のように武州大沢駅（現・北越谷駅）に着き、大沢周辺で桐箪笥や桐箱、桐下駄などの生産に使われていた。後には貨物輸送から産地直送のトラック輸送に変わっていった。昔は、原木の長さは六尺六寸（二メートル）が標準だったが、一回り大きな箪笥が生産されるようになると、七尺五寸が標準となっていった。大沢町には桐箪笥店が七軒くらい、桐箱屋や桐の下駄屋などもかなりあった。下駄屋は昭和三十年代までは見られたが、その後、需要が減少した。桐箪笥・桐箱は昭和五十年代まで盛んに販売されていた。エドヤ桐箪笥店では、桐の原木の置き場は、店の敷地内だけでなく、浅間神社そばの池（浅間池）を埋め立てした所にも仮置き場があった。

荒井家は、初め粕壁の製材専門の所で原木の製材を頼んでいたが、その後、原木の製材を自前の機械で行うようになり、原木の粕壁も含めてここだけであった。製材所も兼ねていたので、製材を頼みにここにやって来る店が絶えなかった。荒井敏雄氏はその製材の技術をさらに磨き、長年工夫しながら改良を加えていった。のこぎりの原盤の歯の厚さは普通三厘（一ミリ）程度なのに一厘六毛（〇・五ミリ）、原盤の長さは二百五十メートルから三百メートル（単位はm）程度である。箪笥の前立用にと、極細の歯で原木をとても薄く無駄なく引くには細心の注意と高度な技術が必要で、職人技といえる。

地元では「残木（ざんき）」と呼ばれる三寸以下の細い木である末口（すえくち）は、数をこなす桐箱作りに使われた。

桐箪笥屋や製材屋などから出る桐材のおがくずの買い取りをする専門の業者が大沢四丁目にほぼ集中し、大沢小学校そばの逆川に面した二軒、旧国道沿いのかつての熊坂整形外科あたりに一軒あった。大沢のみならず、それ以外の地域からもおがくずを購入したが、中には、茨城県や栃木県まで広範囲にわたって自動三輪車や四輪車で購入し回っていたおがくず屋もいたのである。

集まったかなり膨大なおがくずは用途に応じて選別し、主に岩槻の人形を始め、なめし革、氷の保管、メッキ（吉野電化工業）、染物、佃煮の燃料、壁の防音などさまざまな用途に利用されるために、多くの地域で買われていった。

2．大沢町の浅間神社

大沢町の浅間神社は、現在の北越谷二―二―二〇の「ドルチェ北越谷」あたりに、小山の上にあった。その建物の西側にある道路の反対側には一反六畝の広さの浅間神社の池「浅間池」（大沢七つ池の一つ）があり、スッポンが住んでいたという。

言い伝えでは、この池の魚をとるとバチがあたるという。（江戸時代に書かれた『大沢町古馬筥』には「魚をとる者あれぞ疫病を煩う」と記載されている。）日光街道から浅間社への入口は、天理教前バス停そばの天理教大沢分教会と深野宅と間の路地道で、天理教側の角に浅間社入口を示す石柱があったという。この浅間社の永久二年（一一一四年）の記銘がある御神体を荒井敏雄氏が所有している（※）。

3．内池の思い出

内池はヘドロがかなりすごかった。二間（三．六メートル）くらいの竹がさっと入ってしまうほどの深さだった。菱の実が浮かんでいて、それを取って販売する人もいた。内池にたくさんの魚がいて、地引網もやっていた。うなぎ、なまずなどもいた。中島治胤（はるたね）さんがその池で釣りをしてたくさん釣ったことが新聞記事にも出たほど、釣りの場所としてよく知られていた。

池のそば、現在の公民舘のそばに川魚屋さん（大沢二―一一―四）がいたが、野田の方から仕入れて販売していた。それは内池が埋められた後のことであった。内池があったころから池のそばに川魚屋があったとの説があるがそれは誤りである。

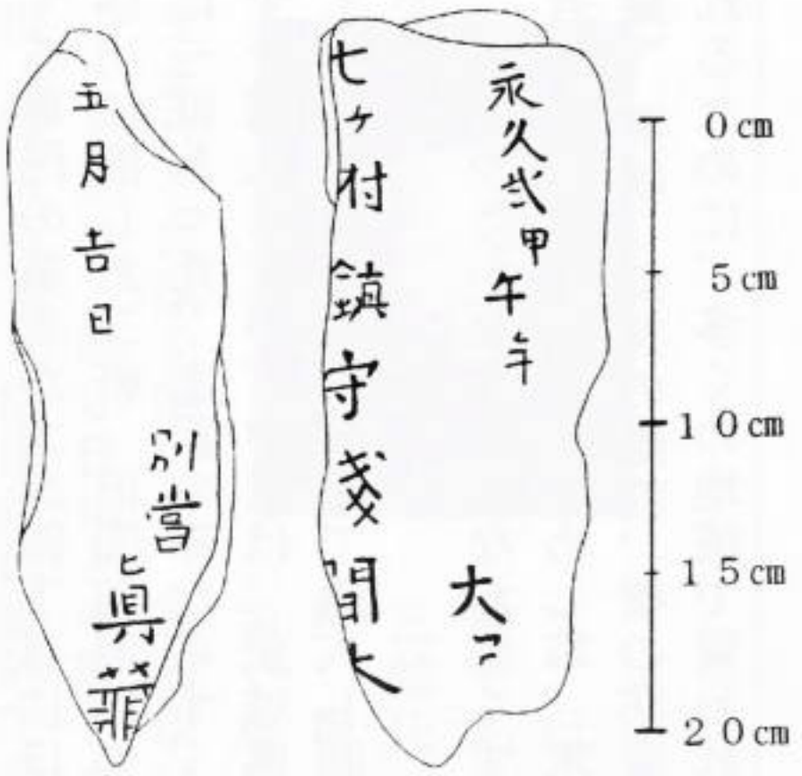
※その御神体は「越谷市の史蹟と伝説」（昭和三十五年四月発行）によると、

「永久二甲午年、五月、七ケ村鎮守、浅間大神宮」

「大沢、眞蔵院」

と刻まれているという。永久二年とは一一一四年。真蔵院とは大沢香取神社そばに住む蔦原家山伏をさす。七ケ村とは、大沢村・大房村・大林村・大柴村（大吉村）・大里村・蒔里村（間久里村）・沼谷新田（弥十郎新田）をさす。

荒井家文書には、さらに古く元七年（一〇三四年）の記銘がみられたが、残念ながら平成十三年に、家屋及び作業所、浅間社の仏像（仙元菩薩像、如来像）とともに焼失してしまった。



永久弐甲午年
大沢
七ケ村鎮守浅間大□□
別當
五月吉日
真蔵院
（神宮）

現在の大沢浅間社の御神体

※印の文章中、村名の（　）内は秦野秀明、スケッチは加藤幸一

大沢町の四方山話　その3

藤浪保雄氏の戦前戦後の思い出

平成二十三年十一月六日



藤浪保雄（やすお）氏（昭和七年十一月生まれ）は、自宅でフジナミ金物店を営む一方、大沢の発展のために北越谷駅東口の再開発事業の理事長を務め、「パルテきたこし」の代表取締役をされている方である。

藤浪家は、鷲後（逆川西側の現・東大沢地区）からここにやってきたとの言い伝えがあり、江戸時代は利左衛門と名乗り、大沢町の町役人の年寄の役（名主の補佐役）を代々務めた家柄である（江戸時代の文書「大沢猫の爪」に藤浪家の先祖は西方村藤塚組よりこの地にきたとある）。

1．戦前は米穀商と農業を営む

戦前は、父が「米穀商」を営む一方、農地を所有し、農業も営んでいた。北越谷駅東口の茶畑方面（現在の大沢三丁目の東側）を主に、北越谷駅西口の現在の北越谷二丁目の大沢町皿沼あたりの農地である。裏の物置蔵には嫁入りの漆塗りの長持ちや古銭などに混じって、現在でも当時の農具が残っている。

なお、俗称「茶畑」と呼ばれる地は、現在の大沢三丁目二三・二四・二六あたりであるが、私が幼い頃には既に茶畑は見られなかった。

2．戦後のカスリーン台風の思い出

茶畑のさらに東へ進むと逆川に突き当たる。ここに四本坂（しほんいり、現在の東大沢橋下流五十メートル先の右岸）があり、とても深い淵になっていた。土地は低く、昭和二十二年九月のカスリーン台風が襲った時、バケツの水をひっくり返すような激しい大雨が長く続いて、元荒川の対岸の越ケ谷町は、元荒川の土手、四町野（四丁野）堤防に沿って土嚢を積み上げて水害から守っていた。その時に逆川の四本坂あたりから大量の水があふれ出したのを私は目の当たりに目撃している。逆川の水かさが増して氾濫する直前まで、雑魚やドジョウなどがなぜかたくさん取れていた。大沢町一帯が一部を除いて（フジナミ金物店・秦野薬局周辺やエドヤ桐箪笥店など）、東武線のホームまで水浸しになった。日光街道沿いの大沢三丁目の自治会館の南側には火の見櫓があった。その火の見櫓に上がって見ると、大沢町が一面の浸水状態であったのを覚えている。

※四本坂とは、かつては四本の道路があることから名付けられた。ここには、日光街道の北越谷駅入口交差点の南西角（江戸時代に屋号「いづミや」の佐々木茶屋と屋号「大黒屋」の高橋茶屋があった地点）から流れ落ちてくる「茶屋裏落し」と、栄進中学校の北西から南東側沿いに流れてくる「須賀用水」、大沢三丁目の立正佼成会の南側に見られる堀が集まっている。

3．大沢地区の古道

火の見櫓からさらに北へ一五〇メートル先にある一割屋（いちわりや）さんから東方に進む道は、現在の大沢幼稚園を通り、

鷺後方面に通じる古道である。地元では「鷺後道（さぎしろみち）」と呼んでいる。昔はこの道路に沿って北側に肥溜めの貯蔵施設（新国道側近く）があり、ここから先は一面田んぼで、遠方には弥十郎や古利根川沿いの大吉の屋敷林が見えた。

4．大沢地区の用排水

四本坏の説明の所であげた「茶屋裏落し」「須賀用水」の他にも水田地帯らしく、用排水は見られていた。

一割屋さんから日光街道をさらに北に進むと、右手に秦野農機具店がある。そこには、用水が北東に向けて流れていて（江戸時代はこれを「大房落し」と呼ばれ、「御料堀」につながっている）、とても澄んだきれいな水であった。

大房の北越谷スカイハイツの南東側道路、東大沢の鷺後小学校の北西側道路に流れている堀は御料堀である。水がきれいで、須賀用水と交わる所の通称「軍艦橋」あたりで泳ぎもできた。

他には、東武鉄道の西側に沿って、堀が続いていた。照光院北側に、水角屋の南側を通って光明院の南側に流れている堀があった。「どのめ」（「堂の前」がなまったものか）と呼んでいて濁った水であった。

戦後は各地の用水堀に戦前にはなかったエビガニ（アメリカザリガニ）が増えていた。特に御料堀にはたくさんいて、それを取ったのを覚えている。

5．大沢町の字（あざ）名

自宅周辺の字として、辻（北越谷駅周辺）、宮後（みやうしろ、大沢香取神社及びその北側）、飯御免（いいごめん、大沢三丁目北側の大沢幼稚園のあたり）がある。今では忘れられた地名である。

なお、飯島医院の隣に戦後、田口医院（現在のライオンズテーションタワー北越谷）ができ、飯島医院は、後に浅野医院として継承された。田口医院の息子さんとは幼い頃、武州大沢

6．大沢町の街道筋の様子

戦前の日光街道には、荷物を運ぶ牛や馬が大八車を引いていたのを覚えている。農家の方が使っていたようだ。麻袋、かます、こも、俵や人糞をいれた樽、米俵などが運ばれていた。三輪や四輪の運送の小さなトラックも見られていた。街道筋には煎餅屋さんもよく見られていた。藁屋根（茅葺）の家も街道に沿っていくつか見られていた。街道の交通はのどかな時代であった。

昭和十六年の大東亜戦争が始まる前のことである。戦車や兵隊さんが宇都宮師団のある宇都宮方面に向かってこの街道を通って行ったのを見ている。

7．大沢町の町医者

そのような時、私が小学校三年生（昭和十六年）の頃の思い出である。日光街道を通る牛車の荷台にある荷物に興味を持ち、牛車の下に左脚が入り、鉄の車輪に左脚の腿のあたりを轢かれて塩か砂糖かを知ろうと触ろうとしたところ、滑ってそのまま牛大怪我をした。自宅のすぐそばにあった飯島医院（内科）の年配のお医者さん（松伏出身）にみてもらった。麻酔なしで裂けた腿の部分を縫ってもらって、とても痛かった苦い思い出がある。今でもその傷跡がある。大沢町では、医者はここ一軒しかなかったと思う。

なお、飯島医院の隣に戦後、田口医院（現在のライオンズテーションタワー北越谷）ができ、飯島医院は、後に浅野医院として継承された。田口医院の息子さんとは幼い頃、武州大沢

駅の引込線（現、「ローヤルシティ北越谷駅前」）の倉庫や大沢の香取神社の境内でよく遊んだものである。

8．子供の頃の水泳場所

私が子供の頃、元荒川の「棚裏（たなうら）」（北越谷五丁目、元荒川が曲がって日光街道に最接近した所の河原）や現在の北越谷小学校の北東の砂地のある河原でよく泳いだものである。

泳ぎの練習場所は、小学校三年頃に「団子屋橋（地蔵橋の俗称）」（そばに当時の松沢家の団子屋、今の松沢煎餅屋がある）のすぐ下流にある橋の周辺で行い、犬かきができてうれしかったのを覚えている。川泳ぎでは、川の中にある木の杭の名残にあたらないように気をつけたものだった。

大沢橋の欄干から元荒川に飛び込んだり、中には東武鉄道の鉄橋から飛び込んだ人もいた。

9．戦後の新国道の思い出

新国道（現在の県道足立越谷線）は戦前までに大沢の交差点まで完成していた。戦後になって間もなくその先が作られ始めた。その結果、子供の頃、裸足で通っていた大沢小学校（現在の越谷消防署から越谷市立第一体育館にかけてあった）の西側に沿った当時の狭い通りは、現在のような広い通りとなった。

新国道は、寺橋（現在の宮前橋）あたりから敷かれた線路の上を走らせたトロッコに土を入れて、その土を土盛りしながら作られた。「まるいと」さんあたり（一割屋の東方の新国道十字路角地）までは畑で、その先は田んぼが広がり、そこからトロッコで土盛りしながら作られていった。

新国道の周辺の田圃は道路に対して平行でなく斜めに入って



10．北越谷の区画整理

昭和三十七年に着手した北越谷の区画整理事業であった。

この年の五月、日比谷線が東武線の北越谷駅まで乗り入れが始まったのをきっかけに、北越谷周辺の土地が上がり、そのしわ寄せがその先の大袋駅西口周辺に影響を与えて、当時は家がほとんどなかった地域に無計画な人口急増をもたらしたのを見てきている。

大沢町の四方山話　その4

秦野徳久氏の東武鉄道開業時の話

平成二十三年十一月十二日

はじめに

秦野徳久(のりひさ)氏（昭和十六年四月生まれ）は、自宅のある大沢三丁目で「かしわや秦野薬局」を営んでおられます。

享保年間（一七一六～一七三六）を初代とする「柏屋」の当主は、「大垣」、「松沢」、「秦野」と名字が変わってきました。

江戸時代の先祖は、「名主」、「問屋」を補佐する「年寄」役を四代に渡って世襲してきました。

1．「東武鉄道」への土地の寄附

明治時代の母方の曽祖父（七代目）は、「越ヶ谷町外一ヶ町組合」町長、「大沢町」町長を歴任した松沢久次郎で、明治三十二年八月二十七日の「東武鉄道」の開業に際して、関係自治体の首長と連名で「線路敷設」に関する請願書を出したり、自らの所有する土地を「東武鉄道」に寄附することで、「越ヶ谷町」側ではなく「大沢町」側への停車場（駅）を誘致したようです。

戦前生まれの大沢地区の住民の間では、それは周知の事実だったようで、中には、先祖代々大沢地区にお住まいの二名の方々が、「東武鉄道・北越谷駅（恐らく駅の東口）」に、松沢久次郎の銅像を建てるようにと、「東武鉄道」に掛け合ったこともあったそうです。

「東武鉄道」の停車場（駅）を誘致するために、土地を寄附したという話は、大沢地区の住民の間では、近年までほとんど「都市伝説」のような形で語り継がれてきましたが、最近の住民の方々の間では知らない人の方が多いようです。

今年（二〇一一）になって、現在は使用されていない『旧土地台帳』を調査した息子の話を聞いた結果、当時の町長であった松沢久次郎をはじめとする「大沢町」の多くの町民の方々や、隣村の「大房村」の多くの村民の方々が、非常に沢山の土地を「東武鉄道」に寄附していた事実を知りました。この事は、「大沢町」より商業の発達していた「越ヶ谷町」の町民の方々には本当に申し訳ないことではありましたが、「東武鉄道」の停車場（駅）の誘致が、「大沢町」の町民や、「大房村」の村民にとって、いかに熱望された悲願であったかを知る機会を得ました。

これまで、「大沢町」に停車場（駅）が設置された理由として、①当時の開業区間である「北千住」と「久喜」の中間地点であったので、線路敷設の工期短縮に有利である②「大沢町」には旅籠屋が多数存在したので、技術者や工事人を宿泊させるために都合がよい③「日光道中」や「元荒川」が近くにあるので、工事のための陸上水上輸送に便利である等が言われてきました。しかし、「線路敷設のための土地の確保」が最優先されなければ何も始まりませんので、多くの「大沢町」の町民や、多くの「大房村」の村民の寄附行為は、それは周知の事実だったようで、後世に語り継がれていかなければならない貴重な歴史的事実なのではないかと思います。

※なお、『旧土地台帳』は現在は使用されていないとはいえ、現在の住民の方々の「個人情報」にも繋がるデータであるため、詳細の公表は差し控えたいと思います(秦野秀明　記)。

2・大沢地区にある「茶畑(ちゃばたけ)」の地名

「旧・日光道中」沿いの「大沢三丁目自治会館」のすぐ南より東北東へと伸びる小径があり、これは江戸時代後期に書かれた『大沢猫の爪』の地図に、「鷺後道(古来両嶋葬礼道)」と書かれている道だそうです(息子の調査による)。この小径の入口の「茨急バス・停留所」の標識に「茶畑入口」と書かれています。

この「茶畑」の地名は、江戸時代後期に書かれた『大沢猫の爪』や、『大沢町古馬筥』、明治二十年の『大沢町地誌』にも書かれていないそうです(息子の調査による)が、「茶畑」と呼ばれた地域は、どうやら現在の大沢三丁目二三番地・二四番地・二五番地・二六番地・二七番地の辺りのようです。

戦後しばらくの間も、「茶の木」で作られた「生垣(いけがき)」、つまり「茶垣」を持ったお宅が少なくとも二軒はありました。

「茶畑」という名称から、京都府の宇治や、静岡県にある「茶畑」を連想してしまいがちですが、南北朝時代の『金沢文庫古文書』にも記載される「赤岩茶」は、現在の松伏町と吉川市にあった下河辺荘赤岩郷で栽培されていたようで、昨年(二〇一〇)までも、松伏町では多くの「茶垣」が現存するそうです(息子の調査による)。

越谷市内でも、大沢地区の隣である増林地区で、「茶垣」による生産・流通が行われていたようですので、越谷市内の他の地区でも「茶垣」による生産・流通が行われていた可能性は非常に高いと思われます。

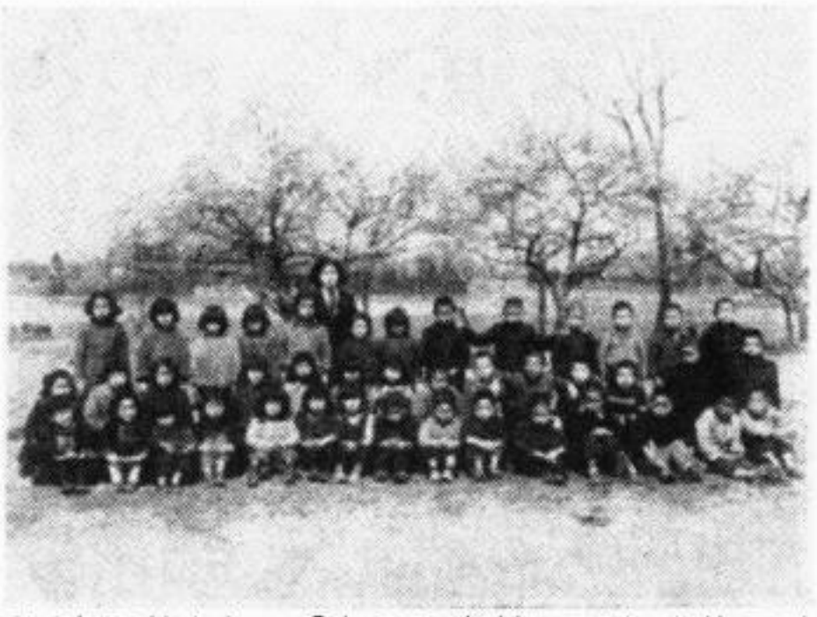
3・「堂の前(どのめ)」の蛍

「旧・日光道中」に架かっていた「天神前橋」より東北東の「光明院」の南側へと流れていた悪水路を、子供の頃は「堂の前(どのめ)」と呼んでいました(現在は暗渠となっています)。

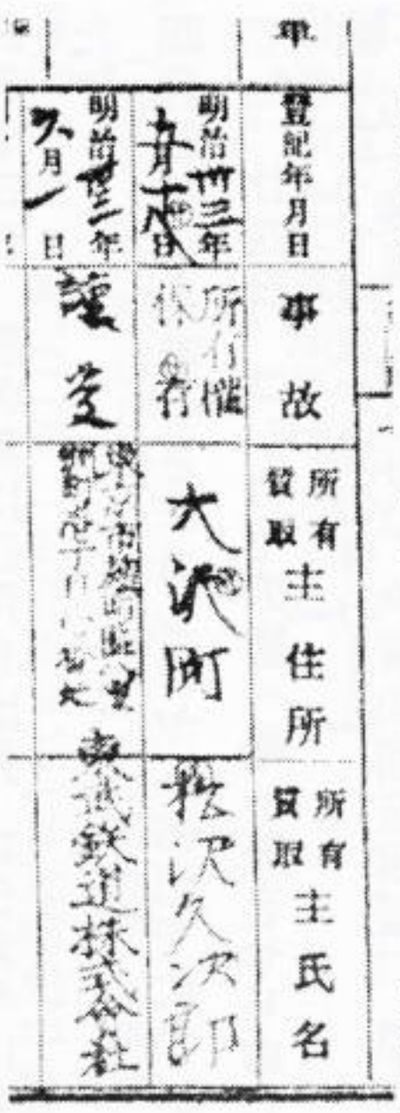
江戸時代後期に書かれた『大沢町古馬筥』には、「堂の前」の説明として、「どふの前といふは、光明院の外囲、悪水堀通り薬師堂の前といふ、略言なるべし、」と書かれているそうです(息子の調査による)。

私の伯母の話では、戦前の「堂の前(どのめ)」には、夏の夜になると無数の蛍が乱舞して、それは美しい光景だったようで、私の祖父(伯母の父)が作った「わっぱ飯」の器に「蚊帳(かや)」の生地を貼り付けた「虫かご」の中で、何匹もの蛍が光を放つ様も幻想的だったそうです。

(秦野秀明　記)



私(秦野徳久)の「大沢小学校」三年生修了時の集合写真です。(場所不明)
昭和二十五年(１９５０)撮影



『旧土地台帳』の一部「譲受」の記載がある。



四年生修了時の集合写真です。(「内池」にて)
昭和二十六年(１９５１)撮影

日光道中を通った人たちの記録

宮川　進

越谷市は街道町である越ヶ谷宿とその周辺の農村で形づくられて発展してきました。その中核をなした日光道中は、いまも市の中心を通り、昔の懐かしい、あたたかい風情を残す木造の建物があちこちに残っています。こういう建物を、残してほしいのはモチロンですが、そのベースとしては、市民の中に「日光道中」についての情報がいっぱい共有されているべきではないかなあと思っています。そこで、日光道中を通った人の日記、紀行文などで「越谷」という名前の出ているものを、江戸時代を中心に探してみることとしました。

探したのは、ほとんどが国立国会図書館。開架式ではないため、本を探すのは題名や作者名などのキーワードをパソコンに打ち込んで請求しなければなりません。「日光道中」「日光街道」「越ヶ谷宿」で探すと、その題名がついた本が見つかる。それに「越谷」が書かれているかを調べる。それが終わると、こんどは「奥州街道」、単なる「日光」、「道中記」「晃山」――あとは、どういうキーワードで探せばよいのか、なにしろ、「内容」をもとに検索することができませんので、題名についてのヤマカンしかありません。このヘんが、凄い苦労でした。そして、平成23年11月1日現在で見つけた総数が162となりました。これからの研究者の方が、一から始めなくてもよいように、とりあえずリストをつくりました。今回はそのうち、17世紀に書かれたものを発表させていただきます。

1.「資勝卿記」　著者・日野資勝　作成年次・元和3年
（1617）（明治12年柳原前光蔵本謄写より）
＝著者は公家の日野大納言資勝（すけかつ）で、元和3年に日光の薬師堂（東照宮の前身）の開眼供養に参向したとき、および帰路の記録である。これが、旅の記録として越谷の出てくる第1号である。

『四月十二日　辰の刻に江戸を出発。コシカヤにて昼の休みをとった』

『四月廿三日　唯心さまコシカヤへお出でについて拙子も罷り立てた。廿四日。コシカヤの宿へ帯一筋をやり申した。コシカヤを罷り立って浅草で昼の休み――』

2.「東武実録」　編者・松平忠冬　作成年次は寛文5年であるが、記事は元和4年（1618）のこと（内閣文庫所蔵史籍叢刊第一巻　史籍研究会編　汲古書院　昭和56年刊）
＝40巻からなる。家康の没年である元和2年の年頭から秀忠の没年・寛永9年の年末までの17年間の編年史。

『（元和四年十一月）公（秀忠）越谷葛西千葉東金船橋所々に御放鷹あり』

3．「丙子日本日記」　著者・任絖　作成年次・寛永13年（1636）　日光市史編さん委員会編　日光市　昭和61年刊）

＝著者は第4次朝鮮通信使。江戸を訪問した折、家光の圧力で、むりやり日光へ参らされた時の記録。

『（十二月）十八日　晴。朝飯後に（江戸を）出立する。――越箇谷で昼飯を取った。――江戸から越箇谷までは三里、越箇谷から粕壁までは三里である』

『（十二月）二十五日　朝　曇、午後　雨。日の出に（粕壁を）出立し、越箇谷で昼飯を取り、午後に江戸に到着し――』

4．「朝鮮往来」　編者不明　作成年次・寛永13年（1636）（日光市史中巻　日光市史編さん委員会編　日光市　昭和61年刊）

＝前記4と同じく、寛永13年の朝鮮通信使、日光社参の日本側の記録か。

『日光路次中之ご馳走人　昼息　越谷　土方彦三郎　宮城主膳正　伊奈半十郎　――』

5．「癸未東槎日記」　著者・不明　作成年次・寛永20年（1643）（日光市史中巻　日光市史編さん委員会編　日光市　昭和61年刊）

＝寛永20年、第5次の朝鮮通信使、日光社参の記録。

『七月二十三日　―中火干越介谷。―自江戸至越介谷六十里。越介谷至粕壁三十里』

『七月三十日　朝（粕壁）発行。中火干越介谷。夕入江戸』

6．「東めぐり」　著者・不明　著作年次・寛永20年（1643）（続紀行文集　博文館　明治33年刊）

＝奥州信夫の里（福島県）を出た人が江戸市中を見てまわった紀行文。作者不明であるが、柳亭種彦は徳永種久ではないかといっている。

『心のまゝに世の中を。杉戸の里と聞くからに。立ち寄る影の朝夕に。迷う我身に優しやな。今宵の宿を粕壁に。早越谷の里なれば。由ある人に草加をば。――』

7．「慶安二大納言日光ご参詣記」　島原市・島原松平文庫所蔵　著作年次・慶安二年（1649）（日光市史中巻　日光市史編さん委員会編　日光市　昭和61年刊）

＝大納言家綱が日光に参詣した時の記録　家綱は当時9歳。二年後に家光没のため、将軍となる。

『（四月）十一日ははなはたしくふれハ、千寿に御滞座あり。十二日、天気晴て、辰の後刻に、出御、越谷にて昼の御やすミ有て、未のをハリほとに、岩付の城へ、入御まします、――』

『（四月）あくる廿二日辰の後刻、幸手を、出させたまひ、昼の間岩付の城に、渡御あれは　対馬守（城主・阿部対馬守）色々御なくさミのことなどなせり――　申のをハリにハ越谷の御殿へ、着御ます、――』

『廿三日には辰の後刻に越谷を、出御有て、千寿の御茶店にて少の

間、やすませ給ひ、未のかしらに江戸の御城へ、着御ましま
す――』

8．「大猷院殿御実記」　著者・成島司直（もとなお）　文化6年（1809）に起稿

＝7と同じく大納言家綱が日光に参詣した時の記録。大猷院殿御実記は徳川実記の一部を構成。

『――（十二日）大納言殿には巳刻千寿をたたせ給ひ。越谷にて昼餉奉る。此館構造せし大番根岸長兵衛直利。中川市衛門忠明に時服。大工に銀を下さる。阿部対馬守重次御迎として岩槻より参る。――』

『（岩槻）城を出たまひて供奉の行装を御覧あるべしとて。越谷の橋に御輿をとゞめられ。中後同所の御旅館につかせ給ふ時。――』

『廿三日大雨なり。大納言殿今朝より御さうじあり。辰後越谷御旅館を発程したまひ、千寿にて御やすらひあり。未後御帰城。』

9．「慶安二年日光御参詣日記」　著者不明　作成年次不明（昌平坂学問所蔵）

＝7、8と同じく大納言家綱が日光に参詣した時の記録　往還十余日の間、少しも退屈せず、ご機嫌よく、いつもは深夜まで寝付かなかったが、この旅行中は早寝早起きであったと9歳の家綱を同行のものたちが誉めていたと書かれている。

『十二日　早朝快晴　巳刻千寿出御越谷ニテ昼御休息御膳ヲ献ス御側ニ侍ルモノ千寿ノ御旅館ヲロソカナリ当所ノ御殿結構に候へハ昨日ノ御逗留後悔ノヨシ申上ルノ処ニ愚痴ノ至イワレサル儀申者カナと仰ラル』

『――未上刻ニ岩付出御越谷へ御着ノ時供奉ノ行列ノ次第御覧ナサルベキヨシ御出サレ越谷ノ橋ノ上ニ御輿ヲ止メラル――行ク事終リテ御旅館へ入御アリ時スデニ申刻ニ及べリ――』

『二十三日　早朝陰辰刻細雨未刻大雨越谷ニテ御精進ノ朝御膳を召上ラル辰刻出御――』

10．「大納言様日光御参詣之時路次中供奉行列」

＝7、8、9記載の大納言家綱が日光に参詣した時の行列の順図　原本表紙には題名の横に「原名姫路蔵典章雑録」とある。

『行列の最初の御鉄砲から、最後の牽馬までの順序が記されている。』

（越谷、その他の地名はないが、越谷の橋上で家綱が行列を見たと8や9に書かれているので、これを収録した。）

11．「癸巳（きし）日光紀行」　著者・林羅山　著作年次・承応2年（1653）

＝林羅山が日光参詣をしたときの漢詩集。羅山は江戸時代初期の朱子学派儒学者。家康から四代の将軍に仕えた。

『二十九日江戸ヲ発シ草駕越谷ノ間ヲ過ク泥淖処処僕馬共ニ労ス函三及人見友元同行　秋霖晴テ後江城ヲ出ヅ目ヲ挙レハ東方日鉦ヲ掛ク努力テ擔夫踏所ヲ知ル輿ハ秩馬ノ如クニ泥行ヲ作』

12．「癸巳紀行」　著者・林鵞峯　著作年次・承応2年
（1653）
　＝林鵞峯が日光、足利学校へ行った紀行文　鵞峯は羅山の三男で後継者。大学頭。11の林羅山と同行の旅か？
『二十九日天晴早旦出駕至千寿橋――　白鷺連挙影沈中因賦一絶
翻足窺魚池沼寒鮮明上下影同般一翎仰立一翎俯白水疑為双鷺看
越谷午憩此里来遊午景幽行厨供設少時休劈分北陸越山否越谷今
看東武列　蕎麦　始看蕎麦花如雪乎日誦知居易詩子粒相朝春作
麺吾儕可下数鍥匙　芋　満疇芋葉蔓索自古蹲鴟得名自若使懶残
喫却徑須不換連城――』

13．「扶桑録」　著者・南壷谷　著作年次・万治2年
若松実訳（日朝協会愛知県連合会「扶桑録」91・12刊による）
　＝著者は第6次朝鮮通信使。日光社参の記録。第6次のあとは経費節減のため、上野東照宮への参詣ですませることとなった。

14．「明暦元年　朝鮮信使来朝記」　著者・不明　著作年次・明暦1年（1655）（日光市史中巻　日光市史編さん委員会編　日光市刊　昭和61年刊）
　＝明暦元年に来朝の第6次朝鮮通信使を迎えた時の日本側の記録か。
『日光山江之道中昼休泊所之御馳走人并御賄役人　越谷昼休　御馳走人　伊達兵部少輔　壱万九千石　丹羽式部少輔（式部少輔依病気　彼地参上）御賄　伊奈半左衛門――』

15．「海陸不求人」　著者・不明　著作年次・万治2年（1659）（道中記集成1　今井金吾監修　大空社　平成10年刊）
　＝全国の主要街道を説明した総合道中記の最初。一文は20円くらいか。
『――そうかより越かへ、二里半　同四拾三文（馬の値段）　越かへよりかすかべ、三里　同拾八文（馬の値段）――』

16．「諸国道中記」（内題・諸国道中大絵図）　著者・不明　出版元・鱗形屋孫兵衛原板　出版年次・天和3年（1683）
　＝全国の諸街道の宿場をつないで描いた地図　道中地図としては最古のたぐいか。
「――かすかへ――二里三十二丁――こしがへ――一里三十丁――さうか

―」

17.「諸国案内旅雀」　著者・不明　出版元・京都　表紙屋七郎兵衛　出版年次・貞享4年（1687）
＝「海陸不求人」について古い総合道中記
『―そうかよりこしがへへ　二里半　こしがへよりかすかへへ　三里―』

18.「一目玉鉾」　著者・井原西鶴　（珍書刊行会刊　大正6年。定本西鶴全集第9巻　中央公論社刊　昭和26年）
＝西鶴の著書ではあるが、彼がこのすべてを訪問したのではないだろう、と西鶴研究者もいっている。（年刊西鶴研究九　河村袈裟夫氏「一目玉鉾の成立」）　著作年次・元禄2年（1689）
『―〇越賀部（こしがへ）　此所に御殿有―』

19.「日本鹿子」　著者・磯貝舟也　著作年次・元禄4年（1691）
＝日本全国の地誌　著者は「好色法のともづな」など浮世草子の作者
『―〇そうかよりこしがへエニ里半　〇こしがへよりかすかべエ三里八丁―』

さらに隅田公園を行くと、左手九mほどの丘にある待乳山聖天を望むあたりに、「花の碑」がある。滝廉太郎作曲の「花」・・・「春のうららのすみた河　上り下りのふな人が　かいのしつくも花と

日光道中ぶらぶら歩き　（3）

和泉守

山谷堀公園を歩く

駒形橋を右手に見てさらに江戸通りを進むと二〇〇mで吾妻橋。交差点の北西角には電気ブランで有名な神谷バーがあり、寄り道したい気もするが、昼間なので素通り。江戸通りの裏に出て、川沿いの隅田公園の中を歩く。表通りの喧騒とはしばしの別れ。歩き出すと目に飛び込んでくるのは完成したばかりのスカイツリー。沢山の人が記念写真を撮っている。公園自慢の桜は一時のものだが、このツリーは恐らく一年中人を惹きつける。「山の宿の渡し跡」の碑を見ながら六〇〇mも歩くと言問橋。江戸通りは言問通りにぶつかってここで終わる。

さらに隅田公園を行くと、左手九mほどの丘にある待乳山聖天を望むあたりに、「花の碑」がある。滝廉太郎作曲の「花」・・・「春のうらうらのすみた河　上り下りのふな人が　かいのしつくも花と

散る　眺めをなににたとうへき」の詞が作詞者武烏羽衣の自筆で刻まれている。隣には「雪の日の隅田は青し都鳥　子規」の碑もある。

一〇〇mで川べりに山谷堀水門。しかし表示は「下水道局ポンプ場」との無粋なもの。ここは隅田川から山谷堀への入り江があった所。対岸の隅田川とは「竹屋の渡し」が結んでいたが、昭和三年言問橋の架設により廃止。明治から昭和のはじめにかけて、対岸の向島を望むこの辺りには、政府高官や政商の別邸が連なっていたという。「山の宿の渡し」から上流、対岸の向島は墨東と呼ばれた。墨堤には、家綱に始まり吉宗の時代に本格的となった桜並木が続き、花の名所・月の名所と謳われた景勝の地であった。

飛鳥山から続く音無川（石神井用水）の末流となる山谷堀、それがいつ掘られたかははっきりしないが、南側に寄り添う日本堤は元和六年（一六二〇）、荒川の水除のために築かれた。待乳山の土が使われたという。吉原に通じていた堀は今は暗渠となり公園にその名を残すのみである。全長七〇〇mほどの細長い山谷堀公園は今戸橋から始まる。入り江から堀に入るところに架かっていた最初の橋である。「今戸橋」の銘板が昔の橋台に埋め込まれて残されている。二五〇mで吉野橋。

この橋の手前の北側、都立の高校のある場所には江戸時代、浅草弾左衛門の役所があった。弾左衛門は町奉行の管理下にあって、関八州とその周辺の被差別民衆を統括していた。吉野通り（日光道中）を横切ると、間もなく「土手通り」が左側に平行して走る。日本堤橋のところで土手通りに日本堤ポンプ場が現れて、公園はようやく終わる。三ノ輪まで続いていた山谷堀は昭和初年に地下に潜って公園となり、日本堤は土手通りに姿を変えた。

公園から土手通りに出ると、一〇〇mで吉原大門の交差点に達する。左側のガソリンスタンドの前に「新吉原衣紋坂　見返り柳」の立派な石碑があり、何代目かのか細い柳が心細げに立っている。吉原へ向かう遊客たちは、日本橋や柳橋から舟で隅田川を遡ってきた。今戸橋をくぐって山谷堀に入り、日本堤へ上がってから、徒歩や駕籠で不夜城を目指した。舟の代わりに馬でくる人もいた。三ノ輪から日本堤を来る人もいた。

今の日本橋人形町にあって移転を迫られていた元吉原が、明暦の大火（一六五七年）の七ヶ月後、浅草寺裏の田んぼの中、日本堤の土手の下に忽然と出現した新吉原は、昭和三三年（一九五八）売春防止法の施行により姿を消すまで続いていた。現在の地図を眺めると、千束四丁目の整然とした区画は、三〇〇年の跡をくっきりと残しているように見える。鷹狩りに向かう将軍から大門が見えないように、「く」の字に曲げてつくられたという衣紋坂も。

かつての中央の通り「仲の町」は、今も仲の町通りとして健在であるが、その左右にはソープランドがひしめいている。吉原に長居しすぎた。吉野通りに引き返して南千住を目指す。

江戸時代以前の越谷を通る古奥州道（一考察）

加藤幸一

今の日光街道は江戸幕府によって江戸時代初期にできた直線の道路である。しかし、江戸時代以前にも後に成立する越ケ谷宿や粕壁宿のそばを通って奥州へ通じる道があったと思われる。

そこで、越谷や春日部を通る江戸時代以前の奥州道は、おそらく主要な川の自然堤防上を通ったであろうという前提と、江戸時代中頃の文化文政年間に越ケ谷宿の本陣を勤めた福井猷貞によって書かれた「越ケ谷瓜の蔓」や越谷・春日部周辺の江戸時代の古地図の解読をもとに考察することにした。

なお、今から約二百年前に記された書物「越ケ谷瓜の蔓」は、江戸幕府ができて約二百年もたってからの文献ではあるが、江戸時代以前の奥州道をつかむ上で貴重な手掛かりとなる。

また、考察するにあたって、髙﨑力氏からの多大な協力をいただいたことをここに記す。

一　隅田宿から出る古奥州道

古代に隅田宿（隅田千軒宿）のあった現在の墨田区内の墨田二丁目交差点には、二つの古道が十字路として交わっている。東西の古道は、武蔵国府（現在の府中市）と下総国府（現在の市川市国府台）とを結ぶ東海道であり、北に伸びる古道は、堀切、亀有、金町、松戸を通って東北地方に通じる奥州道（奥大道おくおおみち、陸奥道むつみち）であったという。

上記の奥州道は北東に向かうが、堀切の手前で北西に分かれて関屋の里（現在の足立区千住関屋町）に通じる道があり、これも奥州道の一つと考えられている。関屋から北西に進み、元宿（もとじゅく・現在の足立区千住元町）、中世の渕江城（足立区本木の中曽根神社付近）跡の西側を通り、ここから現在の伊興遺跡方面に向かって北上するルートである〈註1〉。元宿は江戸時代以前に千住宿の元となった宿駅と推定されている。

さらに元宿より北東に直進して、元宿の二キロ手前で分かれて北北東に直進する日光街道先の下妻街道に続く奥州道もあると思われる。このルートが越谷・春日部地域を通っている奥州道と考えられる。

以下、この古奥州道について述べる。

二　「越ケ谷瓜の蔓」に書かれた古奥州道

江戸時代以前の奥州道については、江戸時代の文化文政年間に書かれた「越ケ谷瓜の蔓」（福井猷貞著）の中に次のように述べられている（一部原文手直し、⑥は秦野秀明氏の読みに従う）。

往古奥州道、千代田御城下より、①千住秋屋の里、②大原通（だいばらどおり）、③八条堤通、④南百（なんど）角より西方（にしかた）、⑤中町（なかまち）横町より元荒川［を］渡り、⑥押立堤（おったてつつみ）［を］通り、⑦大里（おおざと）古往還、⑧間久里（まくり）、⑨粕壁橋手前より百間（もんま）堤［を］通り、幸手（さって）［に］入（いる）、御成道迄川付き［を］通り、往還にて之（これ）有る由。

① 「千住秋屋の里」とは、「関屋の里」の誤りであろう。

② 大原（だいばら）を抜けることから、下妻街道を通ってくることがわかる。千住から下妻街道沿いに行き、現在の綾瀬川に架かる内匠（たくみ）橋（「榎戸（えのきど）橋」〈註2〉）を渡り、左折して大原に向けて北上する大原道である。なお小菅方面に流れる現・綾瀬川は寛永年間の人口の川である。

一方、内匠橋より、そのまま、まっすぐ東方に進むのが下妻道である。実は、この下妻道の方を奥州道であるとの説がある。その説によると、古新田（こしんでん）の古利根川沿いに進み、八条の渡しに向かうことになる。古新田村の古利根川沿いに、今でも大相模地区の土手道のような堤土手の道が残っている。これも奥州道の一つではあろう。

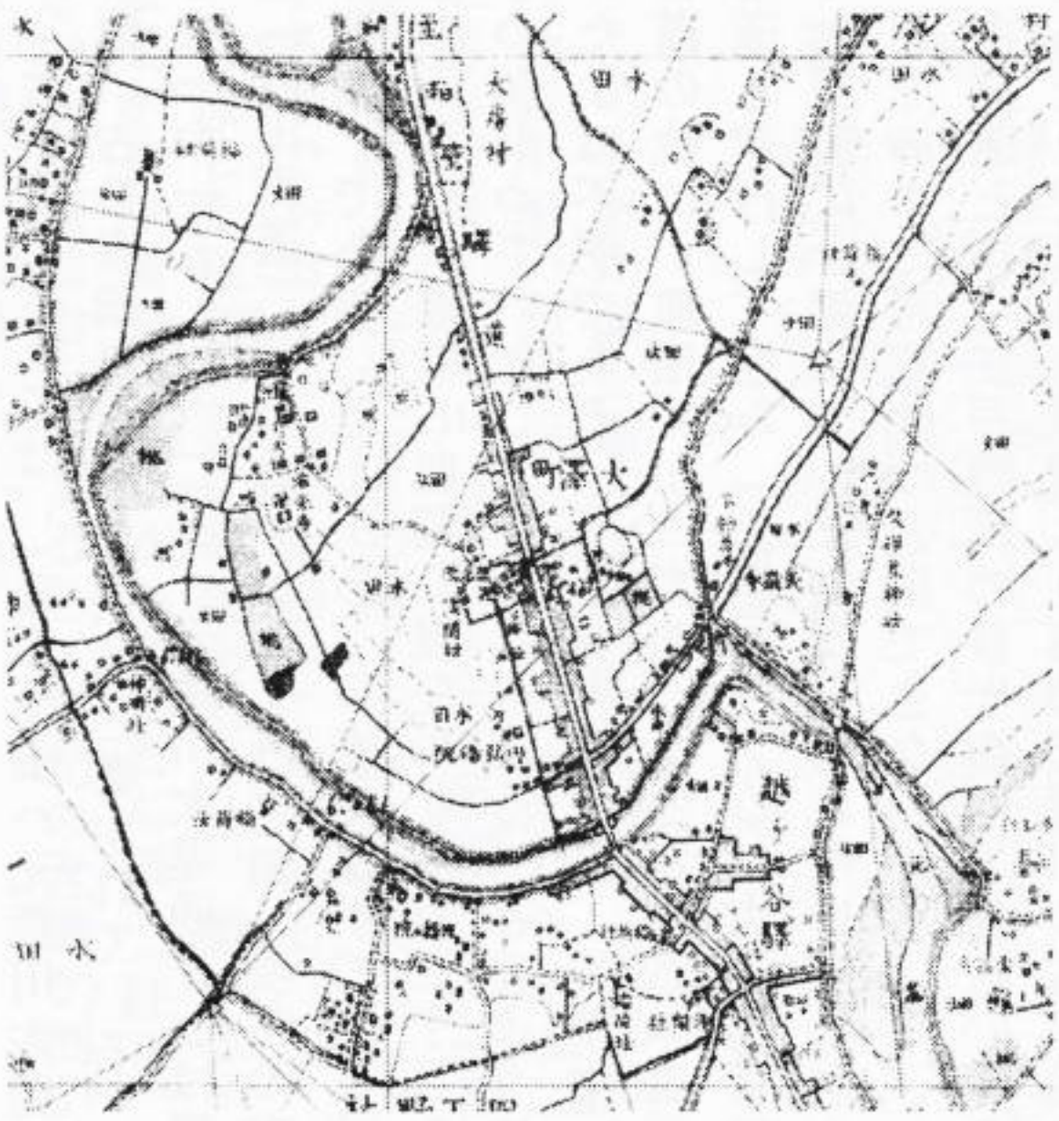
しかし、大原道も比較的高い土地（かつての大河と推定されている毛長川の自然堤防か）にあり、八条の渡しに行くには大原道の方が最短距離であるので、八条堤のような土手道とはなっていないが、「越ケ谷瓜の蔓」に書かれたとおり、大原道を江戸時代以前の越谷方面に向かう奥州道と推定した。

③ 大原道の突きあたりが八条の渡しである。川を渡らずに、川の右岸に沿って北上する。これが「八条堤」と呼ばれていたのであろう。八条堤とは八条領にある中川沿いの堤の土手道、現在の越谷市東町（あずまちょう）の中川沿いの「東町くぬぎ通り」をほぼ指すのであろう。現在の土手道は、過去に何度も決壊したために大きく変わっていると思われる。地元では、かつては下妻道と呼ばれていた。

④ 南百から西方にかけての元荒川の土手道は、ほぼ昔のままに留めていると思われる。中川沿いの八条堤より、引続き元荒川沿いの土手道を西に進んだのであろう。

⑤ 中町横町とは、日光街道に架かっていた中町橋を中心に中町橋の北の日光街道沿いと東の現在の観音横丁を含む地域のことであろう。観音横町から現在の日光街道へと進み、大沢橋近くの市神（いちがみ）様（神明社）があったあたりで元荒川を渡し船で渡ったと思われる。対岸に渡ってからは、現在の日光街道のように北へ直進すると、大沢で最も低い天神前橋辺りを通過し、不便な低地を通ることになってしまうので、現在の日光街道のように直進したとは考えにくく、迂回したと思われる。

秦野秀明氏は、明治十三年測量の迅速図に描かれた浄光寺東側を通る古道（現在の北越谷駅前郵便局そばの十字路や北越谷公民館、大房の稲荷神社の東を通っている）が古奥州道であるとしている。



迅速測図「埼玉県武蔵国南埼玉郡越ケ谷駅及び大沢町近傍村落」（明治十三年測量）

古奥州道は、北越谷地区では、大房村の浄光寺東側にみられた古道（「大房道」とか「海道」と呼ばれた）が古奥州道と推定してきたが、一時は考えを変えて「明治の迅速図に記載された元荒川の左岸に沿って見られた土手（現在の桜並木の土手道）が江戸時代以前は、八条堤のように土手道として利用された押立堤で、それが古奥州道ではなかったか」と思ったこともあった。しかし、秦野秀明氏は緻密な調査によってその可能性はないと指摘している。もっともではあるが、念のためこの説も残し、後世の研究に委ねることにする。

⑥　「押立堤（おったてつつみ）通り」とは、秦野秀明氏によると「押立堤を通り」の意味であるとし、「押立堤通り」という通り名をさすのではないという。

さらに秦野秀明氏は、福井権右衛門猷貞著『大沢猫の爪』の中の「上外レ大房村境をさして押立と云」を取り上げて、「上（かみ）」とは大沢町上宿（上組）、現在の大沢三丁目をさし、その「外（はず）レ」の大沢町と大房村との境界を押立と呼ばれていたとし、北越谷5丁目には、村組の「押立組」があり、北越谷5丁目の西端にほぼ南北に存在する北越谷第五公園そばの「元荒川」左岸堤防を「押立堤」としている。そして、「押立堤」を通る往古の「奥州道」を明治十三年測量の迅速図に描かれた浄光寺東側を通る古道としている。

なお、「押立」の読み方は秦野秀明氏の調査によるものである。「押立」は、本来は文字通りに「おしたて」と呼ばれていたものが、なまって「おったて」となったものかもしれない。

日光街道の大松屋福井家から始まる猿島街道（野田街道）と浄光寺東側を通る大房道や北越谷二丁目あたりの皿沼道との関係について触れてみる。

⑦　古往還とは、江戸時代の日光街道より古い道を意味し、大房道と並行して進み（「皿沼道」か）、大房稲荷神社のあたりで大房道に合流していたのかもしれない。これも古奥州道の一部であった可能性は否定できない。

⑧　元荒川の古川の自然堤防沿いの間久里を過ぎたあとは、その先が現在の新方川（せんげん堀）手前の北浦の地となり、かなりの低地となるため、現在の日光街道のように直進して大枝村を通過するのではなく、湿地帯であろうその低地をよけるために、大泊村方面に迂回したと思われる。

高﨑力氏によると、江戸時代以前の古奥州道は、堂前の手前から日光街道より右に分かれ、下堂（しもんどう）そばを通る。それから念仏橋方面に進んだと推定している。かつての念仏橋通りにあたる。次の頁の上図がそうである。

「大沢猫の爪」には、「元和之頃ハ元荒川大堤通、今云新田耕地、古名高畑皿沼堤上通、」と書かれている。「元和之頃」とは一六一五～一六二三、元荒川大堤通りとは現在の猿島街道（野田街道）、新田耕地の古名は高畑（現在の東大沢四丁目あたり）である。以上から、日光街道ができる前は、高畑周辺の元荒川大堤は、皿沼（現在の北越谷二丁目あたり）方面とつながっていたことを示している。どのようにつながっていたかは不明である。北越谷地区では、「大房道」と呼ばれる古道の他に、皿沼にかつてあったとされる「皿沼大堤」が大房道と並行して進み（「皿沼道」か）、大房稲荷神社のあたりで大房道に合流していたのかもしれない。これも古奥州道の一部であった可能性は否定できない。

⑦　古往還とは、江戸時代の日光街道より古い道を意味し、大里あたりでは日光街道より西の元荒川の古川沿いの自然堤防（河畔砂丘）を進んだと思われ、現在の大林自治会館前あたりの道を通り、日光街道と東武鉄道とが交差する大里の踏切あたりで、日光街道に合流したのではないだろうか。

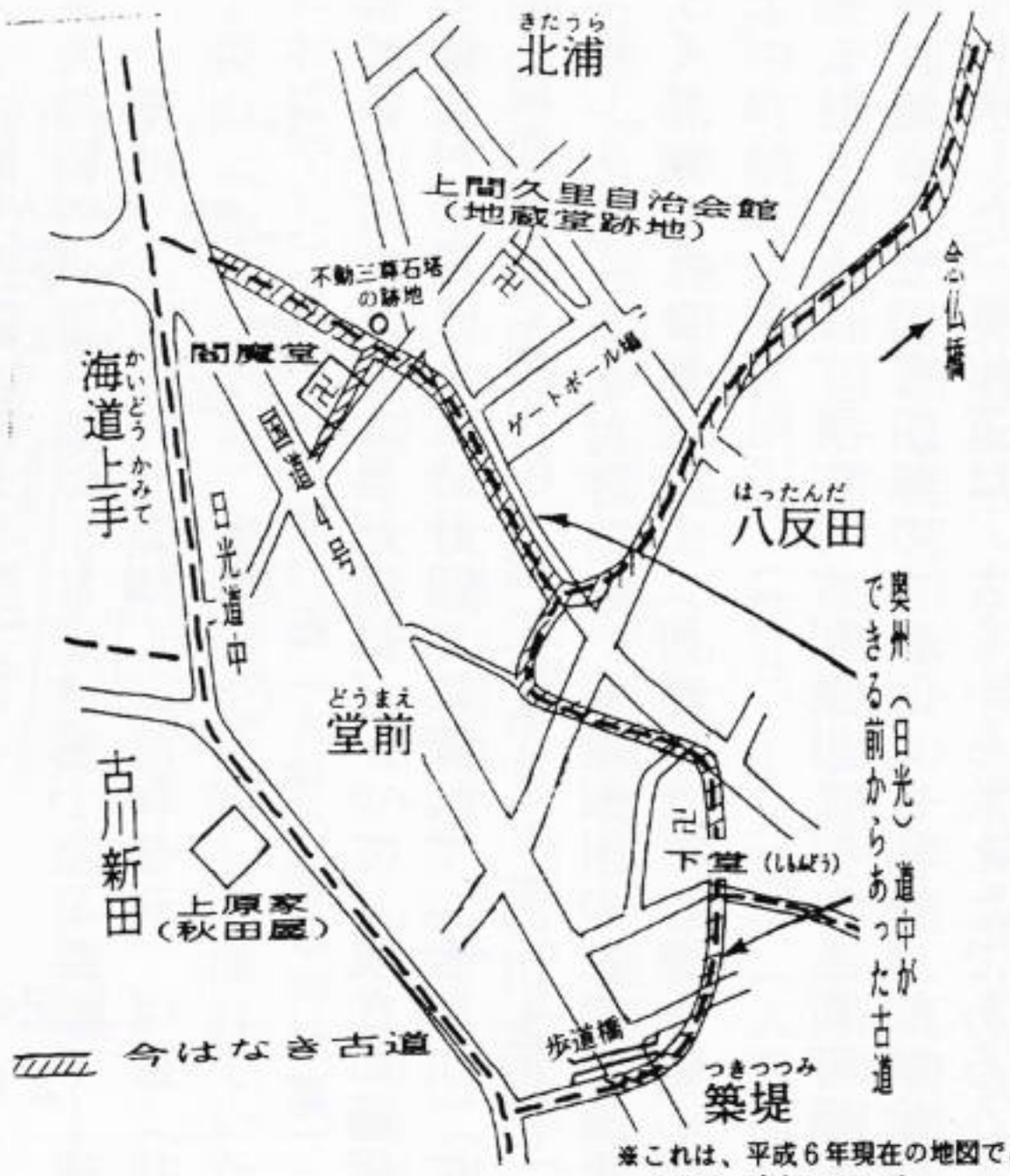
⑧　元荒川の古川の自然堤防沿いの間久里を過ぎたあとは、その先が現在の新方川（せんげん堀）手前の北浦の地となり、かなりの低地となるため、現在の日光街道のように直進して大枝村を通過するのではなく、湿地帯であろうその低地をよけるために、大泊村方面に迂回したと思われる。

高﨑力氏によると、江戸時代以前の古奥州道は、堂前の手前から日光街道より右に分かれ、下堂（しもんどう）そばを通る。それから念仏橋方面に進んだと推定している。かつての念仏橋通りにあたる。次の頁の上図がそうである。

地図中の秋田屋は、秋田藩の佐竹公が大名行列の途中で必ず立ち寄って鰻を食した所。この時、日光街道は閉鎖され、旅人は東側の古道を通ったと伝えられている。高﨑力氏によると、古道はいわば日光街道の臨時のバイパスとなったのだという。

念仏橋方面に進んで細流だったせんげん堀を渡り、道なりにいくと、安国寺の参道に突きあたる。高﨑力氏によると、その先は道はなく、そこで右折し、さらに左に曲がって現在の主要な道路に出る。その道を横断して平方村方面に通じる道に入り北進する。大泊村と平方村の村境には、かつての会野川（あいのかわ・平方村の南側の周りを流れる、今はない）が東西に流れていたところであり、高﨑力氏によると、長い石橋がその川に架かっていて戦前まで見られていたという。今でも屋号が「石橋」と呼ばれる家が大泊側にある。

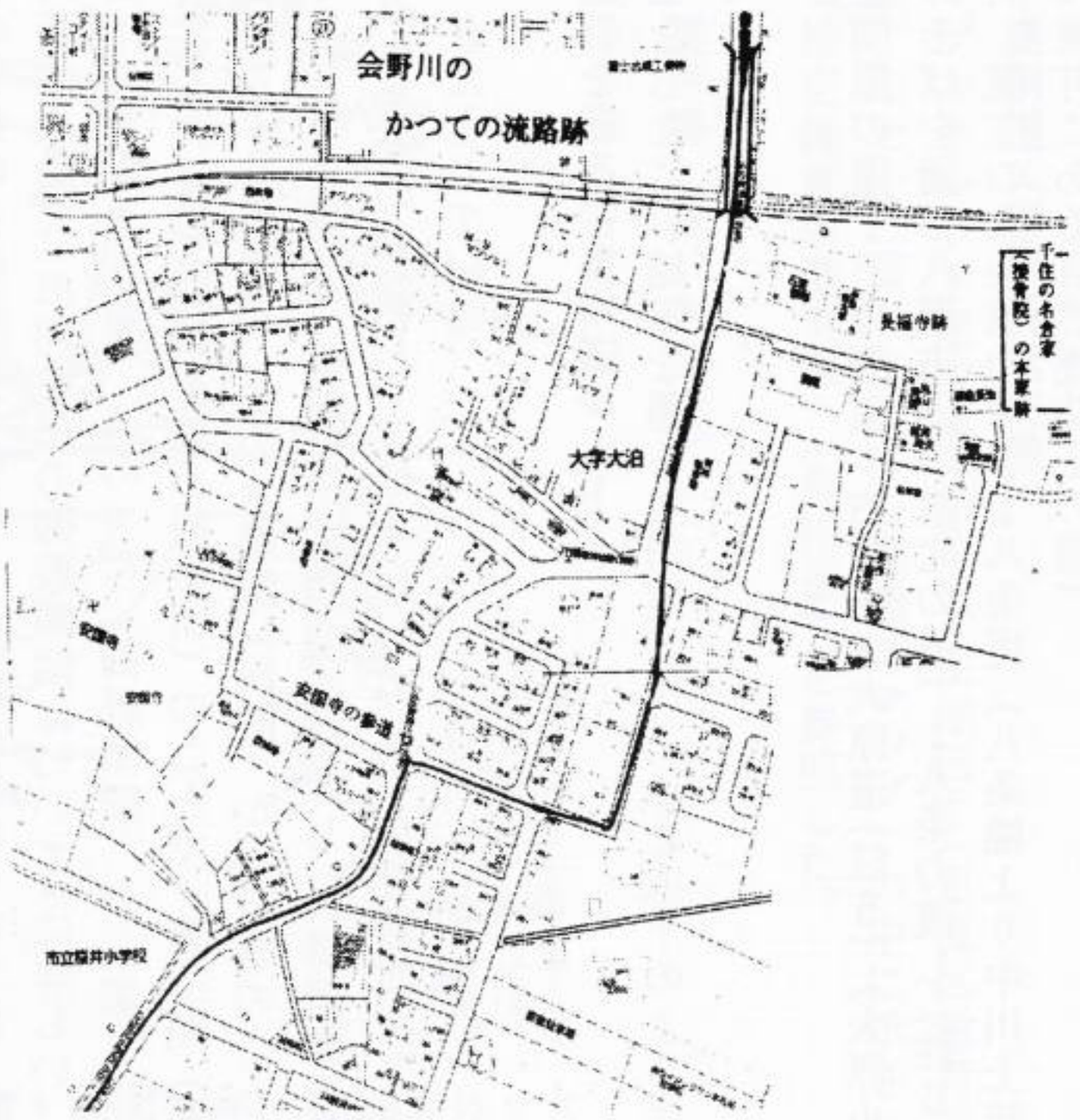
旧上間久里村の古道



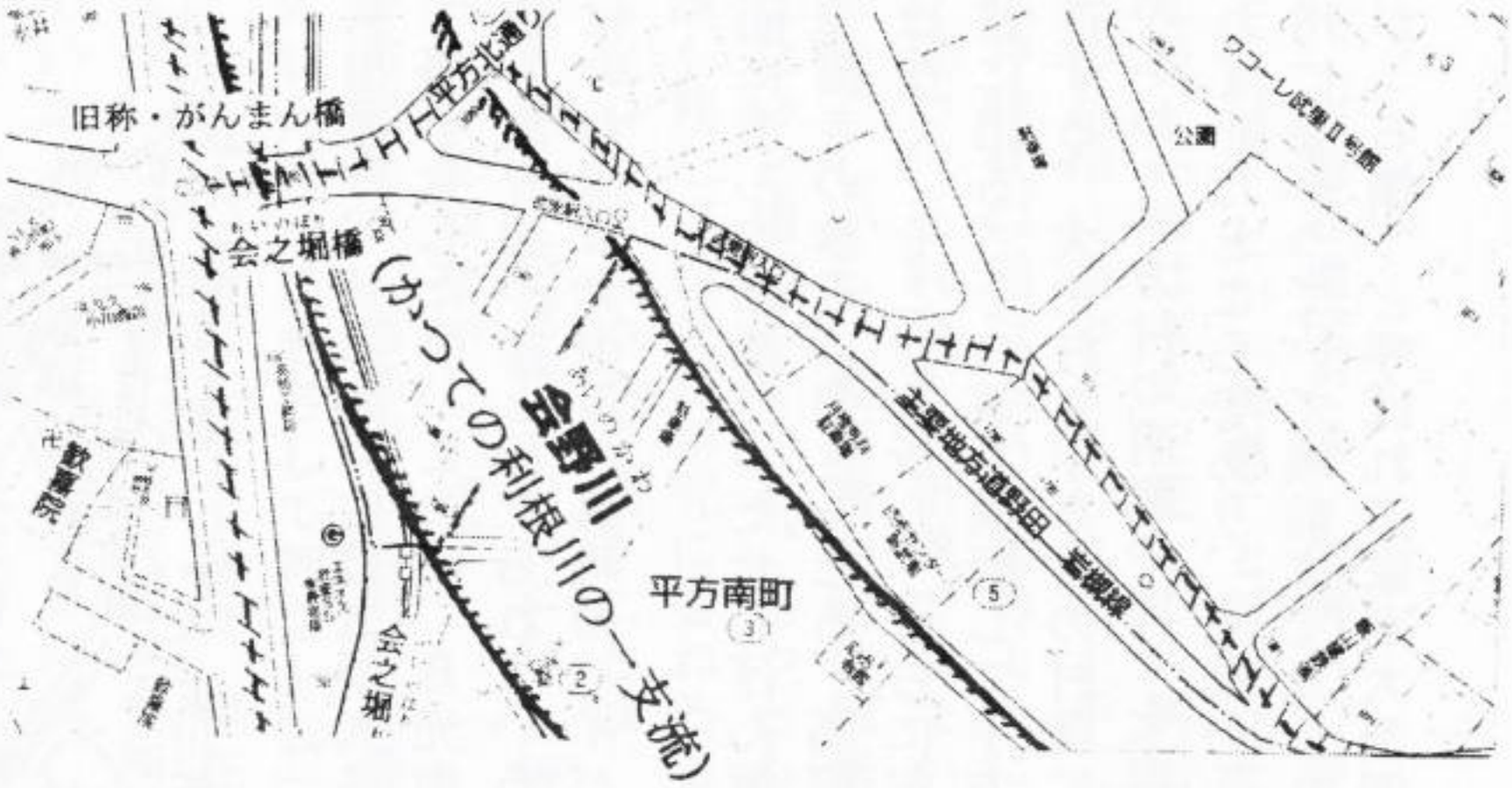
この会野川跡を渡って対岸に進むと、現在の「野田岩槻線」の会野川沿いの土手道に突き当たる。今度はこの土手道を西に進み、再び会野川（現在は会之堀）に架かる上流の橋（現・会之堀橋、旧称がんまん橋）を渡って現在の日光街道に合流するのである。次の頁の図がそうである。

合流した現在の会之堀橋あたりは、戦前は川が深く、ここに架かる土橋を地元では「がんまん橋」〈註3〉と呼んでいたという。高﨑力氏によると、日光の含満ケ渕からの由来である可能性を指摘している。

旧・会野川跡（大泊村と平方村の村境）と石橋



大枝（おおえだ）と平方（ひらかた）を結ぶ
会之堀（あいのぼり）橋周辺



（上記の地図は、ゼンリン住宅地図「越谷市」
２００６・１２を使用して作成した）

春日部に入ってからの古奥州道は、かつて、現在の藤塚橋の北から備後村の周りを反時計回りに流れて「会野川」に合流した川（現在の会之堀川の一部）があり、この川を仮に「備後西川（にしかわ）」と名付けると、備後西川の左岸の備後村にあるよく発達した自然堤防上（河畔砂丘）の道を進んだと推定した。

⑨　粕壁橋〈註４〉とは、現在の古利根川に架かる新町橋のことである。越谷市立図書館蔵の古絵図「古利根川流域絵図」によって判明した。奥州道は、古くから栄えたであろう古利根川や古隅田川そばの粕壁のあたりを通り、この橋の手前で西にある古隅田川に向かい、現在の梅田橋あたり（江戸時代から古隅田川に橋が架けられていた）で古隅田川を渡って西方に進み、その先の百間を通り、日光御成街道（鎌倉街道の中ツ道・中ノ道）へと進み、幸手を通過する。粕壁橋手前までのルートは地元で「街道」と呼ばれた大池通りを考えた。

なお、古隅田川の御厩瀬渡は、太田荘花積郷（はなづみごう）にあるとされることから、「越ケ谷瓜の蔓」に言う往古奥州道のルートとは一致しないが、御厩瀬渡を通るルートの方が本来の中世の古奥州道であろう。御厩瀬渡については、遠藤忠氏著の小論文「旧利根川の御厩領関について」に詳しい。古隅田川の右岸（北岸）にあった「御厩領関」の「領」は、「料」（料所つまり関銭を取る料金所）のことで、陸上関（渡しのこと）より水運としての水路関（河関・かわせきのこと）としてとらえて論じ、旧利根川の河関を紹介し、「御厩瀬渡」は、「みまやせのわたし」ではなく、「みまやのせわたし」と読むべきだとしている。

三　越谷を通る古奥州道ルート

以上をもとに、越谷を通る奥州道のルートを以下のように考えてみた。

千住関屋の里↓下妻街道↓内匠橋↓大原道〈註５〉（大原小学校のそばを通る八潮市内の南北の道）↓八条の渡し〈註６〉の手前（現在の八条橋の袂）↓八条堤（八条橋より中川上流沿いの東町にある自然堤防上の道）

次に越谷市内では、

↓南百〈註7〉（吉川橋・よしかわばしそば）角より西方（越谷市大相模地区内）を通る元荒川沿いの土手道↓瓦曽根溜井沿いの土手道↓現在の越谷市中央市民会館や市役所の西側の土手道↓中町横町（観音横丁）〈註8〉↓元荒川（大沢橋南詰めにあった市神・神明社〈註9〉あたり）を渡る↓浄光寺の東側の古道「大房道」↓大房の鎮守の稲荷社の東側↓北越谷第五公園グラウンド〈註10〉の東側に今も残る土手道（「押立堤」と推定）↓今はなき「大房の薬師堂」〈註11〉（現在の宝性寺越谷別院）の西側↓大林寺（だいりんじ）の西側↓大林（おおばやし）自治会館前の道（大林の香取神社裏）〈註12〉↓袋山（ふくろやま）の周囲を迂回して流れていた古川（旧・元荒川）沿いの自然堤防上（河畔砂丘）の道〈註13〉↓東武鉄道の大里の踏切↓日光街道↓念仏橋通り↓野田岩槻線（かつての会野川の土手道）

越谷市内の大沢周辺の往古奥州道については、秦野秀明氏の「押立堤について」が詳しいので参照してほしい。

次に春日部以降では、

↓日光街道↓備後南交差点東側に左折したかつての土手道（地元では「高道（たかみち）」と呼ばれ、武里小学校の東側の道に通じる古道で、備後の西側に流れていた川の土手道）↓大池通り（地元では「街道」と呼ばれた）↓粕壁（新町橋の手前）↓浜川戸（自然堤防）の手前↓古隅田川（現・梅田橋あたりか）を渡る↓内牧（うちまき）↓宮代町百間（もんま）↓日光御成街道（鎌倉街道の中の道）↓当時の利根川の高野（たかの、現・杉戸町）の渡し↓渡良瀬川（南北の権現堂川）の旧・房川（ぼうせん）の渡し（元栗橋、現・五霞町）

四．〈註1〉～〈註13〉について

〈註1〉奥州道（鎌倉街道支線）

「ブックレット足立風土記①千住地区」（足立区教育委員会）の七十二頁「足立区の交通誌マップ」の中に示された「推定鎌倉街道支線」（奥州道）を参照した。

〈註2〉榎戸橋（現、内匠橋）

「八条領村々絵図」（江戸期古絵図）

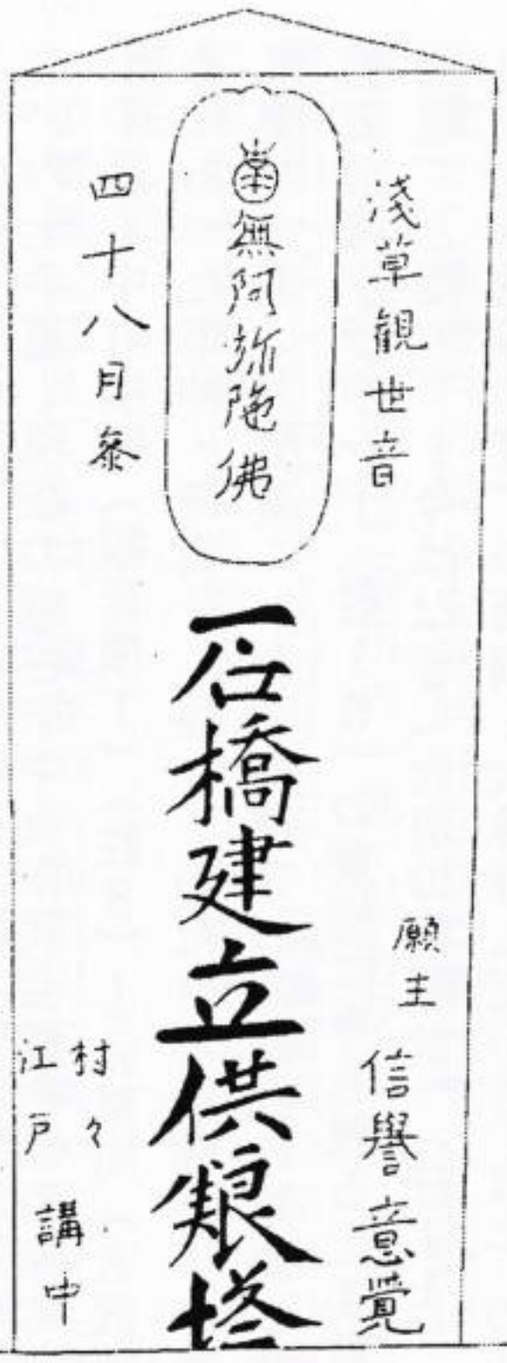


越谷市立図書館蔵・絵図の部・資料番号２５

〈註3〉「がんまん橋」（現・会之堀橋）そばの石塔

これは、宝暦十二年（一七六二）に建てられた石橋供養塔である。日光道中から現在地に入る所に橋が架けられていた。ここに新たに石橋が建立されたことを記念し供養の意味も込めてこれを造立したのである。この石塔に刻まれた銘文によると、造立した一人である願主・信誉意覚は浅草観音に毎月参拝し、それを三年間も続けたという。江戸との人的交流がうかがえる。この供養塔には言い伝えが残っている。江戸時代のこと、この地に架かっていた橋がもろいため荷馬車が馬もろとも川に落ちてしまった。馬は死んでしまった。そこでその馬を連れて来た江戸浅草の人が土橋を頑丈な石橋になおした。その記念にこの塔が建てられたという。

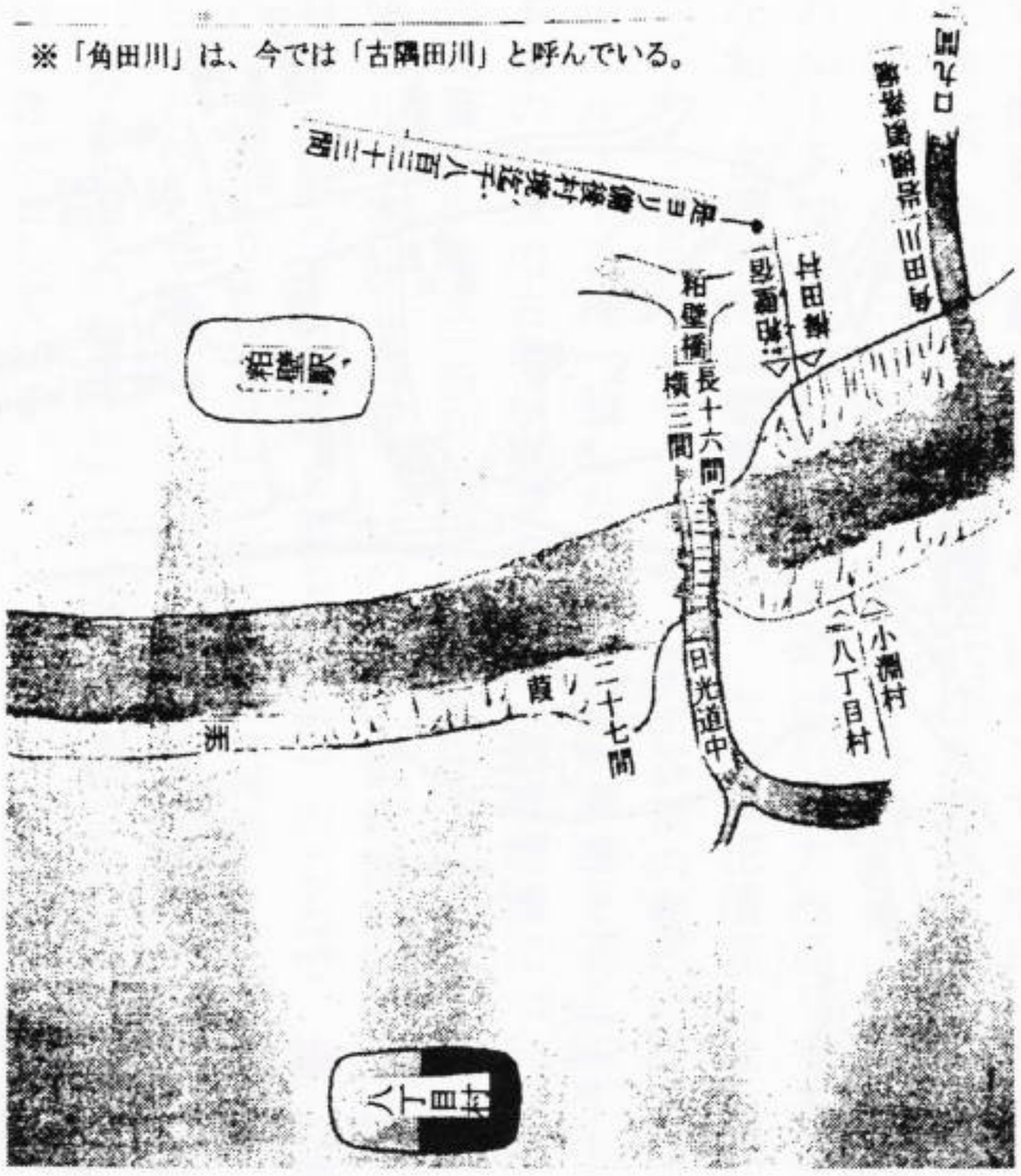
向かって右側面には「宝暦十二壬午年四月吉祥日」、左側面には「武州埼玉郡新方領平方村」と刻まれている。



関根家（平方一七六二）路傍

〈註4〉粕壁橋（現、新町橋）

「古利根川流域絵図」（江戸期古絵図）



越谷市立図書館蔵・絵図の部・資料番号２８

〈註5〉大原道（だいばらみち）

戦後になっても、道の両側にハンの木の並木が見られていたという（高崎力氏談）。

並木は、街道筋にはよくみられるものである。

〈註6〉八条の渡し

戦後、河岸の船着場の護岸を守るためにか、多くの竹が川に面して地面に直角に並べられて敷かれていた跡があるのに気付いたという（高崎力氏談）。

〈註7〉南百（なんど）の地名のいわれ

高崎力氏によると、戦後まで地元の古老の間で受け継がれてきた言い伝えがある。南百村の宝性院（現在の南百農村センター）の南西隣（東町二の一三三）に広大な敷地が残っていて、遠い昔に（江戸時代初期か）ここに「お屋敷」があった所で、そこには楠（くすのき）と栢（柏）の大木がそびえたっていたという。船頭の目印になったのであろう二つの大木の名前から木へんをとって南百村の村名が生まれたという。この敷地には、屋敷があるにふさわしく固い地面をし、さらに素焼きの破片等が散乱していたので、かつては人が住んでいた気配を感じたとのことである。

なお、南百は、現在「なんど」と呼ばれているが、それに関して草加市在住の髙橋操氏は次のように紹介した。

「寛永十年の『武蔵国図』記載の南百は、岡山大学蔵では【なんどふ】とありますが、秋田県立公文書館蔵の『武蔵国図』では、【なんとば】とあり、漢字で『難渡場』『南渡場』と表記できそうです。」

〈註8〉観音横町

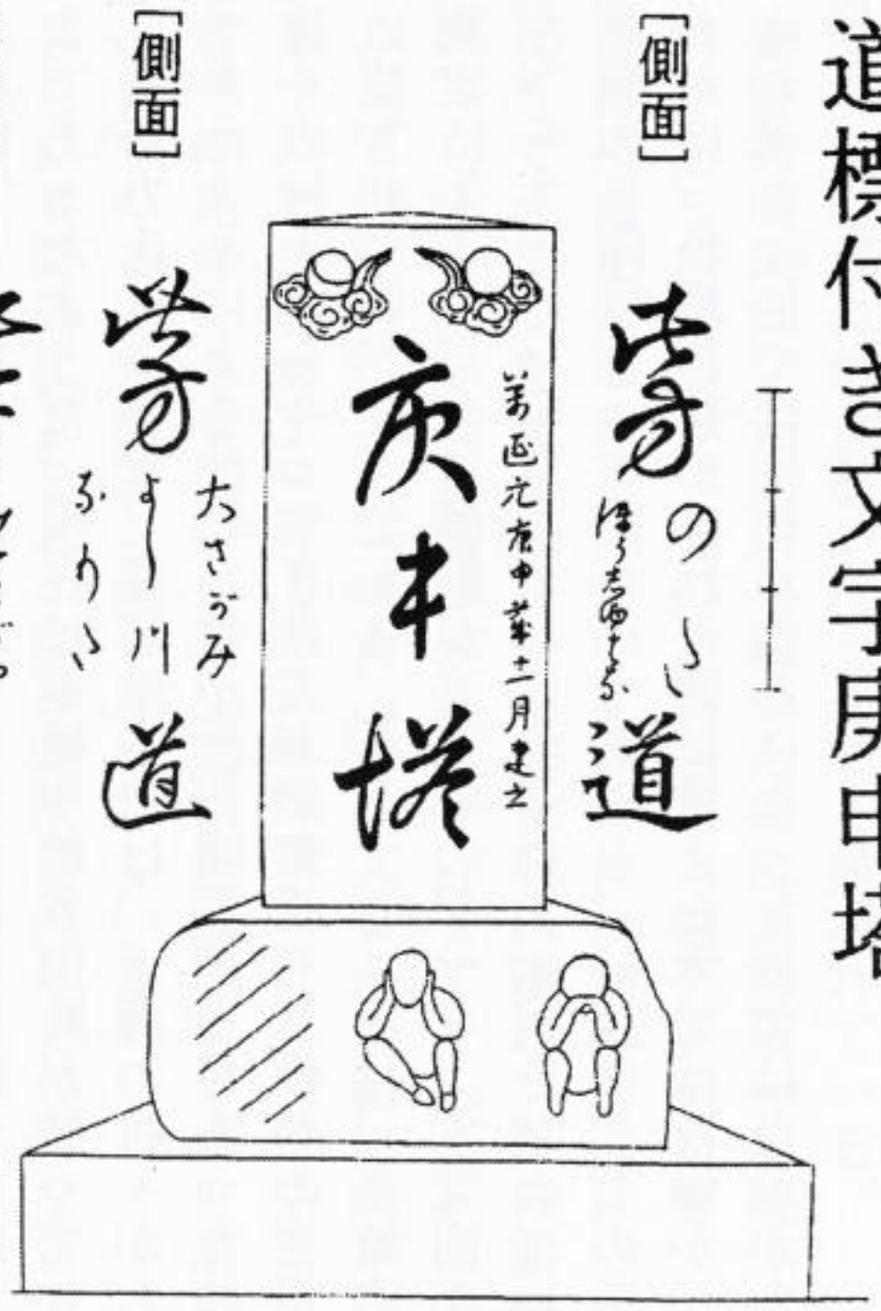
土手道の観音横町入口の角（セブンイレブンの道路反対側、越ケ谷五の三の五六）までが江戸時代は現在の観音堂の境内地であった。

この角に東向きに道しるべがあった。この道しるべの西方面は日光街道を横断すると赤山道に入り、また南方面は大相模の不動尊や遠くは成田山に、北方面は野田や宝珠花に行けるのである。現在、この道標は中町の箕輪家で保管されている。セブンイレブンの南側は、かつては「六本木（ろっぽんぎ）」と呼ばれた場所で、江戸時代の仕置き場（処刑場）であった所である。

日光街道にあった中町の中町橋の東側が今の観音横町であるが、「中町横町」とはこの観音横町と中橋の北の日光街道沿いを含む地域であったのであろう。「越ケ谷瓜の蔓」には、『二七市日ハ本町・中町ハ一並日也、元本道なれ共日光道筋ニ相成申候儘横町と唱、』と記載されている。つまり、「二七の市の日は本町と中町とも一致した日である。元荒川に沿った南百からの土手道から観音横町に続く元の奥州道の本道であるが、日光街道筋になってからも横町と呼ばれる。」というような意味であろうことからもうかがわれる。

道標付き文字庚申塔

箕輪家［越谷中町八－二〇］



〈註9〉市神（いちがみ）・神明社

越ケ谷宿の二七（にしち）の六斎市（ろくさいいち）は、「新編武蔵風土記稿」によると、江戸時代以前（文禄年間）、つまり越ケ谷宿が成立する以前から行なわれていたと言う。秦野秀明氏によると、市神神明社は「埼玉県立文書館蔵「神社明細帳」には嘉吉二年（一四四二）正月七日勧請と記載されている」という。現在の大沢橋南詰めの御殿町（会田出羽家屋敷地、後の江戸幕府の御茶屋御殿）よりに市神を祀る神明社があり、元荒川の水運を利用して市神様周辺に市が栄えたのであろう。当時の越ケ谷郷の市といえよう。

なお越ケ谷郷とは、現在の越ケ谷町（越ケ谷郷から由来している）及びその広大な周辺を越ケ谷郷と呼んでいた。岩槻領鈎上村の江戸時代前期、慶長年間の検地帳に「武州騎西郡越ケ谷の内、鈎上」との記載が見られることから、現在の岩槻区鈎上あたりまで含まれ、小田原北条氏が永禄五年（一五六二）に葛西領の金町の本田氏にあてた書状には「越谷・舎人」は大郷と記載されていることから、広大な地域であったことがわかる。

越ケ谷郷の中心は、元荒川の自然堤防上の四丁野村（現在の宮本町）から御殿町にかけてだったのであろう。越ケ谷町の市神様（神明様）は、四丁野村より勧請したもので、そういう意味で四丁野村は越ケ谷町の元郷といえる。

また、さらに古くは、「千葉氏大系図」に出てくる中世の野与党の一族、古志賀谷（こしがや・越ケ谷）氏が、この地に居を構えて、越ケ谷郷を支配していたのであろう。

〈註10〉北越谷第五公園グラウンド

かつての大房の薬師堂は、「大江（おおえ）りの薬師」とか「押江（おおえ）りの薬師」とも書き、また「鵜の森薬師」「尾入りの薬師」とも呼ばれたと言う。「大江り」とは「大入り」がなまったものであろう。この北越谷第五公園グランドは、かつて元荒川の入り江であったと思われる。

また「押」は水が押し入るという意味で、埼玉では、水害によって堤が破れて堤のすぐ内側に掘られてできた内池を「押堀（おっぽり）」と呼んだが、「押江り」は「おしえり」と読み、「押堀」とも深く関係しているのであろう。

〈註11〉大房の薬師堂

「大江り（押江り）の薬師」、「尾入りの薬師」とか地元で呼ばれてきた大房の薬師堂が昭和の頃までであったようだ。現在は宝性寺越谷別院が建っている。

高崎力氏によると、薬師堂内には、近郷の村々からやってきた人々による俳句が書かれた額が飾ってあったので、遠くの村々からやってきた人々が集まり、俳句の会が盛んに催されていたようである。そしてここには、高崎力氏の測定によると、共に樹齢が五百年のケヤキ（本堂向かって左）とイチョウ（本堂向かって右）の大木がそびえていた。船頭の目印になっていたのであろう。一説に、この二つの大木は、松尾芭蕉が訪れた時に植えた木ではないか、それゆえ、この地では俳句が盛んになったのではないかと推定されていたという。

元荒川は、江戸湾の満ち潮がこの地まで遡上してきたと思われる（瓦曽根の赤水門があった頃までは、満ち潮がこ

の赤水門で止まっていた)。そのため、江戸時代は、薬師堂の周辺の森の木々には鵜が多く止まっていたので、「鵜の森の薬師」とも言われたのであろう。そして、元荒川を利用している船のための停泊地としての入江があったのである。現在の北越谷第五公園グラウンドの地がそうである。

〈註12〉大林(おおばやし)自治会館前の道(大林香取神社裏)

このあたりから古川までの河畔砂丘上には、「大林の桃山(ももやま)」(ミノミ化学株式会社及びその西側一帯、梅ヶ丘団地一帯)が一面に広がっていた。

〈註13〉袋山(ふくろやま)の周囲を迂回して流れていた古川(旧・元荒川)沿いの自然堤防沿いの道

大里八四〇番地から大里七一五番地にかけての北東に進む古道及びその先の下間久里(しもまくり)や上(かみ)間久里の日光街道をさす。

高崎力氏によると、古川の東岸(左岸)は、河畔砂丘が広がり、戦後も古川(大林と袋山との境)から亀が大林側の砂丘に上がってきて、古川左岸あたりは亀の生息地になっていて、子供たちがそれを捕まえて業者に売ったり、越ケ谷の久伊豆神社の池に放したりしたという。久伊豆神社に今でも住む亀は、この古川で捕獲された亀と思われる。

秦野氏の「越谷市内の大沢周辺の往古奥州道について」

秦野秀明氏による大沢周辺古奥州道説は次のとおりである。

明治十三年測量の迅速測図には、大沢の上宿(大沢三丁目)にある日光街道から分かれる小道があり、そこから大房の浄光寺の東側を通って大房村の鎮守稲荷神社(迅速測図では猿田彦祠)、さらに現在の土手道(かつての古道)に通じる「大房道」と呼ばれた古道がはっきりと描かれている。

秦野秀明氏は、元荒川を渡った後に大房道へと続く経路は不明であるとしつつ、この大房道を「越ケ谷瓜の蔓」でいう往古奥州道ととらえており、江戸時代以前の古道は、大沢橋あたりで元荒川を渡り、日光街道を北に進み、天神前橋(現在の「そば水角屋」の南側)を過ぎて百メートル先あたり(現在の「はたの薬局」の南)の大房道の入口から西に向かって、かつての自然堤防上(埼玉県県政情報資料室発行「中川水系」によると浄光寺をのせていて、「北越谷河畔砂丘I」と名付けられている)のこの大房道を通ったとしている。

さらに秦野氏によると、江戸時代を通してのみならず、それ以前からも、この街道に沿って多くの民家がみられていたようで、この点においては全く同感であり、また、秦野氏の指摘のように山伏も点在して住んでいたようであり、つまり日光街道から分かれる交通の要所であったのであろう。

それゆえ、日光街道ができる以前からも、この古道は交通の要所としているようで、昭和五十年に浄光寺本堂裏の墓地造成地から出土した中世の古銭の存在から秦野氏は、「古銭の出土は、その流通を可能とさせる往来の激しい道の存在を想起させ」(平成二十三年五月著の論文「押立堤について」より抜粋)ているとしている。

なお、現在の大沢道の入り口である「はたの薬局」「フジナミ金物店」あたりは、北越谷河畔砂丘Iから続く自然堤防上にあるようで、大沢町でも高い所であったため昭和二十二年のキャサリン台風でも浸水にあわなかったという。

「往古奥州道」と「押立堤」について

秦野　秀明

はじめに

福井猷貞が著した『越ヶ谷瓜の蔓』（以下『瓜の蔓』と略す）（1）と『大沢猫の爪』（以下『猫の爪』と略す）（2）は、それぞれ文化年間（一八〇四～一八一八）より文政五年（一八二二）に至る往古の「奥州道」の経路、について考察を進める。ただし本稿では、「史料一」に記載された経路が実際に往古の「奥州道」であったか否かは問わない。

一　「押立堤通り」の表記

「史料一」における「通」及び「通り」の記載を書き出すと、次の七点である。

① 「大原（だいばら）**通**」
② 「八条堤**通**」
③ 「中町横町ヨリ元荒川渡り押立堤**通り**」
④ 「粕壁橋手前ヨリ百間（もんま）**通り**」
⑤ 「御成道**迄**川付堤**通り**」
⑥ 「千住ヨリ舎人道・鳩谷・大門・岩付・上高野台**通り**」
⑦ 「千住ヨリ八条**通**南百西方中町横丁へ**通り**」

（太字・カタカナ・振り仮名筆者）

これら七点についての考察を進めると、以下のように判明する。

① 「大原通」の前に「〇〇ヨリ」が付かないため、「大原通」という固有名詞の表記である可能性が高い。
② 「八条堤通」の前に「〇〇ヨリ」が付かないため、「八条堤通」という固有名詞の表記である可能性が高い。
③ 「押立堤通り」の前に「中町横町ヨリ」が付くため、「押立堤を通り」という意味の表記である。
④ 「百間通り」の前に「粕壁橋手前ヨリ」が付くため、「百間通り」という意味の表記である。

ゆえに本稿では、①「押立堤」の所在地、②「押立堤」へと至る往古の「奥州道」の経路もまた不明である。

「押立堤」の所在地が不明であり、さらに「中町横町」より「元荒川」を渡り

⑤「川付堤通り」の前に「御成道迄」が付くため、「川付堤を通り」という意味の表記である。
⑥「上高野台通り」の前に「千住ヨリ」が付くため、「上高野台を通り」という意味の表記である。
⑦「八条通」の前に「千住ヨリ」が付くが、「八条通」を含む「八条通南百西方中町横丁を通り」という意味の表記であるため、②の「八条堤通」と⑦の「八条通」は同一のため、「八条堤通」という固有名詞の表記である可能性が高い。
ゆえに「押立堤通り」の表記は、「押立堤通り」という固有名詞ではなく、「押立堤を通り」という意味である。

二　「押立堤」の所在地

はじめに、「押立堤」のあった「押立」と、「押立堤」そのものの所在地について考察を進める。
『猫の爪』には、「押立」について、次のような記載がある。

「**史料二**」
一　**上外レ**大房村**境**をさして**押立**と云、高橋仁右衛門屋敷辺田**端**といひ、上ノ土橋辺**茶屋前**といふ、(5)
（太字筆者）

また、『猫の爪』には、どちらの方角を「上」とするのかについて、次のような記載がある。

「**史料三**」
〔**前略**〕東照宮様御遷宮之時ヨリ**日光方**を**上**と称来候事、
〔**後略**〕(6)
（太字・カタカナ筆者）

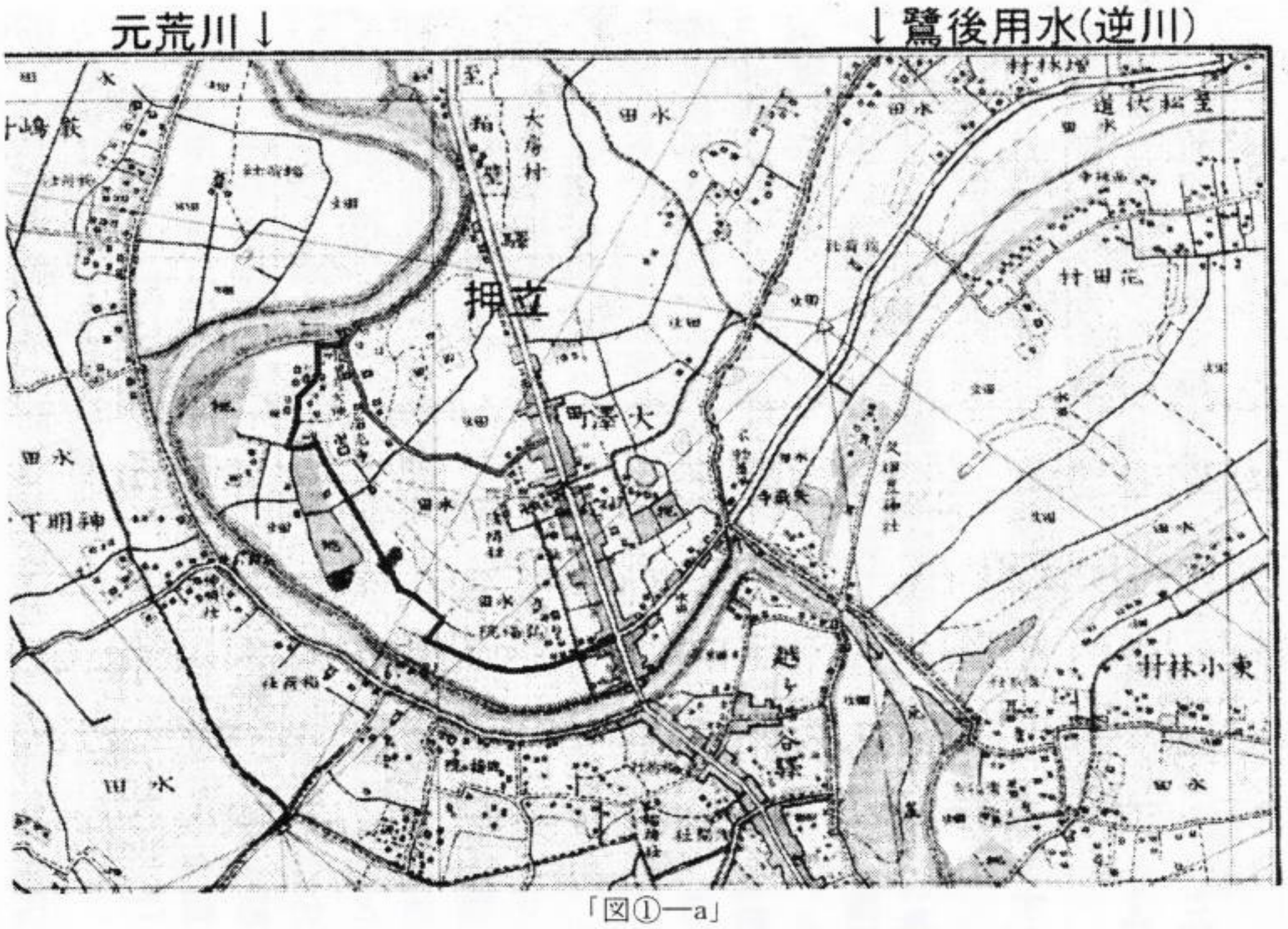
「史料二」、「史料三」の記載により、以下のことが判明する。

①**b**「大沢町・上宿（上組）」は、現在の越谷市大沢三丁目であり、「押立」と云われた「大沢町」と「大房村」の境界は「大沢町・辻」(11)にあり、現在の大沢三丁目の「北端」である。
②**b**「田端」と云われた「高橋仁右衛門屋敷」の辺りは、「大沢町・上宿（上組）」にあり、現在の大沢三丁目である。
③**b**「茶屋前」と云われた「上ノ土橋」の辺りは、「大沢町・辻」にあり、現在の大沢三丁目の「北端」である。

昭和四十年（一九六五）五月の住居表示の変更以前は、現在の越谷市北越谷三丁目、四丁目、五丁目に相当する地域を、越谷市大字大房と称しており(12)、その大字大房には、次のような「村組」が存在していた(13)。

①北越谷三丁目に相当する地域に、「(大房)中島組」
②北越谷四丁目に相当する地域に、「上組(別名を本村組)」
③北越谷五丁目に相当する地域に、「押立組」(14)及び「畷組」

「押立」と云われた「大沢町・上宿（上組）」の外れであった大沢町・辻」のあった大沢三丁目と、「押立組」の外れである「大沢三丁目は、それぞれ大沢三丁目の「北端」付近と、北越谷五丁目の「南端」付近で境界を接しており、北越谷五丁目の「西端」には、「元荒川」左岸の堤防が「東側」に湾曲しながら続いている。



「図①—a」
「明治前期測量　二万分の一　フランス式彩色地図
— 第一軍管地方二万分一迅速測図 —
埼玉県武蔵国南埼玉郡越ヶ谷駅及大沢町近傍村落」
に加筆して部分的に転載

「図①—b」同上

以上の考察の結果により、「史料一」に記載された「押立堤」は、現在の北越谷五丁目の「西端」に、「東側」に湾曲しながら続く「元荒川」左岸の堤防であったことが判明する。

三　「押立堤」へと至る往古の「奥州道」の経路

次に、「押立堤」へと至る往古の「奥州道」の経路について考察を進める。

往古の「奥州道」の経路については、「史料一」における「八条堤通、南百角ヨリ西方、中町横町」までと同様に、「元荒川」の「自然堤防」上に存在したと仮定するが、その前に「押立堤」の所在地であった現在の北越谷地区に存在する「河畔砂丘」についての説明と、それに基づいた筆者の見解を述べる。

平社定夫氏・佐藤和平氏（一九九三）は、『中川水系　I　総論II自然』において、「北越谷河畔砂丘」について、次のように述べている。

> 大林河畔砂丘の一つ南側の蛇行部、越谷市北越谷に二列の河畔砂丘が発達する。いずれもゆるく湾曲した平面形態を示し、北から南へのびる。Iは浄光寺をのせ長さ五八〇m、幅七五mであり、IIは北越谷小学校の東の住宅地をのせ長さ三五〇m、幅五〇mである。(15)

（太字・漢数字筆者）

また両氏は、北越谷地区に「二列」存在する「北越谷河畔砂丘」を含んだ「河畔砂丘」の分布について「かつての利根川と考えられる流路（流路跡）沿いだけに発達し」(16)と述べ、さらに両氏は、多田文男氏（一九四七）による「河畔砂丘」の形成に関する原理を紹介して、「利根川中流部は砂の供給がよく、砂の移動が容易で、蛇行の袂状（けつじょう）部の風下側（東側あるいは南側）に出来やすいことを明らかにした」(17)と述べている。

筆者は平社氏・佐藤氏、多田氏の論考を基に、拙稿「越谷市内を流れる元荒川は元・利根川だった」(18)において、次のように結論付けた。

> ①「河畔砂丘」は「利根川」の流路の「東側」及び「南側」に出来やすいという原理により、昭和二二年（一九四七）に撮影された北越谷地区の空中写真(19)において、現在ある「北越谷小学校」の位置より「東側」に読み取った数筋の流路跡のすべては、「元・利根川」であったということができる。
>
> ②今はなき「大沢浅間神社」(20)の小丘や「大沢七つ池」(21)が形成された時期も、「元・利根川」であった頃であり、長元七年（一〇三四）に勧請されたという「大沢浅間神社」の伝承(22)も、「元・利根川」の流路跡の時期を推定する材料になる可能性がある。
>
> ③昭和四七年（一九七二）に、北越谷地区の対岸である南荻島地区の「元荒川」の川底から、康正三年（一四五七）より明応八年（一四九九）に至るまでの板碑群が引き上げられた(23)が、北越谷地区における「元・利根川」の流路は、「河畔砂丘」の形成の過程により「東」から「西」へ移動しているために、最後に板碑の建てられた明応八年（一四九九）以降に、現在の「元荒川」の位置に流路が定まり、板碑群が川底に没したということができる。

以上の説明と結論を踏まえて、現在の「元荒川」の前身となる「元・利根川」左岸跡の「自然堤防」上を経由する、次の「二通り」の経路を仮定する。

①明応八年（一四九九）以前に形成された「北越谷河畔砂丘I」を含む「元・利根川」左岸跡の「自然堤防」上を進む経路。

「北越谷河畔砂丘Ⅰ」は、「浄光寺」（北越谷四丁目八番五号）(24)をのせる。

②明応八年（一四九九）以前に、「北越谷河畔砂丘Ⅰ」の「西側」に新たに形成された「北越谷河畔砂丘Ⅱ」を含む「元・利根川」左岸跡の「自然堤防」上を進む経路。「北越谷河畔砂丘Ⅱ」は、「北越谷小学校」（北越谷三丁目十番三八号）の東の住宅地をのせる。この経路は、「北越谷河畔砂丘Ⅰ」が形成された当時の「元・利根川」右岸跡の「自然堤防」上と重複している部分が多いと推定される。

なお、北越谷地区に存在する現在の「元荒川」左岸の堤防を、明治十三年（一八八〇）に、陸軍・参謀本部により測量された「明治前期測量　二万分の一　フランス式彩色地図―第一軍管地方二万分一迅速測図―　埼玉県武蔵国南埼玉郡越ヶ谷駅及大沢町近傍村落」（以下「迅速測図」と略す）によって確認すると、「大房稲荷神社」（北越谷四丁目十二番三号）(25)付近より「日光道中（現・埼玉県道三二五号大野島越谷線）」へと、地図上では「茶色」の「堤塘（ていとう）」(26)の記号が描かれているのみで、道は描かれていない。また、現在の北越谷地区でも同様であるが、「元荒川」が上流より下流へと「西側」に湾曲しながら蛇行しているにも拘らず、「東側」の左岸の堤防が「元荒川」の「水流（水面）」に接近しすぎている。このため、「大房稲荷神社」付近より「日光道中」へと続く、「元荒川」左岸の堤防は、「自然堤防」では有り得ず、近世以降に人工的に造られた「堤防」であることが判明する。ゆえに、その上に往古の「奥州道」が通っていた可能性は皆無である。

次に、仮定した「北越谷河畔砂丘Ⅰ」を通る「①の経路」、及び「北越谷河畔砂丘Ⅱ」を通る「②の経路」が、過去に存在したか否かを考察するために、「迅速測図」を確認すると、「図①」（二九頁）に記したように、「①bの経路」、及び「②bの経路」が設定できた。

四　「元荒川大堤通」、古名「高畑皿沼堤上通」

まず、「北越谷河畔砂丘Ⅱ」を通る「②bの経路」について考察を進める。

『猫の爪』には、「元荒川」の堤について、次のような記載がある。

「史料四」

一　当町之義元和之頃ハ元荒川大堤通今云新田耕地、古名高畑皿沼堤上通、其外放れゝ住居致居候所、〔後略〕(27)

（太字・カタカナ筆者）

「史料四」の記載により、文化年間（一八〇四～一八一八）より文政五年（一八二二）に至る当時に、「大沢町・新田」(28)地区にあった「元荒川大堤通」の古名は「高畑皿沼堤上通」と云い、その古名から推定すれば古名で呼ばれていた当時には、「大沢町・新田」内の「高畑組」(29)地区と、「大沢町・皿沼」(30)地区を結ぶ堤の上の「通（とおり）」であったことが判明する。

また、『猫の爪』には、「元荒川大堤通」の古名である「高畑皿沼堤上通」に関係する「大沢町・堤外」(31)の地名について、次のような記載がある。

「史料五」

一　堤外ハ皿沼大堤之外今いふ堤の内通也、古名ゆへ堤外といふ、(32)

（太字・カタカナ筆者）

天保十一年（一八四〇）に、江澤昭融が著した『大澤町古馬筥』（以下『古馬筥』と略す）にも、「堤外」の地名について、次のよ

うな記載がある。

「史料六」

四六　○同**堤外**耕地

一　皿沼に続し耕地なり、むかし仙間宮のあたりニ**堤**ありしと見えたり、其**堤**の**外**なる故名付しや、**〔後略〕**（33）

（太字・カタカナ筆者）

「史料五」、「史料六」の記載により、「堤外」の地名の基準となる「堤」は、「元荒川大堤通」の「古名」である「高畑皿沼堤上通」の当時には、現在の「元荒川」の流路よりかなり離れた位置にあった「大沢町・皿沼」の「仙間宮（大沢浅間神社）」付近に存在していたことが判明する。

ゆえに、「高畑皿沼堤上通」は「元・利根川」右岸跡の「自然堤防」上にあったと推定されるものの、「迅速測図」を基に「北越谷河畔砂丘**Ⅱ**」を通る「②の経路」として設定した「②bの経路」とは全く異なる経路であり、「迅速測図」において確認することができない以上、「北越谷河畔砂丘**Ⅱ**」を通る「②の経路」は、往古の「奥州道」としては復原することができない。

五　「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」

次に、「北越谷河畔砂丘**Ⅰ**」を通る「①bの経路」について考察を進める。

『猫の爪』に描かれた「屋敷割絵図」によると、「大沢町・上宿（上組）」において、「日光道中」の「西側」に並ぶ屋敷で、且つ「日光」方向の「鈴木重左衛門屋敷」（34）と、「江戸」方向の「大木弥市屋鋪（ママ）」（35）の間に、「大房道　辻皿沼野道」（36）が描かれており、その「道」に関する事柄について、『猫の爪』には、次のような記載がある。

「史料七」

一　**野道**之義、古来ヨリ**菩提所通路之道**ゆへ浄光寺と唱ふ、又**此道**付畑等ニ当山修験道之者多居住すゆへに山伏長屋とも云、（37）

（太字・カタカナ筆者）

『古馬筥』にも、その「道」に関する事柄について、次のような記載がある。

「史料八」

七九　○ビクニ長家

一　ひくに長屋といふハ上宿也、**大房村浄光新道竜宝院**といふ、当山修検（ママ）の近所也といふ、此辺ニ山伏の家弐三軒并尼法師の類多く居住せし、故名付しと云、今ハ唱ふる人なし、**〔後略〕**（38）

（太字・カタカナ筆者）

「史料七」、「史料八」の記載により、「①bの経路」の大半は、「大沢町・上宿（上組）」の「日光道中」より「大房村」の「浄光寺」方面へと向かう主要道であり、その道の付近には「当山派修験道」の山伏が居住しており、「山伏長屋」や「ビクニ長家（ひくに長屋）」と呼ばれていたことが判明する。ちなみに現在も、「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」であった道沿いに、かつての「覚宝院（竜宝院）」（39）であったお宅が存在する。

「大沢町」内の「日光道中」沿いにあった「大沢町・下宿（下組）」より「大沢町・上宿（上組）」へと続く土地で、最も標高が高い場所のひとつが、「大沢町・上宿（上組）」の「鈴木重左衛門屋敷」と「大木弥市屋鋪（ママ）」の土地である。その土地は、江戸時代後期より大正時代まで「かしわや」が両方とも所有していた（40）。現在も、「鈴木重左衛門屋敷」の土地であった

部分で「日光道中」に面した一部分は、「かしわや」の子孫が土地を所有し、「かしわや秦野薬局」を経営している。

その店主の方(昭和十六年(一九四一)生まれ)が、六歳の時であった昭和二二年(一九四七)九月十七日に、「カスリーン(Kathleen)台風」による大規模な浸水被害が、現在の越谷市内でも発生していた。店主の方の証言によれば、「日光道中」沿いの商店街を含む「大沢町」内のほとんどが浸水してしまったにも係わらず、現在「かしわや秦野薬局」のあるところに建っていた「蔵」や、「蔵」の西南西に建っていた「母屋」は全く浸水被害が無かったという。

その話からも、「鈴木重左衛門屋敷」付近の「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」は、「北越谷河畔砂丘Ⅰ」より続く「元・利根川」左岸跡の「自然堤防」上の道であったことは、間違いないことである。その「自然堤防」を「日光道中」を越えて東に延長すれば、寛永年間(一六二四～一六四四)以前に遷座したと伝わる「大沢町」の鎮守である「大沢香取神社」(41)が祀られおり、遷座する場所として「自然堤防」上の微高地は最適であったであろう。その「自然堤防」をさらに南東に延長すれば、「大沢香取神社」の別当であった「光明院」(42)がある。この「光明院」にはかつて「薬師堂」があり、『猫の爪』には、「光明院」附属の「薬師堂」について、次のような記載がある。

「史料九」

〔前略〕

附**薬師堂**之義**大房押入之薬師**を**移候哉**、中古ヨリ境内ニ一宇有之候、(43)

(太字・カタカナ筆者)

『古馬筥』にも、「光明院」の「薬師堂」について、次のような記載がある。

「史料十」

廿六　○光明院

〔**前略**〕享保十一午年十一月寺社門前境内除地書上ニ山号無之与あり、いつの頃ヨリ山号寺号を名付しや右同断書上ニ**薬師堂**弐間ニ弐間とあり、尤古来ヨリ有来りニて堂守差置申候由書上有之候、〔**後略**〕(44)

(太字・カタカナ筆者)

「史料九」、「史料十」の記載により、「光明院」附属の「薬師堂」は、享保十一年(一七二六)以前の古来より存在したことが判明し、「史料九」において福井猷貞は、「浄光寺」が別当寺であった「薬師堂(別名「押入の薬師」、「大江りの薬師」、「鵜の森の薬師」)」(以下「(大房)薬師堂」と略す)(45)と、「光明院」附属の「薬師堂」との関係にまで踏み込んでいる。

そこで、「①ｂの経路」を踏まえて「(大房)薬師堂」と「浄光寺」の関係について考察を進めると、「①ｂの経路」は本来、「押立堤」上の道及び「元荒川」が、南南東より進む「日光道中」と合流せずに、「押立堤」上の道を北北西へと進路を変更して進み、「(大房)薬師堂」付近にまで続いていたと推定できる。大同二年(八〇七)創建伝承を持つ「(大房)薬師堂」と、その別当寺であった「浄光寺」の関係が確認できるのは、慶安元年(一六四八)の「寺領朱印状」(46)が最古であるが、「薬師堂領」として記載された「寺領朱印状」には、「任先規(先規に任せ)」と記載されているので、慶安元年(一六四八)以前より寺領が定められていたことが判り、両寺の関係が中世にまで遡れるであろうことは容易に推定することが可能である。

昭和五十年(一九七五)三月五日には、「浄光寺」本堂裏の墓地

造成地から古銭が出土し、その種類と数量は、①唐の「開通元宝」一一五枚、②北宋の「皇宋通宝」一二八枚、③「元豊通宝」一二〇枚、④明の「永楽通宝」七一二枚など、四八種、一八二八枚である。出土した古銭の鋳造年代の下限は、「弘治通宝」(一五〇三初鋳)であり、天文十九年(一五五〇)に、北条氏康が関東に通用を命じた「永楽通宝」が、全体の三九パーセントを占めていることなどから、十六世紀後半に埋蔵されたものと推定されている(47)。

また、「①bの経路」である「浄光寺」の東を北西に進む「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」の端にはかつて、永禄元年(一五五八)銘の「二十一仏板碑」があり、現在は「大房稲荷神社」の境内に移転されている(48)。十六世紀後半に埋蔵されたものと推定される「古銭の出土」は、その流通を可能とさせる往来の激しい道の存在を想起させ、永禄元年(一五五八)銘の「二十一仏板碑」も、そこに暮らした人々の存在を確かなものとさせるのである。

ゆえに、①「薬師堂領」、「任先規」、「別当浄光寺」などが記載された慶安元年(一六四八)の「寺領朱印状」、②「浄光寺」に十六世紀後半に埋蔵されたと推定される四八種、一八二八枚の古銭、③「浄光寺」の「東側」の道端にあった永禄元年(一五五八)銘の「二十一仏板碑」などから、「(大房)薬師堂」と「浄光寺」は「①bの経路」を経て結ばれていた可能性が高い。また、「①bの経路」により両寺の関係が形成されていった可能性もある。さらに、「①bの経路」の大半を占める「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」が、「光明院」のすぐ西側の「日光道中」にまで繋がっている以上、「(大房)薬師堂」、「浄光寺」及び「光明院」附属の「薬師堂」の三つの寺院の関係も今後の課題となろう。

本稿の「三」、「四」、「五」の考察の結果により、「史料一」に記載された「押立堤」へと至る往古の「奥州道」の経路は、「①bの経路」が最も妥当であることが判明した。

六　「下総往還通」、別名「庄内道」、後の「猿島街道」

「越ヶ谷町」の「中町横町」より、「元荒川」を渡った後に、「大沢町・上宿(上組)」の「日光道中」より分岐する「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」へと至る経路は、「迅速測図」において確認することができない以上、「史料一」に記載された往古の「奥州道」としては復原することができない。

しかし、『猫の爪』には、「香取大明神(神社)」の通り道について、次のような記載がある。

「史料十一」

〔**前略**〕今之所ニ宮居在
来候、尤古来ハ**横込**(49)ヨリ**大門**まて通り道有之由申伝、
〔**後略**〕(50)
(太字・カタカナ筆者)

「史料十一」の記載により、文化年間(一八〇四～一八一八)より文政五年(一八二二)に至る当時より古来には、「大沢町・横シ込」より「大沢香取神社」の「大門」へと「通り道」が存在していたことが判明し、「①bの経路」の大半を占める「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」の、「江戸」方向への延長路として推定することが可能である。

『猫の爪』には、「横シ込」の名前の由来について、次のような記載がある。

「史料十二」

一　**横シ込**ハ元和度之名にあらず、往古ハ**横道**筋ハ**村往**

還通也、寛永中日光道中ニ相也宿場相闢ヶ、高畑筋之内へ慶安年中葛西用水筋御堀渡有之候而ヨリ、村内下総往還通ハ、却而日光道ヨリ横道ニ成、新堤手前込合候所ゆへ横シ込と云、(51)

(太字・カタカナ筆者)

「史料十二」の記載により、寛永年間(一六二四～一六四四)以前の往古には、「横道筋」が当時の「大沢村」(52)の「往還通」であり、且つ「下総往還通(別名「庄内道」、後の「猿島街道」)」の古道が存在し、その流路を挟んで左岸側が下総国であった(55)。また、「鷺後用水(逆川)」の造成以後に架けられた「地蔵橋」(56)より「日光道中」方向へと至る「猿島街道」は、古道ではなく新しく造成された道である可能性が高い。

おわりに

本稿では、①「押立堤」の所在地、②「押立堤」へと至る往古の「奥州道」の経路、について考察を進めた結果、①は完全に、②は部分的に判明させることができた。

①「史料一」に記載された「押立堤」は、現在の北越谷五丁目の「西端」に、「東側」に湾曲しながら続く「元荒川」左岸の堤防であった。

②「史料一」に記載された「押立堤」へと至る往古の「奥州道」の経路は、「大沢町・上宿(上組)」の「日光道中」より分岐する「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」を通り、その道は、北越谷地区で最も古い「河畔砂丘」である「北越谷河畔砂丘Ⅰ」より続く「元・利根川」左岸跡の「自然堤防」上にあった。また、その経路により「(大房)薬師堂」と、その別当寺であった「浄光寺」は結ばれていた可能性が高い。

追記　「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」の終焉

明治三十年(一八九七)になると、当時「越ヶ谷町外一ヶ町組合」町長であった「かしわや」の当主松沢久次郎は、「東武鉄道」線路敷設についての請願書を、関係町村の代表者と連名で内務

省に提出し(57)、さらに、開業時の「東武鉄道」の駅を誘致するために、「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」沿いに所有していた自らの土地を含む多くの土地を、「東武鉄道」に対して寄附を行った(58)。明治三十二年(一八九九)八月二十七日、その寄附行為は結実し、「東武鉄道(現・東武鉄道伊勢崎線)」の「越ヶ谷駅(後に「武州大沢駅」を経て「北越谷駅」)」が開設された。しかし、皮肉にも「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」と、「東武鉄道」の線路が交差する位置が、開設された「駅」に近過ぎたために、道は線路を挟んで事実上東西に分断される結果となってしまった(59)。この時点で、「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」の「往来」としての役割は完全に終焉し、往古の「奥州道」であったと推定される栄光の歴史をも含めて、やがて完全に忘れ去られることになったのである。

脚注

(1)福井猷貞『越ヶ谷瓜の蔓』『越谷市史』第四巻　史料二、一九七二、四三～七八頁。
(2)福井猷貞『大沢猫の爪』『越谷市史』第四巻　史料二、一九七二、七九～一二四頁。
(3)越谷市史編さん委員会編『越谷市史』第四巻　史料二、(「史料解説」)、一九七二、三～十頁。
(4)福井、前掲書注(1)、四五頁。
(5)福井、前掲書注(2)、八四頁。
(6)福井、前掲書注(2)、八二頁。
(7)福井、前掲書注(2)、九五～一〇一頁。
　江沢昭融『大沢町古馬筥』『越谷市史』第四巻　史料二、一九七二、一四八頁。
(8)福井、前掲書注(2)、九六・九八頁。
　江沢、前掲書注(7)、一五一頁。
(9)福井、前掲書注(2)、八七・九六頁。
　江沢、前掲書注(7)、一六五頁。
(10)福井、前掲書注(2)、九一～九八頁。
　「大略元禄八御検地名所上ニ記、其片書ニハ元和・寛文之名所書添、文化九申所持之名を記ス、」
　(太字・カタカナ筆者)
　という記載があった後に、「屋敷割絵図」が描かれる。
(11)福井、前掲書注(2)、八三頁。
　江沢、前掲書注(7)、一四六頁。
(12)越谷市史編さん委員会編『越谷市史』第二巻　通史下、一九七七、一一二七頁。
　「大沢・大房地区の住居表示が変更される」
(13)越谷市北越谷地区自治会連合会編
　『越谷市北越谷地区自治会連合会創立十周年記念誌』、一九八五、四二・四三頁。
　久伊豆神社奉仕会広報委員会編「稲荷神社」、『越谷の神社』、二〇〇二、一七二～一七五頁。
(14)「押立組」の呼称に関しては、かつての「大房村」の鎮守であった「大房稲荷神社」の氏子の方の証言では、「押立(おったて)組」と呼んでいたということであった。
(15)平社定夫・佐藤和平『中川水系　Ⅰ総論・Ⅱ自然』、埼玉県、一九九三、九三頁。
(16)平社・佐藤、前掲書注(15)、八五頁。
(17)平社・佐藤、前掲書注(15)、八二頁。
(18)秦野秀明「越谷市内を流れる元荒川は元・利根川だった」、『古志賀谷』、一五号、二〇〇九、一〇六～一〇九頁。

(19)国土交通省　国土地理院　空中写真（一九四七・一〇・二三撮影）　二二九番。
(20)江沢、前掲書注(7)、一三六頁。
(21)江沢、前掲書注(7)、一五六～一五八頁。
　高崎力「大沢の七ツ池」、『古志賀谷』、一四号、二〇〇七、八三・八四頁。
(22)『浅間太神由来』（旧「荒井家」蔵、二〇一一現在、焼失）『越谷市史』第三巻　史料一、一九七三、九二八頁。
(23)本間清利『越谷市史』第一巻　通史上、一九七七、三六三～三九一頁。
　加藤幸一「元荒川（南荻島）出土の板碑群」、一九八八。（『NPO法人　越谷市郷土研究会』ホームページ所収。）http://bc3456de.sakura.ne.jp/196.pdf(2011.05.2入手)
　本間氏、加藤氏ともに、出土した板碑群に関して①自然埋没説、②人為的埋没説、のどちらであるかの判断を保留されている。
(24)『新編武蔵風土記稿』巻之二百六　埼玉郡之八　新方領（復刻版　蘆田伊人編『新編武蔵風土記稿』第十巻、雄山閣、一九六三、一七六頁。）
(25)前掲書（『新編武蔵風土記稿』）注(24)、一七六頁。
(26)友次　英樹『増補版　土地台帳の沿革と読み方』、日本加除出版、二〇〇七、六六頁。
(27)福井、前掲書注(2)、八二頁。
(28)福井、前掲書注(2)、八三頁。
　江沢、前掲書注(7)、一四七頁。
(29)福井、前掲書注(2)、八四頁。
　江沢、前掲書注(7)、一五三・一五四頁。
(30)福井、前掲書注(2)、八三頁。
　江沢、前掲書注(7)、一四六頁。
(31)福井、前掲書注(2)、八三頁。後注(32)と同じ。
　江沢、前掲書注(7)、一四六頁。後注(33)と同じ。
(32)福井、前掲書注(2)、八三頁。前注(31)と同じ。
(33)江沢、前掲書注(7)、一四六頁。前注(31)と同じ。
(34)福井、前掲書注(2)、九六・九八頁。
(35)福井、前掲書注(2)、九六・九八頁。
(36)福井、前掲書注(2)、九六・九八頁。
(37)福井、前掲書注(2)、九八頁。
(38)江沢、前掲書注(7)、一五三頁。
(39)「覚宝院」江沢、前掲書注(7)、一四一頁。
　「竜宝院」福井、前掲書注(2)、九四一頁。
(40)「旧土地台帳」に明記。
(41)福井、前掲書注(2)、八八頁。後注(43)と同じ。
　江沢、前掲書注(7)、一三三・一三四頁。
(42)福井、前掲書注(2)、八八・八九頁。
　江沢、前掲書注(7)、一四〇頁。後注(44)と同じ。
(43)福井、前掲書注(2)、八八・八九頁。前注(42)と同じ。
(44)江沢、前掲書注(7)、一四〇頁。前注(42)と同じ。
(45)前掲書（『新編武蔵風土記稿』）注(24)、一七六・一七七頁。
　「相伝へて大同二年飛騨工が一夜に建立せしと云　さはあれ一夜に建しなど、妄誕論をまたず、古よりの像は先年賊のために失ひしかば、今の像を安ぜり、此薬師を押入の薬師と唱ふ、其義は知らず、慶安二年五石の御朱印を賜へり、浄光寺持ち、」

という「薬師堂」の記載がある。石橋武之編『浄光寺つれづれ』、二〇〇二、一三八～一四〇頁。

平成二年（一九九〇）に「薬師堂」の境内地を売却して、新たに「浄光寺」の境内地に「薬師堂」、「五智如来堂」等を建立した。

(46)『大房浄光寺　寺領朱印状』（「浄光寺」蔵）

『越谷市史』第三巻　史料一、一九七三、八六九頁。

(47)杉田政男「北越谷浄光寺の埋蔵古銭」、越谷市史編さん室編『越谷の歴史物語』、一九八〇、一五～一七頁。

(48)越谷市史編さん室編『越谷市金石資料集』、一九六九、五七頁。

七二　永禄元年（一五五八）　二十一仏

(1)　大房浄光寺**道路端**

(2)　高一三〇cm・幅五〇cm

(3)　現在北越谷稲荷神社に存す。

□□供養。下部に人名あり

本間、前掲書注(23)、三六三～三九一頁。

所在地として、「浄光寺**東側**」の記載がある（三七八頁）。

(49)福井、前掲書注(2)、八二頁。後注(51)と同じ。

江沢、前掲書注(7)、一四七頁。

(50)福井、前掲書注(2)、八八頁。前注(41)と同じ。

(51)福井、前掲書注(2)、八二頁。前注(49)と同じ。

(52)福井、前掲書注(2)、八一頁。

「大沢町之義**承応以前**大沢村と唱、越ヶ谷へ助合伝馬相勤申候、**承応二年ヨリ**大沢町と唱来申候、」（太字・カタカナ筆者）

江沢、前掲書注(7)、一三一・一三二頁。

(53)江沢、前掲書注(7)、一五二頁。後注(56)と同じ。

(54)（本間清利）、越谷市史編さん室編『越谷ふるさと散歩（上）』、一九八〇、一〇四頁。

(55)江沢、前掲書注(7)、一三四頁。

「大沢町」の元郷であった「鷺後」、「高畑」のうちで、武蔵国側であった「元・利根川」右岸の「高畑」ではなく、下総国側であった「元・利根川」左岸の「鷺後」に、「香取神社」が勧請されていたことに注目すべきである。

(56)江沢、前掲書注(7)、一五二頁。前注(53)と同じ。

(57)「明治三十年六月　「東武鉄道線路敷設に付請願書」（『土木部特許事業』「埼玉県立文書館」蔵）

越谷市史編さん委員会編『越谷市史』第五巻　史料三、一九七四、二〇六・二〇七頁。

(58)「旧土地台帳」に明記。

(59)昭和四十六年（一九七一）五月三十一日以前まで、越谷市大沢三丁目三番地付近と、北越谷二丁目十九番地付近を連絡する、「第四種踏切（踏切警報機や遮断機が設置されていない）」が存在した（「営団地下鉄（現・東京地下鉄）日比谷線」の八両編成化のため、「北越谷駅」の島式プラットホームの北千住駅方面への延長がなされ、それに伴い廃止される）。筆者は当初、「東武鉄道」が開通する前の「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」の最南端地点を、廃止された「第四種踏切」の位置と考えていたが、越谷市郷土研究会の加藤幸一氏よりご指摘を頂き、廃止された「第四種踏切」の位置より北北西に約五〇mの地点で、「大房道　辻皿沼野道」、別名「大房村浄光新道」が、北東より南西へと進んでいたことを確認した。

越谷周辺の六阿弥陀めぐりと新発見のご詠歌

加藤幸一

江戸時代に江戸の町で盛んに行われていたのが「六阿弥陀めぐり」である。阿弥陀如来像を安置している六ケ所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰である。明六ツ（午前六時）に自宅を出て、一巡六里といわれる距離を巡拝し、暮六ツ（午後六時）に帰った。

この越谷周辺地域にも、江戸の六阿弥陀めぐりをまねて、天明八年（一七八八）に船渡村の受道によって「新六阿弥陀」めぐりが始められたのである。

次にその新六阿弥陀の六ケ所の寺院の巡拝には欠かせないご詠歌を紹介する。

新六阿弥陀の二番である林泉寺から平成十八年五月に発見された和讃集に書かれていたものである。これまで一部不明な寺院があったが、これによって新六阿弥陀寺院がどことどこであるかが確定することができたのである。

【新六阿弥陀のご詠歌】

第一番　天岳寺（てんがくじ）

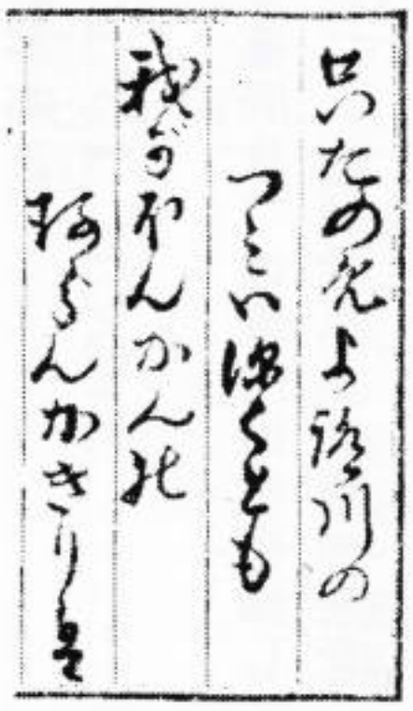
六阿弥陀
いづくと問ふて
越ケ谷の
天岳寺（てんがくでら）へ　参る人にそ（ぞ）

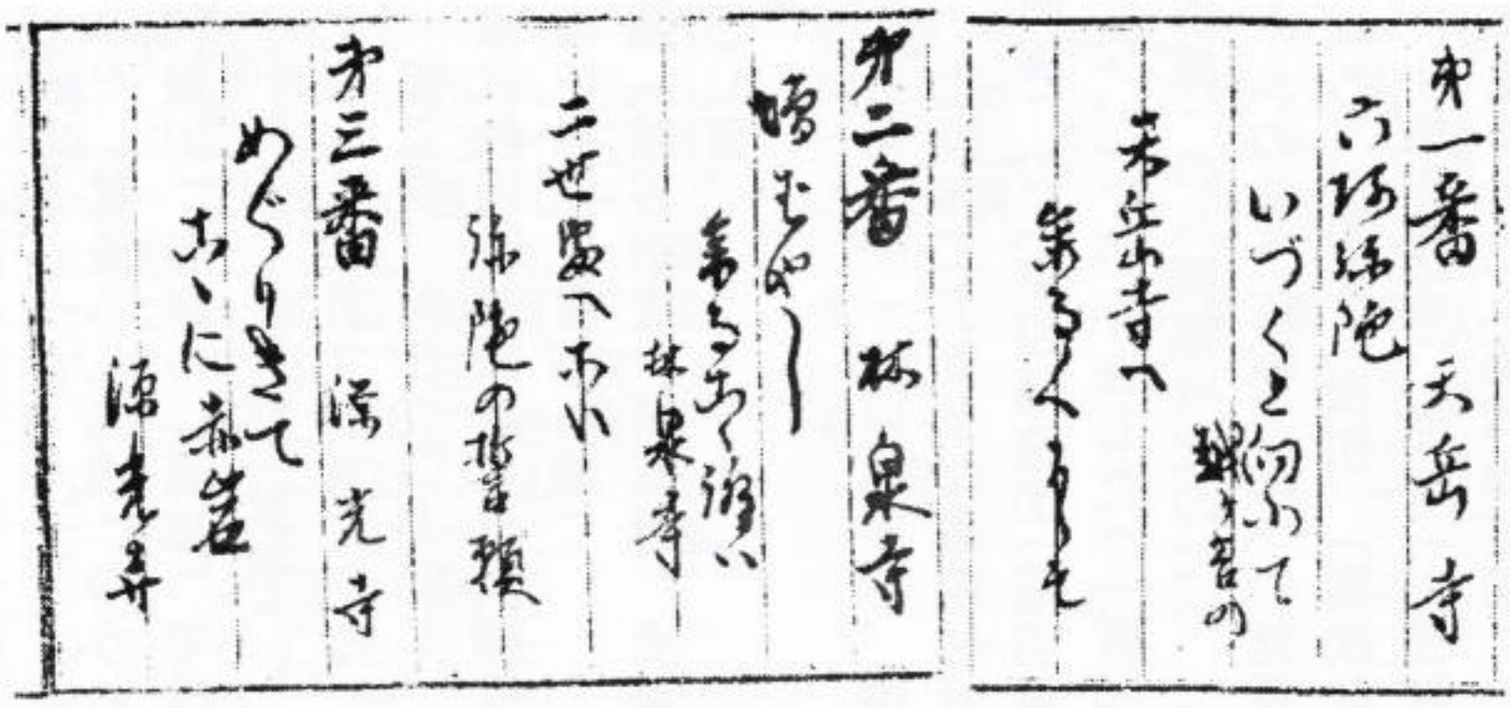
第二番　林泉寺（りんせんじ）

増（ま）ばやし
参るこゝろハ
林泉寺（りんせんじ）
二世（にせ）安楽ハ

第三番　源光寺（げんこうじ）

めぐりきて
こゝに赤岩（あかいわ）
源光寺（げんこうじ）





弥陀の手引で
渡る中川

四番　林西寺

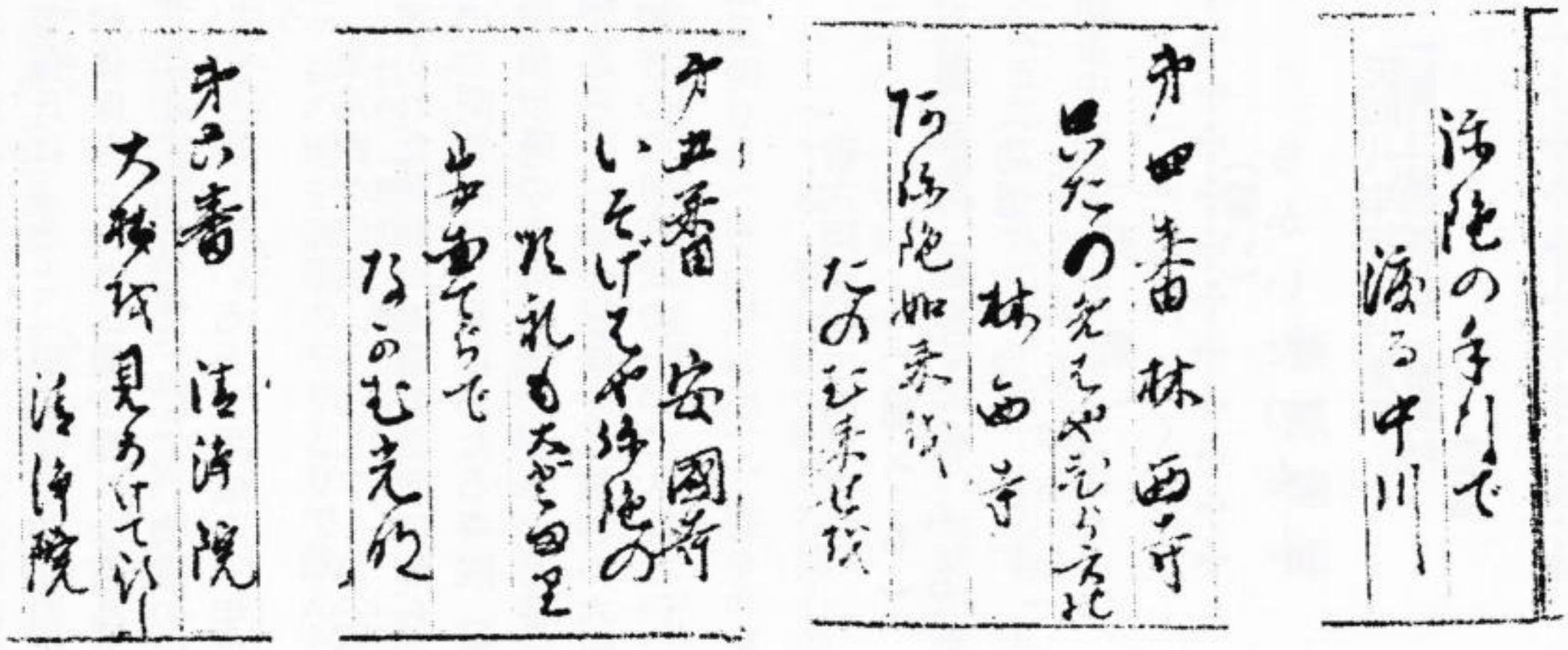
只たのめ　はやひら方の
林西寺
阿弥陀如来を
たのむ来世を

第五番　安国寺

いそげはや　弥陀の
順礼も　大どまり
安国でらで
なかむ光明

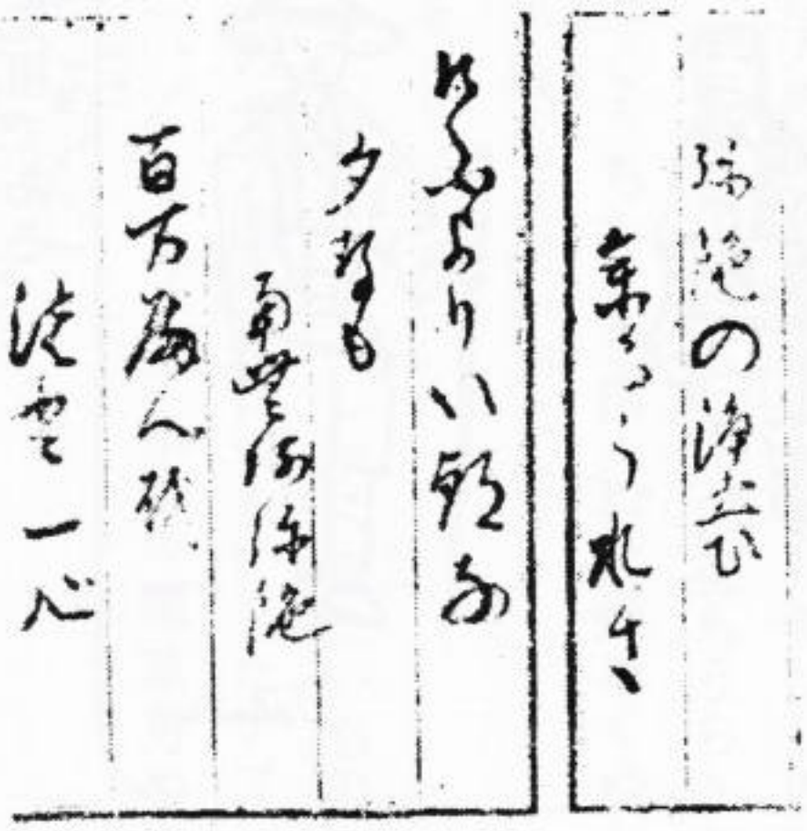
第六番　清浄院

大松を　見あけて行し



清浄院

弥陀の浄土ひ（い）
参るうれ［し］さ
けふよりハ　朝な
夕なも
南無阿弥陀仏
百万べんを
つと一心

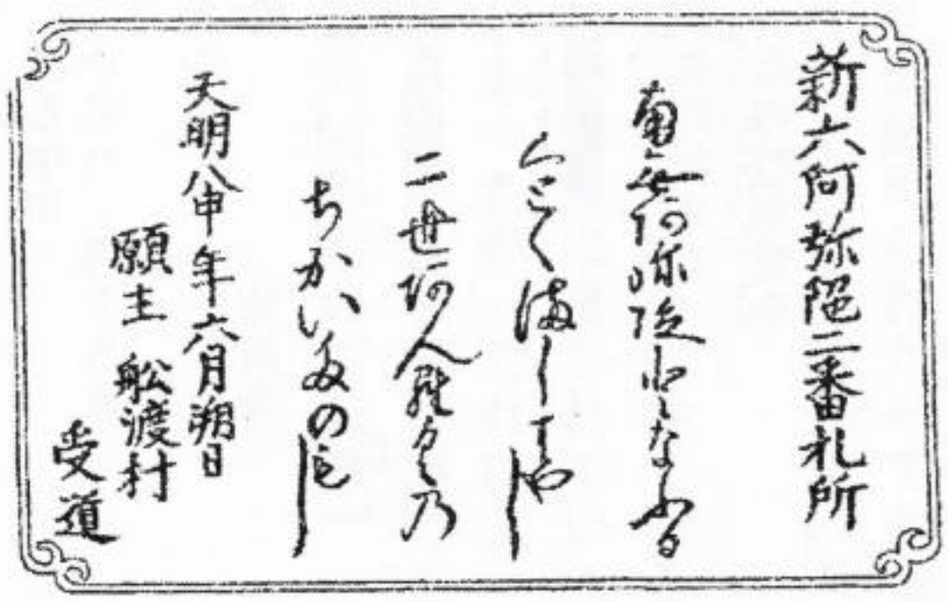


六阿弥陀のすべての寺院の門前には、船渡村の受道が天明八年に造立した「新六阿弥陀□番」と刻まれた標識石塔がある。石標は、二番、四番、五番、六番があることがわかっていたが、平成十八年五月の調査により三番が隣の松伏町の上赤岩の源光寺にあることが判明した。このいきさつについては別紙の新聞記事をご覧願いたい。一番の石標は未だに所在不明ではあるが、越ケ谷の天嶽寺にあったはずである。天嶽寺は当時この地域では最も勢力のあった浄土宗寺院であったし、林泉寺の和讃集のご詠歌にも六阿弥陀の一番の寺院として掲載されているので間違いはない。

石標の他に、ご詠歌の和讃を唱えて参拝するために本堂の正面に設置された扁額が、六ケ寺すべてにあったに違いない。現在、二番の林泉寺にだけ「天明八申年六月朔日　願主　船渡村　受

道」と書かれた当時のご詠歌の扁額が残っていて、本堂内に保管されている。住職の木村惠俊氏によると「旧本堂が昭和四十四年に取り壊された時に、解体保存された仏像や様々な備品が物置に保管され」「平成五年に新客殿が落慶された後、物置の中の物を整理しながら追い取り出していると、平成十五年にこの扁額が現出した」という。

なお、登戸の報土院には「東京西ケ原寫（うつし）　第三番報土院　六阿弥陀如来」と書かれた扁額が本堂の正面に飾られている。西ケ原とは、江戸の六阿弥陀の三番にあたる寺院（無量寺）がある地名である。明治以降の六阿弥陀めぐりの三番は報土院でも行われていたのであろう。その意味で「越谷の六阿弥陀めぐり」としてなら、越谷の六阿弥陀の一つに入れたい。



新六阿弥陀二番札所

南無阿弥陀如来（唱うる）

（功徳）（増　林）

くとくましはやし

二世あんらくの（安　楽）

ちかいたのもし（誓い）

天明八申年六月朔日

願主　船渡村

受道



東京西ケ原寫
第三番
報土院
六阿彌陀如来
ありがたや　弥陀の浄土にも　西かはら
三界衆生のこるものなし
濱野老人

※浜野老人・・・登戸村の名主を代々勤めた家柄の浜野家の先祖である。



一覧
奥羽

道中膝栗毛（二編上巻）について

篠原陸郎

弥次さん・喜多さんの「東海道中膝栗毛」はあまりにも有名で、享和二年（一八〇二）から文政五年（一八二二）まで十辺舎一九のベストセラーとして続編に続編を重ね、識字率の高い当時の庶民に欠くことの出来ない楽しみの一つであった。

十辺舎一九（一七六五～一八三一）は、駿河国の町奉行同心の子として生まれたが、武士に見切りをつけ江戸に出て、度々の東海道往復で蓄積した資料をもとに書上げた「膝栗毛」の大ヒットにより式亭三馬とともに滑稽本の二大戯作者と称された。

弥次（郎兵衛）さん・喜多（八）さんが日光道中越谷に旅をしていたことはあまり知られていない。

嘉永二年（一八四八）に刊行された「奥羽一覧道中膝栗毛」[*1]に登場する二人は、他の二人と越ケ谷の地を洒落のやりとりで飲んだり食ったり遊覧したりして通りすぎている。

その場面を十辺舎一九全集（日本図書センター刊01・7）より抜粋し紹介してみる。

＊1　他の二人　鼻毛延高（狂言師）・千久羅坊（僧侶）

（むかうより武家方の長もちにんそくのうた）

長　「ねんきよサアいれてもナアンアへ食たいものはナアンアへ土手のサア団子やさつまいもたナアンアヘヨウどっこい／／どうした拍子の瓢箪男めういたか／／しめこめ／／」

ちくら坊　「がいに早いお立たアモシ」

延高　「よんこお供が出来たモシ」

（トゆきすぐる道のかたはらにたらふくよっぱらッたる馬かた）

「同士の衆やすくのッてくんさいかへりをまだアけて酒手でのせますい」

北八　「どうして／／今宿屋をたったばかりで足はこの通りかなてこだ」

馬士　「そなはなこたアいはねへもんだよ易いおまだアのんなさろゲイウ」

（ト馬を北八のかたへひきよせるとよんべのさわぎにてあんどんのあぶら北八のきものゝそでにしみたるを馬がかぎつけてくわへる）

北八　「エ、このちくしやうめアゝあぶねへ馬子どうするのだ／／」

（トいへど一向へいきにて馬のくびにかぢりつき）

まご　「ねんきよサアいれてもナアンアへ」

北八　「アヽあぶねへ／／馬がくひつく／／弥次さん見てゐる事はねへアヽあぶねへ／／」

弥次　「まだ／／大丈夫／／食付気遣ひなし」

延高　「あだけぢあないコレ馬子あにのうせる」

ちくら　「このよつぱらひのくだまめがはなしおらぬか／／」

まご　「どつこい／／どうした拍子の瓢箪男めのらぬか／／おまだぞ／／」

北八　「エヽこのべらばうづらめソレ袖がきれる／／」

まご　「袖ふり合も他生のえんづくだアにそんだア袖をおまにくはせなさろ／／」

北八　「こいつはおもしれへ／／」

弥次　「あだけぢやござんないこたアやアだぞ／／かへりおまとがないおとましい馬子だぞエイ／／かへりおまだらわしぶちのるべい」

ちくら　「ソレのんなさへエヽこのどうちくしやうめあによウするだエあゆべ／／」

まご　「ソレのんなさへエヽこのどうちくしやうめあによウだアことヲいふたらおりる／／」

馬　「ヒイン／／」

北八　「エヽ返／／もいめへましい馬子だソレ廿四文遣ひなし」

まご　「エヽせわにもならない事をだまツてございおろせ／／」

北八　「チヨツソレ五拾よ」

まご　「まんだアやア／／」

北八　「エヽ面倒だそんなら百よ」

まご　「百や弐百ぢやアおろせないやアだア／／」

ちくら　「ソレ馬がはねる／／おまにのるこたアやアだぞ／／」

北八　「清水の舞台ずつと飛で弐百五拾」

まご　「まんだや／／」

（トこのうち大名のおとほりさきばらひの人足つえをもつて）

おかちのさふらひ　「したアに／／かぶりものとりさい下アに／／」

まご　「コリヤ／／馬子おろさぬか」

ちくら　「ヤレはアかたじけない　お殿さまだア」

（トおりるまごはゐいがざめてあきれてゐる）

弥次　「どうするかと無言て見てゐたが余程おもしろかつた」

延高　「ゐいけべなくだま馬子のうモシ」

ちくら　「エヽとひやうもない千住までかへるべいそん

綾瀬川鯉の頭小さくしてよしと
四神地名録巻の四に
見えたり水源は足立
郡小針領家村にして
元荒川よりながれ
所々の悪水落合葛飾郡
隅田村にて隅田川に入る
阿古屋松草加宿をたち
ける日の條に筑波より
東に山なしわづかに岡の
ごとく見ゆるは鹿島の
山なりまた南に
はなれて低く見ゆるは
下総の椎名山
なりという云々

そばに居ぬ
人は二八の
いも つなぎ
ありや
な き
やと
しのぶ
うまや路





掲載者注釈

名にし負はば　いざこと問はむ　都鳥　（＊4）

（＊1我思ふ酒は）（＊2ありやなきや）（3業平）

わが思ふ人は　ありやなしや　**（在原業平）**

北八　「先生も弥次さんもみんな胸悪だのう筑羅さん」
ちくら　「あんとしうと天道さまだアかげひなたちふはござんない人を助たアでわしはアまた一文入ず馬よりおりたア　忝　〳〵」
弥次　「なんのそれがかたじけねへものか一文入ずに馬に乗はしめへし大笑だアアハ、、、」
トつぶやきて此所を打過あやせ川をこえ**九右衛門新田蒲生村**にさしかゝれば
村の入り口に



と書きたる行燈のあるを見て
北　「ナンダ〳〵饂飩蕎麦きり有や無やコリヤウ大笑だ
弥次さん珍らしい内だのう這入てひやかして見やせう」
弥次　「ホンニなア我思ふ酒は有やなきやといふ謎語かしら、ん」
延高　「業平そばちふ洒落じやあろ」
ちくら　「食ふてみやこ鳥とこくべいかあんにしてもつツペツて見なさろ」
北八　「その事〳〵」
（トすつとはいればまつくろにくすぶった女房かまの下をたきつけてゐたるかたちできたり）
女房　「ようお出なされ何あげませふな」

北八　「モシお内室さん業平のやうな男が蕎麦はありやなきやはどうだネ」

女ぼう　「ヲホヽヽヽ何被仰か田舎ものにやアわかりましねヱ」

弥次　「モシこつちの行燈に有やなきやと書て置なさるにはつぱり解やせふ江戸ツ子の吾らにやアさかアな」

女ぼう　「ヲホヽヽヽ何おツしやりますうんどんかアなそば切りやせん」

延高　「うらども食ふべエはそばぢやろがあんにしてもありやなきやがからわからないこんだ」

ちくら　「おまへの御亭さまはござんないかおましたら聴聞のういたすべア」

女ぼう　「おたづね申スだがお客様方にこんなアことを申しづらいがお聞なさいこちの宿六どのはぶつやら買やら酒はしこたまかツくらツてあげくの果にやアおしやらくの女さアひツぱりこかして先の月仲人の兄貴のとこさアへほいこくツてやりましツけエ人はもの好もあるもんでわしはアろくでもござらないがその偶妓がいけた面の色は真黒で鼻がへたんこであばただらけでしたひ口から小鬢ちよが兀散かつてふためたア見られないホンニ／＼よくござらないが吾さア方がいくらかとりえだア」

弥次　「ホンニ左様だよ吾ならお前の方をとるのう」

女ぼう　「ヲホヽヽヽおせじのえいお客様だひいきぶんに盛てもまけますヨウ」

（トうどんのやうなそばをさらへもつて四ツだす）

延高　「御ごさまの鼻毛で蕎麦のう見なさいのべたアに」

（トみな／＼そばきりをうちくふをりからどや／＼とおもてら四五人いりきたり）

「おつかアそばでも饂飩でもしこたま出しなないサア／＼兄貴の鹿沼の親かたも大安座でやらかしやせふ」

（トさかもりをするはをちこちにいなか芝居をうちあるくきんざいものなり）

女ぼう　「三十さま上酒を附ませう」

三十　「知れた事祝ひの酒だア」

女ぼう　「そンれは何よりいつもお目出たいこツてござるでのう」

三十　「イヤもうめでたい段ではござらぬ聞ツしやい鹿沼の親方の保山で栃木へ芝居が売れたとおもはアせへわしが持てゐツた人形の隣へ所のもんだアとぬかしおツて猿芝居をおツはじめて何でも朝から晩までイヤ日高川の清姫だアの那の是のとてんから／＼ピツピイ／＼引どん／＼ぢやん／＼と鐘と太鼓でわざと己が芝居の邪魔にせるもんで此方はしんみりとする浄るりのことだアで折角操見にござつた看観衆が何のことはない猿芝居の鳴物聞にきたやうなものそれだアからいくらゐもだめなこんだ終にやア一人も見物がないやうざアナント己が強のにえめ

へことかそこで此三十が思へつきて忠臣蔵の五段目のウつン出して何でも桶薬イしこたましこんで浄るりにやアかまはない二ツ玉ア三ツも四ツも打出したとおもはツせへ案の通り隣の芝居の猿がおどろいて狂言さいちう楽屋へ逃込だアがけちの初て観柵ががらとあいたアが嬉しさに毎日／＼ぽん／＼と鉄炮場アばかり何編もくりけへてやツたがなどういふ間拍子か四ツ玉がねらひどくひゝいたで太夫の猿がべんべらの衣装ひツぱツたきよ姫の形のまんまで楽屋からつなぎのひもウ打切て猿が町中へ逃出したと思はツせへそこの見世だアこゝの内だア好きれへはねへそこが畜生だは佐賀屋の店へかツこんで一ツ一匁五分だアの何のといふ車海老の鮨だア鯛の鮨だアかツくらツたア大さわぎになるめへ事かそれがはねへそこが畜生だは佐賀屋太夫とるゑんやらやツと手打になツてすませた祝ひだアに今から江戸までいぐだア馴染げへにこなさんとこで一盃やツてくだア」

女ぼう　「それは大きな御苦労でござりましよサア／＼あがりまし／＼」

（トこなたの四人はこのはなしに思はずきやうをえてそばくひおえてぜにをはらひ）

北八　「モシおかみさんあの行燈のありやなきやはどういふ訳だネ」

女ぼう　「ヲホヽヽありやなきやござりましない饂飩そばきりありでござります」

北八　「そして下のなきやハエ」

女ぼう　「アリヤこツちやの家名やなきやでござります」

弥次　「ハヽアよめた饂飩蕎麦切ありやなきやかけちの初て観柵ががらとあいたれ」

延高　「うらもはアとんだ苦労のうした」

ちくら　「かけやうのぐだまぢやとんだアことにきイつけてこせはらのうやけ申ス」

（ト弥次郎兵衛らはこのうちをたちいで）

弥次　「アノかみさんもよつほど己慢がつよい後家で蕎麦屋をしやうとは根生のすつはツた女たと思はツせへそこの見世だ」

ちくら　「女ちふもん程げへに生根につよいはごさンないむかし満月ちふ海士たアが龍宮だアちふ国へいんで乳のウ下をうツ切て玉のうおツへしこんでござつたちふがゑい生根玉でござろア」

弥次　「生根玉がへの玉かしらねへが昔の女はなせそう野暮だらうわざ／＼いたい思ひをして乳の下をかツきらずとも丁度いゝ玉の入所があるのに今時の女はその入所を承知して玉どころか家でも蔵でも田地田畑なんでもかでもひきずりこんでしまふが余程広い入所と見える」

北八　「また弥次さんが始たぞ」

延高　「エヽおぞいことべいふ人だアよ」

（トこの所をすぎて**かも村**にさしかゝればこゝに**しほせんべい**の名物あり
いと大きくして一つ八ものづゝ也）

ちくら　「ヤアでツかい**焼せんべへ**うもひきずひますべへ」

弥次　「コリヤアいゝ己も一枚買やせう北八どうだ」

北八　「そんなものう食たツてとべいふねへ先生どうだねお歯に合やすか」

このいへの女房　「お歯に合どころではござりましねへあなたら一ツかめしあがられます」

延高　「こゝなごゝさまはおどけた事いはしますうらはそんだアこツちやござんない氷柱かんでも浮べへ歯ぢやアござんない」

女房　「ホンニ左様じやに麁末申シました定めてその歯なりやこツちやの煎餅は雪のやうなで二三枚も重てめしあがツても大事ないが所の名物でござりますそれはアお例が出来ぬぢやお丈夫なお歯ではないがなア」

（トいはれて延高はしやうとく年よりらしくいはるゝがきらいなれば）

延高　「あんちふだ丈夫な歯でござんないとかゑい／＼うら五枚も七枚も打重て食べへとツて」

（とやつきとなつて大きなるしほせんべい七八まへかさねて大口をあひてくひかく）

「メリ／＼／＼／＼」

北八　「ヤア／＼強勢／＼」

女ぼう　「コリヤつよひお歯なアそんではおとしよりお若い／＼」

大沢宿
桃山遊
覧の図

桃の花
折る手を入る
跡もなし
山花



延高　「こんだア事はあんでもないうツ初めて江戸さアへ出来た頃はかなさいこづちをがり〳〵かみ砕いて鉄粉ふいてあだけたうらだア豈こんなべへいくらもかむだア」

（卜八文のしほせんべいをむしやうにくふ）

ちくら　「ヤレはアそんだアにぎづむもんぢやアござんないモウゑいにしなさろ〳〵モンシごゝさま銭のう拂ますべへ」

女ぼう　「ハイ〳〵あなたが一枚お歯のお丈夫さまが拾八枚で百と五十六文おありがたうござります」

弥次　「違ねへその通りだソレ己が八文先生百五十文お出しなせへ」

延高　「あんでうらが独出すべへ丈夫だア歯だらば食て見せいといひめしたアでかみくだいたまんまアがこゝに有丈うツ引て半銭のう打拂が定のこんだアあんでも雪だアの雨だアのとよんこ食せしめたここのごゝさまもおぞいひとだアそんだア銭をうら一人出せちふはきせちないうらアやアだア〳〵」

弥次　「ハテ扨わからねへ事をいふもんだおじやをかきましたア貝杓子といふ歯でかみくだいたその煎餅を誰食者があるものか食ひかけたのは袋へ入レて貰ツて又道〳〵の楽がよからう」

女ぼう　「ホンニ左様になされましドレ〳〵お土産につめませう」

（ふくろへつめてさしいたせばせんかたなくしぶ〳〵に代物はらふて此所を立出て）

女ぼう　「おありがたうお帰りなさいゑらいお歯の丈夫な御隠居なア」

北八　「おきやアがれ悪くおだつてゝ百四十八文塩煎餅を食せるとはおそろしいかみさんだ」

延高　「しよことがない一首うかんだ『くツたりな塩煎餅でからきめを見たくでもない宿のごゝさま』」

ちくら　「ゑい〳〵序にうらも一首おもひよつた『後悔のほぞをかんだる元とへばさてこそ口は禍の門』」

北八　「おもしろい〳〵トそれより**越ケ谷の宿**にいたる橋を大沢といひ是より北を大沢といふ古利根川にそひ寶珠花にいたる迄桃多し凡二里余もつゞく山に非れども桃山といへり奥桃の鎧通といふもの殊によし李をも交へて植るツイヒヂ村最上なり」

延高　「聞なさろとんのう宿の東半里ちふに**大相模村**大静寺ちふ真言宗の寺さアあるがやくとうめへるべへかよんこ有難い不動尊がいましますゑらいお歯の丈夫なちふで相州大山の不動尊と同時に作たちふがゑいをりだアにめへるべへムシ」

北八　「ヲツト先奇々妙々といふ洒落が腹稿しやした」

弥次　「へン大そうな事をいひ出した北八が洒落が出りやア

大相模の不動さまだアア」

（ト北八はこのふるいしやれをいはんとおもひたるを弥次郎兵衛にせんをこされてしたうちをして）

北八　「ヘンそんな古くせへ洒落ぢやアねへ不動馬鹿にした事をいふぞモウ〳〵不動さま参詣やめにして早く那里へいつて一盃やるとしてへ咽がぐび〳〵してきた」

弥次　「ホンニそういへば何だか口淋しくなつてきたモシ先生先刻の塩煎餅少々頂戴いたしたいの」

北八　「ヲツトさうはなら酒屋この手柏の裏表の舌の根のかはかぬにお前さつき何といつた糝をかき廻した杓子のやうな歯でかみ割たものを誰が食者があるものかといつて置てヘンそれを頂戴も押か強い」

弥次　「チヨツいめへましい奴たまだ覚てゐるか」

延高　「弥次州もほうだいないおぞい〳〵」

トうちつぶやきやがて**大房大林大里下蛤上蛤**立場にいたれば此所**鰻驤**の名物売店三四軒あり辺の沼を鰻驤沢といふ大枝村近し弥次郎公衛この鰻店を見て

弥次　「ちやうど時刻到来で腹がすきや河岸目が丸の内ときた」

北八　「どうも弥次さんの洒落は古くツてならねへちつと腹が杉田の梅目が堀の内といひてへの」

延高　「ハヽア古いより新しいがいにわるい」

越ケ谷宿の内
大畑東の方に男体
女体の二社あり
備後東の方に臨西寺
（林西寺）
といへる浄土宗の寺
あり寺領廿五石

山の芋
うなぎと
なりし
例あれば
金のつるにぞ
ほり
あてに
ける





弥次　「いふだけ安いらんぐい歯だ」
北八　「ソレどうも古くツてならねへ」
ちくら　「歯の事だらやめがゑい／＼」
弥次　「サア這入やせう」
（トみな／＼うなぎやへはいる）
亭主　「いらつしやれ」
女　「おあがりなあれ」
（トずつと二かいへ上り）
弥次　「あねさんあらツぽいところを一貫ばかり焼てくん
なせいそれからあとは追／＼だ」
女中　「ハイ／＼鯰魚は上ませぬか」
弥次　「しれた事鰻驢ばかりサ」
北八　「そこが江戸ツ子だアな」
弥次　「そして筏はごめんだヨずツと大のが賞翫だ」
女　「さよならお舟にいたしませうヲホヽヽヽ」
北八　「わるく洒落るしかしお前の舟なら泥くさいのも辛抱
する」
女中　「沼うなぎぢやござりませぬ泥くさいはあげませぬ」
延高　「あんちふだ早く酒のうもたしませ」
女中　「ハイ／＼」
（トをりてゆきやがてたゝあんにだいこのぬかづけでんぶにきりたるをたくさんに
つみてうしをそへてもちきたる）
弥次　「奇妙／＼」
北八　「是で胸がおちついたサア／＼先生お始なせへ」
延高　「弥次さんお年役ぢやろが」
弥次　「あつかましいサア／＼遠慮なしに／＼」
延高　「うざねばくもおごうのお酌だアぞ」
女中　「ヲホヽヽよく私の名をごぞんじで」
延高　「あんちふだ」
弥次　「此御老人はお前の為にやアお祖父さんだものう名を
知らなくツてどうするもんだ」
女中　「ほんの事で御座らツしやるか吾も七ツのをりこゝ
の内へ年季に抱へられてから一度も田舎へたづねま
しねへが吾がこゝへきた年の秋の事であつたが親父
さまがどうらくで手にこねおへねへとつてとう／＼
かゝさまが出ていつたア跡で男親の手一ツで何すべ
へにも便がわるく長の奉公に出申シたがかゝさまの
父親さまががいに腹を立しやれたとて吾までがかゝ
さまに逢事も出来ませぬふしぎな縁でお祖父さまに
お目にかゝるも常々信心し申シた大相模の不動さま
の御利生でがなごりましやうお目にかゝるは初てな
れど親父はにくいとも孫の吾等に罪はない腹のたつ
のをこらへさしつてかゝさまに一ト目逢せて下さり
なンせうあなた方も共／＼に詫事をお頼申シます」
弥次　「そんならお前がおこう坊であつたか」
女中　「お前さままでがようごぞんじでござりますモウ／＼

おもひだすとかなしくツて涙がこぼれてなりませぬ」

（トチイ／＼となく）

北八　「イソ／＼もう泣なさんな己達がのみ込でお祖父さんへは詫をするから今にかゝさんにも逢れるといふもんだサア／＼泣ずとお酌をするがいゝ」

女中　「ハイ／＼ありがたうございます」

（トしやくをするうちうなぎもやけてくる）

弥次　「サア／＼おめへもちつと鰻驪魚でも食て精分を附て気を丈夫に持がいゝ」

延高　「とんだア事を耳に止て気イもむだアモシぎせぢないめごいおごうだア」

（女中はおごうといふをじぶんのなとこゝろゑ）

おかう　「オヤ／＼ねごひ事迄よう御存ホンニ／＼吾はどうした事か子供のじぶんからうてなりませぬそのねごひのを一チばいかゝさまが苦に病でござりましたどうぞお咄しが出ましたなら今ではだいぶん直りましたとかゝさまの案心するやうに言伝てくださりまし初てお近づきに成りまして了外のことだアが手紙一本かゝさまに届てくださりまし鎌倉とばかり聞ましてねへ心に思ふ絶間はないが一ツぺんも尋ましねへ盆と正月薮入の小遣とツて旦那さまから貰ひためたが金にして壱分残つてございますお恥しいが手紙の中へ封込で上げ申スにかゝさまは不自由もあるまいが乳呑で離た弟の太郎松に好なもんでもかつたがゑいとおツしやつてくださりましたことしは丁度十歳になりませうが嘸いたづら計する事でかゝさまの世話がやけませうドレ直に書てまゐりますお燗を序に直しませう」

（トてうしを持ておりてゆくをあとに四人かほを見合せて）

延高　「外毎はゑいか金銀つくたろゑいにするこんだモシ」

北八　「なんの／＼旅の恥はかき捨折角たのむとあるに今更洒落たともいひにくいやつぱり届るつもりて受取て晩の泊の酒にするが上分別だノウ弥次さん」

弥次　「左様／＼宝の山へ入りながら手を空しくする事はねへだんまりてせしめろ／＼」

延高　「おそい事／＼早く飯くツたらゆかしませ」

（トいふところへ女中手紙を持ちきたり）

おかう　「さよなら是をおたのみ申シます所詮お祖父さまのお腹だちは此場で直せる事ではござりませぬあなた偏におたのみ申シます」

（ト弥次郎に手紙を渡す）

「誰が上書をかいたかいゝ手だぞ」

おかう　「今うなきさきの吉殿に頼ましたがよし／＼おれがいゝやうにとりなして届てやるサ

御母さま　かうより
金子入

ア／＼飯を早く持てきさツし」

おかう　「只今むれますとこソレまゐりました」

（トこれにてみな／＼しゆしよくをなしかんぢやうしてたちいづれば）

おかう　「左様なら又お戻りによろしくお頼申します」

トまぶたはらして見送りしは親子の情合思ひやられて哀の事ども

もなり

奥羽一覧　道中膝栗毛（二編中巻）

斯て四人の同者は鰻驢店を立出行ほどに弥次郎兵衛は一箇にこ／＼とうち笑て早足に歩行を北八跡からひきとゝめ

北八　「コレサ／＼弥次さんおめへひとり何もそう御機嫌でゆくこたアねへ大方手紙の一分があるから気がつゑへのだろうがあれだとつてお前一人の物といふ訳でもねへおれがむりにすゝめて受合せたればこそ先一分にありついたといふものだドレおれに半分よこしねへ」

弥次　「馬鹿な事をいふな此弥次さんの分別有気なのを見かけてあの女中が頼だのも四人の中でどうか深切らしいやさしさうな男だと思つたからの事だ何も手前の陰といふわけぢやアなし半分やる道理があるものか」

延高　「そんだア元はうらが祖父になりすましたアので那おごうめかだらこうつぱたいて一分ちふ金よつはらひの弥次州に預けおつたそんれ見なさろ己が一番の施主だアに」

北八　「ホンニさうだ／＼上香がすんだら葬禮を出すがいゝ迎僧はさしづめ筑羅さんの役だ」

ちくら　「くだまいはしします旅がけだアに不吉だア／＼」

弥次　「ばんこにろくなことはいはねへぞ」

北八　「それでも先生が施主だといひ出したがわりい」

延高　「すんだアとつて己一分の施主にちがふことはござんない」

弥次　「皆がそんなに気をもまずとも万事おれにまかせて置がいゝ一人で酒が呑るものぢやアねへ何れ一同へ馳走をしやすのさア」

北八　「ヘンあんまり一箇でのみかねもしねへ四国の船ぢやアア阿伏兎で乗合になつた和尚が藁苞へいれてもたせて来た蛸の足を一本ぬすんで手造の悪酒せへ呑だぢやアねへか」

弥次　「このべら坊は木曽街道の二編ことを今時分いひ出すにはおよばねへしかもその時手前が蛸のへどを吐たのでとう／＼蛸を盗だしりがわれて和尚かおこツて天秤棒でぶんなくられやうとしたところをこの弥次さんが助てやつたのだ」

北八　「ヘンそんな利根らしい口をきくが子供の糞が交た牡丹餅をおめへがいぢをきたなく食初めたのでおれまでつひ食ふ気になつてたつた三ツ食たので畢竟へども吐たといふもんだ」

弥次　「いくら手前が何といつたツて道中ぢやアいつでもおれに世話ばかりやかせて何もいふこたア一ツもねへ」

北八　「こいつは面白へ一番聞所だ何をおめへに世話をやかせた」

弥次　「何もすさまじいしほゐ川ぢやア座頭の買た酒を盗でくらい日坂ぢやア信濃の覗子のとこへ夜ばひにいつて仏壇の中へおちた時もみんなおれにやつけへをかけたぢやアねへか」

北八　「弥次さんおめへ何も友達づくのやうでもねへ先生たちの知りもしねへ事を此所でいひ出しておれに恥をかゝせるこたアねへおめへも宮島でおれが釣た河豚をもちやすびにして口のはたをくひつかれたも気が利ねへ」

弥次　「ナンノそりやアほんの洒落といふもんだ此とうへんぼくめへ」

北八　「ナニ此蚰蜒親仁め」

（とたかひにぞうごんくわごんしならふるほとに）

延高　「エヽあんちふだ四人同士に出来た旅だアにたがひにぎづむこたアござんないよしなさろ〳〵」

ちくら　「サア〳〵うらがちうとるがア止なさいソレ一首うかみ申シた

『ふるいことといへば鼠が笑ふちふにん口に猫にならしやれ』」

トこの一首にて二人は互に笑ひを催しむつみあひて行程に**宿**にぞいたりける・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

（以下続く）

郷土越谷を詠む『越谷いろはかるた』の紹介

「こしがや地域ネットワーク13」のメンバーの方々によって『越谷いろはかるた』が平成二十二年二月に発行されました。

これにより、小中学生はもとより、一般家庭において「越谷いろはかるた」を通じ、ふるさと越谷の再発見や活性化につながるものと大いに期待されています。



明治天皇の巡幸と行在所の碑

田中利昌

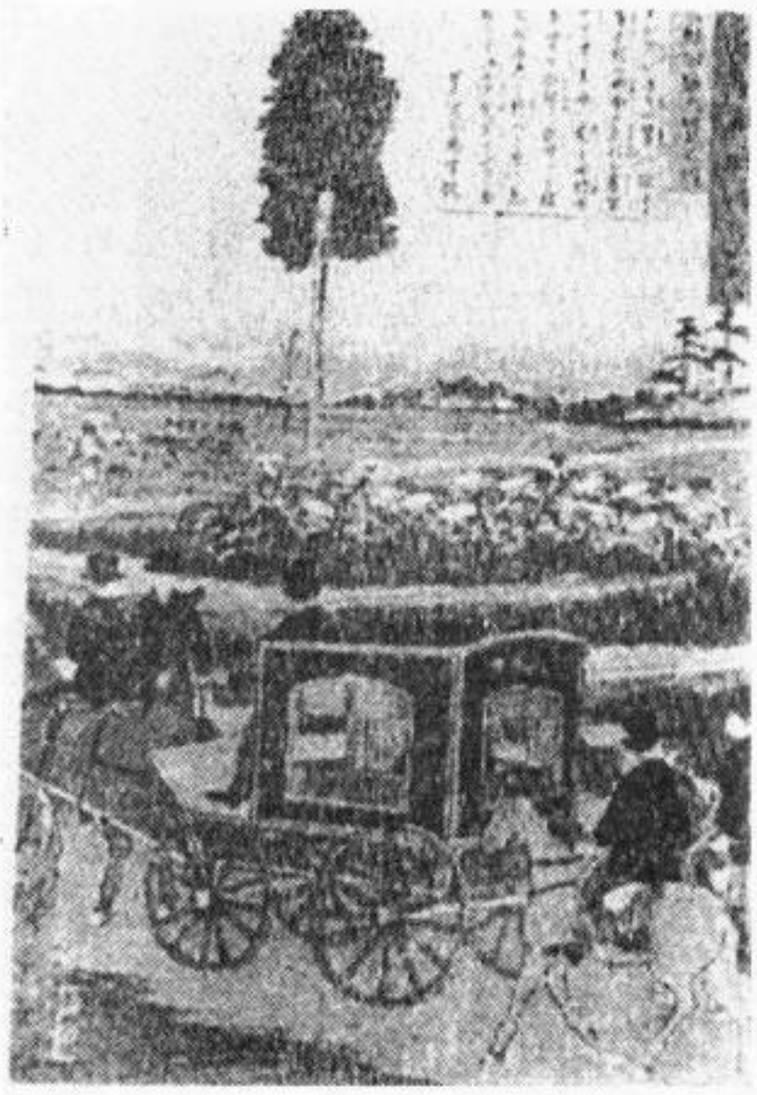
明治九年、国内の諸事件のため（明治十年には西南戦争＊田中註）のびのびになっていた天皇の奥羽地方巡幸が実現した。戊辰戦争以来の民心を安撫し、天皇制国家を印象づけるためである。（この最中、英国特命全権公使パークスおよび夫人子供、随員一行が日光見物のため進行した。）二十日には「御巡幸沿道宿村心得書」が布達され、区内の正副戸長に行在所掛、旅宿掛、道路掛、駅逓掛、県官掛、渡船場掛などをつとめるよう指示されている。三十日には県官より田植展覧が伝えられ、大至急準備にとりかかったようである。正副戸長の当日の服装も羽織・袴ときめられ、国旗掲揚も命ぜられている。

一方、御小休輦所にあてられた大沢町の福井権右衛門家（旧本陣）は、植木職、畳職、経師屋等による修繕がおこなわれ、福井家の隣、下田伝之助家へは米田侍従番長、五軒おいた隣、松倉四郎兵衛家には徳大寺実則内卿、その四軒隣、福井覚右衛門家には右大臣岩倉具視らが休息すべく宿割りされていた。

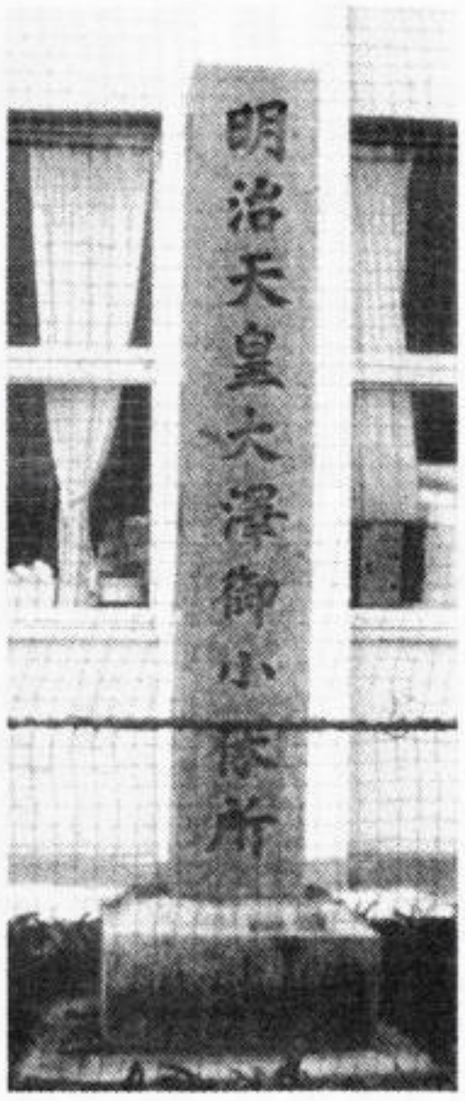
福井様によると、明治天皇よりタバコと反物を下賜されたが、残念ながら散逸したとのことである。

明治天皇立ち寄りの記念に昭和十五年に文化財指定され（現行法では無指定）、昭和十七年四月に福井様前に記念碑が造られた。当時は戦争中であり、破壊を防ぐために土の下に埋められていたらしい。昭和二十五年に文化財指定が解除され、現在の消防署にあった大澤町役場に移築された（北隣にはかつての大沢小学校があった）。なぜ移築したかは現在不明である。昭和三十二年の三月に現・大沢小学校に移築された。大沢小学校、市役所に当時の経緯の記録は残っていない。

（「小休配置図」編さん室文書）（以上、越谷市史二通史下から抜粋）



「明治天皇
田植天覧之図」



「明治天皇大澤
御小休所」碑

温飩屋さんにある一枚の画

金子　寛

大沢橋のたもとにある鰻料理店「温飩屋」に、明治の頃、客の一人が描いて残していった一枚の水彩画がある。川を挟んでおそらく天ぷらの「天芳」の二階あたりから、東西に長く建っている「温飩屋」の建屋全体を描いたもので、正面に四本の松の木が青空に聳え、木材で組んだ川岸の護岸柵が見事な規則だった格子状を示して画の中央部を構成している。家並みは両側の二階建てが平屋の二棟を挟んで四棟並び、表道路(日光街道)に面した二階建ての軒には藍色の下地に白く「山万」の屋号が入った暖簾が下がっている。その隣には米俵らしきものが積み重ねられ、その脇で客人風の二人が立った姿と次の間にも四人の男が見える。画面の左側(西側)後方には銭湯の煙突が二本立っている。川岸では女中らしき女性が洗濯か洗いものの仕事をしている。内二人の髪の結い方が独特である。川面には白鳥と思える水鳥が二羽描かれ、描かれた季節が十一月から二月頃かと思わせる。右下に、Hあるいは(ひさの)と読める朱色のローマ字サインが記されている。

このサインをきっかけに、いつ頃描いた画で、誰が描いたのか、同じ作家の画が他にあるのかを調べに入った。

市の図書館の協力で、明治の中頃から、外国人が日光を訪れ、滞在し、彼等を対象に土産用に社寺、仏閣を描く画家(土産絵師)の存在が多くいたことが判った。おそらくそのような一人が日光への行き帰りに越谷に寄り、どのような経緯からか判らないが、温飩屋で一枚残していったものと思われる。

一方、日光の「小杉放庵記念日光美術館」に、N・HISANOのサインが入った水彩画があることが判った。一九九八年、同館が催した「甦る日光・社寺を描いた水彩画」展でその画が展示され、館でもN・HISANOなる画家の調査をしているところだった。館の説明で、同じようなサインの入った画を名古屋の画の収集家が所有していることも判っている。これは海外で見つけてきた里帰りの画という。

画に描かれた銭湯の煙突は、位置的に「佐々の湯」のものであることが判ったので、「佐々の湯」のご子孫の方に、いつ頃から銭湯を始めたのかお尋ねした。これも祖父の時代のようであり、描かれた時期が明治の中頃と考えても大きな矛盾はない。

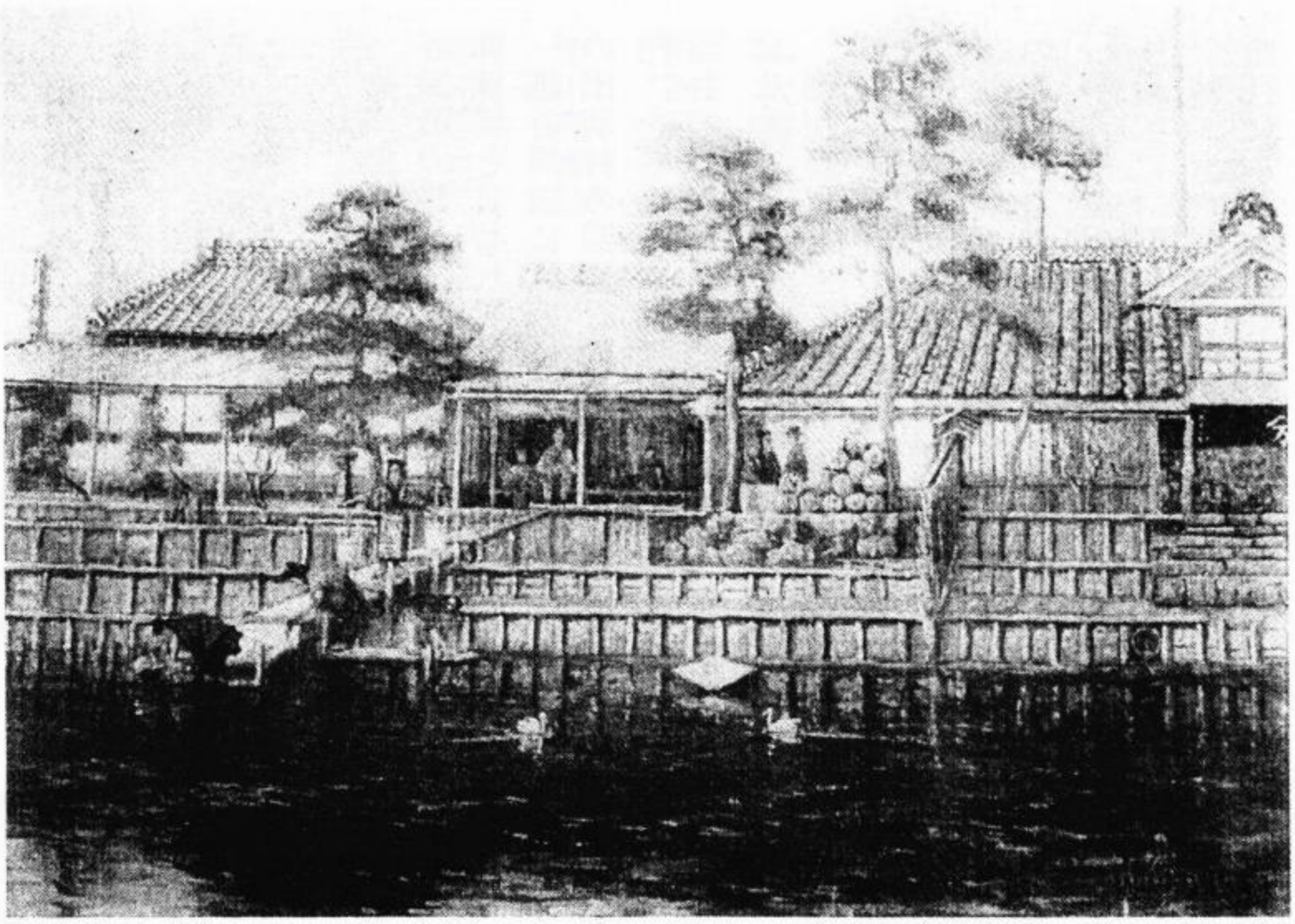
水彩絵の具が日本に入ってきたのは明治初期と言うことであり、明治四十二年頃には国産チューブ入り絵の具が登場している。

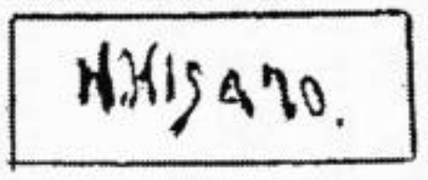
先の「甦る日光社寺展」の作品は凡そ今から百十年前の日光で描かれた水彩画を集めたもので、その色彩の鮮やかさは見事なものがある。

さほどに名を残した画家ではないが、明治の風景が残る姿がこの画から偲ばれ、一度鑑賞に赴くのも一興ではないだろうか。

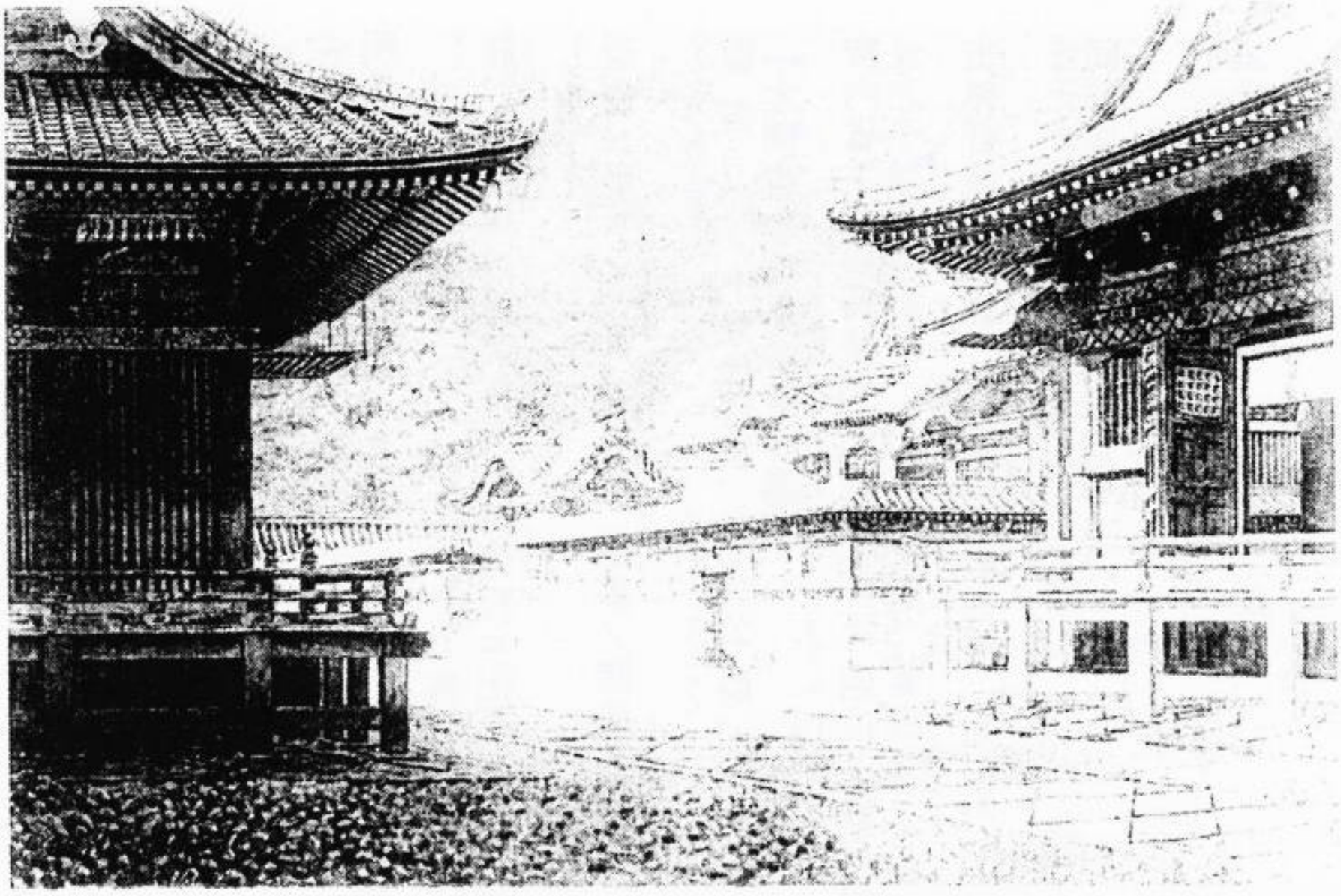
平成二十二年二月二十一日、母屋の火災により、饂飩屋さんの建屋は焼失、取り壊され、江戸時代から続いたお店はここに幕を閉じた。水彩画は焼失を免れ、越谷市へ寄贈されたと聞いている。

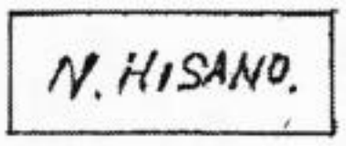
参考文献　甦る日光・社寺を描いた水彩画（世界遺産へのオマージュ）
小杉放庵記念日光美術館





大沢の温飩屋にあるN．HISANOのサインが入っている水彩画
（大山泰弘氏所有）
「明治中期の温饂屋全景」（４８×８８ｃｍ）





甦る日光・社寺を描いた水彩画」展（１９９８）に出品された
Ｎ．ＨＩＳＡＮＯのサインが入っている水彩画
（小杉放庵記念日光美術館所蔵）
「東照宮・神楽殿と上社務所」（３３．８×５１．４ｃｍ）

明治になって越谷に鷹狩に来た徳川慶喜

田中利昌

徳川慶喜が明治三十三年六月五日から九日までの五日間、越谷周辺の鶴を捕りに鷹狩に来ている。このあたりは、江戸川筋御猟場と言われて庶民にとっては禁猟区であった。

越谷周辺に鷹狩に来た徳川慶喜一行の主な名前や人数が当時の出羽村の四丁野の大野家（現、宮本町一―一、代々「伊右衛門」を名乗る家柄）の当時の当主と思われる大野伊右衛門（現当主である大野光政氏によれば、光政氏の曽祖父だと思われる）によって記録され、その文書が大野家に残っている。

徳川慶喜とその家臣二名、宮内省関係六名（主猟局長の山口正定、主猟官の秋田虎雄、澤木直行、御鷹取締の田中修三、会計官二名）である。

大野家に宿泊した人は、そのうちの徳川慶喜とその家臣二人のみである。宿泊した日も、五日と八日の二日間である。

徳川慶喜はその謝礼として、大野家に茶料としての十五円を、使用人に対しても合計五円を与えている。

他の宮内省関係者の宿泊場所は、ここ大野家ではなく、江戸時代に本陣を構えていた大沢の大松屋福井家旧本陣である。

光政氏の祖父、大野伊右衛門氏（明治十九年六月二十日生、昭和四十年に越谷市郷土研究会の初代会長となる）が数え年十四歳の時であった。

出羽村四丁野（現、宮本町）の大野家の古文書による徳川慶喜の当家宿泊記録二点と、お茶料の領収証、大野家への宿泊の礼状の解読文を次に紹介する。

【大野家の宿泊記録その一】

明治三十三年六月五日、宮内省主猟局ニテ、本縣下（ほんけんか）江戸川筋（すじ）、御猟場（ごりょうば）ニ於（おい）テ、鶴ノ御鷹狩（おたかがり）ニ出張致シ、越谷町近傍（きんぼう）ニ於（おい）テ催（もよお）サレタリ、出張ノ諸氏名ハ、

賓客（ひんきゃく）、前（さき）ノ十五代将軍、現今公爵（げんこんこうしゃく）、　徳川慶喜公（よしのぶこう）、

宮内省主猟局長兼（けん）、主殿頭（とのものかみ）、正四位（しょうしい）、勳三等（くん）、山口正定

主猟官兼（けん）、侍従、従四位（じゅしい）、勳四等（しとう）、男爵（だんしゃく）　秋田虎雄

同（どう）　属（ぞく）　正八位（しょうはちい）、　澤木直行

同（どう）　御鷹取締（おたかとりしまり）　田中修三

会計官　弐名（にめい）

徳川家臣（かしん）　弐名

徳川慶喜公ノ旅舘ニ當□会田清太郎殿より徳川公ノ為

座敷懇請サレ、不得止、同公爵家臣弐人ヲ宿泊セシメタリ、

最モ二夜の宿、依之、茶料トシテ頂戴ス、

※慶喜は明治三十五年（一九〇二）に公爵になっていることから、文中の「現今公爵」の記述から、この記録は明治三十五年以降に書かれたものである。

【大野家の宿泊記録その二】

明治三十三年六月五日の夜、八日夜、二夜、

徳川慶喜公、幷ニ、御猟局長、山口正定殿、

御同道ニテ、當近在へ御鷹猟、鶴ヲ取ニ参ラレ、

右、山口君ハ、旧本陣へ旅泊、徳川殿ハ、拙宅へ、

供弐人御連レ、宿泊ス、依て、下男・下女へとして、

御心附被下候ニ付、配當、左也、

金五十銭　利助　　金十銭　定吉

金六十銭　吉蔵　　金五十銭　ふじ・さの

金五十銭　順蔵　　金三十銭　つね

金五十銭　芳□　　金三十銭　舟

金弐十銭　繁蔵　　金三十銭　ます

□□

□　二郎

【大野家のお茶料領収証】

しょう

證

金三十銭　るい

金三十銭　きく

金三十銭　はな

計金五円

ひとつ　きんじゅうごえんなり

右、正ニ領収候也

いえもん

明治三拾三年六月九日　大野伊右衛門

徳川殿

【大野家への宿泊礼状】

拝啓（はいけい）、益々（ますますごせいてき）御清適（きんき）、欣喜（のいたり）之至（さ）、扨（さて）、先年出張之際（せんねんしゅっちょうのさい）は、種々御厚情（しゅじゅごこうじょう）ヲ蒙（こうむ）り、難有（ありがたく）、其節（そのせつ）、御申出之御染草（おもうしでのごせんそう）、今回（こんかい）、出来相成候間（しゅったいあいなりそうろうあいだ）、小包便（こづつみびん）ヲ以出、発送致候（はっそういたしそうろう）、着之上（ちゃくのうえ）ハ御報相成度（おしらせあいなりたく）、右申進候（みぎもうしまいらせそうろう）、

早々頓首（そうそうとんしゅ）

三十四年四月十五日

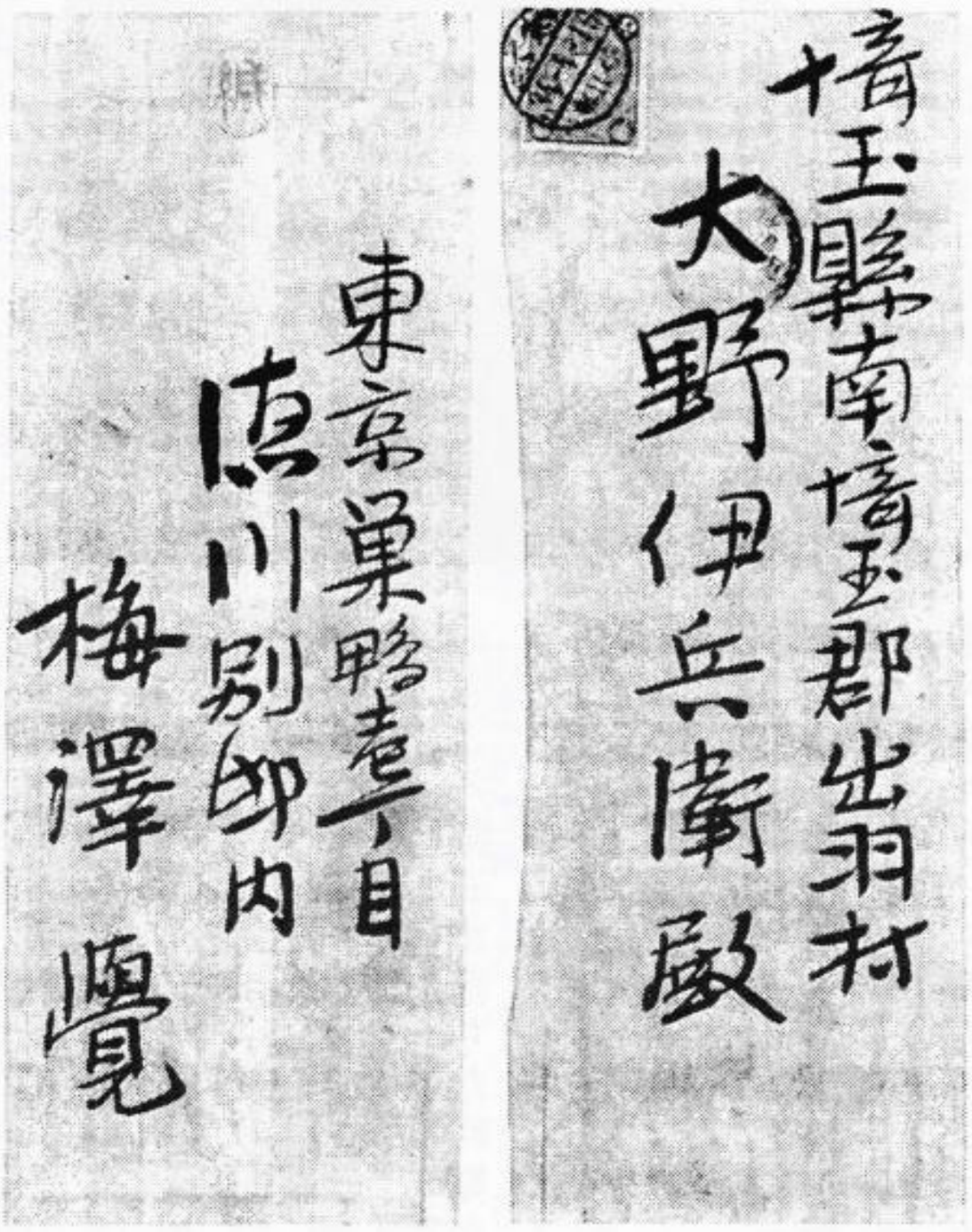
梅澤覚（うめざわさとし）

大野伊兵衛殿（おおのいへえどの）



大野家への宿泊礼状

大野家への宿泊礼状の表書き（封書）



越谷に落ちた隕石

生出弘三

当時、越谷市郷土研究会の会長だった小島誠氏（故人）の調査と隕石を保管している中村勉氏の話によると次の通りである。

関東大震災のだいぶ前の頃、東武線の西隣、南埼玉郡桜井村大字大里五四一番地に住む中村喜八氏（現、勉氏の高祖父、嘉永元年十一月十一日の生まれ、大正十一年に七十五歳で亡くなる）所有の畑（東武線の東側の大里四七四番地）に隕石が落下した。

すぐ近くに住む男性（東武線の東側に住む中村喜八氏の分家）が夜明け前に家の中から外トイレに行った時、西の方から物凄い音をたてて迫るものがあって、すごく驚いて「お化けだ」と叫びながら家の中に飛び込んで戸を閉めたという。

中村喜八氏は、その後、何日かたって恐る恐る耕地に行き、一メートル余りの深さになった窪みの中に石を発見した。その石は、横幅十八センチメートル、高さ十センチメートル、重さは丁度四キログラムあって、鉄分が多く含まれているため磁石がよくつく。今でも中村家の家宝として大切に保管されている。

これは、小島誠氏によると、大正三年十月頃の出来事（平成五年度の第二十五回越谷市民文化祭の越谷市郷土研究会発行の冊子の中の小島誠氏著「越谷に落ちた隕石」とされる。

※大野光政氏によると、右の宿泊礼状の宛名が「大野伊兵衛」となっているが、「大野伊右衛門」の誤りと思われ、ちなみに当時の当主の襲名以前の名は伊八である。

※この資料の作成にあたっては、大野光政氏からの資料の提供と調査の協力をいただきました。

※古文書の解読には、鈴木秀俊氏の協力を得ました。

昭和五十七年四月、越谷市桜井地区連合自治会発行の「創立二十周年記念誌」の中の『戸長並びに桜井村歴代村長と事歴』の年表の中に、〈大里中村新之助氏所有地に4㎏の隕石落下、同家に保管〉との記述が、〈帝国電灯越谷営業所開設、大正二年九月〉と〈桜井小学校舎竣工し現在地に安国寺より移る、大正三年十二月〉との間に記載されていることから、大正三年十月頃の出来事としたことには矛盾はないが、別にもう一つの説がある。



中村喜八氏

中村勉氏の祖父の弟（明治三十五年十二月十一日の生まれ）から聞いた話によると、実はもっと古く、東武鉄道がこの地に開通した三年後の明治三十五年（一九〇二）三月十五日頃の午前二時頃だという。現在のところ隕石が落ちた時期が確定できないのが、今となっては残念である。

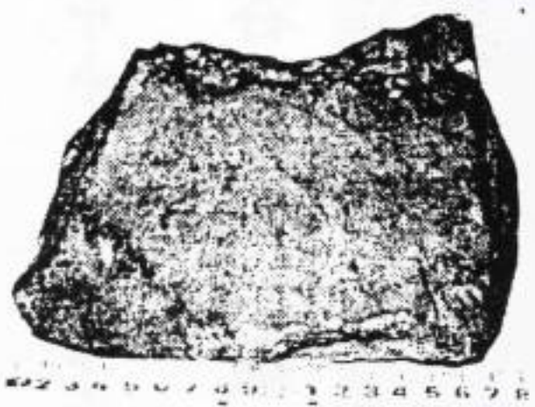
右記の新聞記事（越谷市郷土研究会の原田民氏提供）によると、隕石が大里に落ちたのは、明治三十五年三月八日の暁の頃としている。

中村勉氏の祖父の弟によると、明治三十五年三月十五日頃の午前二時頃としている。多少の食い違いがあるが、大正三年十月頃ではなく、明治三十五年三月であることは間違いないことが判明した。

隕石が落下した翌月に書かれた当時の記事の通り、三月八日頃の暁あるいは夜明け前の出来事ではないであろうか。

明治三十五年四月二十五日付「東京朝日新聞」より

●埼玉縣の隕石　去月八日頃なりき、埼玉縣南埼玉郡にて、暁の頃、火山の噴火したる如き音響ありしが、其後、同郡桜井村大字大里にて、中村喜八といふ人の所有に係る陸羽街道の東側の田に大穴の生じたるを発見し、四尺餘の底より奇石を掘出し、昨今、見物群衆すといふ。



（横幅約６㎝）

越谷の大里に
落ちた隕石

越谷と人気投票

原田民自

国内で美人コンテストが行われたのは、明治四十一年（一九〇八）三月、時事新報社が実施したのが最初といわれる。

越谷市では、昭和五十二年（一九七七）九月、「第三回　交通安全市民まつり」が行われた際、市民が注目するイベントをと、「第一回　ミス交通安全コンテスト」が実施された。ミス一人、準ミス三人が審査員により選ばれ、笑顔をふりまきながらオープンカーに乗り、市民に交通安全を呼びかけた。

平成二十年（二〇〇八）十月に行われた「第三十四回　市民まつり」でもミス越谷コンテストが行われ、市長をはじめとする審査員の選考でミス越谷、準ミス越谷が選ばれた。越谷市でもこのようなコンテスト、人気投票は三十年以上の歴史がある。



第１回ミス交通安全コンテスト

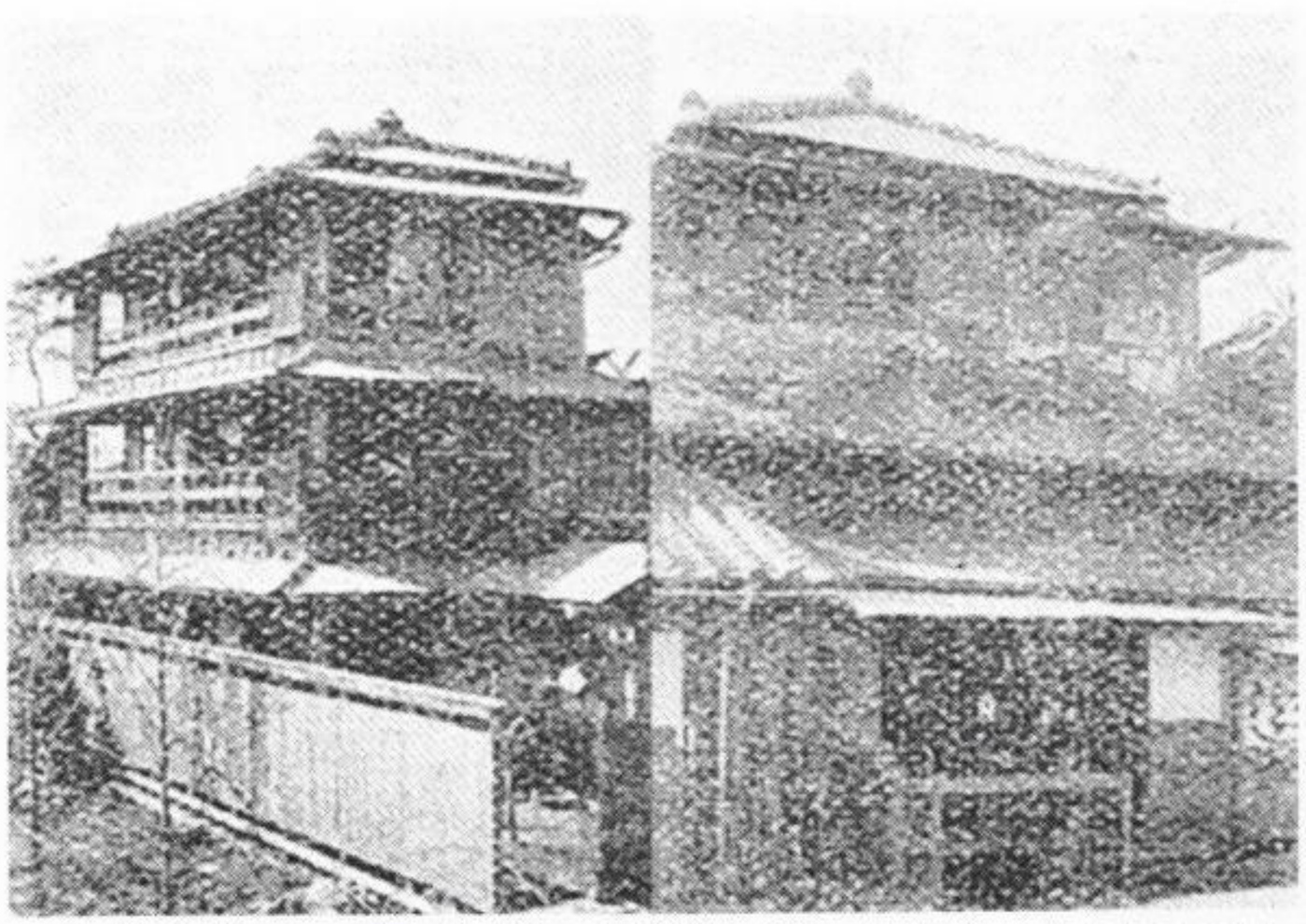
明治時代の越谷周辺を知る上で必須の日刊新聞である埼玉新報は、明治十年（一八七七）十二月に創刊され、二度ほど廃刊後、明治三十二年（一八九九）五月、南荻島の川上参三郎によって復刊、大正三年（一九一四）まで刊行された。越ヶ谷町の退歩堂という薬などを扱う店を経営していた大塚善太郎が記者として巧みな手腕を発揮したことで越ヶ谷町、大沢町に密着した記事が数多く残されている。

埼玉新報では新聞購読の拡大を図る方法の一つとして各種の人気投票を新聞紙上で展開した。例えば埼玉県醤油醸造銘柄や埼玉県下町村長名望家などの人気投票を行い、一位から十位の高得点を獲得した場合に記念品を贈呈するという企画である。

明治三十五年（一九〇二）七月より一か月半にわたり、県下の割烹店（料理屋）の人気投票が行われた。埼玉新報の紙面に掲載されている投票用紙を切り取り投票するというもので、上位十位までに入賞した割烹店に大姿見（全身をうつして見る大型の鏡）が贈呈されるというもの。最終成績は発表の日の紙面が失われているため不明ながら、投票締め切りにあたる八月三十一日の集計では、五位に越ヶ谷町の紀伊国屋の名が見える。

一位	五万六〇〇七票	大宮公園	八重垣
二位	二万八三六八票	幸手町	義語家
三位	二万七四九一票	栗橋町	稲荷屋
五位	**一万九八七〇票**	**越ヶ谷町**	**紀伊国屋**
十六位	**九七五〇票**	**越ヶ谷町**	**嶋田屋**

二〇位　四四四六票　粕壁町　嶋万
二二位　三六六一票　岩槻町　布袋屋
二五位　二四〇六票　越ヶ谷町　天芳楼
二八位　一九七七票　吉川村　こうじ屋
四一位　二九一票　大沢町　うどん屋



大沢橋際にあった三層楼の加賀屋（左）と本町３丁目の天芳

大正五年（一九一六）に刊行された「越ヶ谷案内」の割烹料理店の記述を見ると、「越ヶ谷では大沢橋際の**元芳楼**と**加賀屋**は第一流の料理店で、**天芳**の天ぷら、鰻の馬鹿焼きは有名である。加賀屋の三層楼は風雅の客を呼び、川魚料理は主人の得意とする所である。なお仲町には**内河屋**、新町三丁目には**嶋田屋**がある、これらの店は牛肉で売出しこれは天ぷら顧客を喜ばせてゐる、大沢町では大沢橋際の**うどん屋**が第一で座敷も数あつて、連夜三弦の音が絶えぬのである、流石にこゝは大小の茶屋小屋が多く、**浩養軒**、**芳村**、**大柳亭**、**山本屋**など、それぞれ盛（はや）ってゐる」とある。



芸妓絵葉書　吉田屋　小まん

埼玉新報では、明治三十九年（一九〇六）八月二十一日より九月二十六日の約一か月にわたり「芸妓十美人投票」を行った。芸妓（げいぎ）とは、舞踊や音曲、鳴物で宴席に興を添え、客をもてなす女性のことで、越谷周辺ではこのような女性を置く置屋が江戸時代より大沢地区にあった。

当時、流行した絵葉書の中でも特に芸妓や美人女性のものが数多く発行され、日露戦争では戦地に送られ兵士を喜ばせた。芸妓十美人投票のなりゆきを埼玉新報で見てみよう。

●芸妓十美人投票　募集

芸妓の美人とは容貌の美しき者のみ言うにあらず。先づお座敷に出で客に対して盃盤（はいばん）の斡旋に巧みなる者、撥捌（ばちさば）きの確かにして音声の美はしき者、之れに兼ぬるに美貌を以てせば洵（まこと）とに是れ天下一品交際場裡の花と云ふべし。去れど三拍子の揃ひたる者は容易に求むべからず。長所あり短所あるも亦（また）可なり。是を以て右の内一拍子にても備へたる者は被選者の資格を有する事とし、左の規定により普（あま）ねく其の投票を募集す

一、被選者は県下に営業中の芸妓たる事
一、投票用紙は本紙に刷出せる物に限る
一、投票用紙には一枚一名宛認むべし
一、用紙には住所家号芸名等を記入の事
一、投票は毎日午前十時迄に東京市神田区金沢町廿八番地埼玉新報支社に到着したる分を翌日の紙上に於て披露する
一、一等より十等までを当選者と定め鮮麗なる写真版とし本紙の大付録として普く世間に紹介すべし
一、発表は本月二十一日よりとす
一、締切期限は九月廿日に限りの事

明治三十九年八月二十一日　埼玉新報

この芸妓十美人投票が多くの読者の共感を呼んだのか、個人や商店などから数多くの副賞目録が連日にわたり紙面を飾った。

副賞の一部を列記すると次の通りである。

◎寄贈品

一宝石入純金指輪　一個
右最高点当選者へ寄贈
東京市下谷区北大門十二番地
金銀美術品　野村商店

一最新流行形婦人持　懐中時計一個
右最高点者へ寄贈
川越町　実浄放任

一宝石入金指輪　一箇
右十美人当選者に抽籤を以て寄贈
川越鍛冶町　時計商　近亀商店

一ばら歯磨　三百袋
東京京橋紺屋町（電新一〇三二）
ばら歯磨本舗　東光園

一天芳楼の印付手拭
越ヶ谷町料理店　天芳

一湯呑（当選者の紋所を芸名を染付たる）
右箱入のまゝ高点者より順次以下十名へ寄贈
越ヶ谷町陶器商店　津の国屋

一女持扇子　各一等宛
当選者十名へ優美なる書を描きて呈す
浦和町　信光

一紋織友禅女帯　一筋
右当選者へ抽籤にて寄贈

大里郡熊谷町　つかや呉服店
一宝石入金指輪　一個
右五等当選者へ寄贈
大里郡熊谷町　嶋田商店時計部
一化粧用美顔水　一打
川越志儀町大塚屋　綾部薬舗
一流行武蔵野染浴衣地　一反
右当選者へ抽籤を以て寄贈
大里郡熊谷町　金井呉服店
一濱縮緬友禅帛紗　三枚
右最高当選者へ一枚と他は熊谷の高点者へ順次一枚宛寄贈
大里郡熊谷町　近江屋呉服店
一上等茶器（桐箱入）　一個
右最高点者に寄贈
川越北町　陶器卸小売　鶴川商店
一ムスク香水　一打
東京日本橋本石町四丁目（電本一四五番）
芳香薬種屋　松沢常吉
一特性桂香油（但し各箱入）　大瓶十本
右高点者より順次以下十名へ寄贈
所沢町　油半事　山路香油店
一楊柳白地絣　浴衣地　三反宛寄贈
右八等九等十等当籤者へ一反
越ヶ谷町　呉服店　ぬし市

埼玉新報では「芸妓十美人投票披露」と称し、連日のように順位が入れ替わった。そして愈よ最終日を迎えるが、十美人の写真は後日掲載とあるが残念ながら欠号である。

●目出度く終局　明治三十九年九月二十六日　埼玉新報

当選十美人の鮮麗なる写真版は、本紙の一大付録として愛読者に限り無代配布すべく。其の刷出の日及び寄贈品授与式の日取りと場所とは追て紙上に発表すべし。

素より意地を張るとの水稼業、顔の造作の善悪（よしあし）は人形屋の店頭に就て品評するがよし。利剣は右手の撥、左手に操る絃（いと）の音締めと冴えた音声とが芸者の生命。心意気が知りたくば、先づ丁髷（ちょんまげ）直して出直しなされ。三味線向ふに立つて撥捌（ばちさば）きの巧拙（こうせつ）を問うものあ



美人絵葉書は明治大正を通じ数多く発行された

らば、一歩も後へは退きませんよと、嬌嬌（きょうえん）一番、歴々顕紳（けんしん）満座の中央で啖下を切つた名妓の事は古い昔の物語りなれど、是れや之こそ芸妓中の真の芸妓とも謂（い）ふ可けれ。そこで今や社会の風潮と共に芸妓の風儀も又た著しく失墜し、滔々（とうとう）相率ひて金権の膝下に赴くもの多き中にも砂礫の中に黄金の比喩もあれば、世人の公評に待て。其の粋を抜き芸名と面影の業にも非ざる可との熱心なる読者諸氏の要求に基き十人を限りて募集せし処、以外の盛況を呈せし事は遠近各地より続々贈品を寄せられしに見るも将た。又た投票数の多きに見るも炳（あきら）かなる事実にして、喝采の中に去る二十二日予定通りに目出度く終局を告げしは、独り当選者の光栄のみならず本紙も頗る栄とする処なり。

当選者十美人の得票数、地域、屋号、芸名は左の如し。

第一位　五万九千八百五十三票　千年家　玉寿
第二位　五万三千七百八十票　若松屋　若吉
第三位　五万二千〇〇二十票　愛生屋　千代ッ平
第四位　五万〇百十七票　藤の屋　二葉
第五位　三万〇十九票　梅の家　小蔵
第六位　二万四千二百六十一票　若菜屋　玉助
第七位　一万八千四百五十七票　小川　分萬年　小僧
第八位　一万八千〇二十八票　**大沢　寿美屋　萬歳**
第九位　一万四千三百三十五票　忍　田川　光子
第十位　一万〇四百七十一票　**大沢　三桝屋　駒次**

選外の十美人以下の票数左の如し。

八千九百六十八票　熊谷　林屋　咲子
八千三百七十八票　熊谷　梅の家　君子
六千五百十九票　小川　萬年屋　吉三
五千百八十六票　深谷　梅木　藤松
三千九百三十二票　岩槻　新木村屋　寿々子
三千七百二十八票　大宮　二葉家　小糸
←
千六百三十二票　**大沢　出羽家　小霜**

以後、七票の得票までの総勢九十九名の芸妓が列記されている。

埼玉新報による芸妓十美人投票は、投票総数が四〇万票を越える膨大な数にのぼった。一人で複数の投票をした人がいたとしても新聞の購読数に大きく貢献したことは事実のようである。さらに大沢町では十美人中、二人も入っており、町の人たちが埼玉新報に注目をし、熱心に投票していたことがわかる。

参考資料＝　埼玉新報　広報こしがや　越ヶ谷案内

越谷の生んだ画家・斎藤豊作

フランスのシャトーと墓

竹村克男

斎藤豊作は、今から百三十年前の明治十三（一八八〇）年に現・越谷市相模町七丁目で生まれました。大相模尋常小学校、越ケ谷高等小学校を卒業後、東京美術学校に入学しました。同級生に、青木繁、熊谷守一、児島虎次郎などがいます。明治三十九（一九〇六）年にフランスへ渡り、有島生馬らとともに印象主義と点描画法を学びました。

帰国後、大正三（一九一四）年には二科会の創立に加わり、監査委員となり、第一回展には、自身も九点を出品しています。同年には、来日中のフランスの女流画家カミーユ・サランソンと結婚しました。

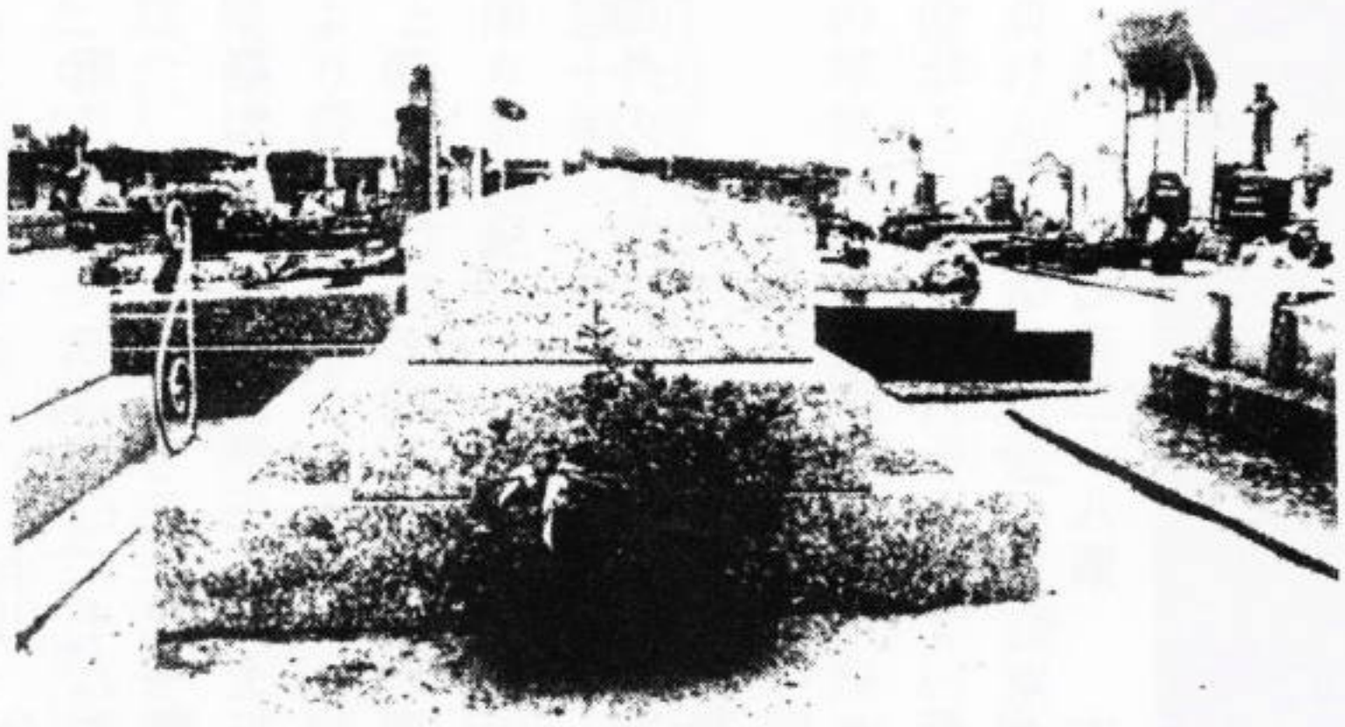
大正九（一九二〇）年に離日。フランスでは画家活動を行なうと同時に、友人の小島虎次郎が大原孫三郎に依頼されて行なっていた西洋美術のコレクションに協力し、これが倉敷大原美術館の基礎となっています。

大正十五（一九二六）年には、サルトル県のリッシュ・プランジェ村にシャトーを購入しています。ここらには児島虎次郎、岡鹿之助、有島生馬、梅原龍三郎などが訪れています。

その後、ドイツのフランス侵攻、パリ陥落、連合軍の勝利などは斎藤家の運命を大きく揺さぶり、豊作も逮捕、拘禁されたりしました。

そして、豊作は拘禁中にかかった結核のため、惜しいかな、釈放後に、亡くなってしまいました（一九五一年）。

私は同じ越谷に住んで絵を描く身として、ぜひ一度、シャトーとお墓を訪ねてみたいものだと思い立ち、井山登志夫氏の「フランスの小さなお城に住む」という著書も参考に訪問しました。今では人手に渡ってはいますが、豊作が住んでいたころと大きくは変わりないであろう、そのたたずまいの中で、彼の波乱に富む生涯を偲んだことでありました。



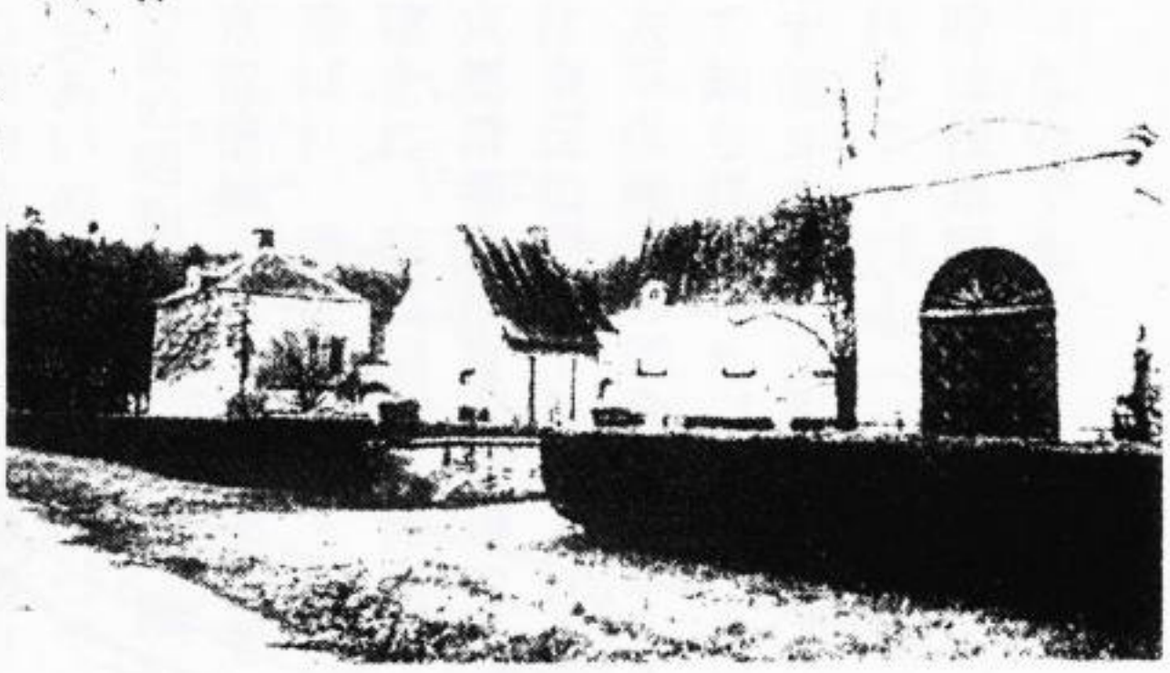
斎藤豊作夫妻の墓

平成二十一年に初めて豊作の墓を訪れ、平成二十三年十月にも再訪しました。

墓は訪れる人もあまりない様子でありましたが、雑草一本生えてなく、ひっそりと存在していました。



斎藤豊作の旧居城　水彩　竹村克男・画

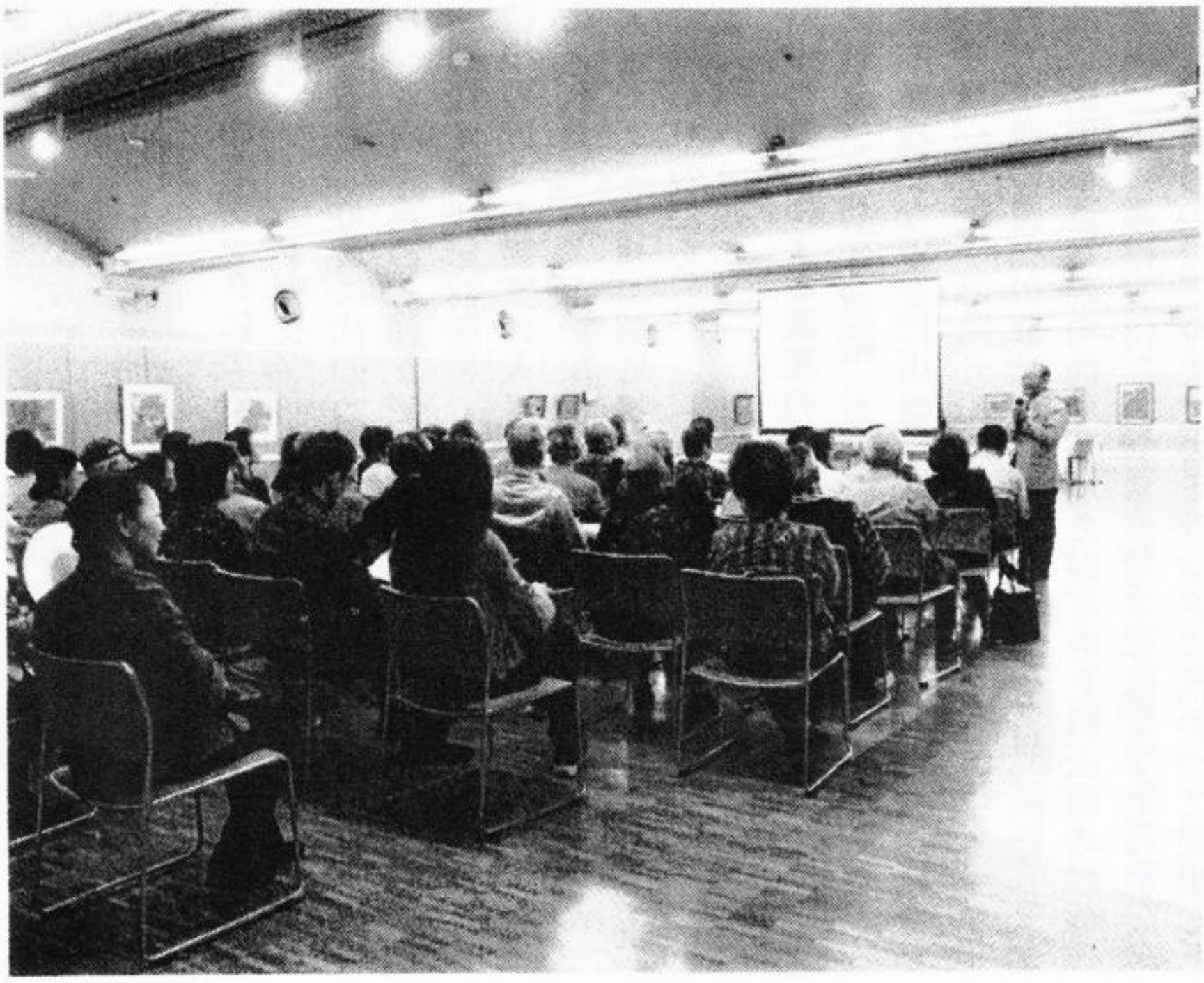


斎藤豊作の旧居城

斎藤豊作展 ギャラリートーク

お話は竹村克男氏

二〇一一年十月九日　越谷市コミセン



越谷・春日部周辺の農作物の屎尿の供給

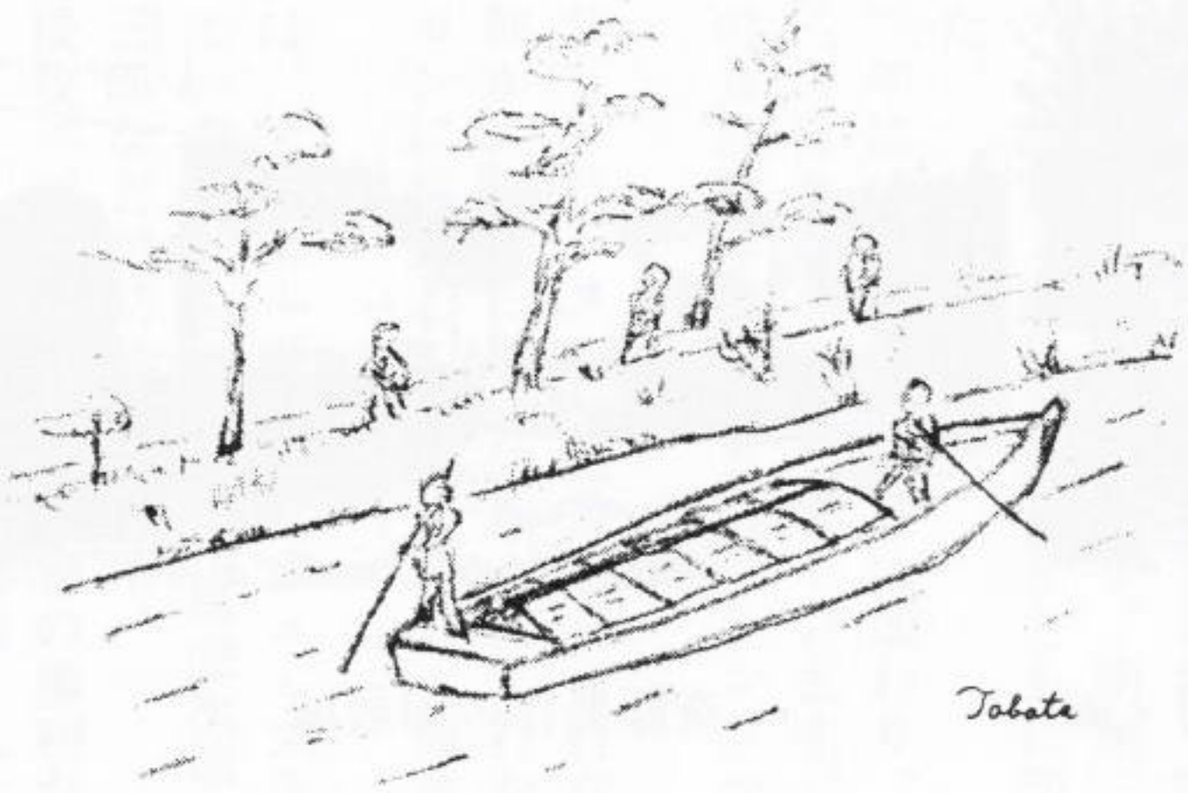
高﨑　力

一・江戸時代から戦後まで続く舟による屎尿の輸送

昔は、人の屎尿（糞尿）は都内（江戸）で集められ、舟運で運び、農家に販売し、畑の肥料として使われていた。都内で一軒一軒汲み取られた屎尿は肥桶に入れられ、肥桶を両端に掛けた天秤棒を肩でかつぎ、荷車に移し替えたりして運ばれ、汚穢舟（おわいぶね）の船底に集められた。そして、農村地帯である埼玉の地に川を上ってくるのである。

川沿いには、そのための屎尿貯留槽（肥溜め）の施設〈註1〉が見られ、そこに汚穢舟を横付けして、運ばれた屎尿を肥桶に汲んで貯留槽に入れ替えていた。また、中川の吉川橋上流から新川橋付近までの吉川側の川岸には汚穢舟が横付けになり、舟から直接屎尿を肥桶に汲んで、肥桶を天秤棒で担いだり、荷車に乗せたりして運んでいた〈註2〉。

このような舟による人肥の輸送が戦後まで見られていたのである。



二・昭和初期のトラックによる屎尿の輸送

昭和初期、フォードやシボレーの外国製のトラックが手に入るようになると、舟運に代わってトラック輸送がみられるようになった。都内で集められた肥桶をトラックに積んで埼玉の地にきて、点在する屎尿貯留槽（註3）にそれぞれ入れられた。屎尿貯留槽の近くの農家の人々が地元の区長（現在の自治会長）から手に入れたチケットで屎尿を購入しに来て、屎尿を汲んで肥桶に入れて、天秤棒で肩に担いだり、荷車に積んだりして、自宅まで運んだのである。

三・戦時中の鉄道による屎尿の輸送

太平洋戦争が進むにつれ、ガソリンが不足するなど、トラック輸送が不可能になると、トラックに代わって鉄道輸送になった。

中川でも下流の現在の草加・八潮・三郷あたりは、汚穢舟（おわいぶね）による運送が可能であったが、さらに上流の越谷・春日部方面での舟運は、長い距離を曳船として遡ることになり、遡上が困難であるので、今までのトラックに代わって登場した

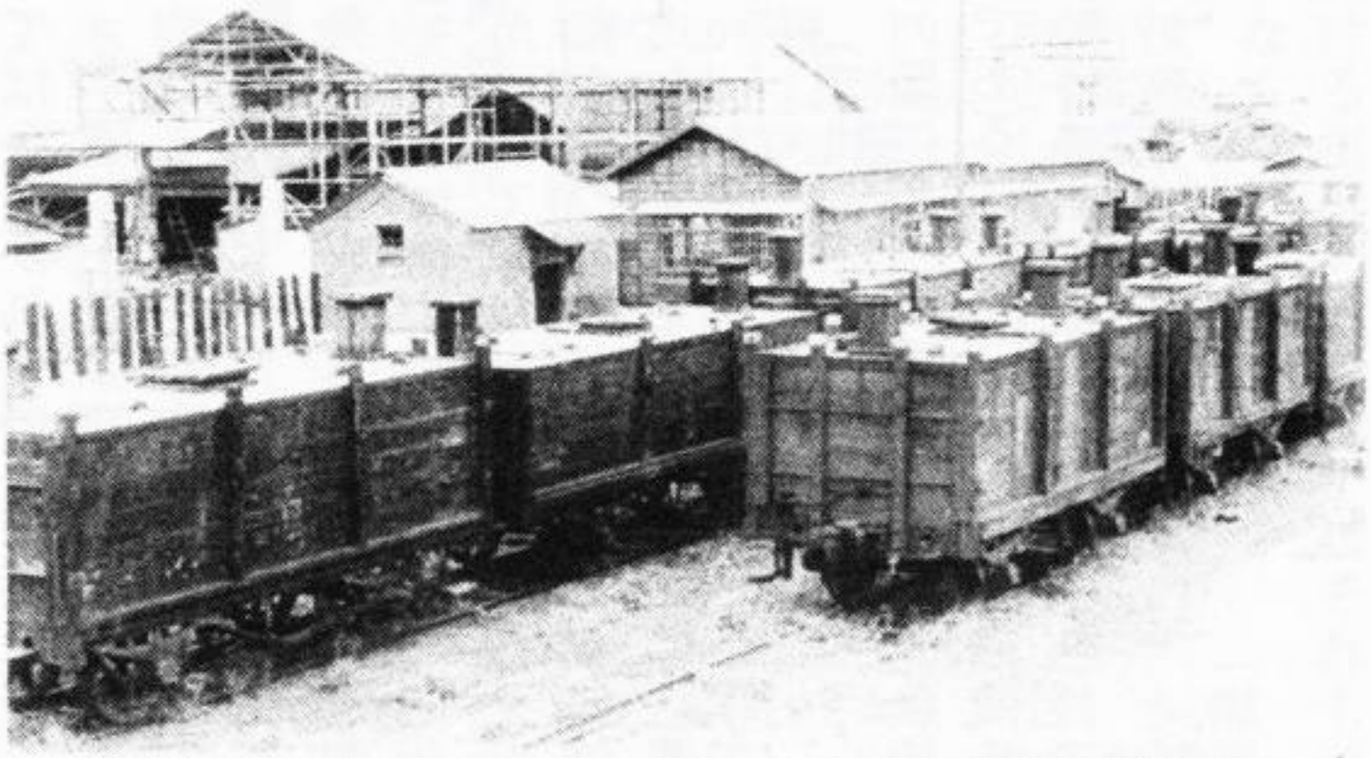
のが、鉄道による輸送であったのである。

業平橋駅（東武鉄道開通時は浅草駅と呼ばれた）は、ここに集められた砂利を落とし入れるホッパー（一時貯留し、必要に応じて下部の口を開いて出す漏斗(ろうと)状の装置）の施設があり、砂利の集散基地として知られていた。そこに屎尿の集散基地が加わったのである。太平洋戦争の昭和十六年から始められ、東京の下町の墨田区・江東区の民家で汲み上げられた屎尿は業平橋駅に集められ、東京都清掃局所有の専用の貨車（屎尿輸送用の木造タンク車）に積まれ、蒸気機関車に引かれて、北上して武里駅や七里駅まで運ばれ、現在の越谷・春日部周辺の農家や大宮周辺の農家に東京都清掃局によってそれぞれ屎尿を供給していた。この供給は戦後の昭和二十六年まで続いていた。

武里駅では、すぐ北の会之(あいの)堀(ほり)（かつての備後村の西側を流れた川の名残）に架かる現在の武里橋辺りを右折して渡って、会之(あいの)堀(ほり)に沿った地元では高道(たかみち)（土手道）と呼ばれた道を東に進み、その道の南側、会之堀の間にある細長い屎尿貯留槽に横付けして、タンク車の底からホースで屎尿が貯留槽に入れられた。その後、貯留された屎尿は地元に販売された。この貯留槽は東京都清掃局が建設したものである。現在では、この地は春日部市南部浄水場となり、新たに作られた貯水槽が設置されている。一方、西側にも同じく高道(たかみち)の南側に沿って見られた貯留槽の施設は、戦後になって東武鉄道によって設置されたものである。今は住宅地となっている。そこに横付けされる有蓋の貨車は、東京都清掃局から手に入れた東武鉄道所有のタンク車である。また、七里駅の貯留槽は、ホーム北側に少し離れて平行してあった。東京都清掃局が武里駅東側の貯留槽とともに同時期に建設したもの

1950 年代後半の業平橋駅の既に業務を終えて置き去りにされていた

屎尿輸送用木造タンク車（岡準二氏撮影、東武博物館蔵）



（「鉄道ピクトリアル」２００８年１月号臨時増刊より）

〈**註1**〉中川の汚穢舟が使われなくなってくると、昭和二十六年から数年間、汚穢舟は東京湾の浦安・行徳方面の潮干狩りに使われるようになる。参加者を募り、吉川橋のたもとを出発地にして、二十人前後が甲板に乗り、屎尿の臭いが残る甲板の上で、食事をしたり、お酒を飲んだりして中川を下り、東京湾に出た。船底が砂地に付かない程度の水位（膝上）の所で舟を止め、そこから海に入り、足で砂地をさぐりながら、アサリの潮干狩りを楽しんだ。遠方には下総台地が見られた。とれたアサリは参加者にほぼ平等に分配しておみやげとして渡され、自宅に持ち帰った。一日かけた潮干狩り旅行であった。

〈**註2**〉元荒川筋では、相模町7丁目と東越谷2丁目を結ぶ人道橋の左岸下流２００m、東越谷7丁目の土手道の河川敷側に、赤レンガの屎尿貯留槽が見られていた。

〈**註3**〉野田岩槻線の道路に南面した大仙関東支社（平方１８９８）や夢工房越谷店を含む奥行き９０メートルの長方形の敷地には、昭和初期、南北に数本の屎尿貯留槽が並んでいて、その間にトラックが入って横付けし、運んできた屎尿を貯留槽に入れていた。道路入口側には、チケットを受け取る小屋（現在の大仙あたり）があり、その道路反対側の角地には、屎尿を買いに来る客の社交の場ともなった駄菓子屋があった。

〈**註4**〉畑の主な肥料は人糞であるが、水田の主な肥料は国内産の干鰯（ほしか）や満州から入ってきた豆粕（まめかす）である。豆粕は、真ん中に小さな穴があいた円盤状に固められていた。武里駅に豆粕や干鰯が積まれた貨車が入り、貨物置場で

※東武鉄道の屎尿輸送と貯留槽

平成十七年三月二十日発行の平成十六年度特別展「肥やしのチカラ」（「葛飾区郷土と天文の博物館」）の中の四十一頁に「東郊地域にもこの黄金列車が走っていたという言い伝えがある。現在の東武伊勢崎線の線路を走って送状況に関しては一切正式な記録が見当たらず、輸送開始年さえもはっきりわからないそうだが、（略）」「また、夜間に運搬を行い、杉戸・武里・大沢（現北越谷）に貯留槽を作り、そこで積み下ろしをし、東京都の関係者が同席する形で、農協で集配し、割り当てていたそうである。」としているが、高崎氏の証言によって、東武鉄道の伊勢崎線による屎尿開始年と終了年や、貯留槽を作った駅とその貯留槽の様子がわかる、今となっては貴重な資料となる。

（加藤幸一）

※肥船の北限

東京から北方の埼玉方面へ屎尿を運ぶ肥船の北限は、綾瀬川流域では、越谷市内の蒲生の香取神社の東隣から日光街道の手前までであった「半七河岸」（左岸）、中川流域では、吉川市内の吉川（よしかわ）橋の北から新川橋あたりの新川の左岸、古利根川（ふるとねがわ）流域では、越谷市内の増森本田（ましもりほんでん）の古利根川右岸や増森新田（ましもりしんでん）の古利根川に注ぐ千間堀（せんげんぼり）の新田橋あたり、元荒川（も

とあらかわ)流域では、越谷市内の東越谷七丁目の西端あたりの左岸までで、ここまで肥船があがってきていた。（加藤幸一）

※貨物自動車での下肥の販売

増森西川の山崎治平は、明治末期から舟運での下肥の引き取りと販売業に携わってきたが、昭和十一年にフォード四トン車を購入して、舟運から自動車運送に乗り換えたという。浅草松屋裏手の今戸の地に事務所を設け、中央清掃会社を設立した。汲み取り人を四人雇入れ、集荷にあたらせた。集荷された下肥は、一台のトラックに九十樽を積み、下肥販売をした。販売先としては、江戸川区の鹿骨（ししぼね）、千葉県の松戸や柏、埼玉では、岩槻、蒲生、新方（にいがた）方面であった。売上は、月五百円程度で、純益は百円位だった。

地元に販売しなかったのは、近隣の舟運での販売業者との競合を避けないからであろう。当時は、今日の交通量とは比べものにならない程の少なさだったので、勿論渋滞はなく、一日に四往復もしたという。運転手に新田村槐戸（さいかちど、現、草加市八幡町）在住の浅井助左衛門（明治三十七年生まれ）がなった。

下肥の販路もフォード車の保管場所も遠方だったので、増森の地元の人々には知られていない話である。昭和二十年三月十日、米軍機三百機が飛来したが、この時に浅草今戸の中央清掃の事務所や自動車も焼失し、その後、廃業した。（山本泰秀）

東越谷の東福寺の樒（しきみ）

松本裕志

一　樒（梻・しきみ）

寺院の境内でよく見かける樹木の多くは、松それもほとんどが黒松で、近頃赤松は少なくなっています。

時折、槙の老樹【古木】が、寺院の名物になっていることもあるようです。槙は常緑針葉高木で葉は扁平な線形、そして雌雄異株、種子は球形で食用として、材は建材などに使われています。

松は古来中国や日本で、水墨画や紋様化されて様々な工芸品などにも描かれている、親しみやすい樹です。

そして、樒は梻とも書かれ、枝葉はよく仏前に供えられ葉や樹皮は粉にして、抹香となります。

日本の中部から南の雑木林に見られ、お寺の庭にもよくある木で、春、四月はじめ淡黄色の花をつける。果実は有毒である。

花のあと、中央にあるめしべの輪が太りはじめ、八月の頃には大きくなって、種子をもった心皮が十数個、放射状に並んで硬い艶のある緑の実となる。少しずつ黄ばんで、葉が枯れてゆくと特に美しい。心皮が朔けると種子がでる。

四季折々シキミの持つ木の香りは樟（くすのき）とは異なる寺の香りです。

「シキミという名のもとについては、実に枝がしげくつくから重実（しげみ）の意であるとか、葉の繁みからきているとか、

臭き実の意味だとかいろいろの説もあるが、実は有毒なので悪しき実から変わったものだとする貝原益軒の【大和本草】の説が一般に受け入れられている。」

「方言にはシキミ・シキビ・シキブ　枝葉を仏花にするのでハナノキ・ハナシバ・ハカノキ・ホトケシバなど、葉や樹皮を抹香にするので、マッコウノキなどの名称が各地にある。」

樒という樹もその名称は今では、忘れられた樹となっているようです。戦前・戦中派の人は第二次大戦中に、この葉や枝を折って防火用水槽に入れ、ボウフラの発生を防いでいた思い出があります。

焼香などに使用される【抹香】は、日本では特に樒で製造したもののみをいうようです。

二　東福寺の見える緑の喫茶店

東福寺と元荒川の間に嘗て、朱夏（しゅか）という喫茶店・カフェがありました。簡単には表現することが出来ない、木の床（板張り）の感触が靴を通して伝わってくるそんなお店でした。オープンドアの緑色に塗られた枠とドアノブ、店内には楕円形の大きなテーブルそして珈琲の香りと、残念ながら今は味わうことの出来ないゆったりとした時の流れがありました。

三　東福寺の樒

東福寺には、樹高約五米、下部から双樹幹周り約五十センチ、樹齢およそ２５０年の樒があります。薬師堂の右側、槙の生垣の裏にあり、東福寺代々先師尊霊の区画に、枝葉豊かに歴史を刻んでいます。

その存在はきっと東福寺の歴史とともに、私たちに何かを語ってくれるような、そんな気がしてなりません。

※抹香・線香の項目では、広辞苑の「樹皮を乾かして粉末」の説明が最もふさわしいと思われます。

輯録　項目別一覧

		牧野 日本植物図鑑	新潮 国語辞典		講談社 日本語大辞典	岩波 仏教辞典
1	科名	モクレン科	モクレン科	モクレン科	シキミ科	モクレン科
2	種類	常緑木	常緑灌木	常緑小潅木	常緑小高木	常緑小高木
3	分布 植栽	山林	暖地に自生 寺院・墓地	山地に自生 墓地	山林 墓地	—
4	樹高	３～５ メートル	約 ３メートル	約 ３メートル	約 ３メートル	—
5	花色	淡黄色	—	黄白色	黄白色	—
6	果実色	—	—	—	—	—
7	果実 毒性	有毒植物	果実は有毒	実は甘いが 猛毒	果実は有毒	—
8	抹香 線香	葉から抹香	樹皮と葉は 抹香	樹皮を乾かして粉末	葉から抹香	葉と樹皮を 粉にして
9	シキビ	—	シキビ	シキビ コウノキ	シキビ ハナノキ	—
10	その他	枝を墓に 供える	全体に香気	全体に香気 材・器具用	全体に香気	仏前に供える木　(櫁)

葛西用水に架かる平和橋（旧称・瓦曽根橋）

高﨑　力

現在、市役所そばには葛西用水に架かる平和橋がある。これよりも下流に架かっていたものをここに移したのである。もとあった平和橋の場所は、現在の藤田医院と吉田酒店の中間にある瓦曽根一丁目バス停のところである。本来は、江戸時代より瓦曽根橋と呼ばれていた土橋であったが、戦後、平和橋と名称を変更したのである。

一　江戸時代の瓦曽根橋

鳥文斎細田栄之の『瓦曽根溜井図』に江戸時代当時の瓦曽根橋が出ている。当然土橋である。対岸は小林村の会田家（現在の東越谷二―二―三）につながる。

二　戦前の瓦曽根橋

江戸時代から藤田医院そばのこの地点に土橋が架かっていたが、戦前は木製の橋で、昭和十五年九月に橋の途中で橋げたが腐り、陥没してしまった。

昭和六十二年十二月一日発行の「広報こしがや」の中の『こしがやふるさと話・橋の巻・平和橋編』によると、次のとおりである。

（東越谷二丁目の会田礼子氏によると）（戦前に）瓦曽根橋と呼ばれた木橋があったんです。古い橋で、私が子供の頃からありました。欄干がなくて幅の狭い橋でしたから、風の強い日なんかは真ん中を歩いたんです。越ケ谷町に市（いち）がたつときなんかは祖母に手を引かれて（対岸に）よく渡って行ったのを覚えています。昔は川の水がきれいだったので、よく泳ぎました。疲れると橋げたにつかまって休んだんです。お転婆だったんですね。」

（東越谷一丁目の山口清氏によると）「戦争の前だったと思いますが、九月に行われる越ケ谷のお祭りに行ったんですが、次の朝、見てみると橋が落っこっちゃっているんです。渡っているとき落ちなくてよかったと、みんなで話したんですよ。」

三　瓦曽根橋の修理

山本泰秀氏の戦前の瓦曽根橋の修理について紹介する。

昭和十五年九月に落ちた橋を翌年の三月の終わり頃に修理が行われている。当時の増林村の村長は、山崎孫八であった。その指揮のもと、橋の修理が始まった。

建設業の元締めに大吉の田川郡二郎という人物がいた。彼は増林村に隣接した新方橋の袂で代々受け継がれてきた材木商を営み、一方で土木建設にも大いに携わっていたことから、この橋の修理を請け負った人物は、当然、田川郡二郎だと思われる。

現場作業員の大工は、大松屋（増林の前波）の岡安常次郎とその弟子の中島三津蔵（増林の中組・大正十年十月二十七日生れ）で、鳶には、栗原新蔵（増林の二子曽根）の他、四～五人

があたっていた。

橋の修理には、まず丸太の取替えをおこなった。杉の丸太を並べ、その上に杉皮三枚程を載せて、押さえに竹を二つ割したのを使用した。さらに、その上に土を載せ、砂利を敷いたものであった。欄干は無く、橋の両端を丸太にしその丸太にドリルで穴をあけ、ボルトで締めた。いたって簡単な作りであった。鳶職は、よいとまけでなく、橋げたの修理に発動機を使って、ウインチで地固めの作業をおこなった。こうして修理を終えたのである。

四　戦後の名称変更後の平和橋

昭和十六年三月に瓦曽根橋の修理がおこなわれたが、いつの頃からかまた朽ち落ちて、戦争中は何も架かっていなかった。『橋の巻・平和橋編』によると、次のとおりである。

（東越谷一丁目の鈴木知亥氏によると）「旧・平和橋は戦後にできたんです。戦前にも木橋が架かっていたんですが、老朽化して落ちてしまったんです。ですから、橋の全くない時代があったんですね。それは不便でした。」

昭和二十四年、戦後になってようやく欄干のない木製の橋、瓦曽根橋が再建される。その名称を「平和橋」と改称される。そのときのいきさつを次に紹介する。

（鈴木知亥氏によると）「（戦後の）平和な時代になり、新しく橋もできたので、みんな喜びました。そこで橋の名も『平和橋』としたんです。」そして、その当時の橋の様子は、

「（旧・平和橋は、）場所は今の橋（現在の市役所そば）よりちょっと下流です。瓦曽根の藤田医院の前に、その名残である出っ張り（今も、瓦曽根一丁目バス停の所に名残がある）と木

五　現在地に移転してきた平和橋

瓦曽根溜井（葛西用水）の藤田医院近くにあった平和橋の架け替えということで、上流の方に離れてはいるものの、同じ水路（葛西用水、瓦曽根溜井）に架かる橋であったために、旧・平和橋の名前を現在の橋に残したのである。昭和四十一年の秋に着工して、昭和四十二年の夏に完成している。

六　新平和橋の着工

元荒川に架かる新平和橋の方の橋は昭和四十年に着工し、昭和四十一年五月に完成した。

元荒川に架かるので平和橋とは言えないが、葛西用水に架かる平和橋に対して元荒川に架かる新たな平和橋の新設という意味で、藤田医院そばに架かる旧・平和橋の上流での再建に先駆けて、新平和橋の建設に取り掛かるのである。

小林側から瓦曽根方面を見る欄干が付いた旧「平和橋」

（欄干のない土橋に昭和３４年１２月に欄干を付ける。）



ご存じですか、絶滅の危惧から蘇った『コシガヤホシクサ』を

コシガヤホシクサは、ホシクサ科の一年草で、ため池・岸辺や河原、水中でも生育し、八～九月に茎を伸ばし、白い星型の小さな花をつける植物です。

昭和十三年（一九三八）東京大学植物学教室の前川文夫博士が越谷町の元荒川付近で発見し、昭和十四年に佐竹義輔博士が新種として発表しました。この時、発見地にちなんで『コシガヤホシクサ』と命名されましたが、その後、越谷市周辺では見られなくなり、地球上から絶滅したと考えられていました。

茨城県下妻市の砂沼で、昭和五十年（一九七五）に再発見されましたが、平成六年（一九九四）に絶滅し、環境省の維管束植物のレッドリストに野生絶滅として指定されています。

越谷市では、国立科学博物館筑波実験植物園が行うコシガヤホシクサの野生復帰プロジェクト（環境省のモデル事業）に協力し、コシガヤホシクサ発祥の地、越谷での野生復帰を目指して取り組みを進めています。

まずは、種の保存のため、種子を確保することを目的に、この四月に筑波実験植物園から五千粒の種を譲り受け、市農業技術センターで水位を調整しながら水温に気を付けて育てた結果、約四六〇株が発芽し、花を付けました。

この絶滅の危惧から見事に蘇ったコシガヤホシクサを広く市民に知ってもらおうと、越谷市アリタキ植物園に平成二十三年九月十六日から十月十六日まで特別展示されました。（増岡）

越谷星（こしがやぼし）

増岡武司

夜空には実に多くの星がきらめいています。その中に「越谷星（こしがやぼし）」と名前のついている星があることをご存知でしょうか。

一　小惑星「越谷星」命名の経緯

越谷市では、この小惑星の名前について広く市民に呼び掛け公募したところ、市内小中学校の児童生徒や一般市民から一、三六七名の方々から八三二種類の応募があり、市制施行五十年記念事業推進市民委員会を中心に審査を行い、種々検討の結果、星の名前を「越谷星」と決めました。ちなみに「越谷星」という名前を提案したのは、十一名の子どもたちです。

この「越谷星」という名前が付けられた小惑星は、発見者の渡辺さんが国際天文学連合に申請していただき、同連合の小天体命名委員会による審査を経て正式に登録されました。

二　小惑星「越谷星」命名の発表

平成二十年（二〇〇八）十一月三日、市立総合体育館で行われた市制施行五十周年記念式典にて、小惑星を発見した天文家の渡辺和郎（わたなべ・かずお）さんから越谷市へ「越谷星」命名の額が授与され、記念して付けさせていただけることになりました。

その小惑星の名前を、越谷市が市制五十周年を迎えることを

この星は、札幌市在住の渡辺和郎（わたなべ・かずお）さんと円館金（えんだて・きん）さんが平成八年（一九九六）二月十一日に共同で発見したものです。

そのいきさつは、財団法人・日本宇宙フォーラムの寺門邦次（てらかど・くにつぐ）さんが、以前、札幌市在住の渡辺さんの発見した小惑星に、越谷市在住のシンセサイザー奏者キム・シンさんの名前を付けたことがあり、今回の市制施行五十周年の記念にと、寺門さんが渡辺さんと越谷市との間を取り持って下さり、実現したものです。

三　小惑星「越谷星」について

この小惑星「越谷星」（ＫＯＳＨＩＧＡＹＡＢＯＳＨＩ）は、太陽の周りを廻り、推定直径は十二～十五キロメートルの大きさと考えられています。最近発見された小惑星は、数百メートル程ですから、「越谷星」は大きな星と思われます。

これを機会に夜空の星に思いを深めるのもよいでしょう。

四　小惑星の命名について

財団法人日本宇宙フォーラムによると、小惑星には、発見者或いは発見に最も貢献した観測者（機関を含む）が命名できる権利を有しており、現在では天体の中で唯一発見者に命名提案権が与えられています。

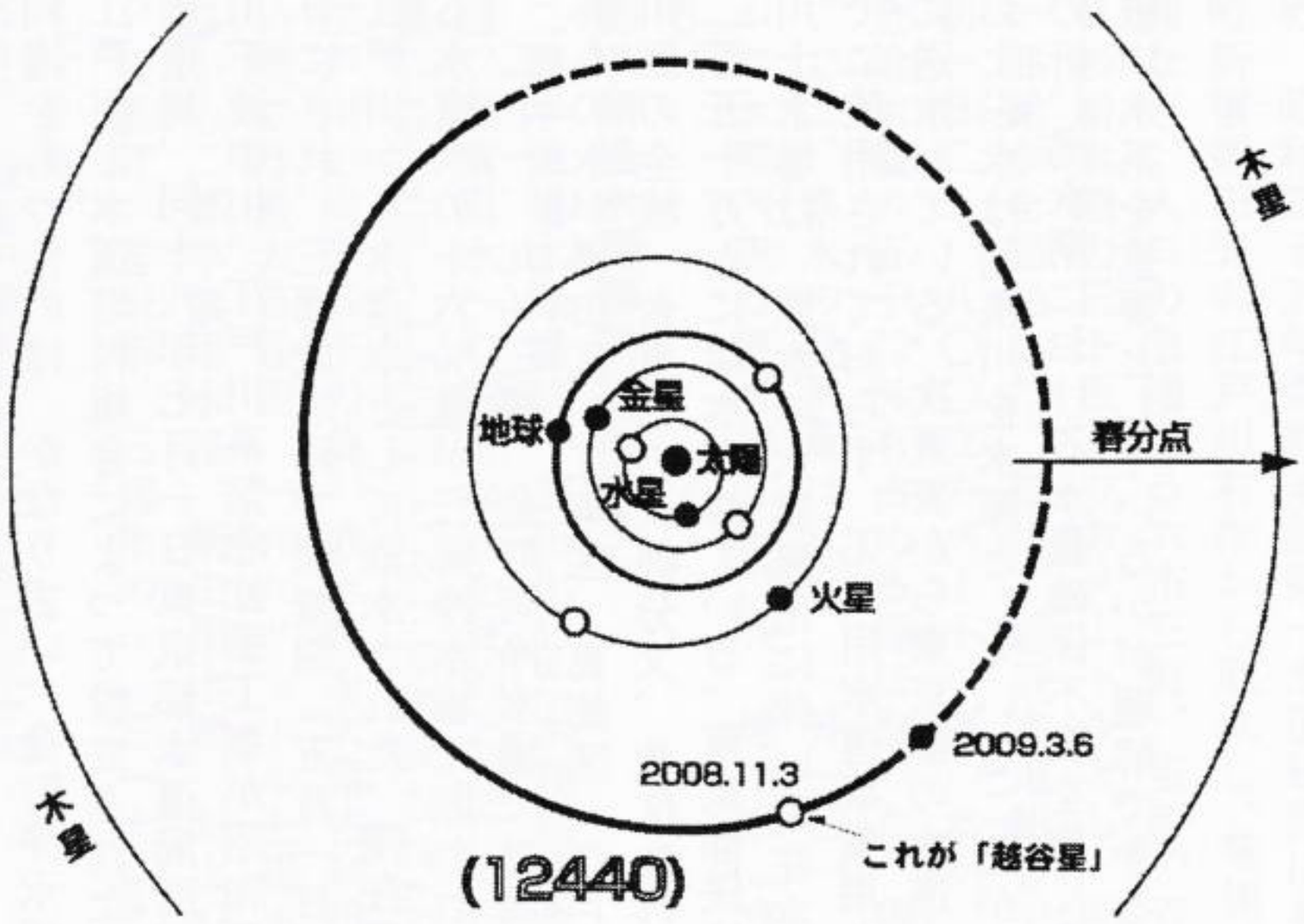
まず、新天体と思われる天体を二夜以上にわたって位置観測し、その観測結果が小惑星センターに報告されると、発見順に仮符号が与えられます。

仮符号を付けられた天体は、既知の天体との軌道の固定作業が行われます。最終的に軌道が確定して新天体だと確認されると、小惑星番号が与えられます。発見者は小惑星番号付与後十年間命名できる特権が与えられます。

発見者によって提案された上で命名されます。発見者は小惑星の小天体命名委員会によって審査されます。

命名候補案は左記のガイドラインに従って作成する必要があります。

・十六文字以内（ローマ字）
・出来れば一ワード
・発音可能なもの
・公序良俗に反しない事件や人物の名前は没後百年以上経過し、評価が定まってからでないと付けられません。
・政治・軍事に関連すること
・ペットの名前は好ましくない。
・命名権の売買は禁止されています。



本文作成に関しては、主に越谷市広報広聴課のご協力をいただきましたことに感謝いたします。

越谷市内の逆川の水量減少

山本泰秀

越谷を流れる逆川の取水制限は平成十五年から行われるようになり、水量が減った。

それは、東京都に水道水として水の供給を増加したことと深く関係している。江戸川の水は、東京都の水道水として金町浄水場で古くから取水されていた。最近では、埼玉県も金町浄水場の上流にある庄和浄水場で江戸川の水を取水して水道水としている。埼玉県側での庄和浄水場の使用水量の頻度が増すにつれて、金町浄水場の取水が減少した。その為江戸川からの二郷半領の水田用水の取水を取りやめて、古利根川から取水し始めた。その為、逆川の水量が減ったのである。野田橋上流二百五十メートル先の金杉にある江戸川揚水機場、玉葉橋下流二百五十メートル先の深井新田のニケ所地点の江戸川から取水した水は、二郷半領周辺、松伏町、吉川市、三郷市の水田を潤していた。しかし、江戸川からの取水を取りやめ、松伏町松伏と大川戸境界地点の二郷半揚水機場での古利根川取水に切り替えたのである。当然、古利根川の水量減少が起き、ひいては逆川の水量減少がおきてきた。そこで、増林の水田耕作者は水をさらに大切にせざるを得なくなり、田圃の水の垂れ流しを規制し、さらに、田圃の落ち口に止水弁を設け取水制限を始めた。逆川の水量減少は免れない事実となった、昔、豊富に使用できた水を考えながら使うことになった。

次に、浄水場について述べたいと思う。東京都が江戸川の水利権をもったのは、かなり古い。金町浄水場は大正十五年に江戸川上水道町村組合によって設立された。昭和七年東京市水道局、同十八年七月一日東京都水道局所管となる。古利根川下流中川、江戸川系緊急拡張工事が昭和三十九年六月十五日にされ、三郷放水路で灌漑期（五月一日～九月三十日）に江戸川から水道水として取水された。現在東京都で使用される水道水の十六％量が三郷浄水場で賄われ、金町浄水場では合わせて三十七・九％もの水が墨田区、江東区、葛飾区、江戸川区、足立区、荒川区の全域、台東区の大部分又、北区及び中央区の一部、約二百五十万人に給水されている。東京都民に馴染みの深い玉川上水場は、原水の水質悪化に伴い現在水道水としては、すでに使用されておらず、工業用水道事業用として三園浄水場に送水している。次頁表から東京都の水道水の約八十％におよぶ水は利根川を水源としていることが分かる。異状気象の折、渇水期における水量確保不安を抱く東京都がいかに利根川水系を重要としているかが理解できる。

東京都水道局の浄水場一覧　　平成19年10月18日現在

水系	浄水場名	施設能(㎥/日)	比率(%)　浄水場別	水系別
利根川	金町	1,500,000	21.9	
	三郷	1,100,000	16.0	
	朝霞	1,700,000	24.8	
	三園	300,000	4.4	79.9
	東村山	880,000	12.8	
多摩川		385,000	5.6	
	小作	280,000	4.1	
	境	315,000	4.6	
	砧	114,500	1.7	17.0
	砧下	70,000	1.0	
	玉川	(15,2500)	--	
相模川	長沢	200,000	2.9	2.9
地下水	杉並	15,000	0.2	0.2
	計	6,859,500	100.0	100.0

庄和浄水場

埼玉県東部地域の水源を地下水から河川水利用に切り換えるため、昭和四十五年県営東部第一水道建設に着工、北葛飾郡庄和町新宿新田先の江戸川右岸から取水し、草加、越谷、春日部、岩槻など、人口の急増する六市三町、当時で百十万人を対象に一日の給水能力三十五万立方メートルとし、昭和四十九年四月に一部給水を開始した。松伏、越谷水道組合で県水の受給量は当初一日二二、八〇〇立方メートルだったが、昭和五十年度には全給水量の五十二%も占める様になった。現在（平成十九年度）では、県水の受水量は凡そ、一日一〇一、〇〇〇立方メートルで水源内訳は県水約九十二%、地下水（自己水）約八%である。

二郷半領揚水機場掲示板より

二郷半領揚水機場は、老巧化した水利施設改修、用水系統の再編、農業用水への転用などを目的とした「利根中央農業水利事業」（平成四～十五年）によって移設されたものです。

江戸川の河床低下の為、取水源を大落古利根川に変更、かんがい期には最大毎秒四、一九九リットルを揚水し、二郷半領用水路、新田用水路、および各支線水路を経て、松伏町、吉川市、三郷市の一、三一七haの農地をかんがいしている。

＊葛西羽生領島中領用水路土地改良区連合＊

「参考文献」金町浄水場概要　東京都水道局

聞社　こしまつ水道2009　越谷松伏水道企業団

平成二十一年十一月十八日　埼玉大百科事典　埼玉新

いぼ稲荷の木

谷岡隆夫

「いぼ稲荷」は宮本町二丁目の宮子通りと四丁野通りの交差する北西角にあります。鬱蒼たる森の中で、人目に触れなかったいぼ稲荷は近年、前の県道が拡張され、見通しが良くなり、通行人の方々からその存在が知られるようになりました。

創建は不明ですが、文化三年（一八〇六）の日光道中分間延絵図にこの稲荷が記載されていますので、古い稲荷に違いありません。

いぼ稲荷は敷地一七一平方米、氏子二四名の共有地です。昭和五十八年に本殿が改築されました。本殿の広さは一間半四方で、大きさは改築前と同じです。ご神体や神仏は残っていません。残念ですが本殿の中には古い

隣地の弘誓寺（ぐぜいじ）は瓦曽根の照蓮院の末寺で、明治四年廃寺となり、現在は墓地となっています。当時二反八畝あったと伝えられていますが、いぼ稲荷と弘誓寺と合算した広さではないかと思います。ここは高台になっていたため東武鉄道が開通する際、線路の盛り土として供出しました。跡は蓮田となり、その後宅地化されました。

この地の四丁野村は、押切組（おっきりくみ）御縄先組（おなさきくみ）野尻組（のじりくみ）に分かれていて、この中の御縄先組の方々がこの稲荷を守ってこられました。現在は大野

四丁野村絵図



日光道中分間延絵図（１８０６年）

一郎氏（宮本町二の九三）が氏子代表となり、二十五名にて維持されています。毎年初午の日は当番がお世話をします。

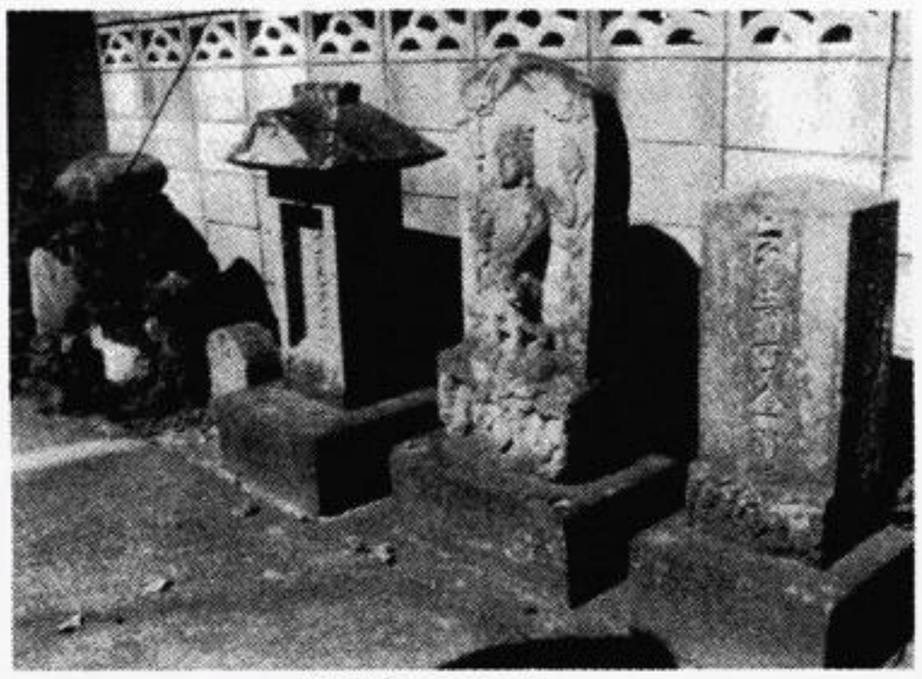
当番は八人で三年毎に回ってきます。当番はお供え金の回収、お堂と境内の掃除、幟建て、御幣の手配（久伊豆神社へ依頼）祝賀会準備など多忙です。幟は平成十八年に新調され「正一位疣稲荷大明神」と大きく書かれています。

初午の祝賀会は隣地の十王堂集会所で毎年、午後三時から赤飯、刺身、油揚げと豆腐と葱の汁が定番で、氏子が参加します。

このいぼ稲荷では旧暦九月九日にクンチでおこもりの行事があり、子供たちが夜遅くまでお菓子を食べながら騒ぎました。「境内が狭いので近所の薬師堂で泊まり、次の日はお供えの赤飯を弁当につめて出羽小学校へ登校しました」と氏子の永井一男氏（宮本町二の一五二）のお話です。おこもりは子供たちの遊びが国内の一部で不健全とされ、ここは昭和三十七年、廃止されました。



初午の風景

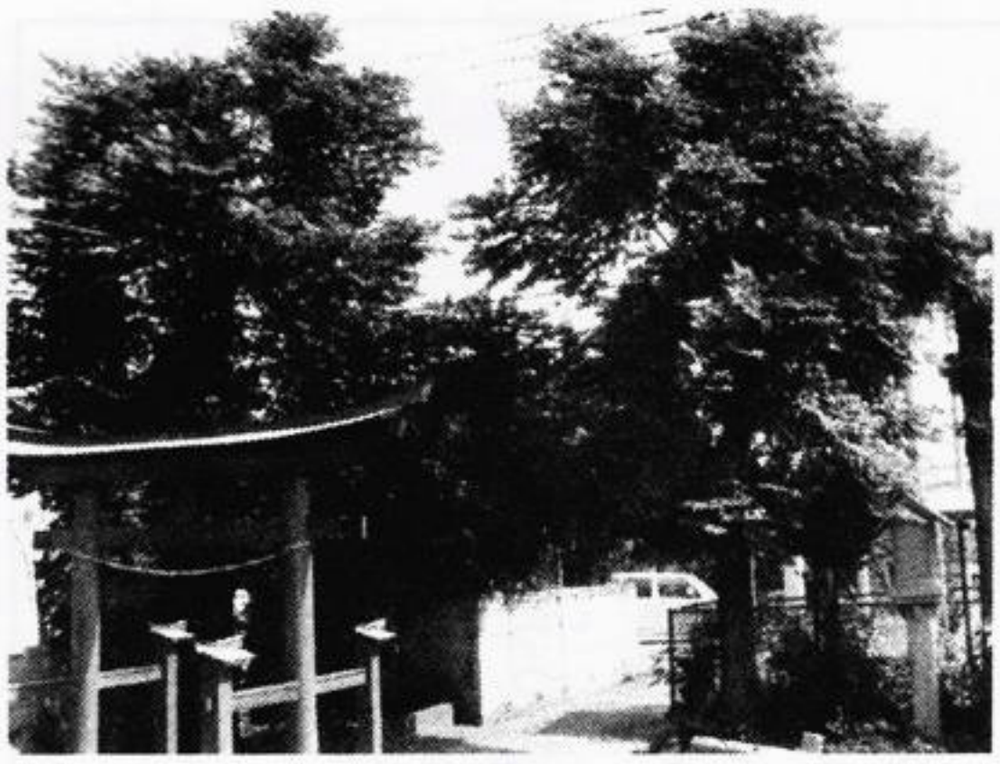


参道の石仏

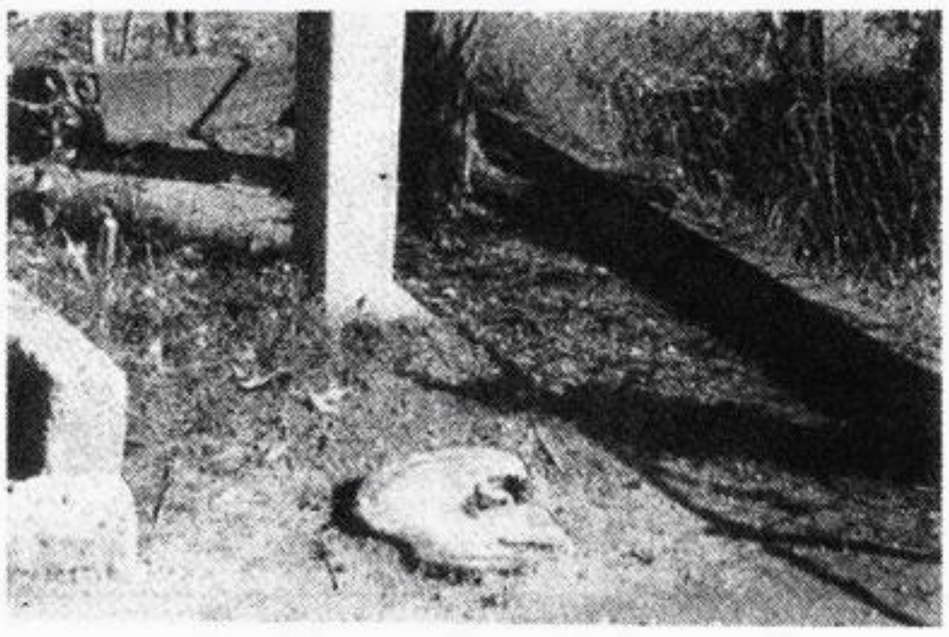
参道に三基の石仏が並んでいます。寛政六年（一七九四）の文字庚申塔、天明四年（一七八四）の青面金剛像庚申塔、天保十一年（一八四〇）の牛頭天王文字塔があり、当会加藤幸一副会長の石仏調査によって解読されています。

現在、いぼ稲荷の木は二本、参道の左右にあります。昔、いぼに悩んだひとが、いぼ稲荷の木の表皮をなでていぼの患部にさすると不思議に治った人が多く、何時しかいぼ稲荷と称されるようになりました。治った人はお礼参りに油揚げを供えます。

このいぼ稲荷の木は、ご神木の梅檀（せんだん）です。今の梅檀の木は二代目です。本殿に向かい左側に先代の梅檀の木がありましたが枯れてしまいました。現在切り株が残っています。昭和五十八年本殿改築の際、故利根川栄一氏（宮本町二の一二三）が先代の梅檀が枯れてしまったので安行の業者から同種の梅檀を取り寄せました。



左右２本のいぼ稲荷の木



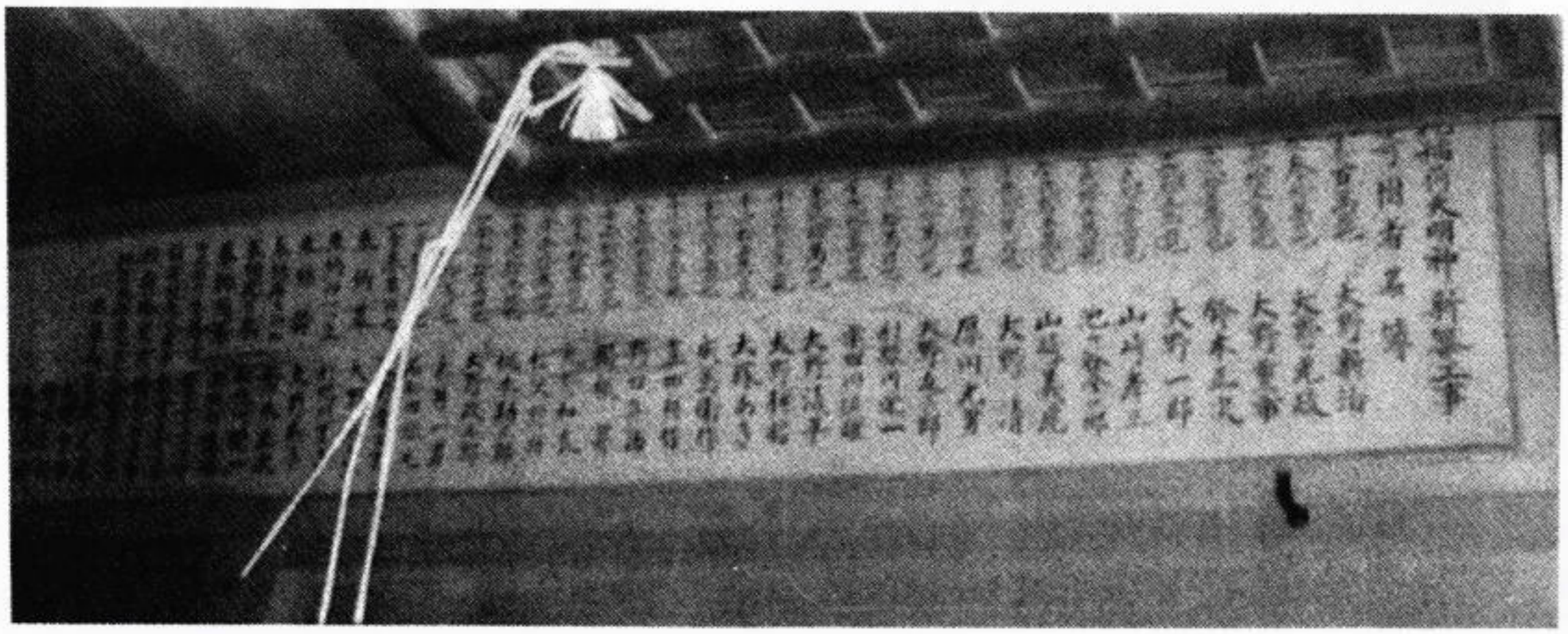
先代のいぼ稲荷の木（梅檀）の切り株

本殿内にある改築時の奉納額（下記写真）にいぼ稲荷の木の奉納が記載されています。

梅檀の木の表皮は松の表皮と似てゴツゴツとしています。樹皮は漢方薬の香りがします。五月頃、紫色の花が咲き、十月に小さい多くの実がなります。ご神木が橙（ダイダイ）との説がありますが、先代の梅檀の更に以前、橙の木が枯れて梅檀に変わったのでしょうか。

いぼ神様のご神木が梅檀なのは全国でここだけです。筆者が生前の利根川氏にお会いした折、「梅檀二本をいぼ稲荷の左右に、一本を宮本小学校の校庭へ地域の結びつきを深める目的で寄贈しました」とお聞きしました。現在も宮本小学校の校庭の梅檀の木に「地元利根川栄一氏、昭和五十八年寄贈。いぼ稲荷修復植樹の際、宮本小へも記念植樹」と表示されています。

「梅檀は双葉より芳し」とのことわざがありますが、若い双葉を取り入れた宮本小学校の校章と思い合わせると、いつまでもいぼの木が成長してくれるのを願っています。



埼玉県内の鉄道唱歌（石原和三郎作）

一．その名も広き武蔵の
　北部を占むるや埼玉や
県下の旅行を試みん
　親しき友とうちつれて

四六、越ケ谷・大沢・粕壁や
　下れば町に中学校
岩槻町に来てみれば
　郡役所あり城跡あり

五五、さてその地図をくりかえし
　思うは地方の文明に
富を進めて君のため
　国をつくさん誠心ぞ

以上は、明治三十三年、東京高等師範学校教師石原和三郎氏による詩の一部である。

昭和六十二年二月二十二日
第八十七回　研究発表会（越谷市郷土研究主催）
「草創期の鉄道あれこれ」（小島誠）より

特集・越谷市内に残る歌　その1

越谷市内の消えゆく歌

高﨑　力

越谷市は、かつては農家が大部分を占めていて、田植え歌、麦打ち歌、祝儀歌、祭り歌、そして童（わらべ）歌から各種の念仏など数多くの歌が歌い継がれていたが、急速な都市化と共に忘れ去られてきた。

次の歌は、下問久里の田植え歌である。

「ヤレ　十七ヨ　今年初めて　田植えた　しかも　しかも
　この田はヨ　よくできたヨ
ア　ウエテシャレ　ウエテシャレ
ヤレ　丈がナ　丈が一丈で　穂が五尺　こいて　こなして
　実が五石ヨ
ア　ウエテシャレ　ウエテシャレ
ヤレ　こいてナ　こいてこなして　実が五石　桝は
　桝はいらなで　箕ではかるヨ
ア　ウエテシャレ　ウエテシャレ」

「ウエテシャレ」は「植えてさがれ」の訛ったものであるが、農民の豊作を願う気持ちが即興的に表現されている代表的田植え歌である。

次に、婚礼に招待された時の大相模の祝儀歌から一部の歌詞をあげてみよう。

「これ様へ　お招（よ）ばれ申して　かくのお座敷あげられて　格式は存じませぬが　手落ちがあったらごめんなさい
　今日　お祝い　おめでたい
これ様の　お嫁ご様の　お座る姿を見もうせば　髪かたち
　ご器量のよいこと
おふた親様はお手柄よ　今日　お祝い　おめでたい
これ様の　お玄関先に　梅の大木　植えおいて
　西の枝にウグイス止まらせ
この家繁昌と舞い遊ぶ　今日　お祝い　おめでたい
これ様の　お嫁ご様の　上に召したる　お小袖は
　田舎染めか　京染めか
今日お座敷照り光る　今日　お祝い　おめでたい
これ様の　お嫁ご様の　上に召したる　お小袖は
　裾模様に　松竹梅
五ツの数が　鶴と亀　今日　お祝い　おめでたい
今日の　お盃は　おこしもとへ納まる　きにせんの山を飾る　山に俵を積み重ね
雌蝶（めちょう）雄蝶（おちょう）の小口（こぐち）を揃えて　千秋楽と納むる」

歌とは性格を異にするが、お年寄たちによって歌われる念仏も数多くある。新築に招かれた時の家見（いえみ）念仏（地元で「ユミネンブツ」と呼ぶ）、法事に招かれた時の法事念仏、そして通夜念仏、死払（しばらい）念仏、枕念仏から新盆（地元では「ミボン」と呼ぶ）のお棚念仏、更に旧暦三月十日の榛名お姫念仏といろいろある。

※以上は、昭和49年4月15日「広報こしがや」の『市史編さんだより【第134号】』（高崎力著）より抜粋

参考までに、地蔵念仏の文言を紹介する（加藤幸一氏調べ）。

きみよちょうらい　おじぞさま　さんがいみすじに　おたちある
なにがしょがんで　おたちある　なにもしょがんはないけれど
あまりこの世が　じゃけんさに　ねんぶつすすめに　おたちある
なむあみだぶつ　なむあみだ　なむあみだ
きみよちょうらい　しもづけの　ゆわふねさんと　もうせしが
むぶつせかいの　だいどうじ　まいざか　うらざか　みせんざか
のぼりておがめば　じぞうそん　水もないのに　ふねうかぶ
ふねはしろがね　ろはこがね　はしらはきんぎん　まきばしら
あやゝにしきの　ほをあげて　きんらんどんすの　まくをはり
あまたのぼさつが　みなおのり　せいしぼさつが　かじのやく
じぞうぼさつが　さおさして　にしい　にしいと　こぎゆけば
にしはさいぼう　みだによらい　ごくらくじょうどのいちのもん
ぜにでも金でも　あからない　ねんぶつろくじで　さらとあく
あけておくのま　はいすれば　一にこうろう　二におはな
三にしきびの　おりいだを　そないてねんぶつ　とないれば
十二ぶつの　みかげさす　あーありがたや　じぞうそん
なむあみだぶつ　なむあみだ

1行目　きみよちょうらい→帰命頂礼、おじぞさま→お地蔵様
　　さんがいみすじに→三界三筋に
2行目　しょがん→諸願
5行目　しもづけの　ゆわふねさん→下野の岩船山
8行目　まきばしら→真木柱
11行目　にしい　にしいと→西へ西へと
12行目　さいぼう→西方
13行目　ねんぶつろくじで→念仏六字で
14行目　おくのま→奥の間
15行目　おりいだを→折り枝を
16行目　みかげさす→御影差す

※大松八二（永野工務店）の明治四十一年八月生まれの永野ふじさん（岡安家本家からの嫁）のメモ書きを、原文のままで掲載した。

越谷生まれの江戸町人の活躍

千住の名倉骨つぎ（創業二四一年）

「江戸の骨つぎ」で有名な名倉氏は、武士を捨て「名倉」と称して越谷市の大泊地域の開発農民となり、その後、名倉家本家は江戸時代に北千住に転居して接骨医を開業した。

日本橋千疋屋（創業一七七年）

千疋村（現・越谷市東町）出身の幕末の武士であった大島弁蔵は、槍術の名人として道場を開いていたと伝わる。彼は地元の果実を江戸で直売するという商売に先見の明をもっていち早く取り組み、日本橋千疋屋の基礎を作った。

藤波小道具（創業一三九年）

与兵衛は、幕末に千疋村の小さな農家に生まれ、後に浅草の芝居小屋に行き、そこでお茶売りをして貯めてきた小銭で、歌舞伎道具を買い集め、今日の「藤波小道具（株）」の基礎を作った。

（髙﨑　力）

特集・越谷市内に残る歌　その2

越谷のわらべ歌（大沢町）

岩瀬静江

戦前・戦後の越谷市内の大沢町にかつて見られた「わらべ歌」などを紹介します。

《まりつき》

1．東武線　手まり歌

1番　こしがや（越ケ谷）　がもう（蒲生）
　　しんでん（新田）　そうかつか（草加）
　　やつか（谷塚）　たけのづか（竹ノ塚）
　　にしあらい（西新井）　うめじま（梅島）
　　ごたんの（五反野）
　　お次は　きたせんじゅ（北千住）
　　なかせんじゅ（中千住）
2番　うしだ（牛田）　ほりきり（堀切）
　　かねがふち（鐘ヶ淵）　たまのい（玉の井）
　　ひきふね（曳舟）　うけぢ（請地）
　　なりひらばし（業平橋）
　　すみだこえん（隅田公園）　お次は
　　あさくさかみなりもん（浅草雷門）

※「中千住駅」「請地駅」「隅田公園駅」は、今はありません。「玉の井駅」は東向島駅、「浅草雷門駅」は浅草駅と改称しています。「公園」は「こえん」と歌っていました。

2．「あんたがた　どこさ」

あんたがた　どこさ
肥後さ
肥後　どこさ
熊本さ
熊本　どこさ
せんばさ
せんば山には狸がおってさ
それを猟師が鉄砲で撃ってさ
煮てさ　焼いてさ　食ってさ
それを木（こ）の葉でちょいと隠せ

※「せんば山」とは、城下町熊本市内にあった「洗馬山」を指すとされています。

※最後の「ちょいと隠せ」では、毬を両脚の間から後方へスカートの中へ瞬時にくぐらせ、後ろ手でスカートの上からその毬を落とさないように押さえます。幼い子や難しい子はスカートの前で押さえます。

3．「いちで　たちばな」

一（いち）で橘　二（に）にカキツバタ

三（さん）で桜・藤　四（し）し獅子・牡丹
五つ　イロハは　六つ　紫
七つ　菜の花　八つ　八重桜
九つ　小梅は　色よく染まり
十（とお）で、殿様　お馬に乗ろおか
　お駕籠に乗ろおか　おもかしょ　一ちょうよ
※「四（し）は」とするところを、大沢町では「四（し）し」と歌っていました。
※「おもかしょ」は、「重い」の意味かと思います。

4.「しなのまちの　しなのこ」（親のない子は）
支那（しな）の街の　支那の子
親のない子は　只一人
売られて行（ゆ）きます　上海（シャンハイ）へ
坊やは良い子だ　寝んねしな
坊やのお里は　あの山を
越えてあなたの　花の村
母さん　匪賊（ひぞく）にさらわれて
遠い　満州へ　行っちゃった
※こんな残酷な歌でも、考えもなしに毬つきしていたのです。
私の子どもの頃は、妹や弟のお守をしながら、大きい子も小さい子も一緒に遊びながら遊びや歌を覚えました。

5.「しなのまちの　しなのこ」（親がないとて）
支那（しな）の街の　支那の子
親がないとて　馬鹿にすな
親はおります　極楽に
白いべべ着て　数珠持って
石を枕に　寝ています

6.「白瀬中佐」
1番　轟く筒音　飛び来る弾丸
　荒波あろう　デッキの上で
　闇を貫く　中佐の叫び
　杉野はいずこ　杉野はいずや
2番　船内くまなく　尋ぬる三度（みたび）
　呼べど答えず　探せど見えず
　船は次第に　波間に沈み
　敵弾いよいよ　あたりにしげし
※小学校上級生たちが、毬つきをやっていたのを見ていました（終戦前）。
戦後は、軍歌などを歌うのは禁止されるようになったので、これも歌わなくなりました。
※3番（今はとボートに～）まであるそうです。

《羽根つき》

7.「ひとりきな　ふたりきな」
一人来（き）な　二人来な　三人来な　寄って来な
いつ来ても　むずかし
南無妙薬師（なんみょうやくし）
ここのよで　十（とお）よ
※明治十七年生まれの祖母から聞きました。「南無妙薬師」は「何

の薬師」と歌う所もあるそうです。

8.「おいばね　こばね」

追羽根（おいばね）　小羽根（こばね）
蝶々になって　ひらひら遊べ
ひい　ふう　みい　よお　いつつで渡そ
花子さんに　渡そ

《お手玉》

越谷の大沢地区では、「お手玉」のことを「ナッコ」と呼んでいました。実際には、お手玉の中身は、「あずき」や「じゅずご」（数珠玉）でした。

9.「いちれつ　らんぱん」

一列らんぱん　破裂して
日露戦争始まった
サッサと逃げるはロシアの兵
死んでも尽くすは日本の兵
五万の兵を引き連れて
六人までも皆殺し
七月八日の戦いに
ハルピンまでも攻め入って
クロバタキン（クロパトキン）の首をとり
東郷元帥　万々歳

※「らんぱん」は、「談判」がなまったものです。大沢町では「らんぱん」と発音しました。

※「六人までも」は、他では「六人残して」となっているところもあるそうです。

※クロバタキンは、クロパトキンのこと。ロシアの将軍で、日露戦争では満州軍総司令官を務めました。歌の内容は歴史的事実とは違っていますのでご注意ください。

※「東郷元帥」は他では「東郷大将」と歌う例もあるそうです。

10.「いちばんはじめは　いちのみや」

一番初めは　一の宮
二は　日光東照宮
三は　佐倉の宗五郎（そうごろう）
四（し）は　又、信濃の善光寺
五つは　出雲の大社（おおやしろ）
六つ　村々　鎮守様
七つ　成田の不動様
八つ　八幡（やわた）の八幡宮（はちまんぐう）
九つ　高野（こうや）の弘法（こうぼう）様（こうぼさま）
十（とお）で東京博覧会

※「八幡の八幡宮」とは京都府八幡市（やわたし）の石清水八幡宮をさすそうです。

※「東京博覧会」は、「東京招魂社」と歌う例も見られたそうです。

※十の後も続けてお手玉で歌うことがありました。

十一　いちごのごまめいり
十二は　日光　中禅寺
十三　三十三間堂

十四（じゅうし）は　四国の金毘羅（こんぴら）さん
十五は　ごうごう汽車の音
十六　ロシアの大（だい）戦争
十七　しちしの墓参り
十八　浜辺の白兎
十九は　楠正成よ
二十は　二宮金次郎　金次郎
※「いちごのごまめいり」は、「越後」「参り」の意味だと思います。
※「しちしの」は、「四十七士の」の意味です。
※最後の二十は、「金次郎」を長く伸ばし、もう一度長く「金次郎」と歌います。

11.「おっさらい」（お浚い）

おっさらい　お一つ　お一つ　（繰り返して一つずつ片手で取る）　降ろして
おっさらい　お二つ　お二つ　（繰り返して二つずつ片手で取る）　降ろして
おっさらい　お三つ　お三つ　（繰り返して三つずつ片手で取る）　降ろして
（これを決められた数まで繰り返して行う）
おっさらい　お全部（右手で取る）　降ろして
（次は、順不同でいろいろと変化して行なう）
おっさらい　お手載せ　お手載せ（「お手載せ」を**繰**り返して、全部を左手で持つ）　降ろして
全部を左の手の甲に載せる）

《おはじき》

「おはじき」のことを私の祖母や母は「ギヤマン」「キシャゴ」などと呼んでいました。

12.「なんこ　なんこ」

何個（なんこ）　何個　合わせて　いくつ
※複数で行います。それぞれが手の中に何個かのおはじきを握っていて、「合わせていくつ」で一斉に握った手を出します。そして全部合わせた数を何個になるかを一人一人が答えます。その後、握った手を一斉に広げて、全部で合わせていくつかを数えます。当たった人は、皆が出したおはじきをすべて独り占めして手に入れます。

13.「いちじく　にんじん」

イチジク　ニンジン　サンショ（さんしょう）にシイタケ　ゴボウ　ムカゴ　ナツメにヤマイモ　クワイにトウガン

※平らな所で行います。まず最初は、皆が同数を出し合って一か所に集めたおはじきを片手でおおい包んで、勢いを付けていっきに散ばします。散らばった中の二個を選び、そのおはじきの間に人差し指（狭い所では小指）で線を引き、人差指（又は親指）でもう一方のおはじきを目指して、はねて当てます。その時、当てられたおはじきが動いて他のおはじきには当たらないようにします。当てたおはじきは自分のものになります。これを何度も繰り返しながら、おはじきを自分の所有にしていきます。当てられたおはじきが、他のおはじきにあたると失敗です。一方のおはじきに当らなくても当然失敗です。失敗するまで続けます。

※最後におはじきが二個残った時に、この歌が歌われます。残った二個のおはじきの間に指で線を引き、もう一方のおはじきを目指してはねて当てます。それを十回繰り返して、最後までできると、その二個のおはじきが手に入ります。

≪縄跳び（複数で行う）≫

14.「おおなみ　こなみ」

大波（おおなみ）　小波（こなみ）　ぐるっと回して　猫の目

※二人で長い縄の両端を持って離れてから、「大波小波」では左右に振り、「ぐるっと回して」では、大きく回す。跳ぶ人は一人で、大波で入ります。

※最後の「目」のところで縄をまたいだ状態にして縄の動きを止めます。

15.「ゆうびんやさん　いまなんじ」

郵便屋さん　今何時
もう　かれこれ　十二時だ
えっさか　もっさか　ゲーロゲロ

※これも同様に、二人が縄を持って、縄を回すだけです。

※最後の「ゲロ」のところで縄をまたいだ状態にして縄の動きを止めます。

16.「ゆうびんやさん　おとしもの」

郵便屋さん　落し物
拾って下さい　一枚　二枚　三枚・・・□枚

※二人が縄を持ち一人が跳びながら落し物を拾うふりをして土に手をつきながら行う縄跳びです。

※跳ぶ前に、土に手を付ける回数を決めます。

跳び始めたら、その回数まで跳び、達成すると縄から外に出ます。同時に次に待っている人が縄に入り、同じことを繰り返します。

17.「おじょうさん　おはいんなさい」

お嬢さん　お入んなさい
ジャンケンポンよ　アイコでショ
勝ったら　さっさと　お逃げなさい

※最初は一人が跳んでいます。

※「お入んなさい」で待っているもう一人が縄に入り、跳びな

がら相手とジャンケンをします。
※勝ったら縄から出ます。勝つまでは縄から出られません。負け続けると、いつまでも跳んでいることになります。

18.**「げっくり　かっくり」**

げっくり　かっくり　水曜日
もっくり　きんどこ　どっこいしょ　日曜～日
山とせ　そよふけば　山の神様　三大師
ピーヒョロ　ピーヒョロ　三大師
そ～れ　入れ　入れ　出ろ　出ろ

≪人の輪を作っての遊び（鬼が中央にいる）≫

19.**「かごめ　かごめ」**

かごめ　かごめ　籠の中の鳥は
いつ　いつ　出(で)やる
夜明けの晩に　鶴と亀とすべった
後ろの正面　だ～れ

※野田市が発祥の地と言われています。東武野田線の清水公園駅の前に「かごめの唄の碑」が建っています。
※鬼が両手で目を隠して中央に座り、その周囲を他の子供達が手をつなぎ輪になって歌を歌いながら廻ります。歌が終わると一斉に座り、その時鬼は自分の真後ろにいる人を当てます。
※「かごめ」とは、籠目、つまり竹で編まれた籠の編み目を表すとか、「囲め」がなまったものとか、「屈め」がなまったものなどの説があります。

20.**「坊さん　坊さん」**

（輪の人たち）坊さん　坊さん　どこ行くの
（鬼）　私は田んぼに　稲刈りに
（輪の人たち）私も一緒に　連れしゃんせ
（鬼）　お前が来ると　邪魔になる
（輪の人たち）なんだ　このくそ坊主
後ろの正面　だ～れ

※大沢町では、「かごめ　かごめ」の遊び方と全く同じで、鬼が両手で目を隠して中央に座り、その周囲を他の子どもたちが手をつなぎ、輪になって歌を歌いながら廻ります。
※歌が終わると一斉に座りますが、その時、鬼は自分の真後ろにいる人を当てます。
※他の地域での「坊さん　坊さん」の遊び方を調べますと、「なんだ　このくそ坊主」の表現は多少違っていて（例えば「このカンカン坊主くそ坊主」というように）、次のようなことも行われていたそうです。
「くそ坊主」のところで、輪の子はつないでいた手をはなし、鬼の頭をつつきます。それから「後ろの正面だ～れ」で止まります。鬼は目隠しのまま自分の後ろにいる人の体を触って名前を当てます。当てられた人が次は鬼になります。
大沢町では、「小豆たった」で行ないました。

21.**「小豆たった　煮え立った」**

（輪の人たち）
小豆たった　煮い立った
煮いたかどうだか　食ってみよ

（輪の人たちが鬼のそばに寄る）
まだ煮えない　コーリコリ（後ろに下がる）
もう煮いたかな（鬼のそばに寄る）
まだ煮えない　コーリコリ（後ろに下がる）
（以上を輪の人たちは何回か繰り返す）
（輪の人たちが）「もう煮いたかな」
（鬼が）「煮えた」
（と言うと、輪の人たちは鬼から逃げる）
※「煮いたかどうだか食ってみよ」で、真ん中にいる鬼のそばに寄っていきます。
「もう煮いたかな」で、鬼の人の頭を突いたり、髪の毛をくちゃくちゃにします。
※鬼が「煮えた」と言ったら、皆、蜘蛛の子を散らすように逃げます。鬼に捕まった人が鬼になります。

≪人の輪を作っての遊び（トンネルくぐり）≫

22.「通りゃんせ」

AB　通りゃんせ　通りゃんせ
A　ここは　ど～この細道じゃ
B　天神様の細道じゃ
A　ちょっと通してくだしゃんせ
B　ご用のない者　通しゃせぬ
A　この子の七つの　お祝いに
B　お札（ふだ）をおさめに　参ります
A　行きはよいよい　帰りは怖い
B　怖いながらも　通りゃんせ　通りゃんせ

※AB二人が向かいあって両手を斜め上方に出してトンネルを作り、その他の人は電車遊びのような体制になって一列につながり、そのトンネルの中をくぐって走りながら進みます。最後の歌の「怖いながらも　通りゃんせ　通りゃんせ」はゆっくり歌います。「通りゃんせ　通りゃんせ」で、両手で作ったトンネルを下方に降ろします。その時にトンネルの中に入って捕まった者が、トンネルの役に回ります。

※川越市三芳野神社の参道は「通りゃんせ」の舞台といわれる。当社は川越城築城により天神曲輪に位置し、「お城の天神様」と呼ばれた。境内に「わらべ唄発祥の地」の碑がある。

≪二組に分かれて列を作っての遊び≫

23.「花いちもんめ」

ふるさとまとめて　花いちもんめ（始まりの歌）
やれやれ　やれやれ　今日（こんにち）は
隣のおばさん　ちょっとおいで
　鬼が恐くて行かれない
お釜かぶって　ちょっとおいで
　お釜ないから行かれない
それもそうだが　あの子が欲しい
あの子じゃ　わからん
この子が欲しい
　この子じゃ　わからん
丸くなって相談だ
○○ちゃんが欲しいよ　花いちもんめ
□□ちゃんが欲しいよ　花いちもんめ

（名前が呼ばれた子が前に出てきて、互いに引っ張り合う）
勝ってうれしい　花いちもんめ
負けてくやしい　花いちもんめ
※二組に分かれて手をつないで横一列になり、横一列になった二組が向かい合います。
※互いに問いかけるたびに前進（相手側はその時は後進）を繰り返し、前進のたびに片足を蹴り上げます。
※「欲しいよ」と指名された双方の二人が前に出て、手を握って引っ張り合います。そして、引っ張られて、一方の仲間に入ります。その時、一方の仲間は勝ち、「勝ってうれしい　花いちもんめ」と前進しながら歌い、「もんめ」で蹴り上げます。負けた方の仲間は、「負けてくやしい　花いちもんめ」と前進しながら歌い、蹴り上げます。
※「いちもんめ」とは、重さのことで「一匁」のことです。

《子守歌》

24.「ねんねんよう　おころりよ」

ねんねんよう　おころりよ
坊やは良い子だ　ねんねしな
坊やの子守は　どこへ行った
あの山越えて　里へ行った
里のみやげに　何もろた
でんでん太鼓（だいこ）に　笙（しょう）の笛
※子供を負んぶしながら歌った

《尻取り歌》

25.「いろはに　金平糖（こんぺいとう）」

いろはに金平糖　　金平糖は甘い
甘いは砂糖　　砂糖は白い
白いは兎　　兎は跳ねる
跳ねるは蚤　　蚤は赤い
赤いはルビー　　ルビーは高い
高いは十二階　　十二階は恐い
恐いはお化け　　お化けは消える
消えるは電気　　電気は光る
光るは親父（おやじ）のはげ頭
※十二階とは、大正時代の浅草にあった十二階をさします。
※以上の他にも次のような尻取り歌もありました。
いろはに　金平糖　　金平糖は甘い
甘いは砂糖　　砂糖は白い
白いは兎　　兎は跳ねる
跳ねるは蚤　　蚤は赤い
赤いはホオズキ　　ホオズキはな
なるはおなら　　おならはくさ
くさいはうんこ　　いい
※あるいは、次の例もありました。
いろはに　金平糖　　金平糖は甘い
甘いは砂糖　　砂糖は白い
白いは雪　　雪は冷たい
冷たいは氷　　氷はとける
とけるはロウソク　　ロウソクは光
光るは親父のはげ頭　　る

《手合わせ歌》

26.「一(いっ)かけ二かけて　三かけて

一(いっ)かけ二かけて　三かけて
四(し)かけて五かけて　橋をかけ
橋の欄干　手を腰に
はるか向こうを　眺むれば
十七、八の　姉さんが
花と線香を　手に持って
姉さん　姉さん　どこ行くの
わたしは九州　鹿児島の
西郷隆盛　娘です
切腹なされた　父上の
お墓参りに　参ります
お墓の前で　手を合わせ
南無阿弥陀仏と　拝みます
拝んだあとから　幽霊が
ふ～わり　ふわりと
ジャンケンポン

※一つ一つ動作がともなって歌われていました。

《指遊び（室内）》

27.「ずいずい　ずっころばし」

ずいずいずっころばし　ごまみそずい
茶壷に追われて　どっぴんしゃん
抜けたら　どんどこしょ
俵の鼠が　米食ってチュウ
チュウ　チュウ　チュウ
おとっつぁんが呼んでもおっかさんが呼んでも
行（ゆ）きっこなしよ
井戸の周りで　お茶碗欠いたの　だ～れ

※片手を筒のようにして、もう一方の片手の人差し指で、隣の人の筒の中に入れる動作を繰り返す遊びです。

※「お茶壷道中」に関わる歌とする説があります。江戸時代、将軍家に献上する新茶を詰めた茶壷を運ぶ行列が見られましたが、大名行列同様に住民は土下座をしたといいます。この説によると、「胡麻味噌を磨ってきて、子どもたちを家の中に追いやられ、戸をピシャリと閉められて、家の中で息を潜めてじっとしている。その間に、米をかじるネズミの鳴き声や、井戸端で茶碗が割れる音まで聞こえてくる。お茶壷道中が通り過ぎると、子どもたちは解放される。」というような内容であったと言われています。

28.「子供と子供とけんかして」

子供と子供と　喧嘩して
薬屋さんが　止めたけど
なかなか　なかなか　止まんね～
人様　笑う
親たちゃ　怒（おこ）る

※両手を合わせて行う指遊びです。

寒い時に火鉢にあたって行うことが多いです。

≪指遊び（室内及び室外）≫

29.「ひらいた　ひらいた」

開いた　開いた
何(なん)の花　開いた

蓮華の花　開いた
開いたと　思ったら
いつの間にか　つ～ぼんだ
※頭の上で、両手で花びらの形を作り、開いたり、つぼんだりの動作をして歌いました。

30.「ことしの　ぼたん」

今年の牡丹は　よい牡丹
お耳をからげて　スッポンポン
も一つからげて　スッポンポン
※「お耳をからげて　スッポンポン」では、両方の人差し指で両方の耳の周りをぐるぐる回して、「スッポンポン」で両手を叩いて払う動作をし、「も一つ」では、それを繰り返しました。

31.「指きり　げんまん」

「指きり　げんまん」
指切り　げんまん
ウソついたら　針千本　飲～ます
指切った

≪相手の腕を使った手遊び≫

32.「おなべふ」

おなべふ　おなべふ　おなべふ（これを繰り返す）
※「おなべふ」を繰り返しながら、相手の手首から、両手で交互につかみ、肘まで進みます。
相手の腕の内側面を使います。
最後の終了場所で、「お」になったら「親孝行」、「な」なら「なまけもの」、「べ」なら「勉強家」、「ふ」なら「不良」と大きな声で言います。

33.「東京都、日本橋」

東京都（相手の腕に人差し指で日本橋（二本の指でひっかく）
蛎殻町（全部の指でひっかく）
豚やの（平手でぶつ）
おつねさん（片手でつねる）

≪かくれんぼ≫

34.「かくれんぼするもの　よっといで」

かくれんぼする者　寄っといで
ジャンケンポンよ
あいこでしょ
もういいかい
ま～だだよ

もういいかい
ま～だだよ
（何度か繰り返す）
も～い～かい
も～い～よ～
※「あいこでしょ」で負けた人が鬼になります。
鬼は両手で両目をふさいで「もういいかい」を言い始めます。
「も～い～よ～」で、鬼は探しに行きます。

《ジャンケン》

35.「ジャンケン　ポン」
ジャンケン　ポン
※あいこになったら、「あいこでしょ」と言います。
※「グー」で勝った場合は、「グ・リ・コ」、「チョキ」は「チ・ヨ・コ・レ・エ・ト」、「パー」は「パ・イ・ナ・ツ・プ・ル」と、勝った人が言いながら、大股でグーは三歩、チョキは六歩、パーは六歩、前に進みます。

36.「アイケン　チ」
アイケン　チ
※「ジャンケンポン」のことを、私が子供の頃は「アイケン　チ」と言っていました。

《押しくら　まんじゅう》

37.「おしくら　まんじゅう」
押しくら　まんじゅう　押されて　泣くな
※寒い時に、体を暖めるために何人かが集まって行ないます。
丸くなって背中を中央に向けて押し合います。

《その他の歌遊び》

38.「お月さま　いくつ」
お月さま　いくつ
十三　七つ　まだ年（とし）は若いよ
この子を産んで　だ～れに抱かしょ
お万に抱かしょ
お万はどこ行った
あの山越えて　油買い　茶買いに
油屋の前で　すべって　ころんで
油一升　こぼした
※お月様が出ている時に歌うことが多いようです。
※子守をしながらゆっくりと歌います。
私も祖母の背中で聞いて覚えました。

39.「うさぎ　うさぎ」
（月を見ながら）
うさぎ　うさぎ　何見て跳ねる
十五夜お月さん　見て跳～ね

40.「一つ二つの赤ちゃん」
一つ二つの赤ちゃんが
三つ　みかんを　食べすぎて

四つ　夜中に　腹（はら）こわし
五つ　いつもの　お医者さん
六つ　向こうの　看護婦さん
七つ　泣いても　間に合わない
八つ　やっぱり　間に合わない
九つ　ここで　お弔い（おとむらい）
十で　とうとう　死んじゃった
※母から聞いて覚えた歌で、特にミカンを食べるときによく歌いました。

41.「盆、盆、盆が来た」

盆　盆　盆が来た
あしたの晩から　寝らんねえ
※月遅れの八月のお盆の為に買ってもらった赤い提灯がうれしくて、お盆の夜に浴衣を着た数人の女の子で、提灯の中の小さいロウソクに火を付けて大沢の町の路地を歌いながら歩きました。

42.「おおさむ　こさむ」

おおさむ　こさむ
山から小僧が　泣いてきた
何て言って　泣いてきた
寒いと言って　泣いてきた
※寒い時に、両腕を縮めて歌うことがありました。

43.「ほっ　ほっ　ホタル来い」

ほっ　ほっ　ホタル来い
こっちの水は　甘いぞ
あっちの水は　苦いぞ
ほっ　ほっ　ホタル来い
※水が入っている頃の田んぼで、ホタルを見ながら、歌うこともありました。

44.「てるてる坊主」

照る照る坊主　照る坊主
明日　天気に　しておくれ

45.「ごんべえさんの赤ちゃん」

権兵衛さんの赤ちゃん　風邪引いた
（これを三回ほど繰り返す）
それで　慌てて　湿布した

46.「朝だ　四時半だ」

朝だ　四時半だ　弁当箱提げて
出て行くおやじの　姿を見れば
上はボロボロ　下もボロボロ
うちの親父は　土方の大将
一日（いちにち）五銭の　安月給
※戦時中に大沢ではやった歌です。

47.「からすが鳴くから　帰ろう」

カラスが　鳴くから　帰ろう
※別れるときに「アバナ　またあした」などと言った。戦後は、

「バイバイ」となります
※遊びに飽きて遊びを止めるとき、「アバにする」と言いました。

48.「どれに　しようかな」
どれに　しよ～かな　神様の言うとおり
どれに　しよ～かな　天神様の言うとおり
※たくさんある物の中から一つを選ぶ時の歌です。

49.「上がり目　下がり目」
上がり目　下がり目
ぐるっと回して　猫の目
※赤ちゃんをあやす時に動作をともないながら歌いました。

50.「この指　とまれ」
○○する者　この指　と～まれ
※遊び仲間を集めるときに、人差し指を出して言います。

51.「そうだ村の村長さん」
そうだ　そうだ
そうだ村の村長が　死んだそうだ
ソーダ飲んで　死んだそうだ
葬式饅頭　でっかいそうだ
※相手が「そうだ」という言葉が出た時に歌われます。

52.「だるまさん　ころんだ」
だるまさん　ころんだ
※鬼が「だるまさん　ころんだ」と言って後ろを振り返り、動いている子を見つけます。一方で、全員鬼のそばに少しずつ近づいていきます。鬼のそばまできて、手をつないでいた捕虜にないだ手を切って、捕虜も含めて鬼から逃げます。鬼は捕まえに行きます。十数える代わりに「だるまさんがころんだ」と言った方が早く数えられます。

《絵かき歌》

53.「おっと　たまげた　蛸入道」
みみずが三匹　はってきて
玉子が三つ　ころがって
雨がザアザア　降ってきて
あられがポツポツ　降ってきて
おっとたまげた　蛸入道
※これは、蛸を描き上げます。

54.「へのへの　もへじ」
へのへの　もへ字
※言いながら顔を描き上げます。

55.「つるには　のの虫」
つ・る・ニ・ハ　の・の・ム・し
※そう言いながら顔を描き上げますが、他の地域では、「蔓には豆豆（丸丸）虫」とするそうで目が○になります。







56. **女の子の全身の絵書き**
くーちゃん しーちゃん リットル テーちゃん・・(頭髪)・・
一銭貰って パン買って 一銭貰って パン買って 三角定
規が四銭で (顔が出来上がる) 縦 縦 横 横 横 丸書いてち
よん 縦 縦 横 横 横 丸書いてちょん (両腕が出来上が
る)・・(スカート)・・縦 縦 横 横 横丸書いてちょん 縦 縦
横 横 丸書いてちょん (両脚が出来て完成)

《相手を攻撃する時の囃子言葉》

57. **「馬鹿 カバ」**
馬鹿 カバ まぬけ (或いは「ちんどんや」)
お前の母さん 出臍 (でべそ)

58. **「のん気な父さん」**
のん気な父さん 毛が三本
電車に轢かれて ぺったんこ

59. **「お前の学校 いい学校」**
お前の学校 いい学校
上がって見たら クソだらけ
※特に川向こうとの喧嘩の時に言いました。

60. **「みっちゃん 道々」**
みっちゃん 道々 うんこして
紙がないから 手で拭いて
もったいないから なめちゃった

61. **「しいちゃん しがつく」**
しいちゃん しがつく
しん左衛門 (ざえもん)
しのこの しん三郎 しにそこなって
しんちょこ しんちょこ
※例えば「みっちゃん」ですと次のとおりです。
みっちゃん みがつく
みん左衛門 (みんざえもん)
みのこの みん三郎 みにそこなって
みんちょこ みんちょこ

62. **「のん気な父さん」**
のん気な父さん 毛が三本
二階の窓から 落っこって
あいたい くいたい 何食いたい
天丼食いたい ソバ食いたい
お金がないから よしちゃった

63. **「でぶでぶ 百貫でぶ」**
でぶでぶ 百貫でぶ
電車に轢かれて ぺっちゃんこ

64. **「かっちゃん 数の子」**
かっちゃん 数の子 にしんの子

65. **「女の中に」**
女の中に　男が一人

66. **「あげようか」**
（これ）あげようか
「か」が付くから　考えよう
「よ」がつくから　よそう
「そ」がつくから　損だ
「だ」がつくから　ダ～メ
「め」がつくから　めっかんこう
「こ」がつくから　こ～ん
※最後の「こつ～ん」では、相手の頭をげんこつで、こつんと叩きます。

67. **「ドレミっちゃん」**
ドレミっちゃん　耳だれ　目は病（や）ん目
頭の横丁には　ハゲがある
蠅が止まって　ちょっとすべる
何て　便利な　ハゲでしょう

68. **「ろくぶて」**
A．手袋の反対は
B．ろくぶて
※言い終わるとすぐに、Aが六回程Bをたたく。

69. **「誰かさんの後ろは蛇の姿」**
誰かさんの後ろは　蛇の～す～がた

《参考：「子供遊び」の紹介》

越ケ谷地区の子供遊びに関しては、越谷市郷土研究会理事の故・山崎善司氏が平成四年七月発行の「越谷言葉　方言と訛集　改補編」の中で触れられています。今となっては貴重な資料です。

作成終了日　平成二十二年十月二十六日
改定版　平成二十三年十月二十一日

◇周りの１０個の輪は、昭和２９年（１９５４）１１月３日に合併した十町村である二町八ケ村（「越谷町」誕生）を表す。



◇中央部周りのデザインは、カタカナの『コ』を４個集めたものである。つまり、越谷の『越』（「コ４」）を意味する。

◇中心部のデザインは、越谷の『谷』の文字を図案化したものである。

◇昭和３０年（１９５５）１１月３日には、草加町に合併していた川柳村（かわやなぎむら）のうち、伊原（いはら）・麦塚（むぎつか）・上谷（うわや）が越谷町に入る。

◇越谷町は、昭和３３年（１９５８）１１月３日に市に昇格し、越谷市となり、現在に至る。

特集・越谷市内に残る歌　その3

東武線手まり唄

原田民自

昭和十一年（一九三六）に大沢町に生まれ、現在も越谷市に住んでいる方が教えてくれた〝東武線手まり唄〟を紹介します。

この〝手まり唄〟は戦前から戦後にかけて大沢町や越ヶ谷町周辺の女の子たちが〝ゴムまり〟をつきながら歌っていたもので、教えてくれた本人も盛んにこの〝手まり唄〟を歌いながら〝まり〟をついて遊んだそうだ。

歌詞を見ると〝手まり唄〟が流行っていたころの東武鉄道の駅名が次々と出てくるが、現在では失われた駅名もところどころにあらわれて興味をひく。

昭和四十年（一九六五）ごろまでは、大沢町や越ヶ谷町の旧街道沿いや路地裏で女の子たちの〝まりつき〟遊びも見られ、〝手まり唄〟もよく聞かれたそうだが、交通量の増加とともに狭い道にまで車が入り、また子供たちの遊びの変化も重なり〝まりつき〟もできない環境になってしまった。今では〝手まり唄〟を口ずさむ人はもちろん、知っている人もほとんどいなくなってしまったという。

〝東武線手まり唄〟の歌詞

1番　こしがや　がもう　しんで　そうか　やつか　たけのつか
　　にしあらい　うめじま　ごたんの　お次は　きたせんじゅ
　　なかせんじゅ

2番　うしだ　ほりきり　かねが　ふち　たまのい　ひきふね　うけ
　　ち　なりひらばし　すみだ　こうえん　お次は　あさくさかみ
　　なりもん

歌詞に出てくる駅名は次のような変遷をたどる

なかせんじゅ　中千住駅　昭和二十八年（一九五三）廃止
たまのい　…　玉の井駅　昭和六十二年（一九八七）十二月、東向島駅と改称
うけち　……　請地駅　昭和二十二年（一九四七）三月廃止
すみだこうえん　墨田公園駅　昭和三十三年（一九五八）十月廃止
あさくさかみなりもん　浅草雷門駅　昭和二十年（一九四五）十月、浅草駅に改称

当会では越谷地域で親しまれた〝わらべ歌〟など、歌詞や音声、動画による収集に努めている。この〝手まり唄〟も音声による収録を行いホームページで公開している。

講師派遣と大間野町旧中村家イベント

［講師派遣］

平成２１年度（主なもの）

①　市立大沢小学校教員対象　　「大沢の歴史」勉強会
②　市内小中学校社会科教員対象　「蒲生、一里塚、藤助河岸」勉強会
③　市立西方小学校４年生　　「逆川たんけん」
④　南越谷地区センター・万年青大学「ふるさと歴史散歩探訪ハイキング」
⑤　市立大間野小学校３年生と保護者対象「地域体験学習教室」

平成２２年度（主なもの）

①　平成２２年６月５日(土)　　「わんぱく相撲大会」
　　出羽公園にて卯之助ＰＲ　　常任顧問　髙﨑 力　ほか
②　平成２２年８月２９日(日)　「越谷いろはかるた完成記念」
　　ケネット１３によるイベントで卯之助ＰＲ　　理　事　　荒金照登　ほか
③　平成２２年１０月２２日(金)　「ふるさと歴史散歩―新田から蒲生―」
　　南越谷公民館（万年青大学）主催　　幹事長　　藤川吉洋
　　理　事　　渋谷正芳
④　平成２３年２月２０日(日)　「日光街道を歩いた人たち」
　　こしがや文化芸術祭講演会（越谷コミセン）　　会　長　　宮川 進

平成２３年度（１２月まで）

①　平成２３年５月１４(土)・１５日(日)　「奥の細道紀行―草加宿から越谷宿―」
　　高松市市民ワンダーフォーゲル協会主催　　会　長　　宮川 進
②　平成２３年６月９日(水)　「逆川たんけん」
　　越谷市立西方小学校４年生　　常任理事　渡辺和照　ほか
③　平成２３年８月２８日(日)　「越谷いちばん物語」
　　宮五栄友会での講演会　　会　長　　宮川 進
④　平成２３年９月３日(土)　「画家・斎藤豊作―越谷からパリへ―」
　　斎藤豊作展プレ講演会（越谷コミセン）　　常任顧問　髙﨑 力
⑤　平成２３年９月２１日(水)　「わたしたちの越谷・昔を伝えるもの」
　　越谷市立出羽小学校４年生　　副会長　　加藤幸一
⑥　平成２３年９月２６日(月)　「越谷の歴史、ふしぎ発見」
　　レデイス・カルチュアクラブ（増林公民館）　　会　長　　宮川 進

⑦　平成２３年１０月６日(木)　千疋屋役員一行「祖先の土地を訪ねる」
　　市内千疋周辺など案内　　常任顧問　髙﨑 力
　　会　長　　宮川 進
⑧　平成２３年１０月９日(日)　「フランス風景と斉藤豊作」
　　斎藤豊作展ギャラリー・トーク（越谷コミセン）会　員　　竹村克男
⑨　平成２３年１０月１１日(火)　「郷土のお話、宮本町・神明町の郷土」
　　越谷市立出羽小学校３年生　　副会長　　加藤幸一
⑩　平成２３年１０月１４日(金)　朝日放送テレビ「探偵!ナイトスクープ」
　　市内三野宮周辺などの案内　　常任顧問　髙﨑 力
　　会　長　　宮川 進
⑪　平成２３年１２月１日(日)　「葛西用水（逆川）の見学」
　　越谷市立東越谷小学校４年生　　実行委員　鈴木すみ子　ほか
⑫　平成２３年１２月１０日(日)　「史跡ハイキングー元荒川沿い出津橋から浄山寺ー」
　　南荻島公民館主催　　常任理事　渡辺和照
　　常任理事　田端功政

［大間野町・旧中村家イベント］

大間野町旧中村家住宅は江戸時代に旧大間野村（現越谷市大間野町）の名主を勤めた中村氏の旧宅で、平成９年に越谷市が寄贈を受け、建築当初の姿に復元したものです。

敷地内には主屋、長屋門、石蔵、土蔵があります。いずれも現在では失われつつある伝統的な建築技法と古材を出来る限り再利用して復元しています。

所在地は、越谷市大間野１丁目１００番４です。

当会は、この中村家において、さまざまなイベントを行ってきました。

平成２１年度

①　平成２１年８月２２日(土)　「夏休み工作教室」
　　後援　越谷市教育委員会　　講師　理事　荒金照登
②　平成２１年１１月１５日(日)　「大間野町・旧中村家住宅開館記念イベント」
　　昔遊びと工作、かまどを使ってのおにぎり・甘酒つくり
　　越谷市教育委員会・越谷市茶道協会との共催

③　平成２１年１２月１２日(土)　「野鳥観察会」
　　後援　越谷市教育委員会　　講師　会員　新井良夫（日本野鳥の会）
④　平成２２年２月２０日(土)　「ひな人形作り」
　　越谷市教育委員会との共催　　講師　理事　岩瀬静江
⑤　平成２２年３月１３日（土）　「読み聞かせと紙芝居」
　　越谷市教育委員会との共催　　講師　理事　藤田浩行

平成２２年度

①　平成２２年８月７日(土)　「夏休み工作教室」
　　越谷市教育委員会との共催　　講師　理事　荒金照登
②　平成２２年１０月２３日(土)　「秋の歴史散歩―大間野中村家周辺―」
　　越谷市教育委員会との共催　　講師　副会長　加藤幸一
③　平成２２年１１月１４日(日)　「大間野町旧中村家住宅開館記念イベント」
　　昔遊びと工作、かまどを使っての甘酒つくり
　　越谷市教育委員会・越谷市茶道協会との共催
④　平成２２年１２月１８日(土)　「野鳥観察会」
　　越谷市教育委員会との共催　　講師　会員　新井良夫（日本野鳥の会）
⑤　平成２３年２月２６日(土)　「ひな人形作り」
　　越谷市教育委員会との共催　　講師　理事　岩瀬静江
　　理事　宮内和代

平成２３年度（１２月まで）

①　平成２３年７月３０日(土)　「夏休み工作教室」
　　紙でさむらいのヨロイと縄文土器を作ろう
　　越谷市教育委員会との共催　　講師　実行委員　鈴木すみ子
②　平成２３年１０月１５日(土)　「読み聞かせ―越谷の伝説―」
　　越谷市教育委員会との共催　　講師　参事　藤田浩行
③　平成２３年１１月１４日(土)　「大間野町旧中村家住宅開館記念イベント」
　　昔遊びと工作、かまどを使っての甘酒つくり（郷土研究会）
　　越谷市教育委員会・越谷市茶道協会と共催
④　平成２３年１２月１７日(土)　「しめなわ作り」
　　越谷市教育委員会との共催　　講師　松沢利信当会会員

講演会報告

当会主催の講演会です。

	テーマ	日時	場所	講師職名	講師氏名
1	日光社参と身分制	H21・6・28(日)	産業会館	国文学研究資料館 教授	大友一雄
2	越谷出身の 平田篤胤の妻お里勢	H22・1・31(日)	産業会館	東京大学名誉教授 国立歴史民族博物館名誉教授	宮地　正人
3	父・大塚伴鹿、祖父・ 大野伊右衛門を語る	H22・6・27(日)	産業会館	越谷コミニテイセンター 所長 越谷市国際交流協会 会長	大塚　善人 大野　光政
4	中世越谷のイメージ	H23・1・23(日)	中央 市民会館	東北福祉大学 教授	岡田　清一
5	お宝いっぱいの街 越谷	H23・6・26(日)	産業会館	日本民家再生協会 理事	大沢　匠

1．「日光社参と身分制 ―将軍・大名・百姓― 」

私たちのまち越谷は、江戸時代には徳川将軍、各地の大名、そして名もない多くの庶民が「日光」へ通った道です。身分制度が厳然とある時代、人々は制度に従ってどのようにこの道を通ったのだろうか。その様子をわかりやすく話してくれました。

2．「越谷出身の平田篤胤の妻・お里勢」

平田篤胤は、「国学四大人」と言われ、江戸時代末、大きな時代の変化の中で多くの門人に慕われた国学者です。門人の数も数千人を数えました。越谷市にもいた門人達は、篤胤の後添えとして越谷宿のお豆腐屋さんの娘、お里勢を紹介しました。彼女は、篤胤が亡くなるまで良き伴侶として尽くしたことを語ってくれました。

3．「父・大塚伴鹿、祖父・大野伊右衛門を語る」

大塚伴鹿氏は、初代越谷市長で文人市長と言われました。また　大野伊右衛門氏は、元埼玉県議会議員です。お二人とも越谷の文化的基礎を築いた方です。大塚氏は、実父を高い理想を掲げ、越谷が将来は百万都市との夢を描いていたと語りました。また、大野氏は、祖父は若くして出羽村（当時）村長を務めたことや、郷土越谷の歴史に深い理解を示し、当会の初代会長を務めたこと等を語りました。

4．「中世　越谷のイメージ」

「越谷」は、中世の歴史の中でどのようなところであったのか。源頼朝・北条時頼など

が、活躍した鎌倉時代から始まる中世資料も乏しくイメージが描けないなか、限られた資料を駆使して中世ー越谷の姿を語っていただきました。

5．「お宝いっぱいの街　越谷」～**故・山口美津江記念歴史講演会～**

この講演会は、当会に長年多大なご貢献のありました故・山口美津江氏の生前からのご遺志により、ご遺族からご寄附をいただきましたので、そのお名前を冠して開催されたものです。

講演会の内容は、私達の街越谷が、多くの人を呼び寄せられる街になれば楽しい。そのためにはどうすればよいか。大沢氏は、越谷の財産は、宿場町の歴史的町並みが感じられることや、街道から入る小道を歩くと門・塀・庭などがあること、美しい建物があることと語られました。その財産を守り生かすためのまちづくりのあり方を、法令や他市の例を参考に多くの示唆に富んだ話をいただきました。

越谷市教育委員会主催、当会共催の講演会です。

	テーマ	日　時	場 所	講師職名	講師氏名
1	県内の近・現代の建物からまちづくりを考える ー越谷の場合ー	H21・7・26(日)	中央 市民会館	埼玉県立 近代美術館 主席学芸主幹	伊豆井秀一
2	越谷を実らせ今も流れる 葛西用水 ー掘削350年を記念してー	H22・9・18(土)	中央 市民会館	東洋大学 国際地域学部 教授	松浦　茂樹
3	浮世絵師　東洲斎写楽	H23・8・27(土)	中央 市民会館	千葉市美術館 学芸課長	田辺　昌子

1．「県内の近・現在の建物からまちづくりを考えるー越谷の場合ー」

越谷市内には、旧日光街道を始め多くの古建築が残されている。そのどこがすばらしいのか。貴重なのか。近・現代美術が専門の立場から具体的な映像を使っての話でした。

2．「越谷を実らせ、今も流れる葛西用水　ー掘削 350 年を記念してー 」

市内を流れる葛西用水。歴史は 350 年前に遡る。関東地方を流れる大河と用水は、人々の戦いの歴史でもあります。葛西用水の特徴、地形から見た関東平野の特徴、開発のあゆみを始め、今日までの歴史を語っていただきました。

3．「浮世絵師　東洲斎写楽」

浮世絵は、江戸時代の町民文化を育み、その技法や表現力から人々を魅了する歴史的日本芸術文化の一つであります。多くの浮世絵師の中から『謎の浮世絵師』と言われる写楽。その謎に生没年・経歴・同時代の絵師、更に作品の持つ特徴等に触れ、語っていただきました。

展示作品一覧

越谷市郷土研究会では、越谷市で実施する文化行事に参加して、会員の研究・調査した資料の展示を行い好評を得ております。平成21年9月から平成23年11月の展示会作品を一覧にまとめました。

他にも、越谷市立図書館での展示も行ってきました。平成22年3月9日から3月19日の「越谷の歴史あれこれ展」、平成23年7月16日から7月28日の「古絵図に見る江戸時代の越谷」です。

越谷市民文化祭

越谷コミュニティセンター　大ホール　ホワイエ

第41回 平成21年11月	1）温飩屋さんにある一枚の画	金子　寛
	2）綾瀬川の河岸場跡を訪ねて	鈴木　恒雄
	3）越谷周辺の六阿弥陀めぐりと新発見のご詠歌	加藤　幸一
	4）越谷市内の消えゆく歌	髙﨑　力
	5）越谷市内を流れる元荒川は元・利根川で、北越谷地区は　乱流していた	秦野　秀明
	6）越谷と人気投票	原田　民自
	7）越谷の「焼き米」の方が草加の煎餅より古い	宮川　進
	8）増林の勝林寺本尊と岩槻城主渋江氏	山本　泰秀

越谷コミュニティセンター　大ホール　ホワイエ

第42回 平成22年11月	1）越谷のわらべ歌（大沢町）	岩瀬　静江
	2）越ケ谷宿を通った弥次さん喜多さん	篠原　陸郎
	3）越谷の生んだ画家・斎藤豊作　フランスのシャトーと墓	竹村　克男
	4）明治になって越谷に鷹狩に来た徳川慶喜	田中　利昌
	5）越谷市の明治の水準点『高低測量几号』	秦野　秀明
	6）明治の大袋村観音山の捕り物一件	原田　民自
	7）下間久里の獅子舞と辻切り	増岡　武司
	8）江戸時代の越谷名物は「焼き米」と「鰻」	宮川　進

越谷コミュニティセンター　大ホール　ホワイエ

第43回 平成23年11月	1）修験宗三明院の実像	大谷　達人
	2）大吉村の稲荷社	加藤　幸一
	3）初めての西洋人	金子　寛
	4）解体された中町の染谷家土蔵	篠原　陸郎
	5）大相模地区にあった元荒川の古川	髙﨑　力
	6）越谷市内三例目の高低測量几号	秦野　秀明
	7）東武鉄道唱歌と越ケ谷駅の謎	原田　民自
	8）寛政の改革の松平定信と間久里のうなぎ	宮川　進

越谷市民まつり

越谷市中央市民会館

第35回 平成21年9月	1）武蔵国三十三箇所観音霊場巡りと越谷	加藤　幸一
	2）江戸・明治の越ケ谷町・大沢町の大火	髙﨑　力
	3）よみがえる90年前の越谷 大正時代の国産卓上電話機と越ケ谷電話番号簿	原田　民自

越谷市中央市民会館

第36回 平成22年10月	昔、なつかし　あの日、あのころ 渋谷コレクション展示	渋谷　正芳

越谷市中央市民会館

第37回 平成23年10月	学びの舎の思い出　～明治・大正・昭和の教室から～ 渋谷コレクション展示	渋谷　正芳

こしがや文化芸術祭

越谷市文化連盟　平成21年度　テーマ「宇宙」

越谷コミュニティセンター　ポルティコホール

平成21年度 平成22年2月	1）越谷星	増岡　武司
	2）越谷に落ちた隕石	生出　弘三
	3）庚申塔と日月	加藤　幸一

越谷市文化連盟　平成22年度　テーマ「森」

越谷コミュニティセンター　ポルティコホール

平成22年度 平成23年2月	1）市民の憩い、越谷の森	共同作品
	2）越谷市の森　越谷アリタキ植物園　市民のオアシス 世界の樹木が林立	原田　民自

協働フェスタ

越谷市中央市民会館

第2回 平成22年1月	越谷・懐かしいくらしのなかにあったモノ 通い徳利と前掛け	渋谷　正芳

越谷市中央市民会館

第3回 平成23年1月	日光街道　1万円　博物館 あなたに挑戦！　これが何かわかりますか？	宮川　進

文化財パトロール

平成二十一年度　桜井地区

A班からG班までの七班に分けて桜井地区内の石仏の文化財パトロールをしました。

今後の風化や破損が心配とか、現時点で所在不明となった石仏があるとか、地元で大切にされているとか、調査時に見知らぬ人からここにある石仏の由来などを聞かれたので説明して大変喜ばれたとか、石仏の解説版（説明案内版）があると関心がわくのでよいなどの報告がありました。

A班　表面の欠落がひどく、今後の保存が心配な石仏あり。

ある石仏の所有者は整地の時に破損に気をつけたい旨あり。

B班　石仏を安置する祠が大破し、要修理。ある石仏は季節によっては雑草に覆われ目につきにくくなる。

C班　路傍にあった石仏が、破損の心配のため個人宅に移転し大切に保管。動かすとバチがあたるとされる石仏があり、そこには花が常に手向けられて近くの人による信仰が今も続く。

D班　堂は廃されながらも個人宅の墓地内に石仏が移され現存。他所の石仏であるが、上部が折れ、つなげて補修した跡あり。

E班　本体はあるが、台座が所在不明の石仏あり。上間久里の香取社は平成十四年に社殿が再建され、境内も整備された。

F班　祠に鍵がかかっていて、中の石仏の側面・背面の確認のできない石仏や破損が進行中の石仏があった。

G班　欠損などが見られる石仏が七基程あり。移転時に水受け台座の所在が不明となった石仏があり。





平成二十二年度　大袋地区南部（三野宮・大道・大竹）

平成二十三年三月、A班からF班までの六班に分けて大袋地区南部の石仏の文化財パトロールをしました。

この地域は、西大袋土地区画整理事業によって、大きく変容してきています。石仏石塔も、現在、この開発の大きな波に呑まれています。

今後、紛失や移動の恐れがあるため、今後とも見守る必要があります。

A班は、道路拡張にともなう石仏の紛失の恐れを指摘しました。開発にともなう石仏の保管方法で迷っている方がいました。

B班は、石仏のこれ以上の破損を防ぐ必要から、石仏の破損箇所を正確に記録しました。

C班は、針金で巻いてこれ以上の破損を防いでいる石仏をみつけました。石仏の青面金剛の剣の先の破損を指摘しました。

D班は、開発による紛失が心配された石仏が、一乗院の墓地に移され、無事が確認できました。

E班は、区画整理事業により、家屋を移動・新築、道路も大きく道筋を変え、それにともない大部分の石仏・石塔は、個人の邸内に移され保存されていたことを確認できました。

F班は破損の恐れがあり、かつ左側へ傾いていて、修復の必要性がある石仏。下部が地中に埋まっているため、掘り出して台石の上に設置することが望ましい石仏。本体を笠部、台石が固定されておらず、倒壊の危険性が大きい石仏。貴重な「道標付き文字庚申塔」が、すぐそばの大竹学校発祥の碑のそばに移され、横たわっていることを確認したこと。

文化財パトロールカード

NPO法人　越谷市郷土研究会　文化財パトロールカード

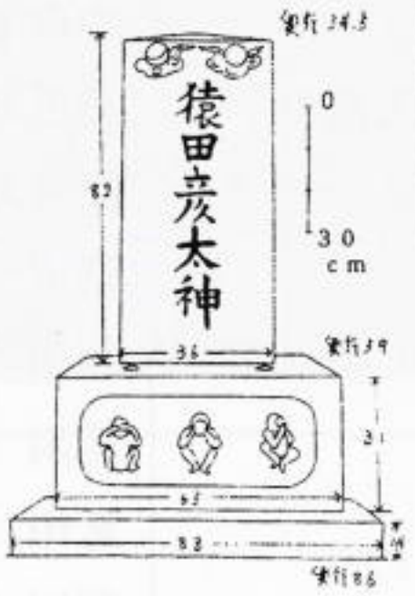
分類	石仏	地区	大袋	旧村	大竹	NO	1

パトロール実施年月日
平成　年　月　日(　)

調査員
岩瀬静江
角田　久
大谷達人

資料中の誤りやお気づきの点
(無)・有

盃状穴の　有・(無)



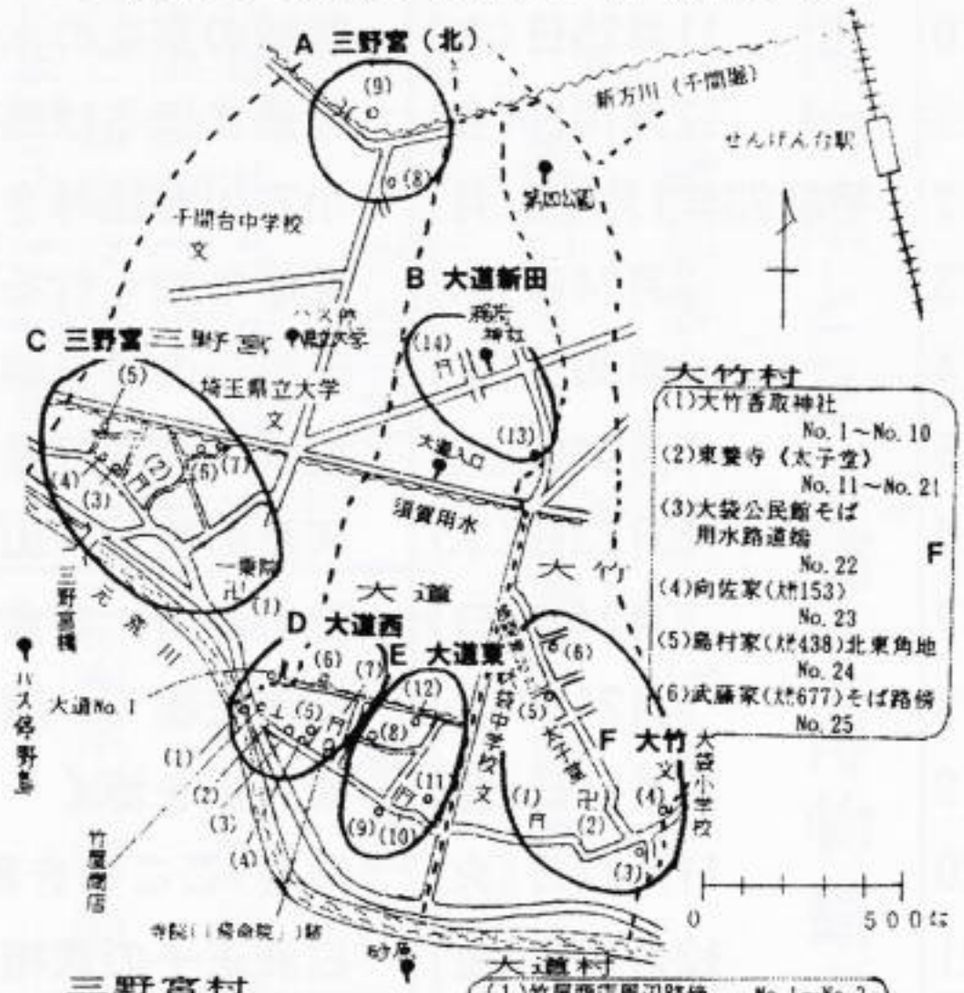
所在地・名称
猿田彦文字庚申塔
大竹香取神社

《持ち物》筆記用具、軍手、たわし

1. 当該場所に現存しているか。変更は無いか
　現在
2. 対象物に破損は無いか
　正面左側上部画面の前後にわたり剥落進行、「神」の文字かなり破損
3. 周辺の環境に問題は無いか(ごみ投棄など)
　なし
4. 今後、破損や移動させられるおそれは無いか
　破損の恐れ有り
5. 特記事項
　大正五年に再建か伊東
6. その他お気づきの点を何でもお書き下さい。
　左側へ傾いている。注意が必要

平成２２年度　文化財パトロール　大袋地区南部（三野宮・大道・大竹）

三野宮・大道・大竹の石仏案内図



大竹村

(1)大竹香取神社　No. 1～No. 10
(2)東養寺（太子堂）　No. 11～No. 21
(3)大袋公民館そば用水路道端　No. 22　F
(4)向佐家(大竹153)　No. 23
(5)島村家(大竹438)北東角地　No. 24
(6)武藤家(大竹677)そば路傍　No. 25

三野宮村

A (1)一乗院　No. 1～No. 16
C (2)三野宮香取神社　No. 17～No. 23
(3)坂巻家(三野宮246)　No. 24～No. 26
(4)森田家(三野宮248)　No. 27～No. 28
(5)森田家(三野宮194)　No. 29
(6)森田家(三野宮291)　No. 30
(7)森田家(三野宮447)　No. 31～No. 33
A (8)榎本家(三野宮1912)　No. 34～No. 36
(9)須賀家(三野宮1971)　No. 37～No. 42

大道村

(1)竹屋商店周辺路傍　No. 1～No. 3
(2)『寮』(大日堂)の墓地　No. 4
(3)上手組(かでくみ)管理の香取社　No. 5　D
(4)鈴木家(大道65)路傍　No. 6
(5)鈴木家(大道108)邸内　No. 7
(6)川島家(大道16-1)そば用水路　No. 8
(7)大道香取神社　No. 9～No. 10
(8)川原家(大道184)路傍　No. 11
(9)八坂神社そば路傍　No. 12
(10)八坂神社　No. 13～No. 14　E
(11)八坂家(大道487)　No. 15～No. 16
(12)川島家(大道212)路傍　No. 17
(13)小林家(大道14)　No. 18～No. 19　B
(14)大道新田稲荷神社　No. 20～ No. 26

※これは、平成９年現在の地図である。

越谷市郷土研究会 史跡めぐりの記録

【第392回】平成21年(2009)7月24日～【第421回】平成23年(2011)12月16日

回	月日・曜日	行き先	案内者	参加人数
392	平成21年7月24日(金)	大沢うどんやの鰻と北川崎の虫追い	加藤幸一	45
393	8月27日(木)	東武博物館と足立郷土博物館をめぐる	宮川 進	41
394	9月11日(金)	横浜開港１５０年目のお祝い開港Ｙ１５０	渡辺和照	84
395	10月3日(土)	甲府・卯之助の力石と県立博物館	安西利夫	44
396	11月11日(水)	秋の「つくばみらい・牛久・土浦」	篠原陸郎	51
397	12月5日(土)	東大駒場キャンパスとイスラム教のモスク	安西利夫	80
398	平成22年1月5日(火)	隅田川七福神を詣でる	加藤幸一	97
399	2月8日(月)	話題の龍Ｑ館(地下神殿)と江戸川堤	渡辺和照	48
400	2月28日(日)	案外知らなかった越谷「新田から蒲生」	安西利夫	75
401	3月26日(金)	日光道中「草加宿」「松原並木」	篠原陸郎	75
402	4月24日(土)	案外知らなかった越谷の春を歩く	渡辺和照	108
403	5月15日(土)	新緑の恵比寿・目黒を訪ねる	安西利夫	87
404	5月30日(日)	越谷入門「日光道中・裏道めぐり」	幹事Ｇ	88
405	7月15日(木)	下間久里の獅子舞と越谷だるま	篠原陸郎	79
406	7月29日(木)	歴史と自然が交差する町 横須賀	渡辺和照	76
407	9月25日(土)	秋の護国寺から椿山荘庭園を訪ねる	安西利夫	67
408	10月13日(水)	筑波へ「コシガヤホシクサ」を見に行く	宮川 進	33
409	10月28日(木)	「富岡製糸工場」と甘楽町の歴史散歩	篠原陸郎	64
410	11月25日(木)	晩秋の東京の水辺　隅田川十二橋めぐり	渡辺和照	72
411	12月10日(金)	常陸まほろば路の悠々探訪	大谷達人	48
412	平成23年1月3日(月)	小石川七福神を詣でる	加藤幸一	89
413	2月24日(木)	蘭学で知られる城下町佐倉の歴史散歩	篠原陸郎	62
414	4月30日(土)	元荒川の後を辿り スナッカラ地蔵へ	加藤幸一	102
415	5月24日(火)	盛沢山な埼玉県内歴史散策	篠原陸郎	74
416	6月23日(木)	天然の美大平山、小江戸栃木蔵の街散策	渡辺和照	64
417	7月24日(日)	夏の湘南・鎌倉の海と歴史	宮川 進	47
418	9月24日(土)	彼岸花咲く　渡来人ゆかりの地	宮川 進	70
419	10月14日(金)	新方川を歩く	宮川 進	54
420	11月22日(火)	円空 こころを刻む秘仏を堪能	篠原陸郎	53
421	12月16日(金)	白洲正子の武相荘・日本民家園	宮川 進	41

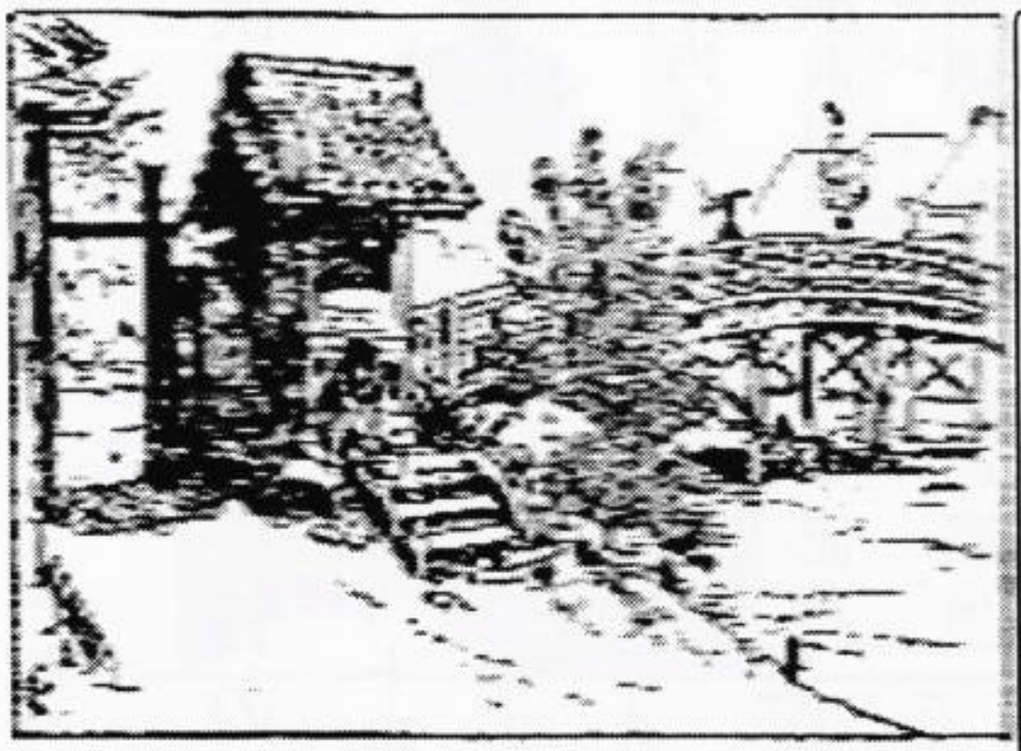
※記録写真は小林孝義様、原田民自様、森田三男様ほかの方々からご提供いただきました。

第三百九十二回　平成二十一年七月二十四日

大沢うどんやの鰻と北川崎の虫追い

参加者数　四十五名　天候　晴

案内者　加藤幸一　副会長



【案内者　コメント】
江戸時代からの老舗大沢の「うどんや」さんの鰻「北川崎の虫追い」は、たいまつで虫を追う県指定の無形民俗文化財。

【行程表】
①うどんやで鰻重賞味。
　バスで移動
②聖徳寺
③清浄院
④川崎神社で虫追い見学。
⑤現地にて自由解散。

第三百九十三回　平成二十一年八月二十七日

東武博物館と足立郷土博物館をめぐる

参加者数　四十一名　天候　晴

案内者　宮川進　会長



【案内者　コメント】
このたび、リニューアルされた博物館二つ、東武博物館と足立区立郷土博物館をまとめて一度に見ようという史跡めぐりです。

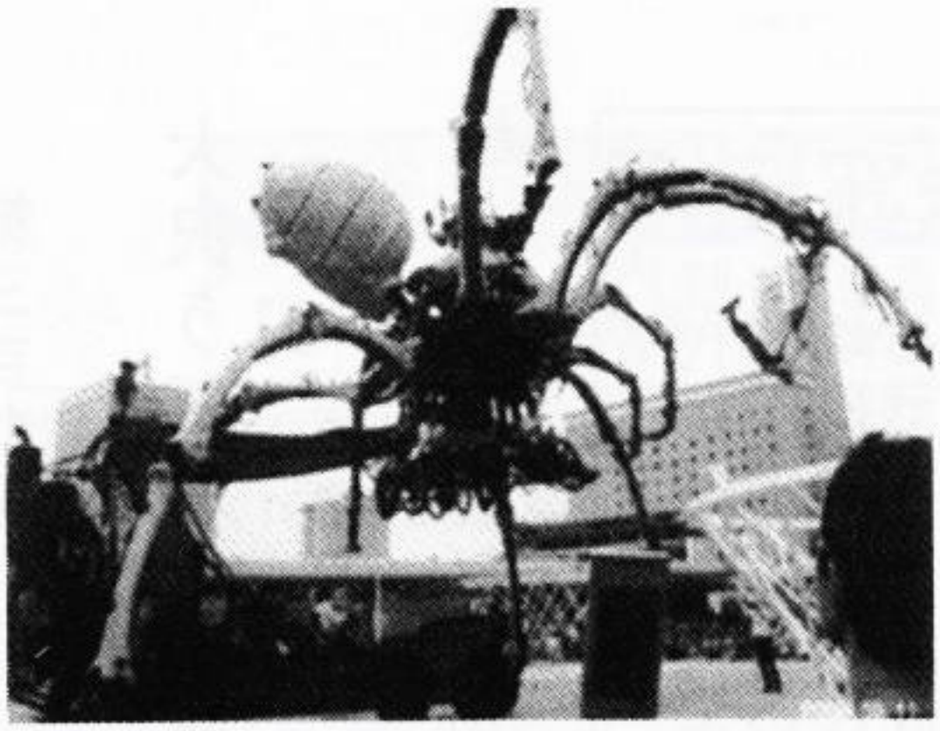
【行程表】
①越谷駅に集合。
②東武博物館。
③足立区立郷土博物館。

第三百九十四回　平成二十一年九月十一日

横浜開港１５０年目のお祝い開国博Ｙ１５０

参加者数　八十四名　天候　晴れ

案内者　渡辺和照　常任理事



【案内者　コメント】

・横浜開港百五十年記念のイベントに参加。開国　開港の街の歴史を訪ねて散策します。

【行程表】

①南越谷駅へ集合
　バスで移動
②横浜開国博覧会
③赤レンガ会場
④日本丸メモリアルパーク

第三百九十五回　平成二十一年十月三日

甲府・卯之助の力石と県立博物館

参加者数　四十四名　天候　晴

案内者　安西利夫　常任理事



【案内者　コメント】

甲府に三ノ宮卯之助の力石を訪ねる。山梨県立美術館ではミレーの名画を鑑賞。

【行程表】

①南越谷駅前へ集合
　バスにて
②稲積神社にて卯之助の力石を見学
③山梨県立美術館
④甲斐善光寺
⑤山梨県立博物館
⑥浅間神社

第三百九十六回　平成二十一年十一月十一日

秋の「つくばみらい・牛久・土浦」

参加者数　五十一名　天候　雨

案内者　篠原陸郎　常任理事

【案内者　コメント】

世界一高い大仏。
ワープステーションでは「篤姫」「仁」の撮影現場などをバスで見学します。



【行程表】

①南越谷駅前へ集合
　バスにて
②間宮林蔵記念館
③板橋不動尊
④ワープステーション　カミヤシャトー
⑤シャトー
⑥牛久大仏
⑦土浦城址　市立博物館

第三百九十七回　平成二十一年十二月五日

東大駒場キャンパスとイスラム教のモスク

参加者数　八十名　天候　晴

案内者　安西利夫　常任理事

【案内者　コメント】

駒場の文化を訪ねる。



【行程表】

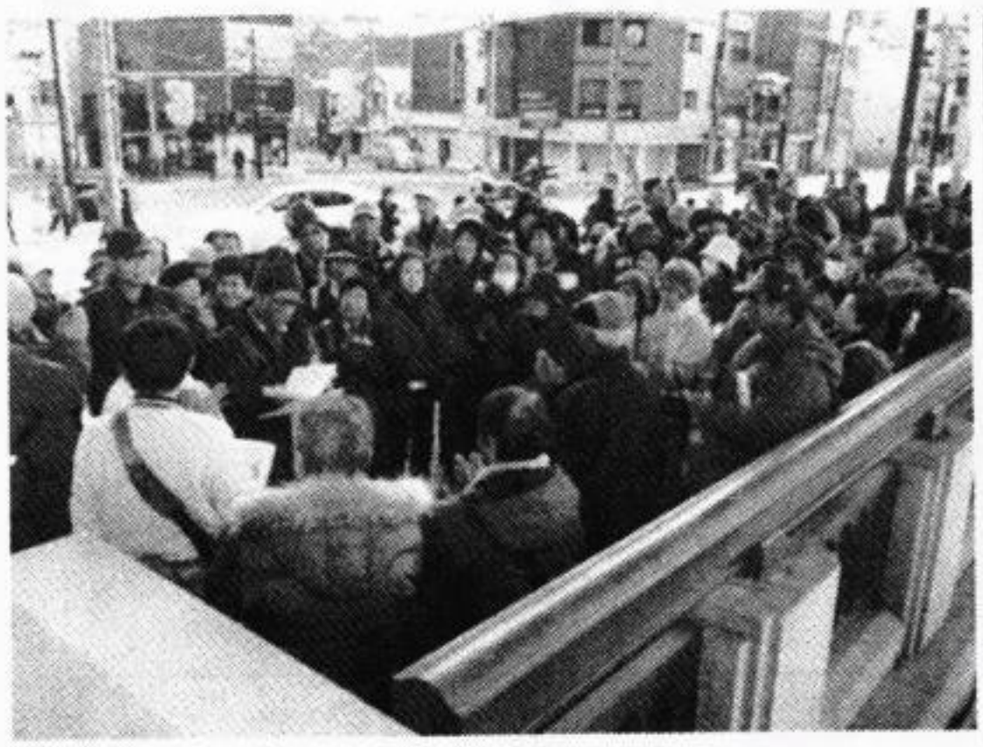
①越谷駅へ集合
②東京ジャーミイ
③東大教養学部キャンパス
④旧前田侯爵邸
⑤日本民藝館

第三百九十八回　平成二十二年一月五日

隅田川七福神を詣でる

参加者数　九十七名　　天候　晴

案内者　加藤幸一　副会長



【案内者　コメント】

向島の歴史を垣間見ながら。

【行程表】

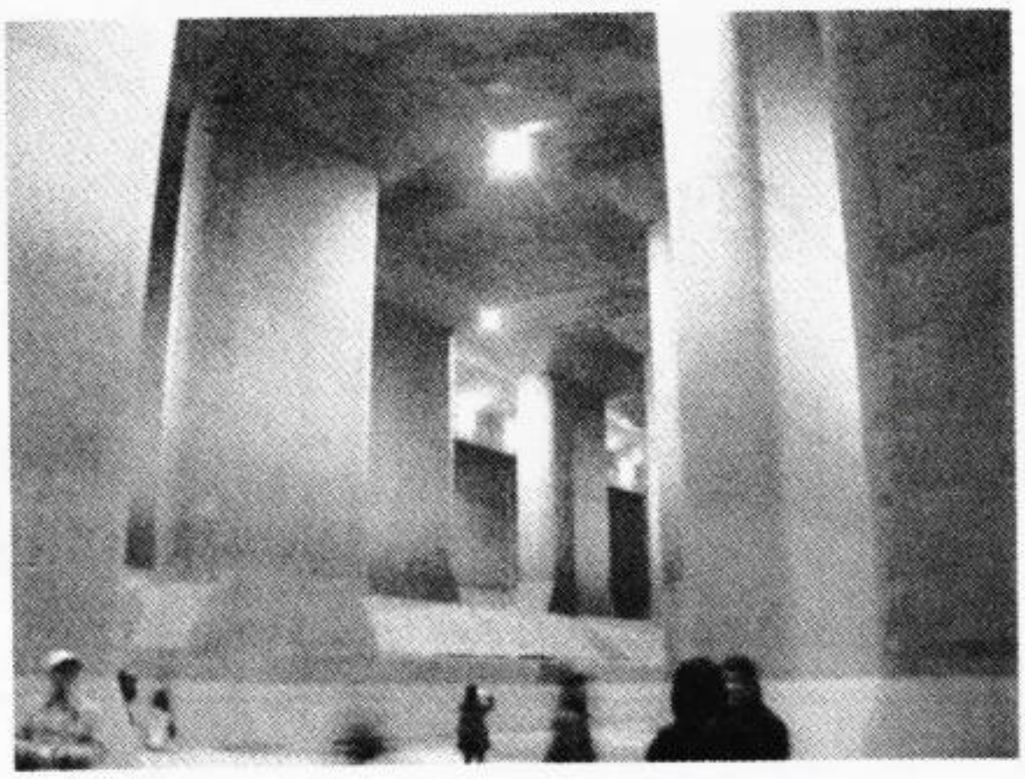
・越谷駅へ集合
・荒川放水路
①多聞寺・毘沙門天
②白鬚神社・寿老人
③向島百花円園・福禄寿
④長命寺・弁財天
⑤弘福寺・布袋尊
⑥三囲神社・恵比寿／大国神

第三百九十九回　平成二十二年二月八日

話題の龍Q館（地下神殿）と江戸川堤

参加者数　四十八名　　天候　晴

案内者　渡辺和照　常任理事



【案内者　コメント】

世界最大級　地下パルテノン神殿と早春の江戸川堤散策。会員限定の史跡めぐりです。

【行程表】

①越谷駅へ集合
②龍Q館
③香取神社
④庄和総合公園
⑤蓮華院

第四〇〇回　平成二十二年二月二十八日

案外知らなかった越谷「新田から蒲生」

参加者数　七十五名　　天候　雨

案内者　安西利夫　常任理事



【案内者　コメント】

第４００回記念史跡めぐり。新田から蒲生を歩く。

【行程表】

①新田駅へ集合
②藤助河岸
③蒲生一里塚
④清蔵院
⑤光明院閻魔堂
⑥光明院
⑦児童館ヒマワリ

第四〇一回　平成二十二年三月二十六日

日光道中「草加宿」「松原並木」

参加者数　七十五名　　天候　晴

案内者　篠原陸郎　常任理事



【案内者　コメント】

芭蕉も通った　隣の町草加を歩こう。

【行程表】

①草加駅へ集合
②八幡神社
③歴史民俗資料館
④東福寺
⑤おせん公園
⑥札場河岸
⑦甚左衛門堰
⑧ハープ橋
⑨百代橋

第四〇二回　平成二十二年四月二十四日

案外知らなかった越谷の春を歩く

参加者数　一〇八名　　天候　晴

案内者　渡辺和照　常任理事



【案内者　コメント】

越谷「入門」史跡めぐり。歩くと、それはまた、楽しいものですよ。越谷入門の第一歩です。

【行程表】

①越谷駅へ集合
②瓦曽根溜井
③久伊豆神社
④天嶽寺
⑤逆川伏越流
⑥越谷御殿跡

第四〇三回　平成二十二年五月十五日

新緑の恵比寿・目黒を訪ねる

参加者数　八十七名　　天候　晴

案内者　安西利夫　常任理事



【案内者　コメント】

越谷市郷土研究会は設立45周年を迎えました。

【行程表】

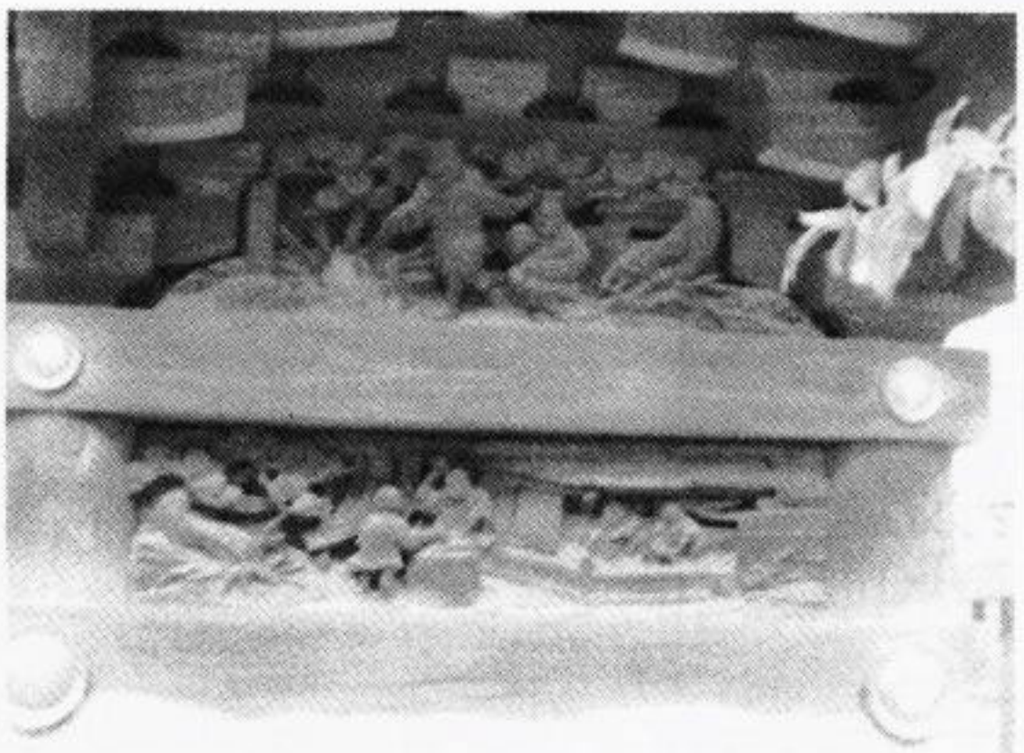
①越谷駅へ集合
②恵比寿ガーデンプレイス
③エビスビール記念館
④展望レストラン
⑤恵比寿三越
⑥アートワーク
⑦東京都庭園美術館
⑧自然教育園

第四〇四回　平成二十二年五月三十日

越谷入門「日光道中・裏道めぐり」

参加者数　八十八名　天候　晴

案内者　幹事Ｇｒ　五名



【案内者　コメント】

裏道も歩かないと「越谷」のことは分からない！

【行程表】

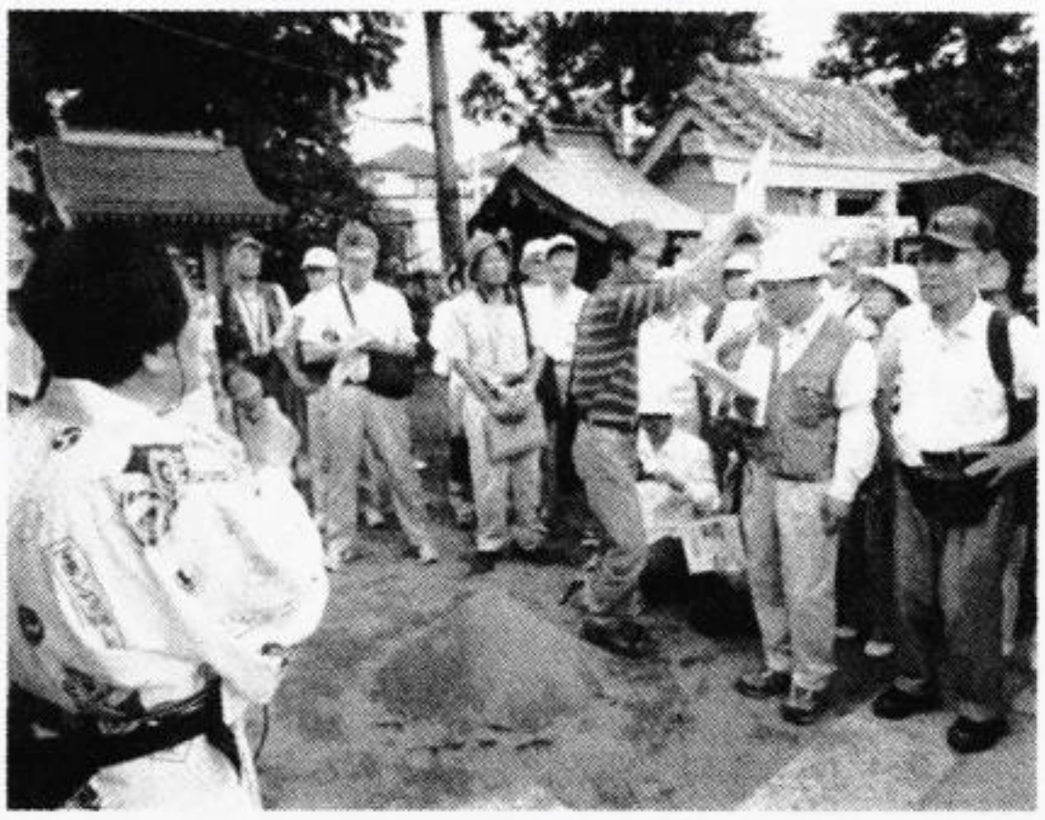
①越谷駅へ集合
②最初の市役所跡地
③新町八幡神社
④観音横丁
⑤「興亜の桜」碑
⑥照光院
⑦天神前土橋跡地
⑧大沢香取神社
⑨北越谷駅で解散

第四〇五回　平成二十二年七月十五日

下間久里の獅子舞と越谷だるま

参加者数　七十九名　天候　晴

案内者　篠原陸郎　常任理事



【案内者　コメント】

一人ではなかなか見たり聴いたり、体験できない江戸時代から伝承される埼玉県指定の無形民俗文化財を見よう。

【行程表】

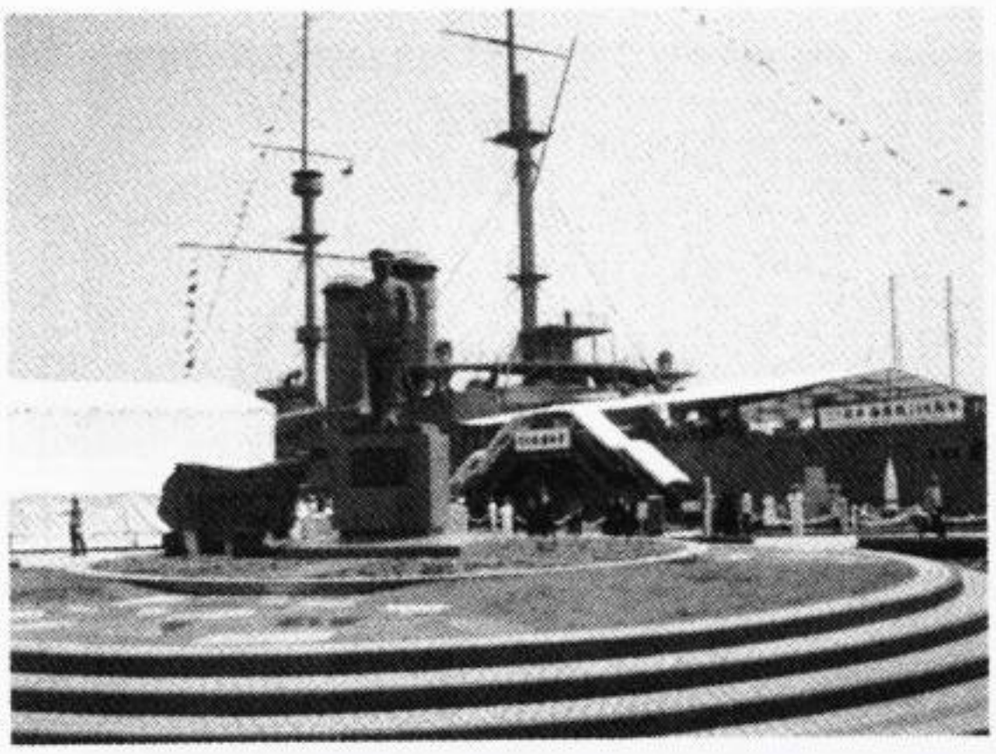
①大袋駅へ集合
②香取神社
③大六天
④石仏群
⑤中村ダルマ商店
⑥北越谷駅にて解散

第四〇六回　平成二十二年七月二十九日

歴史と自然が交差する町　横須賀

参加者数　七十六名　天候　曇後雨

案内者　渡辺和照　常任顧問



【案内者　コメント】

眼で楽しみ、肌で感じ、心で魅入る。

「坂の上の雲」も「龍馬伝」もある　横須賀。

【行程表】

①新越谷駅前へ集合
　バスで移動
②三笠公園と戦艦三笠
③横須賀海軍カレー館
④ヴェルニー公園
⑤ペリー公園
⑥燈明崎／燈明堂
⑦信楽寺

第四〇七回　平成二十二年九月二十五日

秋の護国寺から椿山荘庭園を訪ねる

参加者数　六十七名　天候　晴

案内者　安西利夫　常任理事



【案内者　コメント】

創立四十五周年記念　史跡めぐり。

【行程表】

①越谷駅へ集合
②護国寺
③日本女子大学目白キャンパス
④目白台運動公園
⑤講談社野間記念館
⑥椿山荘庭園
⑦江戸川公園

第四〇八回　平成二十二年十月十三日

筑波へ「コシガヤホシクサ」を見に行く

参加者数　三十三名　　天候　晴

案内者　宮川進　会長



【案内者　コメント】

昭和十二、三年ごろに元荒川べりで発見され、翌年コシガヤホシクサと命名された一年草。開花し見頃を見学する。

【行程表】

①新越谷駅へ集合
②つくば植物園
③国土地理院
④地図と測量の科学館

第四〇九回　平成二十二年十月二十八日

「富岡製糸工場」と甘楽町の歴史散歩

参加者数　六十四名　　天候　雨

案内者　篠原陸郎　常任理事



【案内者　コメント】

創立四十五周年記念　会員限定バスツアー。

【行程表】

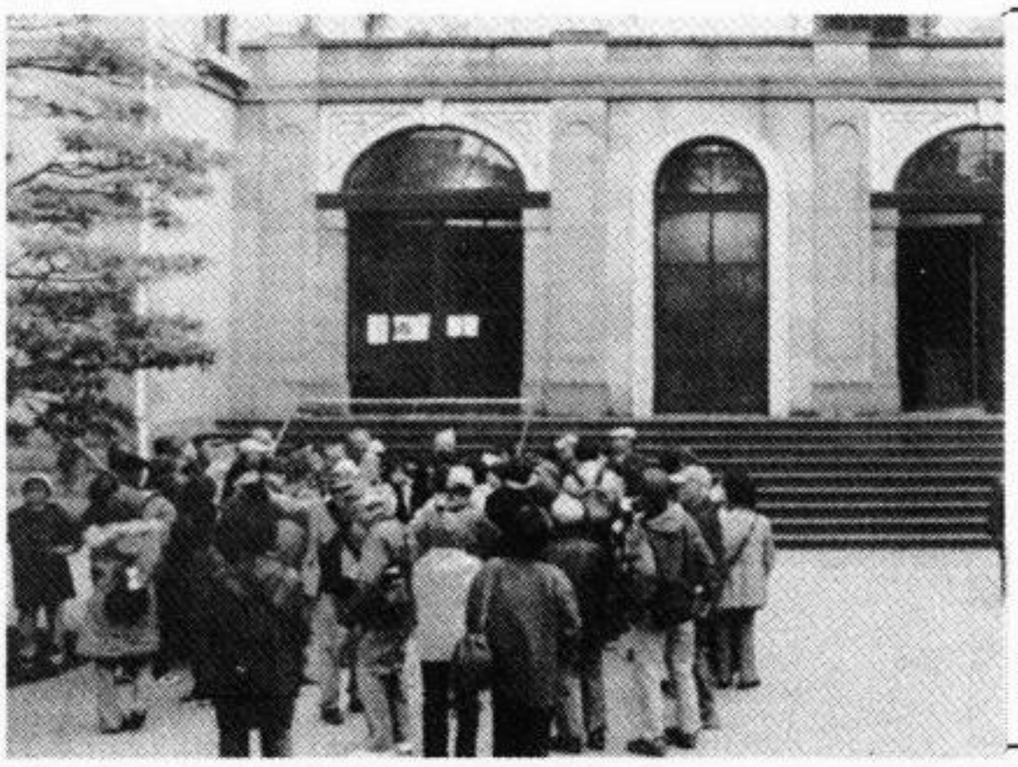
①南越谷駅前へ集合
②一之宮貫前神社
③富岡製糸工場
④甘楽町物産センター
⑤武家屋敷
⑥楽山園
⑦民俗資料館

第四百十回　平成二十二年十一月二十五日

晩秋の東京の水辺　隅田川十二橋めぐり

参加者数　七十二名　天候　晴

案内者　渡辺和照　常任理事



【案内者　コメント】

爽やかに川の上を吹く秋風。庭園美を訪ねて　将軍家の庭園　新橋汐留を歩く。

【行程表】

①越谷駅へ集合
②隅田川水上バス乗り場
③浜離宮恩賜庭園
④旧芝離宮恩賜庭園
⑤日テレタワー
⑥旧新橋停車場
⑦新橋玉木屋

第四百十一回　平成二十二年十二月十日

常陸まほろば路の悠々探訪

参加者数　四十八名　天候　晴

案内者　大谷達人　実行委員



【案内者　コメント】

創立四十五周年　会員限定バス旅行。

【行程表】

①南越谷駅前へ集合
　バスにて
②石岡市民族資料館
③常陸国衛・府中城跡・府中松平家陣屋門
④常陸国総社宮
⑤常陸国分僧寺跡
⑥常陸風土記の丘
⑦常陸国分尼寺跡

第四百十二回　平成二十三年一月三日

小石川七福神を詣でる

参加者数　八十九名　天候　晴

案内者　加藤幸一　副会長



【案内者　コメント】

恒例の新春初詣。みんなで歩いてよい年に！坂のある小石川の歴史を垣間見ながら。

【行程表】

①越谷駅へ集合
②林泉寺
③深光寺
④徳雲寺
⑤極楽水
⑥宗慶寺
⑦真珠院
⑧福聚院
⑨伝通院
⑩源覚寺

第四百十三回　平成二十三年二月二十四日

蘭学で知られる城下町佐倉の歴史散歩

参加者数六十二名　天候　曇時々小雨

案内者　篠原陸郎　常任理事



【案内者　コメント】

会員限定のバスツァーです。

【行程表】

①南越谷駅前へ集合
　バスにて
②佐倉城址公園
③武家屋敷
④甚大寺
⑤旧堀田邸
⑥佐倉順天堂記念館
⑦宗吾霊堂

第四百十四回　平成二十三年四月三十日

元荒川の後を辿りスナッカラ地蔵へ

参加者数　百二名　天候　晴

案内者　加藤幸一　副会長



【案内者　コメント】

案外知らなかった越谷を歩く。久伊豆神社前の元荒川は　昔は花田苑の先まで流れて戻って来た！？ミステリーツァーです。

【行程表】

①貨車の工場跡地
②天神前橋跡地
③大沢七つ池
④地蔵橋そばの地蔵堂
⑤スナッカラ地蔵
⑥伝説「上屋敷」跡地
⑦越谷市立図書館
⑧古川の元荒川流入口
⑨旧・宮前橋

第四百十五回　平成二十三年五月二十四日

盛沢山な埼玉県内歴史散策

参加者数　七十四名　天候　晴

案内者　篠原陸郎　常任理事



【案内者　コメント】

縄文・古墳・中世・近世・近代にわたる史跡を会員限定バスツァーで回ります。

【行程表】

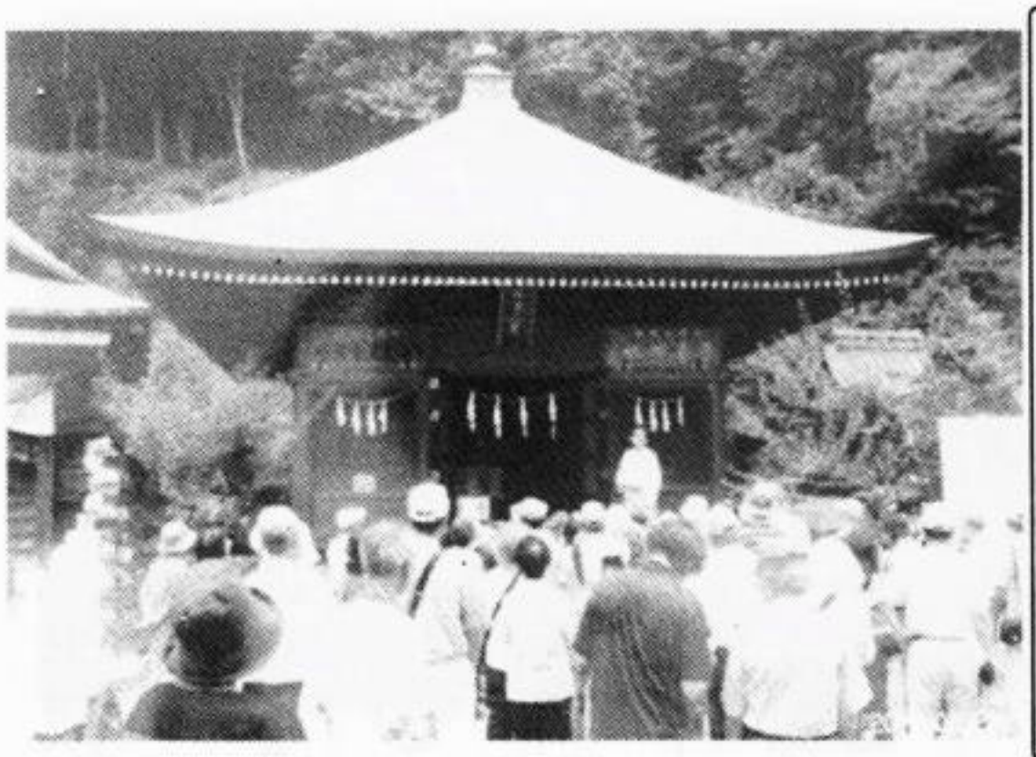
①南越谷駅前へ集合
　バスにて
②水子貝塚
③福岡河岸
④権現山古墳
⑤難波田城跡
⑥平林寺
⑦所沢航空記念公園

第四百十六回　平成二十三年六月二十三日

天然の美大平山、小江戸栃木蔵の街散策

参加者数　六十四名　天候　晴

案内者　渡辺和照　常任理事



【案内者　コメント】

栃木の自然と歴史と街並みが楽しめます。

【行程表】

①越谷駅前へ集合
　バスにて
②おおひら歴史民俗資料館
③おおひら郷土資料館
④謙信平・六角堂
⑤太平山神社
⑥横山郷土館・栃木病院・岡田記念館・翁島別荘
⑦とちぎ山車会館

第四百十七回　平成二十三年七月二十四日

夏の湘南・鎌倉の海と歴史

参加者数　四十七名　天候　晴

案内者　宮川進　会長



【案内者　コメント】

鎌倉の一番東にある材木座海岸と若き日、情熱あふれる説法を展開した日蓮さんの由緒深い日蓮宗のお寺が多い地域をまわります。

【行程表】

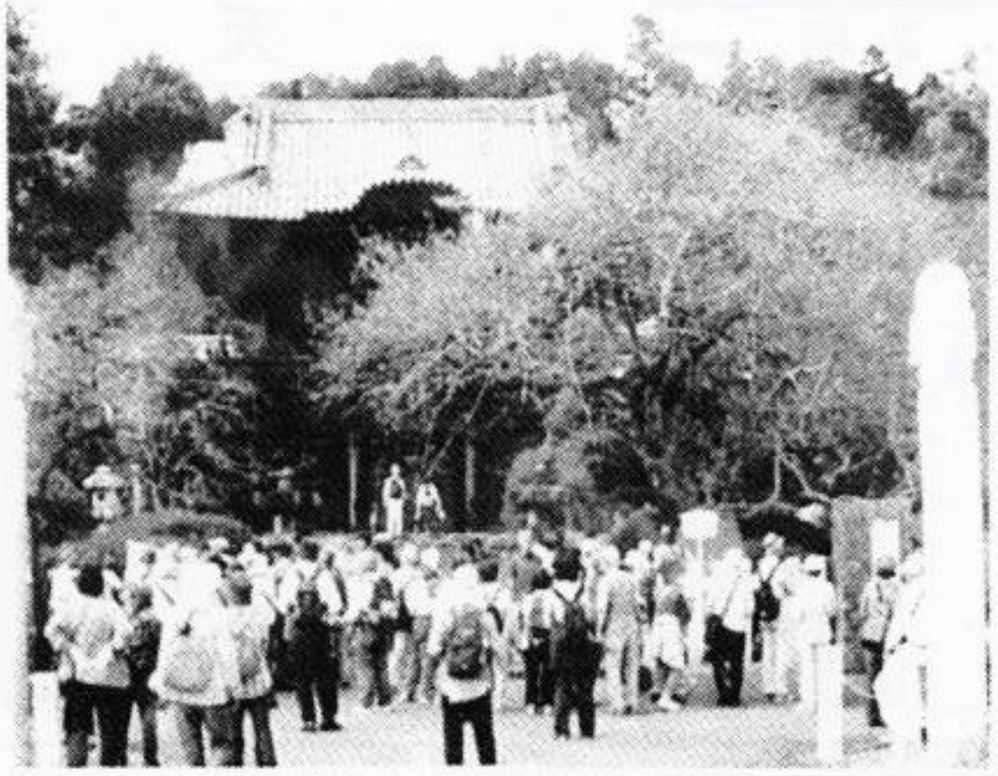
①九品寺
②材木座海岸
③光明寺
④補陀洛寺
⑤実相寺
⑥五所神社
⑦来迎寺
⑧長勝寺
⑨安国論寺　他

第四百十八回　平成二十三年九月二十四日

彼岸花咲く　渡来人ゆかりの地

参加者数　七〇名　　天候　晴

案内者　宮川進　会長



【案内者　コメント】
彼岸花咲く巾着田。高麗王若光の墓聖天院。高麗神社。などを巡る古代ロマンの旅です。

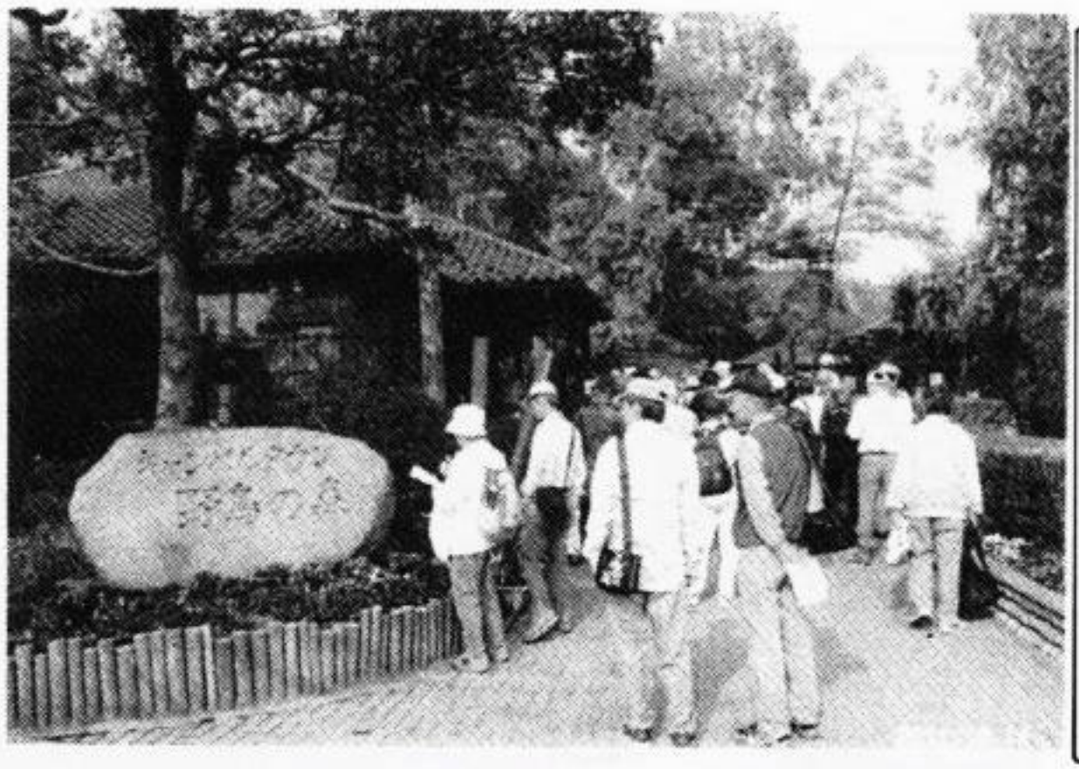
【行程表】
①越谷駅前へ集合
②巾着田
③聖天院
④高麗神社
⑤高麗家住宅

第四百十九回　平成二十三年十月十四日

新方川を歩く

参加者数　五十四名　　天候　晴

案内者　渡辺和照　常任理事



【案内者　コメント】
爽やかな秋空のもと、小鳥たちと会話し、コスモスを愛でながら新方川を辿ります。

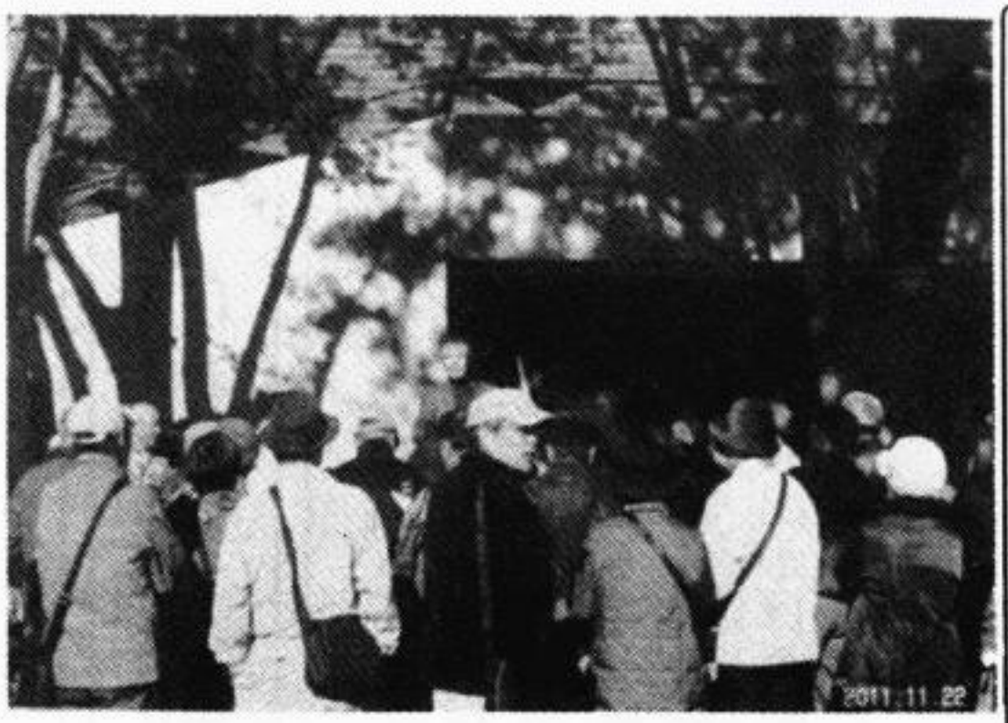
【行程表】
①北越谷駅へ集合
②逆川伏せ越し流
③野鳥の森
④大吉調整池
⑤新方地区センター
⑥くすのき荘
⑦児童館コスモス
⑧念仏橋
⑨せんげん台駅で解散

第四百二〇回　平成二十三年十一月二十二日

円空　こころを刻む秘仏を堪能

参加者数　五十三名　天候　晴

案内者　篠原陸郎　常任理事



【案内者　コメント】
越谷四体を含む埼玉県の円空仏、そして世界で初めての公立の盆栽美術館で「盆栽」を観る。知る。ぜひ　ご家族　お友達もお誘いください。

【行程表】
①越谷駅西口に集合
②埼玉県立歴史と民俗の博物館
③さいたま市大宮盆栽美術館
④大宮公園駅にて自由解散。

第四百二十一回　平成二十三年十二月十六日

白洲正子の武相荘・日本民家園

参加者数　四十一名　天候　晴

案内者　宮川進　会長



【案内者　コメント】
・白洲次郎と正子の住んだ武相荘。神倉家が北条氏のもとに名主として建てた居館　庭園。二十棟以上の民家を見学。

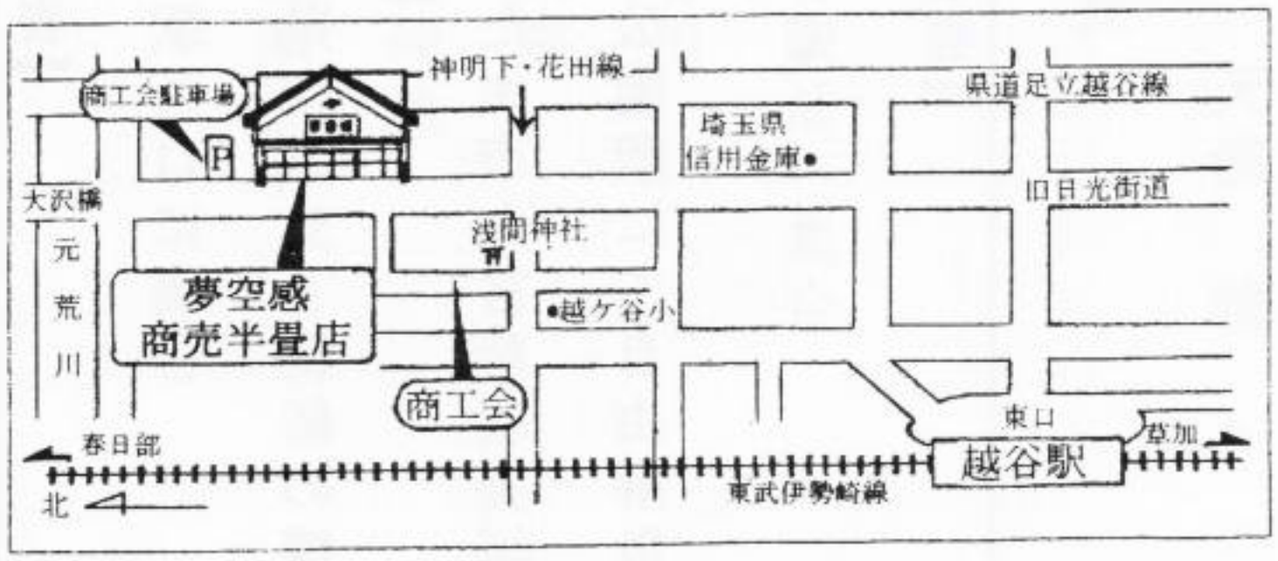
【行程表】
①南越谷駅へ集合
　バスにて移動
②武相荘見学
③香山園拝観
④日本民家園

その他の活動

1．事務所

当会の事務所を兼ねた情報発信拠点は越ケ谷町の旧日光街道沿いのチャレンジショップ「夢空感」内に置かれています。日光街道沿いの商店街へお出かけの際には、憩いの場、お休み場としてもご利用ください。

「夢空感」は、月曜日は定休です。営業時間は午前十時から午後六時までです。当会の電話とFAX番号は、九六二―二六五一です。お出かけの前にご確認ください。



2．ホームページ

ホームページの運営は、「越谷市郷土研究会電子情報化委員会」が担当し、次のような目的を持って日々活動しております。

①当研究会が過去四十数年にわたって作成・収集した膨大な資料を電子化して保存することにより、それらの散逸を防ぐ。

②電子化したこれらの新旧資料の内容を検討・整理し、検索や活用をしやすくする。

③ホームページには、当研究会の活動内容及びイベントを載せ、PRすることにより、イベント参加者増を図り、同時に、新規会員入会者増につなげる。さらに、検討・整理された電子化資料をホームページに公開することにより、越谷市民の郷土への関心をより深め、郷土愛に進化することにも寄与する。

3．募金活動

当会主催の講演会の時に当会発行の資料等のチャリティーセールを行ってきました。平成二十一年六月以降は、次のとおりです。

平成二十一年六月二十八日のチャリティーセールの代金
八、五〇〇円を越谷市社会福祉協議会に寄附
平成二十二年一月三十一日のチャリティーセール代金
六、七〇〇円を越谷市社会福祉協議会に寄附
平成二十二年六月二十七日のチャリティーセール代金
一一、三〇〇円を越谷市社会福祉協議会に寄附
平成二十三年一月二十三日のチャリティーセール代金
三、六〇〇円を越谷市社会福祉協議会に寄付

以上の他に、平成二十三年三月十一日の「東日本大震災」の被災者への、当会の皆様のお気持ちの籠った義捐金（平成二十三年六月二十六日の総会及び講演会の際の寄金・チャリティ、第四一五回見学会の会費の一部）に当会会計から支出したものをあわせて計三万円を、福島県から越谷市へ避難され、「二歩会」という団体（新妻敏夫会長）を作ってお互いに励ましあっておられる方々へお届けさせていただきました。

4．歴史ミニ講座

当会役員対象の越谷市の郷土の歴史の学習会です。月に一回の割合で開いています。

会報「古志賀谷」第１６号アンケート

問１　日本史の中で、次のどの時代に興味・関心がありますか。
　一つだけ選んで○印で囲んで下さい。
　①　旧石器時代・縄文・弥生　②古墳　③飛鳥　④奈良・平安　⑤鎌倉
　⑥室町（南北朝・戦国）　⑦安土桃山　⑧江戸　⑨明治・大正　⑩昭和（終戦まで）　⑪戦後

問２　問１で選んだ理由を簡単に書いて下さい。（例、○○が好き　○○に興味）

問３　「越谷の歴史」と、言えば何を連想しますか。

問４　越谷市の古い行事や祭りで、実際に見たことがあるものに○印を付けて下さい。（複数回答可）

川崎神社のオビシャ	初午（　　）	下間久里の獅子舞
久伊豆神社の秋祭り	北川崎の虫追い	百万遍念仏（　　）
観音経（　　）	神楽（　　）	その他（　　）

アンケート集計結果

お名前	ご出身地	問１	問２	問３	問４
阿久津弘江	栃木県栃木市	① 旧石器・縄文・弥生	食物に興味	家並・商家の家の造りの成立	
伊藤貴美	埼玉県北葛飾郡	⑧　江戸	江戸文化が好き	力石	久伊豆神社の秋祭り
小原祐美	神奈川県横浜市	④ 奈良・平安	寺院仏像に興味		下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
遠藤　洋	埼玉県越谷市	⑤　鎌倉	東国武士に興味	大相模不動	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
新井敏浩	栃木県	⑧　江戸	あらゆる分野の変遷	河川と宿場	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い
山崎弘治	新潟県新潟市	⑧　江戸	近代への政治経済・外交等大変革期	日本有数の河川と低地	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
長谷川義夫	東京都江東区	⑧　江戸	江戸庶民生活に興味	徳川家康	川崎神社のオビシャ 下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り 北川崎の虫追い

芳賀登美子	福島県会津美里町	① 旧石器・縄文・弥生	色々な事が繋がった時で興味あり	日光街道 宿場町	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い
高野栄次郎	東京都足立区	④ 奈良・平安	仏像が好き	街道の宿場町	神楽（久伊豆神社）
川原文子	栃木県	④ 奈良・平安	女性が果敢に活躍した時代に興味	民間伝承が豊か	川崎神社のオビシャ 下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い
岩瀬静江	埼玉県越谷市	②　古墳	邪馬台国はどこにあったのか興味	宿場町	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り 初午・神楽
間野栄一	茨城県筑西市	⑧　江戸	大名支配に興味		下間久里の獅子舞
加藤幸一	東京都足立区	⑧　江戸	石仏に興味	越谷御殿等	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り 北川崎の虫追い 観音経（西方の番場）
吉井ミチ子	新潟県小千谷市	⑥ 室町（南北朝・戦国）	江戸時代までの自分のルーツ	江戸時代の街道の歴史	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
田中かよ子	埼玉県越谷市	④ 奈良・平安	生活の様子	久伊豆神社	初午
小川原政子	埼玉県久喜市	③　飛鳥	国としての形成時期	宿場町	北川崎の虫追い 神楽（久伊豆）
大内　登	福島県	④ 奈良・平安	分かり易い時代	日光街道 越谷の宿場	久伊豆神社の秋祭り 神楽（久伊豆）
竹村克男	東京都	④ 奈良・平安			
遠藤欣次	茨城県小美玉市				
小林かつよ	埼玉県加須市	③　飛鳥	律令国家創立期に興味	越谷宿	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い その他（久伊豆神社夏越の祓え）

尾川芳男	埼玉県越谷市	⑪　戦後	戦後復興に国民が全ての面で努力	二町八村が合併、これが今の越谷	初午（二午実施） 下間久里の獅子舞 神楽（香取神社）
篠原英弥	東京都目黒区	⑨ 明治・大正	鎖国から近代国家へダイナミックな時代の流れ	江戸に近い街道筋 豊富な河川の変遷	㊎（北越谷香取神社の雛祭り）
田沼隆司	栃木県栃木市	⑧　江戸	江戸城の歴史に興味	宿場町 日光街道	㊎平方浅間神社の○○踊り（６月３０日）
毛利健治	東京都荒川区	① 旧石器・縄文・弥生	大昔の人達の生活形態に興味	越谷宿	久伊豆神社の秋祭り
井上瑳久江	東京都足立区	⑧　江戸			下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
和田尚之	東京都板橋区	① 旧石器・縄文・弥生	土器が好き	水害の改善改良	
藤田佑子	東京都足立区	④ 奈良・平安	女流作家・藤原氏に興味	御殿町	北川崎の虫追い
田部井久能	群馬県伊勢崎市	⑦ 安土桃山	城が好き	日光街道	久伊豆神社の秋祭り 神楽
渡辺和照	福島県郡山市	⑪　戦後	日本の夜明けに興味	見田方遺跡	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
松浦節也	高知県須崎市	⑧　江戸	各藩の政治経済・文化	一面の水田と水郷	下間久里の獅子舞
西川峰雄	滋賀県蒲生郡	⑪　戦後	近代化成長	宿場町	久伊豆神社の秋祭り
宮内和代	東京都荒川区	⑦ 安土桃山	人口の分布 川の様子	川	下間久里の獅子舞
新野トモ子	山形県白戸町	⑩　昭和終戦まで	自分が育った時代	達磨・人形・能	
天井　実	東京都葛飾区	⑪　戦後	自分が生きた時代	鉄道	
大野悦治	埼玉県越谷市	④ 奈良・平安	神社仏閣に興味	日光街道の宿場町	

鈴木弥七	福島県郡山市	⑧　江戸	庶民の生活に興味	宿場町と鷹狩り	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
平田道昭	栃木県矢板市	⑧　江戸	史跡等の記録がある	日光街道	久伊豆神社の秋祭り
杉渕真喜子	秋田県秋田市	④ 奈良・平安		御殿跡	川崎神社のオビシャ 北川崎の虫追い・神楽
小野田吉秀	東京都荒川区	⑦ 安土桃山	父が三河出身の為面白い		
石渡ミチ	埼玉県松伏町	⑧　江戸	越谷出身日本一の力持ち三野宮卯之助が好き	日光街道の越谷宿	川崎神社のオビシャ 下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 久伊豆神社の秋祭り
坂巻絹江	東京都	⑧　江戸	鎖国の中での庶民の生活のあり方	日光へ通じる越谷宿	久伊豆神社の秋祭り
小沼登茂子	東京都墨田区	③　飛鳥	当時の人々の生活に興味	しらこばと	久伊豆神社の秋祭り
大澤　茂	埼玉県春日部市	⑧　江戸	関東の地形河川形成期	河川	川崎神社のオビシャ 北川崎の虫追い
木村恵仲	群馬県館林市	⑥ 室町（南北朝・戦国）	人間の生きざまに興味	非常に保守的・受身	下間久里の獅子舞 北川崎のオビシャ 久伊豆神社の秋祭り
江森峰子	東京都足立区	⑦ 安土桃山	信長・秀吉・家康が好き	越谷宿	下間久里の獅子舞
高橋康浩	東京都港区	⑧　江戸	五街道に興味	日光街道の宿場町	
大河内祥行	愛知県安城市	⑧　江戸	当時の古文書が多く残っている	日光街道宿 平田篤胤ゆかりの地	下間久里の獅子舞
斉藤英夫	埼玉県さいたま市	⑥ 室町（南北朝・戦国）	ダイナミックな戦国時代が好き	日光街道の宿場町 大相模の中村家の歴史	久伊豆神社の秋祭り

酒井　正	東京都墨田区	⑧　江戸	多様な文化 武士．庶民二種類の社会		
渡辺久剛	新潟県三条市	⑧　江戸	人々の生活	宿場	下間久里の獅子舞
守屋不二夫	静岡県浜松市	⑨ 明治・大正	明治維新前後の人物に興味	旧越谷宿の町並	久伊豆神社の秋祭り ㊫大聖寺の豆まき 八坂神社の祭礼
大川　博	栃木県足利市	③　飛鳥	解明されてない事が多いので興味	日光道中越谷宿	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り 初午（瓦曽根の稲荷）
石黒　茂	神奈川県横浜市	① 旧石器・縄文・弥生	土器が好き	江戸時代の宿場	下間久里の獅子舞
中尾浩久	東京都町田市	⑧　江戸	宿場・文化・街道に興味	日光街道と古い村落	
峰　孝久	長崎県長崎市	⑧　江戸	江戸時代の歴史・宿場町に興味	宿場町	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 久伊豆神社の秋祭り
増岡武司	東京都北区	⑩　昭和 終戦まで	昭和初頭～終戦までの日本の実情	日光道中と宿場町	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
島根岱助	埼玉県越谷市	⑧　江戸	越谷の町の発展の様子に興味	日光街道の宿場町	下間久里の獅子舞 ㊫大澤香取神社のオビシャと観月祭
漆原直子	東京都板橋区	②　古墳	日本の国の形成期に興味	旧日光街道の越谷宿	久伊豆神社の秋祭り 百万遍念仏 神楽（越谷の秋祭り）
西島　孝	東京都台東区	④ 奈良・平安	建築等に興味	水の町	
坊野清之	静岡県静岡市	②　古墳	邪馬台国に興味関心	越谷宿	久伊豆神社の秋祭り
菅原貞良	山形県鶴岡市	⑧　江戸	戦国時代	宿場町	下間久里の獅子舞
山本泰秀	埼玉県越谷市	① 旧石器・縄文・弥生	遠い過去の人々に興味	見田方遺跡	

蓮田敏晶	大阪府大阪市	⑦ 安土桃山	城に興味	宿場	
唐子　実	千葉県銚子市	⑥ 室町（南北朝・戦国）	上杉謙信が好き	日光街道の宿場	㊎大相模不動尊の梨の市
田端功政	埼玉県美里町	⑧　江戸	江戸時代の全てに興味	日光街道	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い
小林清子	埼玉県比企郡	⑧　江戸	江戸時代の地形に興味	一面の湿地	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
泉　雅彦	新潟県長岡市	②　古墳	古墳・陵墓・古代遺跡	越谷雛 越谷御殿	
吉野理洋子	東京都世田谷区	⑧　江戸	江戸時代に見習う事が多いので	久伊豆神社大の付く地名が多い	
谷岡隆夫	大阪府大阪市	⑤　鎌倉	寺院に興味	郷土研究会	川崎神社のオビシャ 下間久理の獅子舞 北川崎の虫追い 初午（いぼ稲荷）
池田　仁	埼玉県越谷市	① 旧石器・縄文・弥生	分からない事が多い時代なので	大聖寺の創建	久伊豆神社の秋祭り 百万遍念仏・観音経 神楽
菅波昌夫	東京都台東区	④ 奈良・平安	藤原氏の摂関政治全盛・藤原道長に興味	寺院の山門力石・御朱印帳・新六地蔵・円空仏	下間久理の獅子舞 北川崎の虫追い・神楽 久伊豆神社の秋祭り ㊎天嶽寺の木造釈迦如来涅槃像
中野鉄雄	埼玉県越谷市	⑪　戦後	高度成長期の生活変遷	越谷宿	
鈴木裕司	東京都文京区	⑧　江戸	庶民の暮らしに興味	農村と宿場	久伊豆神社の秋祭り
八木下邦夫	東京都台東区	⑪　戦後		お祭り	川崎神社のオビシャ 下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い・神楽 久伊豆神社の秋祭り 百万遍念仏・観音経 初午　㊎大師送り

長谷川久一	福島県川俣町	③　飛鳥	天智天武持統の時代に興味	利根川と荒川の流域	川崎神社のオビシャ 下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 百万遍念仏
大野保司	埼玉県越谷市	⑧　江戸		久伊豆神社 迎摂院	久伊豆神社の秋祭り 神楽
鈴木すみ子	群馬県太田市	③　飛鳥	貧富の差 万葉集誕生	農耕と水との闘い	久伊豆神社の秋祭り ㊎花祭り
前田和子	埼玉県越谷市	④ 奈良・平安	古文書・和歌に興味	昔からの習わし・獅子舞	下間久里の獅子舞 初午・観音経・神楽
永井勇雄	兵庫県宍粟市	⑧　江戸	日本発展の礎を築いた若者の活躍	久伊豆神社	
新井良夫	群馬県桐生市				下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い
角田　久	群馬県渋川市	⑧　江戸	武士から農民等の生活に興味	見田方遺跡から分かる長い歴史	下間久里の獅子舞
鈴木照子	埼玉県志木市	⑨ 明治・大正	近代資料調査に長年携わってきた	河川交通 宮内庁鴨場	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 百万遍念仏
堀越正夫	東京都	⑨ 明治・大正	明治維新に興味		久伊豆神社の秋祭り
藤川吉洋	広島県呉市	⑧　江戸	越谷の原点は江戸時代	川と用水	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
杉浦健之	東京都台東区	⑤　鎌倉	鎌倉仏教と仏像を興味	日光街道の旧家と倉	久伊豆神社の秋祭り 下間久里の獅子舞 北川崎のオビシャ
小野博康	宮城県仙台市	⑨ 明治・大正	明治維新・日露戦争に興味	宿場町	下間久里の獅子舞 久伊豆神社の秋祭り
金子峯子	埼玉県桶川市	②　古墳	埴輪・石室の壁画に興味		
藤井佐登子	埼玉県越谷市	⑧　江戸	町民文化に興味	日光街道の隆盛と宿場町	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い

市川巳隆	愛知県豊川市	⑤　鎌倉	義経が好き	大聖寺不動坊創建	久伊豆神社の秋祭り
飯塚多摩子	埼玉県入間市	⑧　江戸	風俗・暮らし	宮内庁鴨場	下間久里の獅子舞
荻野功夫	埼玉県越谷市	⑧　江戸	新撰組の活動に興味	大澤の街並みと往還に昔の名残有	北川崎の虫追い 久伊豆神社の秋祭り 神楽（荻島）
貴田陽一	東京都渋谷区			宮内庁鴨場	
西沢恒衛	東京都新宿区	⑥ 室町（南北朝・戦国）	時代に興味	日光街道	㊎久伊豆神社へ初詣
阿部文治	東京都中野区	⑪　戦後	高度成長期は現役時代	国民健康保険の発祥地	観音経（番場）
堤竹宏吉	栃木県下都賀市	⑩　昭和終戦まで	小学校時代が懐かしい	郷土研究会の史跡廻り	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 久伊豆神社の秋祭り
中村幹子	東京都荒川区	④ 奈良・平安	文学に興味	墳墓	下間久里の獅子舞
高田哲夫	東京都伊豆大島	⑦ 安土桃山	日本全国の城が好き	天領	久伊豆神社の秋祭り
山口正夫	富山県南砺市	⑧　江戸	現代社会の仕組の基本	日光街道	下間久里の獅子舞 ㊎大房稲荷神社大祭
塚本　昭	栃木県霞ヶ浦市	⑨ 明治・大正	資料が手に入り易い	神社・仏閣	下間久里の獅子舞
井上敏雄	神奈川県相模原市	⑥ 室町（南北朝・戦国）	能の大成者世阿弥に興味	宿場	
大野　浩	埼玉県越谷市	⑨ 明治・大正	明治の人物が好き	宿場町と商業の地	久伊豆神社の秋祭り
田中民江	東京都新宿区	③　飛鳥	ロマンあり	日光街道 御殿町	下間久里の獅子舞
浜　富雄	三重県多気郡	⑩　昭和終戦まで	資料の入手が容易	三野宮卯之助の生涯	川崎神社のオビシャ 下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い
松澤喜代子	埼玉県越谷市	⑨ 明治・大正			久伊豆神社の秋祭り 百万遍念仏

会田克之	埼玉県久喜市	② 古墳	日本国の成立に興味	越谷宿	
篠原睦郎	東京都世田谷区	⑧ 江戸	現在も含め有史以来人間味のある最高の時代	日光街道と川の変遷	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 神楽
田中利昌	埼玉県越谷市	④ 奈良・平安	天台・真言・浄土等宗教に興味	越谷宿	久伊豆神社の秋祭り
藤原征司	秋田県秋田市	④ 奈良・平安	摂関政治から武士の時代への変遷	越谷宿 越谷御殿と鷹狩り	
飯泉信夫	東京都北区	⑦ 安土桃山	日本の国の礎期	河川・用水等の先人の苦労と英知	久伊豆神社の秋祭り 北川崎の虫追い ㊎香取神社のおかめ市
沢辺文子	福島県郡山市	⑧ 江戸	幕末期興味		
小泉平八郎	滋賀県東近江市	⑦ 安土桃山	信長革新策 秀吉の統一に興味	家康の鷹狩	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 久伊豆神社の秋祭り
大谷達人	愛知県弥富市	⑧ 江戸	徳川入府以降の村落形成に興味	日光道中と越谷宿	久伊豆神社の秋祭り 百万遍念仏（安国寺）
増田好子	茨城県	⑪ 戦後	何をするにも自由		
大館 浄	北海道	③ 飛鳥	仏教普及の根本的な理由に興味	日光街道の宿場	下間久里の獅子舞
小川正雄	埼玉県行田市	② 古墳	埼玉古墳に親近感有り	宿場町	久伊豆神社の秋祭り
坂本誠一郎	広島県福山市	⑨ 明治・大正	知りたい事が多い	野与党（現中村家）に興味	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い
山崎定治	埼玉県春日部市	⑧ 江戸	幕末と明治維新に興味	日光街道の宿場町	久伊豆神社の秋祭り
浅川恵子	岡山県岡山市	⑨ 明治・大正	近代社会の幕明けの時	宿場町	久伊豆神社の秋祭り 神楽

酒井達男	東京都墨田区	⑩　昭和終戦まで	日本史最大の戦争の真実探究に関心	元荒川	川崎神社のオビシャ 下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 久伊豆神社の秋祭り
森田三男	埼玉県越谷市	③　飛鳥	素朴で力強いところが好き	越谷市庁舎 旧福祉会館	久伊豆神社の秋祭り 下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 観音経と初午（大泊）
和泉　守	大阪府大阪市	⑧　江戸	今に繋がる時代が好き	日光街道	下間久里の獅子舞
小野　肇	秋田県小坂市	⑧　江戸	江戸文化が好き	宿場町	川崎神社のオビシャ 下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 久伊豆神社の秋祭り 百万遍念仏（蒲生） 初午（大泊）神楽（出羽）
森田傳一	埼玉県さいたま市	⑥ 室町（南北朝・戦国）	武将達の生き様に興味	旧越谷町時代の祭り山車	下間久里の獅子舞 北川崎の虫追い 久伊豆神社の秋祭り
匿名	東京都	③　飛鳥			
匿名	東京都	⑩　昭和終戦まで	戦争を引起した上層部の事に興味	昔は駅前に黒いトタン屋根の建物有り	
宮川　進	滋賀県近江八幡市	②　古墳	弥生時代から卑弥呼の時代、古墳時代へと日本というものが出来た頃	日光道中	下間久里の獅子舞 北川崎お虫追い 久伊豆神社の秋祭り

越谷市郷土研究会 会員名簿

敬称略・五十音順　　2011年12月1日現在　324名

1	会田　清
2	会田　克之
3	青山　栄吉
4	阿久津弘江
5	浅井　明
6	淺川　恵子
7	浅子　定子
8	浅野目美恵子
9	阿部　緑
10	阿部　文治
11	阿部　光江
12	天井　実
13	天野　武
14	荒井　邦夫
15	新井　敏浩
16	新井美代子
17	新井　良夫
18	荒金　照登
19	荒木　恭子
20	有元　淳子
21	安西　利夫
22	飯泉　信夫
23	飯塚多摩子
24	池田　仁
25	伊佐馬悦子
26	石垣　佳男
27	石垣季枝子
28	石黒　茂
29	石田　忠樹
30	石山　博
31	石渡　ミチ
32	泉　雅彦
33	和泉　守
34	磯谷　知子
35	市川　巳隆
36	伊藤　貴美
37	伊藤　靖二
38	井上瑳久江
39	井上　敏雄
40	井橋　義夫
41	岩瀬　静江
42	岩根　富子
43	岩間　弘行
44	岩本　勝義
45	上原　尚章
46	上原　保夫
47	牛込はる子
48	臼倉　洋子
49	内田　文江
50	漆原　直子
51	榎本紀美子
52	江森　峰子
53	遠藤　洋
54	遠藤　欣次
55	大内　登
56	大川　博
57	大川　昌三
58	大河内祥行
59	大沢　茂
60	大須賀治郎
61	太田紀代子
62	大谷　達人
63	太田　秀男
64	大館　浄
65	大塚　国治
66	大西　チエ
67	大野　浩
68	大野　悦治
69	大野　保司
70	大橋　浩子
71	大港　信作
72	岡井三枝子
73	岡本　金夫
74	小川　章
75	小川　康治
76	小川　正雄
77	尾川　芳男
78	小河原政子
79	荻野　功夫
80	小曽川弘美
81	小野　肇
82	小野田吉秀
83	小野　則子
84	小野　博康
85	小野　了子
86	小原　祐美
87	小原勘三郎
88	柿沼　孝行
89	加藤　幸一
90	加藤富士代
91	加藤　雅子
92	香取世志男
93	金子　俊
94	金子　寛
95	金子　三郎
96	金子　峯子
97	亀田すみ子
98	唐子　実
99	川上　金蔵
100	川島　喜代
101	川添ハルミ
102	川原　文子
103	川端　孝夫
104	岸　サク
105	北川　善三
106	北村奈於美
107	貴田　陽一
108	木原　徹也
109	木村　恵仲
110	工藤　迪子
111	熊谷　正博
112	倉持唯枝子
113	黒田　信子
114	桑原　嘉子
115	小泉平八郎
116	甲田美恵子
117	小島智恵子
118	越村　英雄
119	小島　徹
120	小島　千枝
121	小島　千代
122	小島　久枝
123	小沼登茂子
124	小林かつよ
125	小林　清子
126	小林　孝義
127	小林　静夫
128	小林　威郎
129	小林　登
130	小林　憲子
131	小林　光男
132	小松崎登美子
133	小山　淳子
134	後藤　美香
135	斉藤　守
136	斉藤　英夫
137	酒井　正
138	酒井　達男
139	坂巻　絹江
140	坂本　梅香
141	坂本誠一郎
142	桜田　洋子
143	佐々木一磨
144	佐竹　春江
145	佐藤　恵子
146	佐藤　弘二
147	佐藤　修實
148	佐藤　光夫
149	沢田　清子
150	沢辺　文子
151	首藤　久枝
152	篠塚　義雄
153	篠原　英弥
154	篠原　陸郎
155	柴崎巳代子
156	渋谷　正芳
157	島根　岱助
158	清水　初江
159	下田　則子
160	管　清子
161	須賀　弘
162	菅波　昌夫
163	須賀由紀子
164	菅原　貞良

165	杉浦　健之
166	杉渕真喜子
167	鈴木　康礼
168	鈴木　進志
169	鈴木すみ子
170	鈴木世津子
171	鈴木　照子
172	鈴木　秀俊
173	鈴木　弥七
174	鈴木　裕司
175	鈴木　陽江
176	関根　和夫
177	染谷　耕司
178	染谷　勇蔵
179	染谷　高行
180	高倉和嘉子
181	高﨑　　力
182	高田すみえ
183	高田　哲夫
184	高野栄次郎
185	高橋　将介
186	高橋　とき
187	高橋　康浩
188	高山　はつ
189	瀧田　雅之
190	田口　正信
191	竹内　喜昭
192	竹村　克男
193	竹谷フミ子
194	田中かよ子
195	田中　民江
196	田中　利昌
197	田中　直子
198	谷岡　隆夫
199	田沼　京子
200	田沼　隆司
201	田端　功政
202	田端　嘉雄
203	田部井久能
204	多羅尾義之
205	塚田　照男
206	塚田　美華
207	塚本　　昭
208	堤竹　宏吉
209	角田　　久
210	津山　正幹
211	寺田　一代
212	寺田　桂子
213	東條　悦子
214	殿木美枝子
215	殿山　悦三
216	冨澤　康雄
217	冨田アケミ
218	豊田　　重
219	豊田　益子
220	内藤　録次
221	仲井美智子
222	中尾　浩久
223	中澤　元紹
224	中沢　正夫
225	中島　栄子
226	中野　鉄雄
227	中村　幸夫
228	中村　幹子
229	永井　勇雄
230	永作　公道
231	長瀬由木夫
232	名倉三津枝
233	新野トモ子
234	西川　信徹
235	西川　峰雄
236	西沢　恒衛
237	西島　　孝
238	根岸　久子
239	野口　祐許
240	服部　正一
241	服部　淑子
242	芳賀登美子
243	橋本ミツエ
244	長谷川久一
245	長谷川義夫
246	秦野　秀明
247	浜　　富雄
248	浜島はじめ
249	浜野　肇
250	原　　良子
251	原田　民自
252	平田　道昭
253	福井　勝衛
254	福井　恵子
255	福田　ふく
256	藤井佐登子
257	藤川　吉洋
258	藤田　浩行
259	藤田日出男
260	藤田　佑子
261	藤原　治郎
262	藤原　征司
263	古田　美雄
264	古谷　京子
265	北江　千代
266	細井　敬子
267	堀井　静枝
268	堀井　博之
269	堀越　正夫
270	本銚　文子
271	坊野　清之
272	前田　和子
273	増岡　武司
274	増田　好子
275	松浦　節也
276	松澤喜代子
277	松本　新市
278	間野　栄一
279	水上　　清
280	水谷　光子
281	峰　　孝久
282	宮内　和代
283	宮川　　進
284	宮下　孝雄
285	武者ミツ子
286	村上　瀏治
287	室橋　和子
288	毛利　健治
289	望月たけし
290	望月よし江
291	森田　傳一
292	森田　三男
293	守屋不二夫
294	八木下邦夫
295	矢口　博孝
296	安田　輝子
297	矢野美保子
298	籔　　高道
299	山口　正夫
300	山口みどり
301	山崎　孝二
302	山崎　弘治
303	山崎　定治
304	山崎　ミツ
305	山本　　昭
306	山本　一夫
307	山本　希八
308	山本　泰秀
309	八本　澄子
310	柚原　一友
311	吉井ミチ子
312	吉川　輝男
313	吉越　紀子
314	吉田　和子
315	吉田　忠雄
316	吉野夫美子
317	吉野理津子
318	蓬田　敏昌
319	楽の蔵安田恵三
320	若原　治夫
321	渡辺　和照
322	渡辺　久剛
323	渡辺　景子
324	和田　尚之

NPO法人 越谷市郷土研究会 役員

— 平成23年(2011)7月～平成25年(2013)6月

常任顧問	谷岡 隆夫	髙﨑 力		
顧問	増岡 武司			
会長	宮川 進			
副会長	加藤 幸一			
幹事長	藤川 吉洋			
幹事	中村 幸夫			
常任理事	青山 榮吉	篠原 陸郎	田端 功政	
	原田 民自	渡辺 和照		
理事	新井 敏浩	渋谷 正芳	田中 利昌	
	角田 久	永井 勇雄	長谷川義夫	
	浜 富雄	古谷 京子	宮内 和代	
	山口 正夫	山崎 弘治		
参事	小泉平八郎	小林 光男	福井 勝衛	
	藤田 浩行	山本 希八		
監事	峰 孝久	吉田 忠雄		

NPO法人 越谷市郷土研究会 実行委員

— 平成23年(2011)7月～平成25年(2013)6月

臼倉 洋子	大谷 達人	小河原政子	香取世志男
坂本誠一郎	鈴木すみ子	田部井久能	西島 孝
服部 正一	秦野 秀明	水谷 光子	森田 三男

NPO法人 越谷市郷土研究会 会友

池田 仁	小原勘三郎	木原 徹也	鈴木 秀俊	
堤竹 宏吉				

会報「古志賀谷」掲載基準

会報掲載の混乱・異同をさけるため、基準を設ける。

一、会員・会員外の原稿を受けつける。

原稿は、越谷につながるもので、原則として独自性のあるものとする。

二、原稿の字数は次の各号とする。

(ア) 調査・研究の記録は、字数制限はしない。

(イ) 紀行・随筆は、二千字程度とする。

三、次の各号に該当する原稿は編集委員会で掲載の可否を審議する。

(ア)特定の政治的主張、または政党勢力拡大を内容とする原稿。

(イ)特定の宗教を流布し、または勧誘する内容を含む原稿。

(ウ)営利を目的とする内容を含む原稿。

(エ)差別の内容を含む原稿。

(オ)戦争賛美を内容とする原稿。

(カ)他人への中傷を内容とする原稿。

(キ)その他、特定の意図を含む原稿、または穏当を欠く原稿。

四、第三者の調査・研究・報告・書籍を引用するときは原則として著者名・書名・出版社名・出版年度を明記する。

五、会員名簿は、氏名のみを掲載する。個人情報保護のため、住所・電話番号は掲載しない。

六、本基準の変更は、理事会の議決を経るものとする。

付則　本基準の施行は、平成二十一年六月三十日とする。

あとがき

当会の取り組みや会員の研究成果を後世に残したいとの思いと、多くの会員の皆様が誌面に登場することを願いながら編集を進めてまいりました。特に今号では、特集記事の新設や地元の方々からの語りを「四方山話」という形で取り入れました。今後とも会員皆様のご支援の程、よろしくお願い申し上げます。

編集委員　大野悦治　加藤幸一（代表）　坂本誠一郎
　　鈴木すみ子　田端功政　田部井久能　浜　富雄
原稿作成委員
　　岩間弘行　多羅尾　義之　豊田益子　渡辺久剛

会　報「古志賀谷」第十六号
発行日　平成二十三年（二〇一一）十二月
発行者　NPO法人　越谷市郷土研究会
　　埼玉県越谷市千間台西二―十七―十六
代表者　宮川　進
印刷所　三光堂印刷所
　　埼玉県越谷市大沢一―十五―十四